

新書太閤記

第八分冊

吉川英治

青空文庫

てんきこつこく
天機刻々

依然。——秀吉はさつきの所に坐つたままであつた。

燭しよくの下に、灰となつた薄いものが散つていた。長谷川宗仁からの飛脚状を焼いたものと思われる。

飛脚の者を始末しおえた彦右衛門と久太郎秀政が、座にもどつて来ると、間もなく、「お見えなされました」

と、石田佐吉が、歸りを告げ、その佐吉が小姓部屋へ退さがると、入れ代りに、黒田官兵衛孝高がびツこを曳きながら入つて来た。

「やあ」

と、眼で迎える秀吉も、不自由な脚を折つて、どかと坐る人も、いつもながらの風であつた。

殊に官兵衛は、伊丹城いたみじょうちゆう中の遭難そうなん以来、不治の隻脚せつきやくとなつていたので、君前でも、そのための横坐りはゆるされていた。なおついでにいえば、あのとときの獄中生活で

きた皮膚病も痼疾こしつとなつたかたちで、今なお頭の毛の根はそれが治りきつていない。——だから余り燈火あかりに近くすわると、そのうすい髪の毛の根までが透すいて見えて、この体軀わい矮たんにして胆斗たんのごとき奇男児の風貌、いやが上にも魁偉かいいに見せ過ぎる嫌いがある。

「この夜更よふけに、何事でございますか。……お召しとは」

いつまで、ものいわぬ秀吉へ、官兵衛からそういった。秀吉は傍らを向いて、

「彦右衛門から話せ」

と云い放したまま、腕拱うでぐみして、首を埋めてしまった。こういう間にも、むだなく思考をめぐらしているように見えるし、また、ともすれば嘆息となる意志の崩れを如何いかんともし難いような姿とも眺められる。

「官兵衛どの。驚かれるなよ」

こう厳肅な悲痛味を予告しながら、彦右衛門は手短に事実を告げた。長谷川宗仁からの飛脚もそのまま語った。豪気をもつて鳴る官兵衛孝高の顔いろも、それを聞かされた一瞬は凡人以外のもではなかった。

「……………」

何もいわず官兵衛もまた、大きな息と共にその胸へ腕を拱くんでしまった。

そして時を措いて、じろと額ごしに同じ姿でいる秀吉を見た。

と、堀秀政はすすと膝をすりよせて、秀吉へ云った。

「はや過ぎたるを思うてみても致し方ござりませぬ。世風は今日から吹き変りました。しかも風は順風と覚えられます。お船出の帆をお揚げなさるべき時節こそ到来。ふたつか一つの御分別、いまこそ肝腎かなめかとぞんじまする」

それに応じて幽古も云った。

「秀政どのの御意、まことに至言。世間の様態、ものに喩えて申すならば、吉野の桜、雪とけて、東風の訪れに会いたるごとく、人もみな、やがてお花見を待つ心地やらんと思わゆる。早々、お花見のおしたく、遊ばされますように」

「よういわれたぞ、御両所——」

と、官兵衛孝高も膝をたたいた。

「天地と永劫、万象も春秋に、そのすがたをかえてこそ、生命も久し。——そのあめつちの心をもて大きく申さば、このたびのこととて、めでたしといえぬこともない。吉野のさくら、時来らでは見られぬものよ。雨情を孕み、風の陽気に、おのずから咲き出るに、何の御分別や要り申さん。——秀政、幽古などの申すとおり、この上は花見始めの御一戦。

しかと御決意あそばして然るべきかと存じまする」

左右の者のすすめは秀吉をして、いうまでもないことよ、と会心かいしんの笑みを抱かせたにちがいない。

実に秀吉の本意もそこにあるのだ。——が、ただ、秀吉は人々がそれを云い出すのを待っていたに過ぎない。彼としては、信長の死をもって、

——天地の慶祝けいしゆくなり。

とはいえなかつた。

その痛哀つうあいをして、天下の悲愁たらしめず、天下の慶祝とさせなければならぬ、とする小義や私情を乗り超えた信念が、よいかほど自己のうちに固くあつてもである——不用意にあらわしては誤解されやすい。総帥そうすいの死はやはり三軍の喪もであり、しかも彼の臣だつた。

臣なるがゆえに、信長の死を犬死にとさせてはならないのである。その生命を不朽に継ぎ生かすこそ遺のこされた家臣の道と彼はかたく思う。けれど臣道なるものを、誰も口には説き、誰も行うに劣らずとしているが、その信行にはおのずから人まちまちな深さの差がある。

彼は彼の信念と深度を以てつらぬくしかない。その肚の底には持つものを確しかと持つての秀吉であった。

彼は、うなずきうなずき、面おもてをあげて、左右の者へ答えた。

「官兵衛も、秀政も、また幽古までが、よくぞ励ましてくれた。実、秀吉の思うところもそれよ。それ一つでしかない。——ついてはだが」

充分、肚の底ができていた証拠といえよう。そこで一語を切ると、彼のことははずぐ實際問題へ入つて来た。要するに、対毛利とのこの戦場をいかに処し、いかに打開し転進するかであった。

「ここで、できるだけ迅速じんそくに、かつ機密に、毛利との和睦わぼくを取りきめねばならぬが。：

…彦右衛門、御辺はきようも、惠瓊えけいと会つていたろうが、どうだな、先の肚はらは」

「和議のことは、こなたからの申し出いではない、安国寺惠瓊あんこくじえけいを使いとして、両三日前から、内々毛利方より申し入れて来たことゆえ、彼の示して来た条件ならば、すぐにも取結ばれましょうが……」

「いかん、いかん」

——秀吉は、たとえこの際でもと、つよく首を振つて見せながら、

「断じて、あのままではいかん」

と、ことばを重ねた。

「されば。——もとよりこの前から、ここは毛利で何と行って来ても、耳をかたむけぬ、との御意でありましたから、今日も恵瓊が来て、そつと、よそで会談しておりましたが、頭からその幹あつせん旋せんを突つツつ匆ぱねて別れたわけでございまする」

「そこだな。……そのまま手切れとなつては困ることになつたのだ」

官兵衛の方へ眼を向けて、

「安国寺恵瓊は初めて、往年の知縁をたよつて、彦右衛門を訪れて参り、二度目には、その方の陣屋へも行ったのではなかつたか」

「左様でした」

「その方のところまでは、どのように云つていたか」

官兵衛は、秀吉の問いに答えて、

「やはり彦右衛門殿を介して、申し入れて来た条件とひとつに過ぎませぬ」

「——と、いうと？」

「つまり……毛利方から提示して来た条件というのは、この際、こうわ媾和するならば、びつちゆ備

中、備後、美作、因幡、伯耆の五カ国を割譲しよう。そのかわりに高松城の囲みを解いて、清水宗治以下の城兵五千の生命は保証して欲しいと申すのでありました」

「ウム。それだな。五カ国を割いて献じるといえば大譲歩しているようだが、備後一国をのぞくほかは、今なお争奪の地で、必ずしも、毛利方の領下として治められている地ではない」

「仰せのとおりです」

「さるを唯々として宗治の一命をも助け、和議に応じるわけにはゆかない。これは信長公の御意を俟つまでもないことだった。勝敗の決はすでにわが手にあるのだから。——しかし今となると、この機会は、だいぶちがって参った。この和を逸してはならぬことになった」

「まことに、ここは間髪、伸るか反るかの大機と存ぜられます」

「敵の毛利が、京都の変を知るがさいご、到底、和議はむずかしい。戦いの主導は彼の手につり、必然、大勢すべてわれの不利となる。……が、毛利はなお気づいてはおるまい。おそらくはまだ」

と、秀吉は語尾に力をこめて、もういちど、

「おそらくはまだ何事も知つてまい。——天のわれにかし給える数刻の時は——敵がそれを知るまでの違いでしかない。大機をつかみ、大策を施すも、そのわずかな間にのみ限られておるのだ。一刻一刻が、いまほど尊いときもない」

「まだ今夜は、三日の真夜半、ようやく子の刻ね（十二時）頃と思われます。あす四日中に和議をおすすめあるとも、両三日中には纏まとめられましよう」

これは蜂須賀彦右衛門のことばだった。

秀吉は、その彦右衛門や秀政へ面おもてを向け直して、

「いや遅い。夜明けを待つまでもなく、すぐその運びにかかれ、幸い彦右衛門はきよう恵え瓊けいに会つておる。そのはなしの縫よりを戻して、もういちど、恵瓊がこちらの陣地へ出向いて来るように取計らえ」

「では、すぐ恵瓊のところへ、使者など立てましようか」

「待て待て。過日来から彼の鞞あつせん旋いっしゅうを一蹴いっしゅうして来たものが、にわかにに夜中、此方からただ使いを立てては、敵も、はて？ と不審をさし挟はさもう。——使いを遣やるには、遣る口上も熟慮せねばなるまい」

それからしばしは、ここの声も洩れないほど密ひそかだった。

間もなく蜂須賀彦右衛門がいそぎ足に出て行った。

小姓部屋のうちでは、幽古から眠気ざましの菓子を賜ったので、おでこ押しや腕相撲に興じ、更けるのもわすれて折々高い笑い声をあげていた。

でんそく
電掟

秀吉の命をうけるとすぐ諸所の往来口へ早馬を打って、通行の検査けんさつにかかっていた浅野弥兵衛の手の者は、同夜間もなく、その迅速な網の目に、一名の怪しげな男を捕えていた。

場所は首部こつべという山村の、部落からも離れている間道だった。

「どこへ行く」

一小隊で取り囲むと、男は杖を止めて、

「備中の身寄りへまいます」

と、至極神妙である。

「備中のどこへ」

たたみかけると、

「はい、庭瀬にわせで」

と、そら嘯うそぶく。

「庭瀬へ行く者が何でこのような山道を好んで歩くか。しかもこの真夜半まよなか」

「ほんに、仰つしやるとおりで、黄昏たそがれに旅籠はたごを求めそこね、一里先へ行つたらあるか、

二里歩いたら泊まれるかと、つつい盲人の勘めくらと強情ごうじょうから、こう参つたのがまちがい

の因もとでした。……どう参つたら旅籠のある人里へ出られましようか、どうぞお教え下さい

まし」

と、竹の杖に両手をのせて、さもさも慙あわれを乞うようにうなずいた。

じつと、様子を見ていた部将は、いきなり指さして、

「こいつ、偽にせめくら盲めくらだ」

と、一喝いっかつをあびせ、部下へむかつて、縛りあげると命じたのである。

すると、盲の男は、眼があいたような驚き方をして、ぱつとうしろへ跳びのきながら、

「と、と、とんでもない」

無性むしょうに地を叩いては言い訳した。

自分は都の者で、けんぎょう 檢校のいんか 允可も持つている。年久しくびわ 琵琶など教えて生活していたが、庭瀬にある老年の叔母が危篤というので、身の不自由も顧みず、取るものも取りあえず、こうして西へ下つて来たもの。……あわれ、この目のきかない者を、そのようにおか
らかい下さいますな。と、手を合わせて拝まばかりふる 顫えている。

「うそをつけッ」

部将は一步つめて、

「目だけは、ふさいでいるが、貴様のからだのどこにもすき 隙がない。かような物は要らないはずだ」

いきなり男のついている竹の杖をひッ奪た ぐつた。そして短刀の抜く手も見せず、杖を二つにぱんと割つた。

すると竹の中から一通の書簡が落ちた。盲人の眼はいつの間にか鏡の如くまわりの兵を睨んでいた。いまはこれまでと決意したものか、突然、一方の囲みを蹴つて逃げ出そうと試みた。

約二十名ほどの人数であつたので、から 辛くもこのくせもの 曲者は取り逃がさずに組みしくことができた。

がんに縛めとなつて、馬の上へ荷物のように括し上げられた後も、曲者は、

「残念だツ。今に見ている」

と、歯ぎしり鳴らして、何を期してか、やがてこの報復を思い知らせるぞ、というような意味を喚きつづけた。

「やかましいツ」

部将はその口へ土を喰わせた。そして馬腹へ一鞭を加え、部下二、三騎と共に西へいそいだ。

——これも同夜。

場所は、首部の間道で、偽盲の捕まつたときよりも、時刻はだいぶ後であつたが。

岡山の東方一里ばかり乙多見村附近で、一修験者が、検察隊に誰何された。

さきの偽盲があわれなふりを装つたのと反対に、この山伏は傲岸な態度に出て、

「それがしは 聖護院印可の優婆塞で、京都因幡堂に住す金井坊というものである」

と、云い、訊問にたいしても、尊大にかまえ、

「真夜半あるくは、山伏のならいだ。修行となれば、道なき道も行き、眠らずにも歩く。

——なに、行く先はどこだと。つまらぬことを問い給うな。行雲流水の身、あてなど持つ

て歩いたことはない」

と、飽くまでひとを煙に巻いて逸いちはや早く去ろうとする気振りだったが、隙を見て、検査の一兵が、槍の柄えでいきなり向う脛すねを払うと、口ほどもなく、

「痛いッ」

悲鳴をあげてぶツ倒れた。

半裸にして調べてみると、果たせるかな、本来の山伏ではない。石山本願寺系の僧らしく、本能寺の変と共に、毛利方へ密報すべく昼夜をかけて急いで来た者とわかった。

で——これも直ちに、秀吉の本陣へ、荷駄同様に急送された。

同夜の獲物は、この二人限りきだったが、うち一名でも、警戒網を洩れて、その目的が成功していたら、信長の死は、即日毛利方へ知れていたわけである。僥倖ぎようこう倖倖といえは僥倖だが、秀吉の応急策も、確かによろしきを得ていたものといえる。驚くよりも哭なくよりも前に、真ツ先に浅野弥兵衛を派して、この往来検査をさせたことが奏功そうこうしたのである。

この山伏は、光秀の発した密使ではないが、さきの偽にせめくら盲は、いうまでもなく明智の士雑賀弥八郎さいがや ちゅうろうであった。光秀から毛利輝元へあてた一書を受け、二日の早朝、京都から立つて来た者だ。

光秀の使者は、同日の早朝、二人立っている。もう一名の原平内は、大坂から海路備中へ入る経路を取っていた。

ところが、その原平内も武運つたなく、海上で風浪に遭い、そのため日数も費つて、彼が毛利家へ着いたときは、中国の大機すでに決した後だったのである。

——こう観て来ると、

本能寺以後、光秀の画策は事ごとくうまく運んでいなかったことがわかる。またそれは人智人力を越えた微妙のものであることも領ける。そしてかかる蹉跌や後の敗因は一体何から来ているかといえ、それは一に天意なりというしかない。人は人をあいてとして戦い、飽くまで人と人との戦場を描いているが、偉大なる宇宙の指揮も加わっているのである。陣上に天意をいただかず、人力を尽して神意に通ぜざる三軍であつては、いかに誇るも「人間の陣」にすぎない。「神人の陣」には打ち克てない。

安国寺恵瓊

和議の内交渉について、その日の昼、何度目かの会見を試みたが、やはり何の緒も見ら

れずに、空しく別れたばかりの蜂須賀彦右衛門から、急にかきねて、

（——さつそくに会いたい。できるだけ早いがい）

という簡単な書面である。

時は、真夜中であつたが、安国寺恵瓊は、

（これは、まとまるな）

という直感を信じて、すぐ身支度にかかった。そして使いに来た彦右衛門の子家政といつしよに、約一里ばかりの石井山へ急いで来た。

もちろん彦右衛門は寝もやらず自己の陣所で返辞を待っていた。恵瓊は彼の顔を見ると、「明朝とも存じたが、何かは知らず、早いほどよいとの仰せに、すぐ罷り越した」と、いった。

彦右衛門は、さり気なく、

「それは恐縮でござつた。明朝でもよろしかつたのに、文意の不備、お寝みもさせぬことに相成つたか。しかし早いに越したことはないのぞ」

と直ちに、相あいともな伴ともなつて、石井山の中腹まで上つてゆき、途中からすこし曲つて、俗に蛙かえるはなヶ鼻はなとよぶ所の一軒家まで導いた。

人のいない農家であった。彦右衛門は子の家政にいいつけて、燈火を点させた。毛利側を代表する恵瓊と、羽柴方の彼との会見は、いつもこの人目のない所で行われていた。

「貴僧とそれがしとは、思えば不思議な宿縁だな」

対坐すると、彦右衛門は何思い出したか、沁々いった。

「まことに……」

と、恵瓊もふかくうなずいた。

ふたりの胸には、二十余年前の蜂須賀村の小六のやしきが思い出されていた。わけて彦右衛門正勝には、その頃、僧侶としてはまだ多分に若気であった一旅僧の恵瓊の姿が追憶された。そして感無量な面でながめ入るのであった。

織田信長の清洲きよすという小城のうちにも、木下藤吉郎という出色な人物がひとりいる——ということを恵瓊が親しく知ったのも、旅の修行中、その蜂須賀村に一宿した機縁によるものであったのだ。

以来、年は経ても恵瓊は、織田麾下に藤吉郎という一青年将校のあることを久しく忘れることができなかつた。天正元年といえ、まだ今日の秀吉が、その頭角すら認められず、柴田、丹羽、滝川などの諸将から見ればずっと末輩まつばいに置かれていた頃なのに、当時、

惠瓊が都から中国へ報じた吉川元春宛の書状のうちには、偶然か、炯眼かこういうことすら認めてあつた。

——信長の代、五年三年は持たせらるべく候。来年あたりは公家などにも成らるべく見および候。左候ふて後、高ころびに、あふのけに転ばれ候ずると見申し候。藤吉、さりとはの者にて候。

惠瓊の予言は驚くべきものであつたのだ。十年後の今日、まさにそのとおりになつて来たのである。

——けれど、その夜の彼はまだ十年前に自分が云つたことが、かくまでの中していようとは夢にも知らない。ただ心ひそかに秀吉の人物に、敵ながらふかく傾倒しているにとどまつていた。

二十年も前に、秀吉の利器をすでに観ぬき、十年も前に、信長の運命を云いあてていた惠瓊もまた決して決して世のつねの凡僧とはいえない。

まだ彼が幼少の頃、安芸の安国寺を訪れた毛利元就が、ひと目見て、
(あの小坊主を予にくれぬか)

と、求めたというはなしは、彼のひとつの名誉となつてよく語られている。元就の在世

中には、戦陣にも伴われて、小僧小僧と、つねに愛でられていたものだという。

中年に郷を出て、諸州を遊歴し、帰国したのちは、安国寺の西堂とあがめられ、小早川隆景や吉川元春の帰依もあつく、戦いのある日は、軍事顧問、いわゆる陣僧として従いもしていた。

(ここは御和睦あるが善策です)

と、小早川、吉川の両将へたいして切にすすめていたのも彼である。秀吉をよく識る彼には、秀吉を敵として中国の存立は考えられなかった。

またふたつには往年の知己蜂須賀彦右衛門というよい手づるもある。で、内々毛利側の媾和条件を提示してみたが、何度折衝を重ねても、こちらから折れて出た五カ国讓渡と、清水宗治を助命してほしいという交換的条件とは、秀吉の容れるところとはならない——というのできようも立別れたわけだったのである。

「いや、急におてがみを上げた次第は、きよう貴僧とお目にかかつての次第を、黒田官兵衛どのにはなしたところ、何、わが殿は、至つてお氣持の寛闊なお方なのだから、もう一步毛利方において讓歩を示すならば、きつと和談のととのわぬはずはない。今夕もふとそんなおはなしにふれた時、無造作にほかの条件はともかく、宗治の助命はいかん、守将

まで助けて城の囲みを解いたとあつては、よくよくわが織田軍の戦力も精いっぱいとなつてやむなく微々たる条件で和に応じたという印象を世上に与える。殊には、信長公にたいしてお執りなしも相成らん。宗治だけは宗治だけはと重ねて仰せられたということでおぎつた。……で、そこまでの和意をおいだきあるものゆえ、恵瓊えけいどののもう一と骨折りによつては調ととのわぬ筈はない。きつとこれは調ととのう和談じやと官兵衛どのは、かたい信念をもつてそれがしを励ますのでござつた。……どうあるうか、貴僧のお考えにある真底のものは」彦右衛門のことばは昼間と變りのないものだったが、その人は恵瓊が昼見たようなものではない。

何事かこの間に大きな方針の推移があつたものと、恵瓊の炯眼けいがんはそれを見のがしてい
なかつたが、彼もあくまで平調な口吻くちぶりで、

「さ。その真底はもう申しあげ尽しておる。毛利領十カ国のうち五カ国を献じて、清水宗治の助命を得ずば、天下にむかつて、武門が立たぬとしておる毛利家の心中もお察しね
がいたい」

「あれから後、今夕にでも、小早川殿か吉川殿きつかわに、御内意なりと質ただされてみられたかの」
「伺つてみるまでもないことゆえ、伺つてみませぬ。たとえ中国全土を失うとも、毛利家

にとつて忠義無比の宗治はころすには忍びぬと固く臍ほぞをきめておられます。輝元様以下、小早川殿にせよ、吉川殿にせよ、毛利家の鉄則は百万一心、こうと定められたことに異存をいだくお方はひとりもない」

夜は白み、鶏の声が遠くする。いつか四日の朝となっていた。

恵瓊も応じない。彦右衛門も譲らない。

時はいたずらに経つのみで、和談はすこしも進んでいなかった。のみならず行詰まると、「では、ぜひもない儀」

と、まま物別れになりそうな危局きぎよくにさえ度々落ちかけた。

恵瓊も毛利側の君命をふくんでいる者だし、彦右衛門ももとより秀吉の肚はらを肚としての交渉であつた。しかもこんどは、めつたにこの交渉を物別れにさせてはならないのである。その容子ようすを、恵瓊は僧侶特有な眼でじいっと見つめては、根氣のよい口調でぼそぼそと果てしなく同じことを繰り返していた。

「それがしの器量ではもう貴僧との折合いは見出し得ぬ。ここはひとつ黒田どのに代つてもらおう。貴僧もよく御承知のある黒田官兵衛どのともう一応、じっくりと、はなし合うてみるおつもりはないか」

「だれとでも熟談いたそう。野柄やのうのねがう和議に、すこしでも目鼻のつくものならば」

「家政——」

と、夜半から次にひかえたまままでいる子息を呼んで、

「もうお目ぎめの頃、黒田どのを迎えに行つてくれい」

と、いいつけた。

家政はまもなく官兵衛ともなを伴つて来た。官兵衛は四名の家臣が支さえ上さげている手輿ていしの上に
乗つてやつて来た。降りるやいな、大きく体の一方を動かす歩みを曳いて、無造作にそれ
へ来るなり二名の側へ坐つた。

そしてすぐ恵瓊さいじうにむかい、

「実はもういちど西堂さいどう（恵瓊のこと）を煩わづらわして、和睦するか手切れか、さいごの談判
をなさいと彦右衛門どのへすすめたのは、かくいう官兵衛なんじゃ。どうなすつた、やは
りだめか。半夜中かかつて、折合のめどはおつきにならなかつたのか」

煮え詰まったような二人のあいだに、官兵衛の磊らいらく落な語調はよほど気分を前へもどす
のに効果があつた。恵瓊も朝の光に面おもてを少しあらためて、

「せつかくでしたが、どうも依然たるものでした」

と、笑った。

彦右衛門はそれを機しおに、

「今朝、信長公の御着陣について、堀どのと、なにかと打合わせをひかえておるので、失礼なれどちよつと中座をおゆるし下さい」

と、席はすを外してしまった。

官兵衛はつぶやくように、

「右大臣家のお着きも両三日と相成つておるので、和議のことも、きょう一日を除いてはもう二度と会見もなり難い。……とところで、どうです。よい程に取極めませんか」

彼の外交は単刀直入だった。またひどく高飛車たかびしやだった。到底、勝目のない戦局に立ちながら条件についてとやかくいうならば、もう一戦のほかはないというような極言まで敢えてした。そしてまた、

「ここで一つ東軍にお骨折りを示しておけば、貴僧としても将来の大を約しておかれるものではないか」

などという彼一箇の利にわたることをも露骨にほのめかした。相手がちがってからの恵瓊は前ほどの雄弁を失っていた。しかしその顔つきは彦右衛門と粘ねばり合っているときより

は大へん気がるそうに見えた。

笑歌しやうか

「城主むねはる宗治むねはるの切腹さえ確約あるならば、五カ国移讓いじようの条件のほうは、いささかなりとも、殿へおねがい申して、こちら也讓歩をお示したそう。ともあれ今朝もう一度、吉川、小早川の両将へ、貴僧より切にお扱いを励まれてみぬか。和戦、その上でいずれとも一決いたそう」

官兵衛にこう説かれると、恵瓊えけいは何となく腰をすえていられなくなった。吉川元春の陣地岩崎山までは僅か一里。小早川隆景の陣地日差山ひざしやままで行っても二里弱にすぎない。彼は急に意をうごかされたらしく、

「お馬を拝借したい」

と、云い出で、この陣僧はやがて、馬をとばして駈けて行った。

「さて。何と返事があるか」

見送つてから官兵衛は、持宝院じほういんへ上がって行った。そして秀吉の昨夜の室をうかがう

と、秀吉は衾も被がず手枕で眠っていた。

油の尽きた燭はすでに消えている。官兵衛は側へ寄ってゆり起した。

「殿。夜が明けておりまする」

秀吉は躰をやめた。

「……明けたか」

と、むくむく起きて、すぐ恵瓊との会見のめようを聞き取り、ちよつと難しい顔つきをしたが、すぐ起ち上がって、

「飯のしたく」

と、いいつけ、一目散に廊下へ出て行つた。

側であつた。小姓たちは湯殿口のわきに、洗顔の水をたたえて待つていた。

「飯をくうとすぐ陣廻りに出るぞ。平常のとおり馬を曳き出し、供の者を揃えておけ」

顔を拭きながらの命令である。朝飯は忽ちにすました。桜若葉の山門から彼はもう金瓢の馬じるしと朱の大傘をかざさせて、ゆらゆら麓へ馬を打たせている。

彼の日課である陣廻りには、もとより規定の時刻はない。しかし常になく早朝だったことは珍しい。彼は日頃よりも機嫌もうるわしく、折々、剽氣た戯れなど云いながら悠々

各陣地を視てあるいた。

やがて帰り途にかかると、

「筆を持って」

と、祐筆をそばへ呼び、

「——狂歌を一首思いうかべた。認めて毛利の陣所へ持たせてつかわせ」

と、いった。

そして馬上から自作の狂詠を供の人々に聞えるような声で誦した。祐筆はそれを懐紙に書いた。

両川が一つになつて流るれば

毛利高松藻屑にぞなる

「どうじゃ」

と、秀吉は左右を顧みた。人々は笑い興じた。ひどくお下手な歌ではあるが、味方の気概を示すには足りるし、あわせて一笑を放つには充分だ。

使いはすぐ敵方の陣へ出かけた。誰かよくこの機微を感知し得よう。

この余裕を誇示している人の胸に「信長の死」が秘せられていようとは。

為に、今朝なお味方の内にすら京都の変の洩れている気はいはなかつた。秀吉はそれを見届けて緩々と石井山の本陣へもどつた。すると山門の前に、官兵衛孝高が待ちうけていて、何か、眼でものを云いながら寺内へ従いて行つた。秀吉は彼の顔色で、惠瓊の返事が不調に終つたことをすぐ覺つていた。秀吉のもどる少し前に、惠瓊も毛利の陣から歸つていたが、結果は予想どおりだつた。最後の努力も何の効なく、毛利輝元を始め吉川、小早川の両川は依然、

(宗治を殺しては、毛利家の武門が立たぬ。宗治の助命を容れぬ媾和には断じて応じない) という絶望的な返辞にきまつたという——惠瓊の答えなのである。

「ともあれ、惠瓊をここへ召し連れて来い。わしが会おう」

秀吉はまだ絶望を絶望としていない。熱意を昂めている程だつた。

待つ間、傍らの生駒雅楽助や蜂須賀彦右衛門に、何事か耳打ちしていた。

「安国寺どのが見えられました」

程なく官兵衛から披露すると、秀吉は朝陽のこぼれている書院へ彼を引いて打ち寛いだ。

むかし話やら、都の噂などの末に、

「さて、御僧には、清僧か、妻帯か」

と不意にたずねた。

惠瓊はうろたえ気味に、

「清僧にござりまする」

と、答えた。妻は持っていないということである。

「やれ、やれ。それは」

秀吉はもつたいないような顔をして、しかし、祝酒ならよかろうと、小姓に銚子ちょうしを命じ、三宝に盛つて出された昆布こんぶ、勝栗かちぐり、美濃みのの干柿ほしがきなどのうちから、柿一つ取つて自分も喰べ、惠瓊にも、

「取れ、取れ」

と、すすめ、

「さて」

——と、本題にはいつて、こう説いた。

「宗治の命一つが、双方の面目問題にかかつて、和議もさッぱり埒らちあかぬようだが、顧みるに、天正六年播州ばんしゅうの序戦で、わが軍は作戦上ぜひなく、尼子勝久あまこかつひき、山中鹿之介やまなかしかのすけたちの上月城こうづきじょうを打ち捨てた。その折にも面目を失したし、次いで去年、伯耆ほうぎの馬之

山まにおいても、吉川元春と対陣の末、われはわれから陣を払って引き退のいた。——かく
両度まで、われは天下に面目を欠き、毛利は武門を立てて来たことゆえ、このたびは高松
の守将清水宗治に死を与えるとも、決して両川りようせん（吉川・小早川）の恥にはなるまいと思う。
筑前はそう思うのだが御僧の分別はどうか」

「ごもつともにはござりまするが」

「——と真底、御僧もうなずくならば、なぜ御僧個人として宗治に会い、宗治に事態を告
げ、自決をすすめるのか。——忠義な彼へ対して、主家より切腹は命じ難いである。しか
し御僧からその主家の苦衷くちゆうをよく伝えたら、宗治とても、己れの一死が、城中五千のい
のちに代り、かつ毛利家の滅亡を救うものとなして、よろこんで自決するに違いないと思
われるが」

それだけいうと、秀吉は軍務にかこつけて席を去った。生駒雅楽助や官兵衛はなおあと
に残つて、惠瓊をかこみ、さらにひとつの秘密を打ち明けた。

それは毛利方の上原うえはら元祐もとすけから秀吉へ宛てた幾通かの書簡である。元就もとなりの賀むこたるこ
の人さえ内通しているという事実を見せるために惠瓊へ特に示したのだつた。惠瓊はつい
に決意した。自己をふるい起して高松城へ出向いた。もちろんそれは濁水さおに棹さおさして蛙かえるヶ

鼻はなから舟で渡るのであった。

諾たく

水の城、孤立の城、高松のうちには将士や農民をあわせて五千のいのちが拠よっていた。「この水をのみ、壁を喰つても」

と、彼らは降伏を知らず、戦いにかたまっていた。

寄手よせての浅野、小西などの軍は、遠く海から山越えで運送して来た大船三隻を泛うかべ、それに砲を載せて城じょう楼ろうへ弾丸をうちこんだりした。

櫓やぐらは半崩れとなり、死傷者もだいぶ出た。それにこの梅雨どきである。病人はふえるし、食糧も濡れびたしとなり、廓かくな内の惨状は目もあてられない。

西曲輪にしぐるわと東曲輪ひがしぐるわとの往来さえ舟や筏いかだでするほどだった。城兵は、染戸そめどの染板数百枚をあつめて、軽舸はしけを作った。水上戦のとき、それに載って寄手の大船へ攻めかかった勇者もある。そのとき二、三の軽舸はしけは沈没されたが、泳ぎ帰って、ふたたびこの中で指揮している者もあり、何しろ農民までが、今は兵にも劣らない決死のすがたを持っていた。

「他郷へ逃げれば逃げててもよいお前たちなのに、われらと運命をともにさせたのは不愼であつた」

と、守將の清水宗治が見廻つていたわると、彼らやその家族たちは声をあげて哭きながら、

「殿さまと御一緒なればうれしゆうございまする」

と、みな答えた。

宗治の日頃の民望が今この声となつたものである。

吉川、小早川の援軍が、彼方の山々に到着して、その旗幟をここから望んだときは、全城の士民はみな蘇生の思いを抱いて、

「もう大丈夫」

と、一日中、歓呼したものだつた。しかし、それも遂に、自分たちを救うことの出来ないものであつたと、彼我の地勢や作戦上の理解に知つて、一時は落胆したものの、決して戦意を捨てはしなかつた。むしろその後のほうが、誰の顔にも「死ぬもの」と思い極めた。明るささえ見えた。そこから沸り立つ強味には底知れない不屈があつた。

だから味方の援軍から、密使をもつて、所詮、救い難い実情を城中につたえ、

（——この上は、羽柴へ降伏して、城中五千のいのちを保つがよい）

と、元春や隆景の名をもつてそれをゆるしても、宗治以下すべての者は、

（われはまだ、降伏ということをし、習つてもおりませぬ。こんな時のために、日頃からわきまえていることは、一死あるのみです）

と、慨然がいぜん、恩を謝して、しかもそれには従わなかつた。

こうして二十日余りを頑張り通して来た或る日の朝——六月四日の朝——はるか敵地の岸辺から漕ぎよせて来る一つの小舟が城兵の眼にとまつた。

武士に櫓ろをあやつらせ、その舟の中には、僧そうぎよう形の者がひとり乗っていた。これなん安国寺惠瓊えけいであつたことはいふまでもない。

惠瓊は、宗治に会つた。

——切腹をすすめた。

もとよりそれはさいごの言で、それをいうまでには、

「先頃から両軍のあいだに、和睦わぼくの内談わだかまがすすめられ、愚衲ぐのうがその折衝せつしょうに当つて、数次、羽柴方と会見しておりましたが」

と、そのいきさつを語り、またこの城の守将の一命を助けん、助け難し、とする両軍の

面目問題が暗礁あんしやうとなつて、ついに行き悩んでしまった実情をも、事こまかに話した末、「ここは其許そこもとのお心一つで、毛利家の安泰も確約され、ふたつには、多くの城兵や無辜むこの民も、つつがなく助け出されることになるのでな……」

と、縷々るる、真心と熱弁をかけて、彼にそれを説いたものであつた。

宗治は始終だまつて聞いていたが、惠瓊が、これ以上はいうべき言葉もなしと、総身そうみを汗にぬらして、俯向うつむいてしまつたのを見ると、初めて穏やかに口をひらいた。

「……やれ今日は何たる吉日きちにち。ありがたい仰せを承うけたまわつた。おことばに違ちがひなきことは、御僧おもうの面を拝見してもわかりました」

承知とも、不承知ともいわないのである。——宗治の心はすでに諾否だくひの先へ超えているのであつた。

「さきには、数ならぬ身を、小早川殿、吉川殿にも、いたく御心配くだされて、城を開いて降れよとまで仰せ越しあつたが、たとえ五千のいじらしき子どもを共に死なしても、宗治としては、降伏して命を助かるなどというは思いもよらぬことゆえ、お断り申しあげたが、御僧のおことばに任せれば、主家も安泰を約され、城中の士民も無事を得ることのこと……さもあれば毛頭もうとう否いなむすじはない。むしろ大きな歓びでござる。宗治として歓びでござる。」

ざる」

語尾を強くかさねて云った。

惠瓊はからだがふるえた。これほど易々と——というよりは歡びをもって相手に容れられようとは思ひもしていなかったからである。感激にふるえたのである。

と同時に、ひそかに恥じた。自分は僧侶であるが何かの場合、よくこの人のように死生に超然としていられるだろうか。死を受くるのに、顔いろもうごかさず、それを歡びとして迎えることができるだろうか——と。

「では、御承知下さいますな」

「御念には及びませぬ」

「御一族たちと御談合なくともよろしゅうおざるか」

「あとで告げます。みな共に歡んでくれましょう」

「それと。……甚だ申しあげ難いが、事は急を要します。信長の西下も一兩日と沙汰されておりますゆえ」

「おそくも早くも、それがしにとつては同じこと。して、期日は」

「今日。……しかも午の刻うまこくまでにせよとの筑前のことばでおざるが。午の刻までといつて

も、もう二刻半ほどのいとましかありませんが」

「それだけあれば」

と宗治はうつすら笑つて、

「死ぬには悠ゆつたりと支度もできましよう。御僧には疾とく立ち帰られて、宗治異存なき旨を、両軍へおつたえありたい。わけて長々びしん微身をお目にかけられ下された主君輝元様。また小早川殿にも。吉川殿へも。……よしなに」

惠瓊えけいの小舟は矢のように帰つて行つた。彼はすぐに秀吉に会つて、宗治のいちだく一諾を報告し、また馬をとばして西軍の岩崎山へ急いだ。

吉川元春も小早川隆景も、いまや重大な関心を彼の復命一つに寄せていたことはいまでもない。

「破談か」

てツきりそれであろうと予想していたもののように、彼のすがたを見るとすぐ隆景は云つたが、惠瓊は、

「否」

と、答え、

「——ようやく曙光しよこうを見ることができました」

と、次の息でつけ加えた。

元春も隆景も、

「では、秀吉が譲ったか」

と、やや意外な顔したが、惠瓊はそれにも否と面を横に振って、

「この和議のため、身一つ捨てんと、誰よりも御和睦を祈っている者の力でござりまする」

「はて、それは誰をさすのか」

「宗治どのが申されました。かくまで微臣びしんを庇かばうて給わる御主君に報むくわでやあるべき。こ

のうえは、われだに切腹なせば、御和談も成り、かたがた、主家の御名にも傷つくことはあるまいと」

「西堂さいどう。御辺ごへんはその宗治に会ったのか」

「たつた今、会うて参りました。今こん生じょうの拝顔も成り難けれど、輝元様以下、元春様に

も、隆景様にも、くれぐれよしなにとのお言伝ことづてにござりました」

「秀吉のすすめによって会いに行つたのか」

「もとより羽柴方のはからいなくては舟もやれませぬ」

「そして宗治には、御辺から仔細を聞くに及んで、腹を切ると云い出たのであるか」

「午の刻を期して、一舟を泛べ、敵味方の見る中で腹切らん。そのときをもつて、和議を結ばん、毛利家を万代の安きにおす下されよ。また、城中五千のいじらしき者をお救い給われと、入念のごあいさつでありました」

「ううむ」

と、隆景もうめき、元春もうめいた。そして熱い眼と眼を見あわせていたが、その感動の波をふかい息として吐ききると、

「して、秀吉の意嚮は？」

と、隆景が再度たずねた。

「城将の首を見ねば断じて和せず——とされていた筑前どのも、野柄からそれを聞くといたく感じられた態で、さすがは大国の毛利、よい家臣を養いおられる。さてさて、清水長左衛門宗治は、毛利無二の忠臣なる哉——と、幾たびも長嘆して左右に語られておりました」

恵瓊はさらに云った。

「なお筑前どののいわるるには、それ程の忠臣を殉じさせ、彼の忠魂に報いぬは、敵たり

とも、心なきわざ、かつは中国の名族毛利に、全土の半ばを割かしむるのも気のどくの至り、五カ国の移譲の約束であるが、われは三カ国を取り、残り二カ国は宗治の忠節に免じておもどし申さん。……かく両川にも申し伝え、異存なくば、宗治の切腹を見とどけた後、直ちに誓紙を取りかわすであろうとの明言にござりました」

間もなく、恵瓊をのこして、両川は毛利輝元の前にこれを伝えていた。元より異議を立てる理由はもうどこにもなかった。

男をつくりて

わたくしもお供に。

それがしも何とぞお供に。

高松城の士たちは、次々に主人宗治の前へ出て死を願った。

「成らん。相成らん。いけない」

宗治は、それを叱つたり、諭したり、なだめるのに、口を酸くした。

一時は当惑につつまれた程だった。しかしすべての者に一様にゆるさなかった。

惠瓊えけいの舟が城を辞して離れるとすぐその後で、彼は自己の決意を全城の者に告げたのだ。
つた。

あわせて、また、

「きよう午うまごくの刻に、この濁水の湖上に舟をすすめ、敵味方見る中において腹切る所存」

と、その舟支度を士たちにいつけていた。

号泣ごうきゆうの声こゑが城に満ちた。いたずらに彼の屠腹とくふくをかなしむのではない。人の死は日々

眼にも見、耳にも聞き、おのれの死もそれと変らぬものと常に観みている人たちである。

宗治の犠牲によつて、はからずも自分たちのその命が救われたことを狂喜した哀号あいごうでもなかつた。彼らはそれほど利己でもない無情でもない。

全城にみちた一瞬の号泣は、実に、人の真美が人の真美を衝うつたのである。宗治の無私大愛のあたたかさに触れて、先頃からみな鬼の如く防戦に凝り固こまつていた一心が、突然、雪解ゆきげの如く溶とけて誰も彼もの嗚咽おえつとなつたものだった。

ようやく、諸士の願いを退けて、すこし座右ざゆうに暇を見出したと思つてみると、こんどは宗治の兄の月清げつしょう入道にゅうどうが来て、彼に説いた。

「長左衛門（宗治のこと）。いま仔細は聞いたが、お前が死ぬには及ばぬことだ。この兄

が代つてあげる。死装束しにしようぞくはわしに譲れ」

「兄上は桑門そうもんのおん身、宗治はこの守将でござる。せつかくですが、代役はおねがいできません」

「いやいや、元々、わしは兄の身だから、家督かどくを継ぐべきであつたのを、生来、仏道にならずみ、武門にはうとい身ゆえ、強たつて、弟のお前に家名を継いでもうたのだ。為に今日、この事に当つて、お前が切腹するような立場になつたのを、この兄のみ、余命を長らえているわけにはゆかない」

「僧門のお方は、世事死生の上に高くあるべきです。俗の古事など、何の今日の事とかかわりありません」

「そうでない。僧たる者は、人の範はんともならなければ、その道も行われぬ。さるを、世人から見て、月清入道こそは、弟にも似ぬ命惜しみの人かなと嘲わらわれては、わしはともかく、桑門の道も教えも廃すたりになる」

「いかに仰せられても、宗治が切腹は、決してかえるわけに参りません」

「それも、もつともじゃ。しからば舟までのお供いたそう。それならよろしかろう」

月清げっしょうは去つた。

すずやかな姿である。それを見ると長左衛門宗治も気安くなつた。小姓どもにいいつけ、みずがみしも水はかま袴はれや水いろの袴など、死に就くべき曠はれのものを揃えさせていた。

「そのまに一と筆」

と思いついて、三原にのこしてある妻と子の源三郎へてがみを書いた。源三郎には、武士の一生のためのしよせい処生のこの歌三首を書き遺した。

城中には目付めつけとして、また督戦のためもあつて、味方の吉川、小早川の両家から来ている検使の将、数名がいた。

そのうちの一人末近左衛門は、宗治の部屋を窺うかがつて、

「すこしの間、お邪魔してもよろしゅうござるか」

と、常のような容態で話しに入つて来た。

ふと見ると末近もいつの間にか垢あかの見えぬ夏小袖に死装束を重ねているので、

「御辺のお支度は何のためか」

と、宗治はわざと、いぶかつて訊ねた。

末近左衛門は事もなげに、

「御一緒にまいるつもりで」

と、答え、

「——幸いに、天気も快くして、舟の中での切腹は、さだめし爽やかなことでござろう」などと、もう同行を独りぎめにしている口吻くちぶりだった。

宗治は固く断つた。

「貴公には、ここの次第をよく見られて、隆景様や元春様へお伝えあれば、それでお役目は、尽されておる。お立場上、誰も卑怯とは云いますまい。——それがしの相伴しやうばんはむしろ迷惑。おやめ下されたい」

「いや、御報告には、いくらも他に人がある。てまえはどうしても、其許そこもとと共に死ぬことに思いきめ申した」

「それはまた、どういうわけです」

「されば。——すでに当城へ臨むときに、もし貴公がいささかの異心でもさしはさみ、敵に通ずるごとき兆ちやうあらば、直ちに貴公と刺しちがえる覚悟でござつた。しかるに、志もお変えあらず、この城を守り通して、しかも今、主家の安きを祈り、城中一同の命に代つて御切腹あるとは、何たるこちよき、御辞世しじせであろう。義に感じててまえも共に自刃いたしたい。それは、隆景様より敵命をうけてこれへ参つたとき、すでに、貴公とは死生一つ

なり、二度と郷地に帰らんと思ふべからずと、独りかたく職分に誓っていたことをござれば、当然な勤めの一つと、笑つて、お目に入れず、おゆるしおき下さい」

宗治は黙つてそれをうけた。左衛門の辞色じしよくには少しも騒がしいものは見えなかつたが、たとえ説いても説き伏せ難い程のものがその姿を巖いわおのように見せていた。声の裡うちにこもつていた。

ところへ、大手の矢倉の上に在る部将白井与三左衛門から、一武士を使いとして、主人宗治の許へこうじょう口上こうじょうで、

（甚だ、憚はばかり多いことですが、自分はなお、お矢倉の守りについておる身なので、たとえ和談の議があろうと、誓紙の調印あるまでは寸時もこの部署を離れることはできません。

御足労、痛み入りますが、今こんじょう生一期ごのごあいさつを兼ね、ちと申しあげたい儀もござりますので、お矢倉の上までお運び願ひとう存ずる）

と、伝えてよこした。

何事か知れないが、白井与三左衛門は多年仕えてくれた家の子のうちでも年としがしち頭しらの方である。宗治はすぐ矢倉へ上つて行つた。与三左衛門はうれしげに、主人の姿を、その不斷の戦いの場所に迎えた。

与三左衛門は負傷していた。

まだこの城が水攻めをうけない卯月二十七日の大寄せに、敵の鉄砲に中つて、片脚になり痛そうな怪我をしていたが、この矢倉を預けられた以上、仆れてもここは降りない。眼のあいている限り死守してみせると頑張つて、昼夜、物の具も解かず、きょうまでなお、満々たる城外の濁水を睨みまわして、弓を懸けつらね、銃口を並べ、手に陣刀の柄を放さずにいる老部将であつた。

「おう、ようお越し、ようお越しを」

彼は、喘ぐような声をして、主人の足もとにひざまずいた。

そして武士に、

「御床几をあげてくれい」

と、いいつけ、自分は、さらに片脚を寝かせて、どすと、武者坐りに腰を落した。

「与三左衛門。仔細は、月清からも聞いたであろう。間もなく、自害に赴くこの宗治ぞ。相見るも今のみ。年来のそちの奉公、あらためて礼をいうぞ」

「おめでとうござりまする」

与三左衛門は片手を落した。どうしたのか、急に首の根が折れたようにがくと前へ下が

ったからである。肩で大きく呼吸をして後、また宗治を振り仰いだ。

「さてさて、またなき御武運にお会いなされましたもの哉。かな人の一生も生涯の士道も、その仕上げは、よくも悪くも死によつて定まるとか申しますが、今日の御生害ごしょうがいは現し身うつつみの人をも数多生あまたかし、また御自身の一命をも末代に生かす曠はれの一期いちご。およろこび申さずにいられませぬ」

「よういうてくれた。与三左衛門。悲しんでおくりやるよりは、ずんとうれしいぞ」

「左様にお心も確しかとおすわり遊ばしているわが殿のこと。無用の憂いとは存じましたが、何せいきようのお場所は、敵味方の両大将はもちろん、中国勢も上方勢も眼をこらして見まもっている真つただ中での御生害。万が一のことでもあつてはと、年寄の取りこし苦労から、切腹とはいかなる味のいたすものかを、お先に試みてみましたところ、案外、軽いものでござりまする。——致さぬ前に思うほどのた打つものでもござりませぬ。……まずまず、左様に思し召して、おこころ悠ゆるやかに遊ばしますように」

与三左衛門はそう云いながら、よろいの胴を外し、腹帯を解きはじめた。そしてことば静かに、

「——御覽候え」

宗治は眼をみはつた。——見事に老腹おいばらを搔かツ切きつてゐるではないか。紅くれないの腹巻はらまきを解とくとも、さすがに氣丈きぢやうな与三左衛門も鬢びんしよく色いろに死しをあらわして、

「憚はばかりながら……」

と、首くびをさしのべ、眸ひとみで介錯かいしやくを求めた。

その耳元みみもとへ口くちをつけて、

「与三左衛門、案あじるな。やがて見ておれよ。彼方かなたの水の上みづの上を」

一いっさつ颯さつの光ひかりは戛かつぜん然ぜんと鳴なつた。宗治は、自分に先立さきだちつ道みちづれを、涙なみだとつるぎの下したに見みた。午うまの刻こくは近づちかづいていた。

宗治はすっかり身支度みしども調ととのえ終しまつた。

きようまでは、一滴ひとしずくたりと、城中じやうちゆうの者の生命せいめいをつなぐ大事な物ものとしていた飲のみみ水みづも、今はよかろうと、手桶てづくに一杯いちぱい持もつてと命いのちじ、その水みづで、籠城ろうじやう四十日しじゅうにち以来いらいの身みの垢あかを浄きよめ、髪かみも梳すいた。

麻あさの小袖こそでに水みづ袴がみしもの姿すがたもすずやかに見直みなおされた。小姓せうじやうに、舟ふねの支度しどを問とわせると、

「まだ羽柴勢はしばしせいの堤つゐに合図あひづの小旗こはたけが見みえませぬ。合図あひづが見みえたらお知らせ申まをし上げます」と、ある。

何という休戦の静けさだろう。陽は無心に似て、刻々、中天にかかつてゆく。

この日、風もなく、城外四方、百八十八町歩にみなぎる濁水の色は、依然として赤く濁ったままであるが、梅雨の霽れ間のさざ波は、そよそよ陽を射返して、折々、白鷺の羽音のするほか、敵味方の陣営も、ここの一城も、実にしいんとひそまり返っていた。

そのとき、十数名の直臣たちは、やがて間もなく城を出る主人のおすがたに、さいごの名残を惜しもうものと、目顔で語らい合いながら、打ち揃って、そつと宗治のいる居室の外に居並んだ。

見ると、その宗治は。

時刻の来るのを待ち遠しげに、部屋の中で伸々と身を横たえ、ふたりの小姓に毛抜きで小鬢の白髪や耳の毛を抜かせていた。

縁の端からその態をながめた老臣のひとりには、じんと瞼に衝きあげてくるものを、わざと軽い戯れにして、宗治へ云った。

「これは、これは。殿には、時節がら不相応な男振りをお作りでござりますが、いかなる思し召しでございますか」

すると宗治は、片肱起して、むくと面をもたげながら、一同の者へ、

「さればよ。この首は、今日まで男競べいたした秀吉の見参にも入り、信長の前にも供えらるべきもの。——余りに寔やつれていては、一いったん旦の籠城にかばかり老いさらばいつるか、中国武士の荒胆あらぎもを軽んぜられも致そうか。——さもありては口惜しきゆえ、かくは男をつくりて候ぞや。嗤わらうな。嗤うな」

と、いつて笑った。

迎えが来た。——時刻とみえ、対岸の蛙かえるヶ鼻はなに赤い小旗が見え出したという。

「さらば、参ろうか」

宗治はつと立った。

不覚と思いながらも抑えきれずに、この時、衆臣の中から嗚咽おえつがながれた。宗治は耳なき人のように、さつさと、城壁の方へ歩いた。小舟は、新しき藁わらの葎むしろを敷き、白き死の座を備え、あくまで清浄に、舷ふなべりを洗つて彼を待つていた。

宗治の兄月清入道と、末近左衛門のふたりがさきに乗つていた。

ほかに宗治の郎党難波七郎次郎が櫓ろを把とつて控え、介錯かいしやく人を命ぜられた幸市之丞が端はなにいた。

薫風くんぷう 一いつ 扇せん

舟は城を離れた。

難波七郎次郎の漕こぐ櫓ろのあとに、ゆるい波紋が残されてゆく。

「あれよ、殿さまのお舟が」

「真まつ白しろなおすがたで」

「わしらの命にお代りくださるのじや」

「勿も体たいなや。勿も体たいなや」

城中五千人のうちの三分の一は領下の百姓老幼であった。それらの者がみな水漬みずいた城壁の破れ目や、屋根の上や、狭間はざまや小高い所などから、声こそ揚げないが手をあわせ、眼めを拭ぬぐいつつ、見送みおくっていた。

長年その人に仕えて来た家中の将士にいたつてはいうまでもない。みな断だん腸ちようの思しいを嘔のみ、眼には悲涙たぎを沸たぎらせていた。為ために、彼方かなたへ遠とほざかる舟の影すら、涙にかすんで熟視じゆくしていられなかった。

——しかし、舟と人とは、うらうらと、さも長閑のどけき途みちのように、雲の影うつつの映うつっている

静かな水面を漕ぎすすんでいた。

振り向くと、高松の城は、かなり後になった。ちょうど、蛙ヶ鼻かえるはなと城との中間あたりと
 覚しき所まで来ると、

「七郎。この辺でよかろう」

と、宗治の兄の月清入道がいった。難波七郎次郎は黙って櫓ろを上げた。

待つ程もなく。

この舟が城を離れたとき、同時に対岸の蛙ヶ鼻からも、一艘そうの舟が湖心へむかって漕ぎ
 出していたのである。それは秀吉の陣から派せられた検使舟であることはいうまでもない。
 目印には舳先へびさきに赤い小旗を立て、舟にも緋ひの毛氈もうせんが布しかれ、中央に武者三名ほど坐つて
 いた。

検使の将は堀尾茂助吉晴ほりおもすけよしはるであった。吉晴のみ陣羽織を着ていた。

白い死装束しにしようぞくの人を乗せて漂ただよい待つ小舟と、紅あかの小旗をひるがえした検使舟とは、よ
 うやくいま、この満々たる水上の中心で相会おうとしていた。

水も静か。四山しやんも静か。——漕こぎよせてくる検使舟の櫓ろの音のみが耳につく。

はるか西の岩崎山から、今日はこの辺りまで手にとるように望まれているだろう。そし

てそこには毛利輝元、吉川元春、小早川隆景などが座をつらね、味方三万の将士も鳴りをひそめて、この一点に眸を凝らしているにちがいない。

さらに。——羽柴筑前守秀吉の本陣石井山は、もつと近々とここを俯瞰する位置にあった。その麓から堤上数十町にわたる陣々も馬印と旗で埋められていた。

宗治は遠く岩崎山のほうへ向つて、心のうちでは多年の恩顧を謝し、なつかしの主家の旗を見ては、ひとみに惜別をこめていた。

「それへお渡りありしは、高松城の守将、清水宗治^{むねはる}どのでございますか」
検使の舟は、すぐ側へ来た。こう呼びかけたのは、使者の堀尾茂助である。

宗治は、こなたの舟から、

「おことばの如く、長左衛門宗治であります。御和睦の一条を相果すべく腹を切りに参つてござる。御検使の役、御苦勞にぞんずる」

と、一礼した。

「なお、申しあげたいお言伝もござれば、少々、お待ち候え」

茂助は、そういつてから、扇子を上げて、宗治のうしろにいる難波七郎次郎へ、
「もすこしお舟を寄せ候え。こなたよりも寄せ申さん」

と、云つた。

相互の舷ふなべりと舷とが近づきあつて、軽くどんとゆれた。

茂助は、威儀を正した。

「——さて。余の儀でもありませんが、それがしの主人秀吉様の申さるるには、この度の和議も、其許そこもとの御一諾なくば、到底ととのがた、調い難きはずのところを、忠義のためには、一身もお顧みなき御返辞に、ほとほと感じ入つて候との儀でござつた。——今日はまた、時刻もおたがいなくお立ち越え、まことに殊勝しゆしょうのいたり存じ申す」

と、まず慇懃いんぎんなる挨拶を呈して、次に、

「——ついては、永々の籠城ろうじょう、さだめし御辛苦の事もおわしつらんと、主人秀吉様より心ばかりの品お慰めにと、これへ持参いたしてござる。……まだなかなか陽も高うござれば、われらの役儀にお心づかいなく、悠々ゆるゆると名残をお尽しあるように」

ひとたる樽ひとたるの美酒と、幾重ねの佳肴かこうなどが、舟から舟へ手渡された。

宗治はよろこびを顔に湛たたえて、

「これは思いがけない好物のお贈り物。わけて秀吉どののお志とあれば風味喫すべしと存ずる。遠慮なく頂戴いたそう」

と、杯をとりあげた。

そして、兄の月げつしやう清入道に、

「兄者あにじやひと人も、おひとつ」

と、すすめ、未近左衛門にも、難波七郎次郎にも、杯をまわして、順に酌くみ交かわした。

「久しゆう、かような美酒もいただかなんだせいにか、はやちと微醉ほろようてござる。——無骨

者の余芸、おかしゆうお眺めあらんも、一ひとさし舞うて堀尾どのへお目にかけん。——兄者

人。左衛門。鼓はなけれど、手拍子てびようし、膝拍子ひざ。いつもの曲舞くせまいの一節、共々ともどもに謡うたわれ

よ」

宗治は、小舟の上たに起つて、さつと白扇をひらいた。そして日頃の一つ芸、誓願寺せいがんじの曲を舞った。

舟がやや揺れる。波がやや立ちさわぐ。——高松の城中にある五千の人のこれは涙か。

はるか彼方かなたの山々や岸にある三万将士のこれは感動の波か。——眼まのあたり近々といいた堀

尾茂助吉晴は、正視するを得ず思わず頭を垂れていた……。

と。——謡声うたごゑがやんだと思うとすぐであつた。

「堀尾どの。確しかとお見届けおかれよ」

先方からいわれて、はつと顔を上げると、宗治はもう坐り直して、腹一文字に切つていた。

「市之丞。介錯」

促す声は凄愴を呼んだ。凜々、血は舟中を紅にしている。

「弟よ。わしもゆくぞ」

すぐ、兄の月清も屠腹した。さらばと、末近左衛門もつづいて自刃した。

また、検使に首桶を渡して帰ると、郎党の七郎次郎も、介錯人の市之丞も、主人に殉じてともに後を追った。

清水宗治はときに、四十六歳であった。

持宝院では、秀吉以下、堀尾茂助の帰りを待ちかねていた。

小舟から上がるやいな、茂助は首桶をかかえて、息せわしく登って来た。そして、宗治の切腹を復命し、その首を、秀吉の床几の前に供えた。

「あわれ、よい侍を」

秀吉は惜しんだ。きょうほど深く心を打たれたことはないような容子だった。――が、
すぐ、

「惠瓊えけいを迎えにやれ」

と、急せぎ立て、やがてその惠瓊が来るまでの間にと、風呂所にはいつて、水を浴び、清衣けっさいに着かえ、潔けつさい斎して待つていた。

惠瓊が来た。

秀吉はすぐ別間に出て、

「宗治の切腹も相すんだ。この上は誓紙の取り交わしが残されておるのみ。いま潔斎して、起請きしよの一文は約束のごとく認したためておいたが、予の筆元を御僧が見とどけ、また、毛利の筆元を見届けるために、こちらからも一名の陣僧をさしつかわすであろう。——まず一読いたすがよい」

と、惠瓊にそれを示した。

読み下してみると、

起請文きしやうもんのこと

一、公儀（信長を称いう）に対せられ御身上ごしんじやう御理おんことわりの儀、われら請取しやうしゆ申し候条ぢょう、いささか以て疎略そりやくに存ぞんずべからず候事。

一、申すに及ばず候いへどと雖も、輝元、元春、隆景、深重しんちゆう如じよさい在ざいを存ぞんぜず、われら進しんた

退いにかけて見放し申すまじき事。

一、かくのごとく申し談じ候上は、表裏へうり抜け公事くじこれあるべからざる事。

右の条々、もし偽りこれあるにおいては、日本国大小の神祇じんぎ、殊に八幡大菩薩、愛あ
たごはくさんまりしそんでん 宕白山摩利支尊天、べつして氏神うちがみの御罰、深しんちよう重まか罷りかうむるべきもの也。
 仍よつて起請文くだんのごとし如く件。

羽柴筑前守秀吉

まうりうまのかみどの
毛利右馬頭殿

きつかはするがのかみどの
吉川駿河守殿

こばやかはごゑもんすけどの
小早川左衛門佐殿

えけい、
惠瓊が謹んでそれを秀吉の前へもどすと、秀吉はうしろの侍臣たちへ向つて、

「白い小皿を持つて来い」

と、命じ、さらにすずりばこ硯すずりばこ 筥すずりばこをこれへと求めて、惠瓊の眼のまえで書判かきはんを誌しるした。そして白い小皿のうえに左手の小指をかざし、刃をあてて血しおを出し、書判のわきへさらに血判を加えた。

「かたじけのう存じまする」

恭しく押しいただいたて恵瓊が納めると、秀吉はさらりと打ちくだけて、めでたいめでたいと繰り返し、侍臣へむかつて、

「さらば、吸物を」

と、酒、土器を促して、一献酌み、使者にも酌して、また受けた後、
「土器は手前にて納めておく」

と、祝の寸儀をすませた。

安国寺恵瓊は、すぐ辞して、毛利の本陣へいそいだ。毛利の筆元拝見の使いとしては、大知房という陣僧が彼に従って行った。

大知房も程なく毛利三家連名の起請文をうけ取って帰って来た。和議調印はここに成つたのである。だが、それから幾刻も経たないうちに、毛利方の陣営は旋風のごとき驚きと茫然たる自失に見舞われていた。——初めて信長の死をその日の夕方に知ったのであった。

喪を討たず

「出し抜かれた」

「秀吉めに、まんまと、乗せられたものだ」

「和睦わぼくの誓紙は破棄すべしだ」

この声は、そのせつなの、毛利の帷幕いはく全体のものだったといってもさしつかえあるまい。信長の死を、彼らが知ったのは、その日の七刻ななつき下がり（午後四時）の頃だったから、宗治の切腹直後、誓書の交換が行われてから、わずか一刻いっとき（二時間）ぐらいな後でしかない。

知らせて来たのは、当時上方方面に配してある課報ちようほうかた方の一名で、これが全軍に知れ渡ると、毛利方のうちでも今度の和議を心から迎えていなかった強硬組の面々は、

「それ見たことか」

と云い、

「秀吉を討て」

と、さけび、

「討つは今だ。絶好ぜつこうなときだ」

と、たつたいま調印交換をすましたばかりの和睦などは、頭のうちから消し飛ばして、陣々の諸士も、囂々と私議紛説を放ちあい、天下一変の予想される昂奮の坩堝のなかに各、その感情を極端に揺すぶられていた。

輝元の帷幕にも一時はあわただしい動きが見えたが、間もなく厳しい守兵を立てて一切の出入を断ち、ここは反対にひっそりとしてしまった。

「決して、お味方が欺かれたものではない。和議のことは、元々、後月の末頃から、御当家よりはなしを進めさせたもので、秀吉から云つて来たものではない、その秀吉も、神ならぬ身の、何で京都の兇変を、事前に知つて計ることができよう」

これは小早川隆景の言であり、それに同意していないのは、この際、秀吉を討たずにおいてどうするものかと、熱心に輝元へ説いている吉川元春であった。

元春は耳朶を熱している。

「信長の死は、即ち、織田勢力の分解といい得られる。同時に、わが毛利家に比肩する強大はどこにも見られなくなったのだ。いま当面としている秀吉のごときは、織田氏の後継者としては、第一に指を屈しられる者だが、それすら今、ここにおいて一撃を加えるならば、その背後に持つ大きな弱点からいつても、易々たることであろうと思う。さすれば、

天下はいやおうなく毛利の掌しょうあく握あくに帰するほかない。——また和睦のことは今暁以来、秀吉の方から急速に運びすすめて来たもので、すでに昨夜あたりは、京都の兇変を、秀吉としては知っていたものに違いなく、それを秘して取り結ばれた調印である以上、たとえ当方で破棄しても、決して毛利家の不信義とは相成らぬ」

「いやいや。ここは大きな考えどころでしょう」

隆景はあくまで理性である。澄ちやうめい明めいな頭脳はそのいうことばの適切と冷静がよく証拠だてていた。

「馬之山の対陣の後も、あなたは秀吉の人物を絶ぜつ讚さんしておられた。正直それがしも彼の弓の取りようを見、その大志と智略を知るにつけ、敵ながら推すい服ふくしている。おそらく信長の後、天下の仕置しおきをなす者は彼ではないでしょうか。……武門には、敵の喪もを討たず、という古言もある。いま誓約を捨てて悲境の彼を攻めても、もしなお、彼がよくここを生き抜くときは、骨こつ髓ずいのうらみをもつて、将来長くわれを仇あだするに至ろう。——一山中鹿之介の敵対すら、あれほど年久しく禍わざわいとなつたことを思うと、ここはうかつには御方針も変えられますまい」

じゅんじゅんと説く隆景の常道論も、容易には元春を説得できなかつた。元春は、飽く

まで兵機を主眼として、

「時は今をはずせぬ」

であった。理論でなく熱情だった。兵家として、かかるまたなき機を逸す法はない。弓取の冥加みょうがにつきるといふのである。

隆景は兄の主張だけに、説きつけるのに一倍も二倍も骨が折れた。遂に元就もとなりの遺訓まで持ち出して、

「先主の垂訓すいくんにも、わが家は分を守るを一義いちぎとし、天下をのぞむ勿れなかにまじと戒められておられる。いかに富強でも中国は辺土に過ぎず、中央を占むる利は持たない。先君もそこに遠いおもんばかりをなされていたものではあるまいか」

家憲かけんは絶対である。元春もこれには口を嚙むつくほかなかつた。また輝元も家の遺訓に照らし、

「隆景のことばは尤ももつとと思う。この際、破約はやくして、ふたたび秀吉を敵とすることは避けたい」

と、云い断きつた。

密議の終つたのはもう四日の夜であった。ふたりは輝元の前を辞して各の陣所へ帰つ

たが、途々も元春が悄れている体なので、隆景は弟として、すまない気がしてならなかった。

途中味方の物見の一隊に出会った。その一部将すら甚だしく昂奮している眼をもつて、遠くの闇を指さして告げた。

「——羽柴方では、すでに撤兵を開始し始めました。五つ刻（八時）頃から続々と岡山方面へ引き揚げてゆく隊伍が見られ、それは多分、宇喜多勢でないかと思われます」

「そうか」

聞き流してすれ交ったが、元春は舌打ち鳴らしていた。

——ついに機は逸したかと、心中齒がみしているのであろう。隆景はその気もちを読むが如く云った。

「まだ、残念に思し召しておられるのですか」

「そうだ」

問うまでもないことだと、鬱勃を色にあらわして元春は答えた。

隆景はそれへまたいった。

「——では、かりに毛利家が天下に臨むと致して、その場合、あなたが天下を取る思し召

しか」

「……………」

「御返答がないところを見れば、それまでの御所存はないものと思われる。——ではこの隆景は如何といえ、われらとても同様、輝元公をさし措いて、天下を掌握するなどは思いも寄らぬこと。……しかるに輝元公の器量はどうか。果たして天下人たる器を備えておられるでしょうか」

「……………」

「その器ならざる者が天下をうごかすの座にあるときは、天下の乱れはいうまでもなく、天下をも失い、家をも亡ぼし、宇内の不幸は一毛利家の滅亡には止まりますまい」

「隆景。……もういふな。分つたよ」

元春は面をそむけた。悵然と中国の夜空を仰いで、落涙しかける臉を抑えた。一毛利家の家憲の下に在らざるを得ない遣り場なき武魂は声なく哭いていた。しかも彼は齢はすでに晩節近き五十三であった。

堰を切つて

即時撤兵は両軍媾和の原則だった。

羽柴方では、もうその日の夜から実行にかかっていた。

が、それは高松城の北方を抑えていた八幡山の宇喜多忠家と、龍王山麓の羽柴秀勝の二軍が陣払いしたに過ぎない。

兵略上、毛利方と遠く隔てたこの二陣は、すでにそこに在る必要を持たないものであった。高松の城にはもはや抗戦すべき守将もなければ精神もない。——なお万一の不測になえて依然うかとは動かし難いものは、毛利方の直前にある石井山の本陣と、足守川の線に沿う抑えあるのみであった。

夜をとおして宇喜多勢は岡山へ撤退していた。けれど秀吉の本軍はまだ一兵も退いていない。もちろん秀吉自身もじつとその持宝院にいた。

かくて四日の夜は明け、五日の朝となったが、なお彼はうごかなかつた。心はすでに上方の空へ駆けていたろうが、滅多に陣を払う気色すら見せていない。

一昨日もごろ寝、ゆうべもごろ寝。用事があらば時を選ばず起せといいつけては手枕で横になった。そして今朝、起きぬけに、蜂須賀彦右衛門から受けた報告のひとつは、

「お約やく定じようによつて、今朝、毛利方から二名の人質を送つて参りました」という件であつた。

これも彼の気がかりとしていたことだつた。まず毛利に豹ひょう變へんはないとほつとした容よ子うすに見える。しかしなお油断はできなかつた。なぜならば、京都の兇變を、今朝もまだ彼が知らないものとすれば、たとえ質子ちしを送つて来たにせよ、それを知つた彼の変心は測はかり難がたいからである。

何もかも、ここは秀吉の肚はら一つにかかつている。秀吉はその肚はら芸げいを意識していた。和議が成立したからといつて、余りに慌あわただしく退のくことは、毛利をしてわが虚うそを覺さとらしめるものと考えられた。東へ逸はやる心を西へ向けて、無策むさくな顔をしていたのも一いつに毛利の虚実を測るためだつた。

「彦右衛門。水はいくらか減じ始めたか」

「一尺程退ひいたようです」

「急には流すな」

秀吉は持宝院の庭へ出た。きのう宗治が切腹した一舟の跡も小波のみ見るだけだつた。一部の堰せきを切らしたため、わずかずつの水量は減じ始めたとはいえ、まだ彼方の高松の城

は水の中だった。

秀吉の麾下杉原七郎左衛門は、昨夕すでにそこへ入って、城受取りを完了していた。――今そこから渡船や小舟で続々陸上へ運ばれているのは、宗治の死によって救われた無数の領民である。籠城の将士は、それらの老幼を先にあげて、自分たちはいちばん最後に上陸した。

事なく一日は暮れた。

夜に入ると秀吉は、森勘八高政に毛利方の監視を命じ、また黒田官兵衛その他と何事か凝議し、終ると、小姓一同にも引き揚げを伝え、急速に陣払いを準備し出した。

夜はまだ深いが、正しくは六日の朝といつてよい。それは夜半をすぎた丑の正刻であったから。

総軍引きあげ準備を命じておいた秀吉は、いよいよ持宝院を出て、

「直ちに発足」

を伝えさせ、念のため、もういちど伝令をもって、

「毛利方に何の異状も見えないか」

を殿軍の森勘八に問い合わさせた。なお、その間にも官兵衛孝高を招いて、

「すぐ、諸所の堰を一齐に切れ」

と、命じた。

孝高はこれを家臣の吉田六郎太夫に託し、六郎太夫は駈けて山つづぎの蛙ヶ鼻へいそいだ。
だ。

六郎太夫は水攻めの築堤工事に当った奉行人のひとりだった。去月十九日にそれが成つてからちようど半月目である。満々百八十八町歩にみなぎらした水は、思えば偉大なる歴史を劃した時代の分水嶺でもあつた。

その水は、四日の和議締結とともに、一部の堰を落して少しづつ減水を示していたが、今や十数カ所にわたる大堰を一時に切り落して、もとの高松盆地に回そうとするのである。彼は蛙ヶ鼻の岩頭に立つて、部下の兵が灯してさし出した松明を両手に持った。

ふたつの松明は。

颯、颯、颯——

と三度ほど、六郎太夫の手に振られて、美しい焰の線を闇に描いた。

それは鮮やかに、原古才から福崎までの長堤一里に待機していた味方の見張小屋から見とどけられたに違いない。間もなく、眠れる湖沼の水面にはむくむくと諸所に活動が起

りはじめた。無数の大きな渦とそれに伴う水と地殻の咆哮であつた。ぐわうツと闇を鳴る異様な音響でもあつた。

「よしッ」

六郎太夫は松明を踏み消してもとの方へ駆けもどつた。——時すでに、秀吉と秀吉をかこむ近衆小姓、将士たちの一群は、金瓢の馬簾を中心に、槍の光を並べ、弓をつらね、鉄砲をそろえ、青葉の露の頻りに降る暗い坂道を、一糸の紊れもなく、粛々と麓へむかつて降りかけていた。

進撃はなおやすく退軍はより難しいという。

和睦成つての引き揚げとはいえ、秘中の秘はなおつつまれている。ひとたび彼に豹変があるうと、その責めは秘を包んでなした秀吉に帰さねばならない。

「おう。あの声は……」

彼は馬を止めて、虚空に耳をすました。嵐か海嘯かとも疑われる水の唸りが夜空を翔けまわつてゆく。——一時に十数カ所の堰を切つて、阻めるものを知らず流れ狂う濁水は、瞬く間に、毛利方のいる岩崎、天神、黒住などの高地を余す以外の地をことごとく水と泥とに化してしまふであらう。秀吉は想像した。

その水脚みずあしが迅はやいか、一いちべん鞭東へさす彼が迅はやいか。石井山はあとになった。全軍また奔ほ河んがのごとく急いそぎに急いそいでいる。

急行軍二里余。道はもう備中から備前に入っていた。

からかわむら辛川村である。秀吉は、

「ここから先、本軍は別れて、べつの進路をとれ」

と、しばし馬を駐とどめて、その行軍路を各隊の将に指示した。

すなわち一軍は、西大川、真可上まかのみ、和氣わけ、金谷かなやを経て三石みついしに至る旧道をすすむ。また

一軍は、国府市場、沼、長船おさふねを通つて西片上に出、三石に合する。そしてふたたび全軍

一つになつて舟坂峠をこえ、有年うねから姫路に入る。

この命令に、どの隊は旧道へ、どの隊は新道へと、一村一村に溢あふる軍馬が一時に混み合つ

ているところへ、おくれ走せに追いついて来た官兵衛孝高よしたかが、その率ひきいでいる黒田隊を

ひかえさせて、自身一騎だけ秀吉の所へ来た。

歩行に甚びつこだしい跛行びつこをひくが、馬に乗るにはさして不自由を覚えないらしい。彼は駒を

ひとの手にあずけて秀吉の前にひざまずき、あたりの騒音を幸さいいにそつと囁ささやいた。

「高松城の周囲一時に干瀉ひがたと変りました。その代りに低地はすべて河と化し泥田となり、

もはや毛利勢がお味方へ追い討ちかけんといたしても、ここ兩三日中は急に踏み渉ること
も相成りませうまいか」

「そうか。それでまず一方はよし、というわけだな」

「——が、ここで毛利方の人質は、きれいにお返しあつては如何ですか」

「人質を返せと」

「そうです。留めておいても効かない人質などは、御返還あるこそ、良策かと思われませんが」

「……ム。いかにもな」

孝高の説明をまつまでもなく、孝高の考えは、すぐ秀吉に領かれた。

帰するところ、これから羽柴の征かんとする一戦は、光秀を撃つか、光秀に撃たれるか
にある。もし光秀に敗るるほどなら、毛利家の人質を抑えていたところで何の益にもなら
ないであろう。

もしまた、光秀を誅戮して信長のとむらい合戦を果し、義を天下に唱えんか、天下

はおのずから秀吉の手に傾いて来ないわけにゆかない。そうでもなれば、たとえ人質を取
っておかなくても、毛利氏一族がふたたび反抗を示そうとは考えられない。むしろこの際、
彼に対して恩を施し、彼の歛心を求めておくことのほうが、いかにその効果が確実に後で

ものをいうことになるか知れないとなすことが、官兵衛孝高の意中であり、秀吉の察したところだった。

「たれを添えて返しにやるか」

「てまえの家臣を遣りましょう。返還するについては、先方から借用して置きたいものもございますから」

「まかせる。よいように計ろうておけ」

秀吉は直ちに、陣後に伴っていた毛利方の人質、吉川経言と毛利元総のふたりを、彼の手にゆだねて、先へ立つた。

いまや彼の心は、矢のように急がれていた。一日遅れば一日味方の不利である。それだけ明智の軍容は強化され、光秀の横奪した天下を天下にゆるしておくことにもなる。本軍と別れた秀吉は、ここから馬をすてて輿へ移った。なるべく疲労を少なくするためである。そして、麾下の将士と共に矢坂、野殿、野田を経、半田山までくると、さきに引き揚げていた宇喜多主従が、岡山から迎えに出ていた。

秀吉は陣輿を停めさせた。

そして、宇喜多忠家以下、出迎えに来ていた岡山衆へたいして、

「やあ。大儀大儀」

と、洩れなく愛想をこぼし、またふと、諸士の中に囲まれている一少年の姿に目をとめて、

「お出で。お出で」

と、さしまねいた。

忠家は少年の手をひいて、陣輿じんいしの側へひざまずき、

「ごあいさつ遊ばせ」

と、教えた。

少年は礼をした。蘭らんの新芽の如く素直である。まだ童髪で、武者人形のように化粧されていた。

「忠家、これか。——亡き直家どのの孤みなしご子は」

「はい。直家同様に、行く末とも、お引き立て下しおかれますように」

「案じるな、故人へもここで誓うておく。かならず筑前が育ててみよう。以後は秀吉の養子ともなして」

「ありがとうござる」

一族の忠家は涙をこぼした。岡山城主の直家はすでにこの一月頃病死していたので、幼い遺孤いごを守り立てて高松へ参陣していた岡山衆の心境は、いとど多感であったのである。

そうした遺臣たちの心をとらえて、この急ぐ途上でありながら秀吉が「養子にする——」と約したこの宇喜多家の幼主こそ、後の宇喜多だいなごんひでいえ大納言秀家であつた。

このとき秀家はまだ十歳で、現下の旋風せんふうにも父の死にもほとんど何らの感傷もうけていないふうだつた。秀吉は可愛らしくて堪たまらないように、

「これへ乗れ」

と、手ずから抱いて陣輿しんごしの中へ入れ、自分の膝のあいだに置いて、

「幾歳いくつになるか」

と訊ねたり、

「何が好きか」

と、問うてみたり、また、

「きょうから和子わこは、この小父おじさんの養子になつたのだぞ。……どうだ、欣うれしいか。欣うれしくないか。この小父さんは嫌いか」

などと戯れたりしていた。

その間にも彼はすぐ輿の者へ急げと命じていたのである。だから陣輿は舟のように揺れていた。かくて岡山の城下まで来るうちに、秀吉と少年とはすっかり仲よしになっていた。城下には着いたが、城中には入らない予定なので、秀家を輿から降ろし、忠家以下の岡山衆にも別れを告げた。

「ぜひとも、お先手について、御加勢申したいと望む者も少なくございませぬ。二千でも三千でもお召しつれ下さいませ」

忠家の好意にたいして、秀吉はあきらかに断つた。

「かたじけないが後も大事だ。万一、毛利家に豹変あるときは、お汝ことらの力に俟まつものが多い。ここの一罫は、毛利への抑えとして、筑前が恃たのみおくもの。呉くれぐれ々、抜からぬように」

種々策は授けたが、兵力は借らずに、ただ宇喜多家の旗だけを借りて去った。その後から、東へ東へと急ぐ軍馬は、ひっきりなしに城下を通過した。半日以上たっても、騎馬のいななきはなお断続していた。

六日夜は、沼城ぬましろに泊まった。夜半ごろから暴風雨となった。すさまじい風雨の声をよそに、秀吉は深更まで、ここを守る宇喜多家の諸将へ、万一の場合の計を授けていた。

眠るも束の間つかましかない。秀吉は未明の頃から出立を発令して、残る人々へ、

「さらば」

と告げ、きのうは陣興じんこうだったが、今朝は馬上で、風雨の中をもう真ツ先に急いでいた。この日は七日、福岡の渡しまで来ると、河は出水に激している。沼城の者が、

(この大雨では、とても御無理でしょう。一日程も御休息あつて減水をお待ち遊ばしては)と引止めたのを、何のと、無碍むむげに急いで来たことなので、秀吉はもとより難儀も覚悟であつた。

荷駄にだと荷駄とを繋つなぎ合わせて馬うま囲かこいを作り、人と人とは手をつなぎ、或いは槍の柄を握り合いなどして、一陣一陣濁流を渡るのだった。

さきに越えた秀吉は、彼方かなたの水際みづぎわに床しょうぎ几ぎをすえて、

「急ぐな、あわてるな。心しずかに河越しいたせよ」

と風雨もよそに落着きを見せていた。

「こういう時に、人ひとり取り落すと、五百も三百も損じたようにいわれるものだ。荷物一つ流しても、百荷も二百荷も捨て去りたりと沙汰されよう。かたがた、戦場とちがいが、不覚といわれては、いのちも軍器も捨てがいが無いぞ。悠悠ゆうゆう涉れ、悠悠ゆうゆうと」

高松のあとへ殿軍しんがりとして残して来た森勘八の一軍も、この頃、追いついて来たし、そのほか遅れた部隊も、続々見えて両岸にむらがあった。

森勘八は秀吉の前に来て、あとの模様を報告していた。——味方の引き揚げは六日ひつじの未の刻（午後二時）までに全部終了したということ。また、その後も、毛利方の陣営には、追撃に出て来る気配はなく、ぼつぼつ兵力の後退にかかっているらしく思われる、ということなどであった。

秀吉はほつと一ひと安堵あんどしたような眉を見せた。これで初めて全力を一方へ注ぐことができるおももちと確信を得たような面持おももちでもある。

強行軍は続けられた。人馬も旗も濡れて、みな雑巾ぞうきんのような姿となつてゆく。雨は折々小やみにもなつたが疾風しつぷうは終日やまない。

西片上にししかたがみまで来て、さきにしかたがみに別れた本軍と合し、一方は船坂越えから姫路へ急行したが、秀吉はその嶮けんを避けて船で赤穂あこうへ上陸した。

船問屋の灘屋七郎右衛門の家で小憩みして、またすぐ陸路を姫路へ急いだ。この途中でも秀吉は、度々陣輿と馬とを乗り換えたが、輿の内では正体もなく、軒をかき、馬上でも居眠りをし、幾度か落馬したということである。

こうして彼がわが城たる姫路に帰り着いたのは、八日の朝であった。全軍は、昨夜のうちに着いたのもあり、この朝、前後して着いたのもあって、ほとんど揃った。泥土を浴び、大雨疾風を冒し、一日二十里も歩いた軍馬は、ここへ来ると皆もう綿のようになっていて、思い思いの場所を選び、ともあれ一睡をとるに急であった。

姫路の居城は、沸き返すような騒ぎである。手の舞い、足の踏むところも知らずという有様だ。留守居の面々は、城門、玄関、その他へ走り出て、主の秀吉を、歡呼のうちに迎え入れると、そこにも此処にも、

「先ずまず、おつつがもなく——」

「真ツ黒にはおなりなされたが、お元氣はいちばいのようにお見うけ申された」

「なんと、御武運のめでたさ」

と、ほつとしたような声が全城に聞かれた。

留守居の衆の心では、この城へ無事に主人を迎える日があるか否かすら、今朝まで確信

もなく案じていたところである。

——で、今、秀吉の泥まみれな姿を見ると、その眼は、熱くならずにいられなかった。余りの歡びに度を外して、大廊下を往来するにもつい駈け足になり、互いに告げる用事も声を弾ませ合うので、秀吉が本丸へ入った後も、城内は物音でいっぱいだった。いや城下もまた馬のいななきや兵の声で沸いていた。

秀吉は本丸に坐るとすぐ、

「何よりは、一風呂浴びたい、湯殿のしたくを」

と、小姓にいいつけ、さて、

「骨折り骨折り」

と、自分の苦勞は忘れて、他の者をねぎらっていた。

留守居の將、こいではりまのかみ 小出播磨守とみよしむさしのかみ 三吉武蔵守も、彼の前に平伏していた。

ふたりは、主人の帰着を祝してから、長浜からの使いが別室に待っていること。またほかにも一名の客がひかえている旨を告げた。

「御用意がととのいました。御入浴、いつでも」

小姓が伝えて来ると、秀吉はとたんに起ち上がって、

「まず一浴してその後のことといたそう。あの大雨に、よろいしたぎ鎧下着まで濡れひたつたせい、湯が恋しさよ」

つぶやきながら室を出たが、ふと、侍たちを顧みて、

「堀どのは、どこに休息しておるか」

と、訊ねた。

「桐の間におられます」

と告げると、秀吉はつかつか立ち寄つて、そこを覗のぞいた。堀秀政は濡ぬれぐそく具足を側に置いて、寛くつろいでいた。

「久太郎どの。どうだな。きつかつたであろう」

「何の。それがしは、あなたより十も若い。あなたこそ、随分お眠そうであつた」

「ははは。正直、まだ眠たい。——いま風呂の湯が沸いたところだが、実は、長浜の母の許から使いが見えておつて至急会いたいと申すゆえ、先へ御免蒙ごうむる。お許は後で秀勝（信長の子。秀吉の養子）とでも一緒にお入りあれ」

「御会釈ごえしやくでおそれ入る。さあ、どうぞお先へ」

秀吉の大股な歩みを追つてゆく家臣たちの登あしおと音も忙しげである。湯殿の窓には雨後の

朝陽が美しく匆^はねていた。このとき時刻は八日朝の巳^みの刻^{こく}（午前十時）頃であった。

ここのは蒸風呂でなく、中国風の浴槽^{よくそう}だった。秀吉は、湯へ肩まで沈めて、

「あ。あ」

と、大きく肺を呼吸させた。

湯気の中なる彼の顔へ、高い櫺子^{れんじ}から日光が降りそそいで来る。見るまに、彼の顔は赤黒^{ゆだ}く茄^だつて、その額から玉の汗がにじみ出し、無数の小さい湯気の虹が立った。

早湯、早飯は、習性である。ざぶツと、滝のような音をさせて出ると、

「おいよ。誰か、背を流せ」

と、外へ命じた。

揚り屋にひかえていた小姓の石田佐吉と大谷平馬のふたりは、はいツと、待ちうけていたように、すぐ秀吉のうしろに廻^{まわ}つて、ごしごしと襟^{えり}くびから手のさきまで、力にまかせてこすつた。

秀吉は突然笑い出して、

「おもしろいほど、出るなあ」

と、自分の足もとを見まわした。小鳥の糞^{ふん}を撒^まいたような垢^{あか}である。

「痛い痛い。もうよい」

後はざつと自身で洗って、もう一度湯ぶねにぎぶと沈むとすぐ揚って来た。

戦陣で見られるこの人の威容いようというものは、いったいどこに備わっているものなのか。

こんなとき、一糸まとわぬ彼の肉体を熟視すると、それはまことに貧弱なものだった。こ
こ五年越しの打続く戦陣生活にもずいぶん無理はして来たに違いないが、それにしても四
十七歳という体にしては余りに脂肪しぼうがなさ過ぎる。——この頃になつてもなお依然として、
尾張中村の貧農の子であつた発育不足な面影がどこかにある。深刻な苦勞を経て来たその
筋骨は、たとえば岩礁がんしょうに生はえている痩せ松まつか、風雪に痛めつけられて来た矮梅わいばいの如
き感じで、強くはあるがもう人間の老成ろうせいを呈ていしていた。

しかし彼の場合は、尋常よつねの人の年齢や肉体と較べては考え得られないものがある。そ
れはそうした皮膚や筋肉とはまったく別箇のものみたいなある絶倫ぜつりんな精力だった。また
音声、動作、眼まなざし、笑うこと怒ることなどを見ては、到底まだ老成の影もない若々しさ
である。いや時には、幼稚ですらある場合も見ることがある。

「市松」

秀吉は、浴後の身をへ揚り屋の腰掛にかけると、まだ乾かぬ汗を拭き拭き、小姓の古参

福島市松を前に呼んで、こう軍令を口授した。

「すぐ天守から一番貝を吹かせて、全軍に兵糧をつかわせること。二番貝の鳴るときは、人夫荷駄などを先に出立させること。次に、三番貝は、城外に総揃いの合図ぞと、表方へ触れておけ」

「はいッ」

市松が駈け去ると、また直ちに、

「彦右衛門を呼んで来い」

と、べつの小姓を走らせ、その蜂須賀彦右衛門の姿もまだ見えないうちに、さらに、ほかの小姓たちを派して、姫路城の金奉行、蔵奉行などを、みなここへと、呼びにやつた。

「彦右衛門にござりますが」

「見えたか。そこにいてくれ」

「はッ。何ぞ？」

「待て。いま金奉行を呼びにやってある。その上で、用事を申そう」

秀吉はまた汗を拭く。湯上がりの体は拭いても拭いてもすぐ汗になる。が、それは一浴

したためというよりも、彼の五体を駆けめぐっている血行と頭腦の活動から垂るる滴々てきてきのものだといったほうがあたつていよう。

湯殿の揚り屋といつてもかなり広い。彦右衛門は板敷の一方にひかえていた。そこへ金奉行と蔵奉行が一緒に来た。

腰打掛けたまま、秀吉はすぐ訊ね出した。第一に、
「いま当城の金蔵には、いかほどの金銀があるか」
であつた。

金奉行は、言下に、

「銀子ぎんす七百五十貫、金子きんす八百枚余りありまする」

と、答えた。

「彦右衛門——」

と、向き直つて、こんどは彼に向つて命じた。

「ある限りの金銀すべて、その方の手にうけ取つて、番頭ばんがしら、鉄砲頭、弓槍頭などへも、
洩れなきよう、知行ちぎように応じて分配せい」

「かしこまりました」

「速やかにせい」

「はいッ」

打連れて、二人が退座すると、

「蔵には米がどれほどあるか」

と、蔵奉行へ在^{あり}高^{だか}を問うた。

「八万五千石ほどは」

と、答えると、秀吉は、

「よしよし、今日から大晦^{おおみそ}日まで、日頃、扶持^{ふち}取りの者の家族へ、五倍加増してつかわすがいい。ここに籠城する気はないゆえ、城米を蓄えて置くは無用である。——弓、鉄砲の組下や足軽小者などの残る妻子に、せめては煎^{せん}じ茶のひとつもゆるゆる飲ませてやりとう思う。——その心もちをうしなわずに計^{はか}らえよ」

「ありがとうぞんじまする」

「そちの退^さがるついでに、小西弥九郎に、すぐこれへと言^{こと}伝^づけせい」

蔵奉行が立去ると、彼はその間に、鎧下着に着かえ、忽ち具足を身につけ始めた。

弥九郎行長は走って来た。

秀吉は、具足の緒を結びながら、陣中の所持金を彼にただした。高松陣の經理は弥九郎の任だったからである。費^{つか}い余してあるかねは、銀子のわずか十貫目、金子四百六十枚に過ぎなかった。弥九郎がその旨を答えると、

「それだけは持つて行け。使者や飛脚に与え、また何かの褒美につかう必要もあろう。よろしい、それだけを聞きおくのみだ」

彼は、浴室を出た。

そしてすぐ、小出播磨守に案内させて、長浜から来て待っているという使者の部屋へ自分から出向いた。

かかるうちにも、彼の心の一隅には、長浜の城にのこしてある老母と妻の寧^ね子の身が、絶えず案じられていたであろうことは、彼なればこそなおさらのものがあつたに違いない。

平伏している使者を見るや、

「無事か、何かあつたか。——そちのこれへ来るまでに、母上には、どう遊ばしておられたか」

と、秀吉は早口に訊ねた。

この使者も例外なく疲労しきつた態であつた。病人の喰べるような物を喰べ、一室に休

んでいたところである。そこへ何の予告なしに秀吉が入って来て、直接、あれこれと早口に訊ね出したので、彼はひどく慌あわてていた。

「はい。御母堂様にも、奥方様にも、まずは御無事でいらせられます」

「そうか。しかし長浜の城は、よも無事ではあるまい」

「さればで。——てまえが長浜のお城を脱して来たのは四日の早暁でございましたが、その時もうお城へは少数の敵が襲よせ始めておりました」

「明智方の誰の手勢か」

「いえ。浅井の旧臣阿閉あへ淡路守の浪人兵で、おそらく光秀に加担かたんしてのことだろうと思われまします。けれど、てまえが安土から瀬田へと急いで来る途みち々のうわさでは、明智の将の妻木範賢つまぎのりかたの軍勢が長浜を目ざして続々下って行ったと聞きました」

「そちの出立が四日とあれば、以後の安否は知るよしもあるまいが、留守の者どもの覚悟はどう決めておるか」

「所詮しよせん、籠城するほどの御人数もおりませぬゆえ、万一のときは、御母堂奥方様などを、どこか山深き地へお移し申しあげて、あとはあとのことと、侍衆は死を期して申し合わせしておられました」

使いの者は、ようやく落着きを得て、懐中から一通の書面を取り出し、秀吉の前へさし出した。

それは妻の寧子ねねからのものであつた。浅井の残党や明智勢の襲撃に備えつつ一面留守を
あずかる主婦として、老母の処置を案じたり、家中の女どもや、侍たちをも励ましながら、
嵐のような不安と混雑の中で書いたものとしては、文字のすがたも落着いていて、日頃の
便りと変つてゐるふうは見えない。

しかし、さすがに内容の辞句には、これが最後の便りかも知れないと感じている痛切な
ものがこもつていた。

まず、老母のつつがなきを告げ、中国表の御進退も今こそ大事、おからだもこの時こそ
お大事——と述べ、お国許くにもとの儀は一切お案じ遊ばし下さいますな。日頃は何不自由なく
安穩に暮させて戴いている私たち女どもであります。こういう時に巡り合つてこそ、内
助いじよの功とかも出来るものとありがたく思つて、御老母さまを中心に、侍女こしもとの端までみ
な励み合つております。——ということから、終りに、

——たとえ万一の事あろうと、秀吉の妻がなどと、世に嘲わらわれるような始末はいたしま
せぬ。万々、この方にはお心遣づかいなく、どうかこの大事の時をお乗りこえ遊ばしますよう

に、そのみを、御老母さまも念じ上げていらつしやいます。

さすがに、手紙の末になるほど、筆のあとも走り書きに見えた。

秀吉は満足した。そして使いの者へ、

「立ち帰つて後、もしなお、母や妻が無事でいたら、見た通りを伝えておけ」

といったのみで、彼は忽ちその一室を出ていた。折ふし城頭で吹く一番貝の音が城内城下へ流れていた。

かぜ
おいて
風は追手

姫路城の内外から立つ炊煙すいえんは一時天も賑にぎわうほどだった。一番貝の音とともに将士は、みなみな飯を喰いにかかった。秀吉もまだ広間の中央にあつて、具足のまま飯茶碗をかかえていた。養子の秀勝、堀秀政、彦右衛門正勝、官兵衛孝高よしたかなどみな同座だった。

「何杯目か。これで」

秀吉は自分の喰べた量を傍人に訊いていた。給仕の侍が、

「四膳召し上がられました」

というと、苦笑して、

「湯漬ゆづけを、もう一碗」

とまた求めた。

箸はしの間にも、彼は、その旺さかんなる食欲と同じように、絶えまなく時務を聴き、処置を断じ、また発ほつそく足の措置そちをあれこれと左右へ命じておくなど、飽くまで旺盛な気力と周しゅう到とうな頭脳を働かせていた。

さきに金奉行へいいつけておいた在庫金の分配のことも、

「終りました」

と、告げて来たし、庫中の在米を家中の家族へ残りなく頒わけ与えることも、

「一同へ布告いたし、割当てが相すみました」

と、それへ報告された。またその中へ、

「ただ今、亀井かめい殿が鹿野しかのじょう城から馳せつけられました」

という取次もあつた。

「亀井かめい茲これ矩のりが来たか。これへ通せ」

と、秀吉は座のまま、そこへ迎えて、茲これ矩のりの姿を見るや、やあ元氣か、と訊ね、

「因幡いなばは辺土といえ、いつまた、吉川勢が変を窺うかがわぬものでもない。後いよいよ守りを固く頼むぞ」

と、いつた。

亀井軍は吉川勢の一面を牽制けんせいするため、天正八年以来、因幡いなばの鹿野城に拠よっていたものである。秀吉はいま、彼をここに見て、以前の口約を思い出した。

「中国の事成る上は、御辺には、出雲の国を与えるであろうと、信長公にもその儀は御内諾だくを得ていたが、今度、俄にわかに毛利と媾和こうわしたため、そこを与えるわけには行かなくなつた。で、御辺へはべつに他の封土ふうどを遣つかわそう。どこか望みの地もあらばいうがいい」

「お忘れもなくありますがどうぞんじまする」

と、茲これ矩のりも抜からず礼を述べた。そして、いうには、

「このたび、明智の御征伐あるにおいては、自然、六十余州は風に靡なびいて御麾下ごきかと相成りましょう。従つて私の望む地といつても日本国内では諸国共にさし合ひがありましたようゆえ、願わくば琉球りゅうきゅうを賜りたいもので」

秀吉はふと眼をまろくして、こやつ俺の上手うわてに出たなというような顔をしたが、直ちに手に持っていた金扇へ「亀井琉球守」と書き、傍らへ「秀吉」と署名して茲矩へ与えた。

諸将がそれを羨うらやんで、

「今日のお門立ちに、逸いちはや早くかばかりなお墨すみつき附を戴いた者は他にない。琉球王は抜け目のない奴じゃよ」

と、打ち興じているところへ、留守として姫路に残る小出播磨守はりまのかみと三好武蔵守が、
「はや二番貝が鳴りましょう。ただ今から先発の荷駄隊や人夫が発足いたします」と、また座の一方へ来て報らせていた。

「さらば」

と、秀吉も起ちかけた。

そしていよいよ、出陣するにあたって、彼は、留守役の小出播磨守と三好武蔵守のふたりへ、こう云のこい遺した。

「勝敗は天運にもある。万一、秀吉が光秀のために討たれたときは、この城に火をかけて、一物ものこすな。わが母、わが妻、一族にも皆、然るべく云いふくめてある。総じて、本能寺にみまかられた御方に従い参らすつもりで、潔いさぎよくあることだ」

一瞬、残る人々も、征ゆく人々も、一様な厳肅に打たれていた。すると、播磨守のうしろにひかえていた一僧がやおら膝をすすめて両手をつかえ直した。これは日頃秀吉も帰依きえし

ている城下の真言僧しんごんそうなので、何か善言を呈する心であろうと見まもっていると、彼はようやく眉をあげて、憂わしげに忠告した。

「ただ今から諸軍を閲えうして、御本陣は明九日の、暁天の御発足の予定どうかがいましましたが、量はかるに明日は、出でて再び帰ることなしという大悪日にあたります。何とぞ、吉日を卜ぼくして、明後日、当所を御出陣なされますように。——この儀何とも心がかりのまま、折角のお立際たちぎわながら、御賢慮に入れ奉ります」

——と。秀吉は、もうぬツくと褥しとねから起ち上がっている。そして真言僧の切なる諫言かんげんが耳にはいったのか聞き流していたのか、突然、満座の者の憂いを吹きとばして哄笑した。「何をいう。それなれば、明日はわれにとつて大吉日ではないか。出でて再び帰るなしとは、明日ばかりか、毎度出陣ごとに、兵家の常とするところだ。——このたびとて、一死君恩に報ずるの覚悟、もとより生還せいかんを期してはいない。もしまた、幸いに、秀吉死なず、戦いに勝たば、何でこれしきの小城を我が居となすに足ろうか。べつに天下の地を相し大城を築いて住もう。——易経えいききょうにもいう、卦けは卦面けめんに非ず解心げしんにありと。いずれにしても、またなき吉日。明日こそ待たれる。さあ、出ようか」

そのまま、彼は室を出た。そして城門の外、大手口の欄干橋で、なお後から続く小姓組

の面々や諸將の出揃うのを待ち合わせていた。

二番貝が高らかに鳴った。すでに荷駄隊は発足を開始していた。そして陽も西に傾く頃、秀吉はここから三番貝を吹かせ、自身の床几場を城外へすすめて、海道口の印南野に移した。

三番貝は勢揃いの合図である。秀吉が印南野に床几を置いた頃、もう海道の広野も松並木も夜になっていた。蜂須賀彦右衛門にいつつけて、十数名の祐筆を臨時に選び、明々と高張を左右に掲げて、参陣者の姓名を着到帳に記させた。

宵から夜半過ぎるまで、先鋒、中軍、後陣の配備に人馬の影は地を埋めて濤のごとく揺れていた。なおそのうちにも、後から後から、取る物も取りあえず、具足を投げ懸け、得物を押ツ取つて、着到場へ来て姓名を記入する者がひきもきらぬ有様であった。

秀吉は床几に倚つて、終始、高張の下でそれを見とどけていた。

着到帳に記された姓名は一万余にのぼった。時はすでに九日の丑の刻（午前二時）を過ぎてゐる。秀吉は左右にある彦右衛門正勝、森勘八、黒田官兵衛などに向つて、

「出発の用意はよいか」

と、問い、一同が、

「何刻なんどきでも」

と答えると、さらば貝を吹かせよと命じ、起つて、床几を畳ませた。

螺手らしゆが貝を吹く。

長く緩くゆる、また高く低く、合図の貝が鳴りわたると、先鋒鉄砲組の大將中村孫兵次の部隊から一鼓六足いつこうそくにて前進を開始していた。

第二軍は、堀尾茂助吉晴。次に中軍がつづき、羽柴秀勝は、養父秀吉の旗本たちより二、三町先に立つて行軍し、後陣には、秀吉の弟秀長が將として続き、総軍一万は、五段になつて、姫路城外の印南野いなみのを立つた。

この頃ようやく、夜が明けて、海道の松のすがたの一つ一つも鮮やかとなり、東の方、播磨灘はりまなだの水平線と横たわる黎明れいめいの雲のあいだに、真ツ赤な旭きよくじつ日ひが出陣の足なみを祝ことほぐようにさし昇つていた。

「風は追い手だ。見よ、旗、馬じるし、吹貫ふきぬきなんど、この西風に、みな京の方へ吹き靡なみいておる。一個の人命如きは、朝あしたあつて夕べも知れぬが、量はかるに、わが軍の門出かしては、天もその名分を嘉よみし、前途を味方し給うものと思われるぞ。まず、腹いっぱい、鬨ときをあげて、この発足を天下に告げよう」

貝の音をもつて、人馬の足なみを止め、まず中軍から、大喊呼だいかんこをあげた。それに和して、全軍も濤なみの如く武者声を張りあげた。中には、朝陽あさひに向つて、馬簾ばれんを打ち振る隊もあり、一斉に槍の穂をさし上げるのも見え、いなく馬の意気までが、すでに北勢明智光秀の軍を呑のんでいた。

一路、撰津せつづに入り、尼ヶ崎に着くまでは、これまでの急行軍とひとしく、落伍する者は捨て去り、人馬ともに息を休めず、敢えて隊伍諸卒の整列きくや規矩にとらわるるなく、ただ、急ぎに急ぐことを旨として来た。

尼ヶ崎に着いたのは、十一日の早朝だった。際限なくなだれ入つて来る軍隊に戸を開けたばかりの民家はただ目を睜みはりあつていた。

秀吉は路傍に馬を止め、

「禅寺でもないか」

と、休息する場所を求めさせていた。

「あれに一し小しょう庵あんがございます」

と指さす小姓を案内に、海道から少し横道へ入つて、附近の松原に馬を繋つがせた。

「どこでもいい。どこでもかまわん」

秀吉は頻りに云っていた。なぜならば仰ぎょうてん天てんして迎えに出た和尚おしょうも左右の者までが、余りに何の設備もない小寺に過ぎないことを諄くどく言い訳するからだった。

「上がるぞ」

彼はもうその濡れ縁を上がって、気に入った部屋の一つに坐りこんでいる。堀秀政もつづいて坐す。諸将、小姓などはそこには詰めきれないので、裏から表まで、ある限りの空地を占め、この小さい禅寺の内に人々はなく、人々の軍中に禅寺があるような恰好かっこうになつてしまった。

「秀勝。これへお坐り」

白湯さゆひとつ飲むと、秀吉は、すぐ隣室に座をとつて休んでいた養子の秀勝を膝近く呼びよせた。

秀勝は、十五歳であつた。

信長の第四子として生れ、幼名は於次丸おつぎまるとよばれていた。秀吉の養子となつてからも、もう五、六年にはなる。

秀吉が中国出征中は、長浜の城にいて、領下の政治を沙汰していたが、ことしの三月頃、信長の命をうけて、養父秀吉の麾下きかに参じ、具足始めの式をうけ、児島の城を攻めて、初

の戦功をたてたのであった。

「秀勝」

「はい」

「お許もとの眼元を見ておると、亡き御方が偲しのばれてくる。信長公によう似ておられる」

秀吉はしげしげと眺めた。秀勝は、諸将の中で今日この時、何事を養父からいわれるのかと俯うつむ向いた。秀吉は眼をうつして傍らにいた堀久太郎秀政と秀勝とを等分に見てからこう云い出した。

「先君御落命の報らせをうけて以来、高松から当地にいたるまで、お許もとらも見えて来た通り、筑前は精進しょうじん潔斎けつさいを守つて来たが、ここ尼ヶ崎の地は、すでに敵の明智軍とも指呼しこの間近にある。——きょうにも、明日にも、いつ敵とまみえて、合戦に及ぶかもわからぬ」

秀勝は丸ツこい眼をあげた。若々しい感情はもうその眼の中に沸たぎる湯となつてあふれかけている。秀吉の親としての気持も、信長の死後は一ひとしおいじらしさと慈いつくしみを加えていた。

「わしも四十七歳、はや老武者の組に入りかけて来たが、このたびの合戦こそは、畢ひっせい生せいのもの、先君のとむらい合戦、いざといわば、みずから鎧やうりも持ち、太刀打ちもなす覚悟で

おる。——が、年はあらそえん、食物を精進物しやうじんものに限つておると、何となく力づかぬ。そこでわしは今日をもつて、精進を廢めるやが、お許らは、若いのだから、なお、精進をつづけておれよ」

「はい」

秀勝は明答した。久太郎秀政もうなずいた。

「——次には」

と、秀吉はなお語をつづけて、秀勝へ諭さとした。

「敵の日向守ひゆうがのかみ光秀は、お許にとつては親のかたきたり、また主の仇あだたり、申さば、二重の敵である。いうまでもないことながら、光秀を討たずして、お許の生命は天地にあり得ない。誰よりもさきに先陣せよ。わしより先に討死せい。養父も汝の健気けんけいを見とどけた上で討死いたすであろう」

「かならずおくれは取りませぬ」

秀勝は両手をつかえた。諸将は嚴肅な氣に打たれていた。秀吉がこの勝敗に一死を期している容子ようすは、疾く姫路から見ていたが、さらに、強固な覺悟を、敵近きこの尼ヶ崎へ来て、ふたたび胆に銘じ込まれたのであった。

「お湯が沸きましたが」

との、寺僧のことばに、彼は禪庵ぜんあんの裏へ出て、行水をつかった。そして、命じておいれた食事を摂とった。彼の膳には調理された魚鳥の肉が豊富にのっていた。彼は、幾日ぶりの精進落しに、胃の腑ふをみたした。

終ると、一房へ入って、ごろりと眠った。一刻、軍馬もしずかに、蟬時雨せみしぐれの声のみがつつんだ。食と眠りが、秀吉の戦備であつた。

すず
涼しき頭あたま

ここ天下の諸相は急激に一転したが、経へて来た日かずを顧みれば、信長の死後、まだわずか今日で十日程しか経たっていない。

近畿きんぎの人心は、本能寺以来の動揺を、今なおそのまま抱いていた。柴田、滝川は遠隔にあり、徳川は自国へ退き、細川、筒井の向背こうはいは知れず、丹羽にわは大坂表にあつて織田信澄おだのぶずみを始末したという風聞のみで、これもそれ以上に出していない。

「——今朝来、尼ヶ崎には、はや筑前守の先手、中軍の諸勢が、続々到着して、大物だいもつの

浦、長洲ながすのあたり、兵馬が充満して見える」

この噂は、事実のまま、十一日のその朝から風の如く、摂津せつを中心に拡ひろまった。

けれど、なお、

「よもや、そう迅はやくは？」

と、半信半疑の者が多かった。

それというのが、やれ徳川殿が西上して来るとか、北畠殿が進撃中だとか、どこで誰と明智とが接戦中だとか、余りに耳を捉とらわれやすい類似るいじの風説が多いことと、もう一つは、

——羽柴軍は毛利に釘付けくぎづにされておるため、そうやすやすとは中国をうごき得ない。

という先入観も、一般の常識になつていたからである。

しかし、事態の中核に身を置いて、真に、秀吉を観み、時代の推移を直視していた一部の人人にだけは、もちろんそんな錯誤さくごはなかつた。何といつても、旧信長麾下きかの諸大将のうちには、すでに動かない秀吉の支持者が存在していた。

多年、秀吉が中国で示して来た実際的な経けい略りやくは、西日本の戦雲を背景として、遠地にある諸将のうちへも、いつのまにか、秀吉なる者の真価とその偉風を、かなり大きく投影ていけいしていたのであつた。

これをもつて見ると、彼の長い苦節は、ひたすら信長への忠勤にほかならなかった。が、結果的にいえば、秀吉は秀吉自身の素地をこのあいだに築いていたということになる。

ともあれ、一部の人士は、秀吉が毛利と和を結んだと聞いたときから、

「さてこそ。東上の肚」

と、彼の意中を読み、また、日頃の期待を裏切られなかった歎びをも加えて、彼が現地を去り、姫路を経、奔転、摂津へ向けて驀進して来るあいだにも、その途上へ向けて、

(早々来り給え。待つこと切)

と、飛報したり、また、

(明智方、その後の動静は、かくかく也)

などと早打して、その旗幟へ鶴首していたものだった。

大坂の丹羽長秀なども、

(まずは、彼の来るを待つて)

という態度で書簡を通じていたし、中川瀬兵衛、高山右近、池田信輝、蜂屋頼隆等、みな同様に心を寄せていた面々である。

わけて高槻の高山右近と茨木の中川瀬兵衛の二将は、在城の地も近いので、秀吉が

尼ヶ崎辺に着いたと聞くと、すぐ一部の手勢をつれ、また各、ことし八歳ほどになる質ち子を伴しもなつて、秀吉の休んでいる禅寺へたずねて来た。——陣門の士は、前後して来た中川瀬兵衛へも高山右近へも、

「殿はただ今、お寝やすみ中ですが」

と答えたのみで、二将の来会を狂喜して、あわてて取次ぐなどということはなかった。ふたりはやや意外だった。

瀬兵衛も右近も、内心、自分たちの向こう背はいが持つ価値と力を知っている。

信長の生前までは、二将とも明智の麾下きかに置かれていた者である。その兵力ぐるみ一方の陣営へ転じて来ることは、敵味方の比率に二倍の狂いを生じさせるわけになる。

また、瀬兵衛は茨木の城主だし、右近は高槻の城を持っている。この領内を通らず京都へは出られないし、明智勢と接触はできない。ほとんど敵中にあるとあってよいこの二基地を、戦う前に足場となし得るのは、作戦にも運輸糧食の上にも、大きな利といわなければならない。

で、当然、ふたりは、自分らが秀吉の陣門に参会してゆけば、秀吉としても、待っていたという顔まではしなくても、

——よくぞ、早く。

と、迎えもし、歓びもして、かんたい 歓待を示すであらうと思つていたらしい。

ところが、案のほか、いまはお寝やすみ中だからしばらくお待ち下さい、と陣門の将士はいうのである。それもよいが、寺内ほとんど人馬で、待つ間を休息している特別の設けもない。

中川瀬兵衛も、高山右近も、兵を外におき、つ 伴れて来た質子ちしと少数の従者と共に、境内の一隅たたずに佇んでいるしかなかった。

ただ、その間も、時を忘れて眺められていたのは、後から後からと到着して来る遅れ馳せの軍馬に見える旺さかんな流汗であつた。後に大村由己おおむらゆうこが記録にも、

——シヨソツ 諸卒相揃ハズト雖モ、イヘド 九日ニ姫路ヲ立チ、昼夜ノ境モナク、人馬ノ息ヲモ休メズ、尼ヶ崎ニ至ル。

とある秀吉の文字通りな急行軍のために、途中で落伍したものが、ひきも切らず、続々と、まず門前に来て、

「何なにの某がし、ただ今、着陣」

と、呼ばわると、これに立っている蜂須賀、森の二将が、どの辺たむろに屯して命令を待てと

か、また、誰の部隊が彼処かしこにおるから、その手について休めとか、いちいち指さして、それらの軍隊に所属と位置を与えていた。

また、どこの使者か、どこから帰つて来た使つかい番ばんか、寺中と外との往来も頻繁だった。その中には、どこかで見覚えのある武士もあつて、

「はてな。今のは丹後の細川家の士さむらいではないか」

と、瀬兵衛は、ひとりの背を見送つて、眩つぶやいた。

光秀と細川ほそかわ藤孝ふじたか、その子忠興ただおきとの関係は密接である。藤孝と光秀とは、多年、莫ば逆くぎやくの友たるのみならず、光秀のむすめの伽羅沙がらしやは、忠興の妻でもある。

(細川家から何の使いを?)

これは今ここにある二人の関心であるばかりでなく、天下の衆目がみな強く意識している問題だった。——瀬兵衛のつぶやきに和して、右近もふとこう疑った。

「昼寝と申ししていたが、実は筑前はもう眼醒めざめておるのではあるまいか。何にしても、余り無愛想な」

不満を顔色に現わして、すでに帰ろうかとすら思っているとき、ようやく、秀吉の小姓が走つて来て、どうぞと、狭い禅庵の奥へ案内に立った。

通された一室にも秀吉は見えなかった。しかし疾うに目醒めていることは確實である。方丈かどこか近い所で大きな笑い声が出ているからだ。かかる応対をうけるのは、中川瀬兵衛にしても高山右近たりとも甚だ心外らしかった。

——秀吉、何者ぞ。とつい思いたくなくて来るのだ。彼も信長の遺臣なら自分たちも信長の臣下だ。いまだかつて、彼から高下の差別をうけるような恩顧をうけた覚えもなし、主従の約をしたわけでもない。

ただ、今日これへ自分から駈けつけて、彼の陣門に駒をつないだものは、故主の敵光秀を討たんという一片の耿々の志を一つにする者と思うたからにほかならない。しかるに、その同僚を迎えるに、この態度は何事か。こんなことなら吾れからここに臨むのではなかった。秀吉が礼を厚うして迎えに来るのを待つて来てやるのであつたに——と、右近もほろ苦い顔して悔いているようだし、瀬兵衛も頗る洩面をつくっていた。

それと、この二人の不快を手伝つてよけい堪らないものになっているのは、その日の暑さだった。梅雨はとうに明けているはずだが、いつこう空気は乾燥しない。そして空にはのべつという程、この頃の天下を象徴しているような去就の定まらない雲が往来していた。その雲間から折々かつと照りつける陽はまた脳膜を麻痺させるような執こさと強烈

な光を持っている。

「暑いのを、瀬兵衛どの」

「ムムム。風もないし」

ふたりも勿論、脛すねから籠手こてまで身を鎧よろっていた。近来の具足は年々敏捷びんしょうを貴んで軽略けいりやくになって来たとはいっても、厚い革かわ胴どうの下には汗が流れるようだったにちがいない。

「筑前も、もうよい加減に、出て来そうなものではないか」

瀬兵衛は軍扇ぐんせんをひらいて、しきりに頸くびをあおいでいた。そして、敢えて下らざる意志を示すもののように、右近とともに、上座を取って坐っていた。

ところへ、やあ、という声が風とともに入って来た。秀吉である。二人の前へ来て坐るやいなや繰り返して云った。

「やあ、どうもすまぬすまぬ。寝起きに御本堂へ出て、これをやっておると——（自分の頭をペしやペしや叩きつつ）ただ今、遠路から細川藤孝、忠興父子の使者が見えて、帰国をいそぐとのこと、さきにその方の談合をすませた。そのため、まことに、お待たせしたようだが」

と、いつに変わらぬ体ていで、座の上下などは眼のうちにならない。

「ほう」

とのみで、ふたりは挨拶もわすれて、秀吉の頭ばかりながめていた。

秀吉が剃髪ていはつしていたからである。剃そりたての頭に庭木のみどりがてらてら映って見える。

「先君の弔合戦とむらいと申して、せがれ秀勝も髪を剃おろさんといい、堀秀政も剃髪すると云い出したが、お身らは若い、それまでには及ばぬ。武者振むしやぶりこそ作れと、ようやくあちらで止めて参った。——そして今、二人の髪の端だけを切らせ、筑前のと添いはいえて、お位牌いはいの前に供えて参ったが、おかげでこの暑さにも、頭だけは涼しくなった。はははは。入道にゅうどうとは涼しいものよな」

とはいえ、気になるものとみえて、秀吉はしきりにそれを撫なでまわしていた。

瀬兵衛も右近も、最前からの不快は拭ふき消された。こんどの一戦を前にして、秀吉が剃髪して臨むまでの決意を見せている以上、些末さまつな私情に駆られるなどは、みずから恥はずべきだと思つた。

ただ、いかんせん、談話中、秀吉の頭を見ると、折々、おかしくなつて堪らなかつた。

近頃は余り面と向つては人もいわなくなつて来たが、秀吉をさして「猿々」と呼び慣わ

していた頃の先入主が、今もこの二人のどこかに潜ひそんでいた。そしてその旧観念と、眼の前のものが、見る者の心のうちで、相互に擦くすくすツたい感情が挑いどみ合っているのらしい。

「迅はやいには一驚を喫した。高松からこれまでの間、ほとんど、眠るまもなかったでござろうに。——いや、お元氣を見て、われらも安心いたした」

瀬兵衛が、おかしさを怵こらえて、まずは尋常に挨拶すると、秀吉も急に思い出したかのごとく、

「いや、途上度々、お飛脚を賜わって、かたじけない。それによって、明智方のうごきも知れ、また何よりの儀は、御両所の味方だにあればと、大いに意を強ういたして参った」と、世辞をいった。

高山右近も中川瀬兵衛も、そんな下手へたな世辞にすぐころりと欣よろこぶほど甘くはない。聞き流して、すぐ秀吉に注意した。

「いつ大坂へ向われるか。われはともあれ、大坂表には神戸信孝様もおられ、丹羽五郎左も、貴公の来るのを待ちぬいておる」

「いや、敵のおる方角でもない大坂表へなど、いま参っておる暇はない。大坂へは、今朝すぐ使いを出しておいた」

「信孝様は、先君の第三子。貴公から出向かなければ動くまい」

「秀吉の陣門へ来いと申し上げぬ。先君の弔合戦とむらいに参会せられよと云い遣やつた。側には丹羽長秀もおることゆえ、常時の礼や、つまらぬこけんこけんにこだわっておられるようなことは万あるまいと思う。かならず明日は参陣されよう」

「伊丹いたみの池田父子は」

「これは相違なく会同する。まだ見えぬが、自分が兵庫まで来たとき、使者をよこして、此方こなたまで誓紙をとどけて参つておる」

味方の糾合きゆうごうについては非常な確信をもっている容子ようすだ。わけて山陰の細川父子が、明智家とは切つても切れぬ姻戚関係にありながら、光秀の誘いを退け、却つて、今も今とて、家臣の松下康之まつしたやすゆきを遠くから使いによこして、

(断じて逆徒には組みさない)

という誓約を入れて来たばかりである——という事実を、秀吉はかなり得意そうになつて、また、これが当然な世間の大勢であり武門の大道でもあるといつて、二人へ力説した。

そしてなお種々談はなしの末、やがて中川、高山の二人が、いずれも伴つて来た幼い者を、質子ちしとして、秀吉の手許へあずけようと申し出ると、秀吉は大いに笑つて、

「無用無用。御両所のお心はよく分つておるし、かつは、このたびの一戦は、そんな古い習慣によつて辛くも結ばれ合う味方同士ではないはずだ。幼少の和子たちは、早速、各のお城へお返しあるがよい」

といつて断つた。

雷らい気き

秀吉の休んだ禅庵ぜんあんは栖賢寺せいけんじであつたが、これと並んですこし先に広徳寺こうとくじがある。彼の本陣はこの二寺をあわせ用い、刻々に増える軍勢を、附近の長洲から大物の浦まで充たして、十一日はここで過した。

その晩は、広い闇の諸方で、しきりに軍馬がいなき狂つた。

「明智方の四方田政孝しほうでんまさたかの斥候隊が、近くの村落に出没している——」

というような風説もあつて、陣中は夜どおし緊張しきつた裡うちにこもごも一睡をとつていたが、馬が寝つかないのは、それとは無関係であつた。宵の頃からいちめんに掻き曇つていた空から折々電光がひらめいて、遠く近く雷鳴も伴つていたせいであろう。

「天王寺辺から東のほうは、ひどい大雨だそうな」

大坂表から来た早馬の者にそう聞いた哨兵しょうへいが、共に哨戒しょうかいに立っている友の影へ向って話している。

「この辺はポツーとしか降らないが、この風はどこかで降っているようなあんばいだ。あすは雨かな」

「嫁入りの晩と、戦いの出がけに降るのは、縁起がいいというから、ギツと来るのもいいだろう」

「敵もそう云っているかも知れない」

「大きにそうだが、同じ大地へ天から降る雨でも、光秀の部下とおれたちとでは、濡れ心地が違うだろう。みろ、馬さえあのように勇んでいる」

「よかった、おれたちは」

「なにが」

「明智の家中でなくてさ」

「ははは。まったくだ」

闇の中の人声を聞きとめて、秀吉はふと佇たたずんだ。昼間、快睡かいすいしたせいとか、眠れぬまま

に、彦右衛門と茂助をつれて野営している士卒の様子をそつと見廻つて来たところだった。

「彦右衛門。聞いたか」

秀吉は顧みた。いま、哨兵しょうへいが大勢で語り合つていたことばをさして云つたものであることは勿論である。

「戦いは、勝つておる。もう勝つた。そう思わぬか」

「まことに」

彦右衛門も茂助も、主人の気もちを正しく解といてうなずいた。また、ここに聞く人ありとも知らず放言していた士卒たちの正直なことばにも心から共鳴した。

「もう丑刻うしの頃か」

「そうなりましょう」

「戻ろう。やがて進撃の貝も鳴るであろう」

裏門を探つて寺中へ帰つた。附近の農家であろう、長い声を曳おいて牡牛おうしが啼なく。総じて、野良犬も鶏も鼠も何となく官能を尖とがらせているとみえて、どこの営でも兵は深々と眠つてゐるが、動物たちは夜どおしかさこそと物音をたてていた。

「お尋ね申していたところでした」

秀吉が灯もない縁先に腰を休めると、小姓たちが来てすぐ告げた。

「大坂表の丹羽にわどのから、早馬のお使いが着かれております。すぐ御返書をいただいて、即刻、立ち帰らねばと、しきりに急いだり案じたりしております」

「また、来たか」

同じ所からこれで三度目の早馬である。秀吉は苦笑した。この方面の問題だけでも今夜は彼を寝かさぬようにできていた。

秀吉は縁に腰かけたまま「大坂の使者をこれへ呼べ」と迎えにやり、やがて彼の前に来て平伏した使者の手から、丹羽長秀の書簡を直接受けとった。そして一読すると、祐筆ゆうひつに筆を執とらせて、

「すぐ持ち帰れ、仔細は書中に」

と極めて簡単な一札を使者に託した。

けれど返書の文意だけでは余りに簡に過ぎると思ったか、使いの者が倉皇そうこうとして起ちかけると、なお、ことばをもつて伝言をたのんだ。

「やがて夜明けと同時に、秀吉は軍をすすめて、きょうにも敵と一戦の覚悟である。すでに敵は眼前にあることゆえ、たとえ味方の諸勢が揃わぬまでも、兵機さえよろしと見れば、

いつでも時を移さず交戦に入るであろう。——折角、のぶたかぎみ信孝君をお迎え申して、子としては、父なき御孝道を尽させ給い、臣としては先君のとむらいがっせん弔合戦、ここは死生も御一緒に、御旗をひとつに、昨朝来、書簡を以て再三御参会をうなが促しまいらせたが、何のかのと御理由のみ立てられて、いっこうお腰の上がらぬ様子。……さもあれば是非なし。悠々、いつまでもお待ち申しあげておられぬ場合。後に、お悔い遊ばすことなどないように、丹羽殿も切にお心入れあるこそほさ輔佐のお役目であろうと。——左様に、筑前が申しおつたと、あからさまに伝えてくれい」

使いはきようく恐懼して帰つた。使いの者のうけた感じでは、秀吉が多少、かんしゃく癩癩を起しかけているように見えたかもしれない。

事実、きのうから三度も四度もむだな早馬と時間を空費しながら、まだ煮え切らない書面をよこしたり、返書を求めて来るかんべのぶたか神戸信孝の態度には、秀吉もこの多事と兵機を寸刻たりと、ゆるがせに出来ない中だけに、やりきれないようなうつしう鬱陶しさを覚えていた。

神戸信孝としては、秀吉が、尼ヶ崎まで来ていながら、大坂へ来て自分にえつ謁を執らないことが第一の不満らしく、

(自分は、信長の子だ。我から彼の陣へ参じる理由はない。予のこけんにもかかわる)

という面目に囚とらわれているのは確かだったが、それはそうとはいわず、丹羽長秀の名をもつて、

(部下の大半が逃散したため、なお御軍勢の整備がつかぬ)

とか、また、四国の長曾我部ちようそかべの動静がさだかでないから、一兩日はなお見定めたいとか、あらぬ理由を立ててしまかもなお、いちど貴所の方から大坂城へ来て、ここで御軍議を固められては如何か——などと悠長なことをいつて来ている。

で、秀吉はいま帰した使いに託した書中にも、これが最後の書状と断つて——

(かくの如き時は生涯二度とはありませぬぞ。秀吉とて明日はこの世の者でないかも知れず、かかる時を逸いっして悔いいを千載せんざいにのこし給うな)

と極言して遣やつたほどだった。

一方の朝雲が白みかけた。今朝も雲脚くもあしは早く、まだ他地方はゆうべから吹き暴あれているような天候である。

兵糧用意の貝の音が陣々で鳴った。

海の近いせいもあるう。夜明けの頃ひところは濃密な霧だった。それに一万以上の軍勢がつかう兵糧の炊かしぎに、陣々の炊煙もたちこめて、松の多い尼ヶ崎一帯は、松か霧か人か煙か。

秀吉は寺内の一隅にある老松の根がたに筵むしろを敷かせ、堀秀政、中川瀬兵衛、高山右近、黒田孝高よしたか、蜂須賀彦右衛門などと、膝組んで何か談笑を交えながら、そこで一緒に兵糧の握り飯を喰っていた。

「精進を廃めて、魚鳥を充分に喰べたせいにか、きようは何かしら非常に力づいた気がするよ。やはり食は士気の根元だな」

秀吉の矛盾むじゆんを、彦右衛門が側から笑った。

「御剃髪ごていはつと同時に、肉食をお始めになられた御出家は、古今、殿をもって嚆矢こうしといたしまししょう」

「仕生そもさん。それがわしの真骨頂だ。秀吉の出家は坊主の出家と甚だ意味がちがうからな」

これが生還を期せざる戦いに入る前の筵えんだろうかと思われるほど賑やかな朝餉あさげである。

そこへまた昨夜来、高槻の北方、芥川あくたがわ方面へ偵察に行っていた加藤作内光泰、福島市松などが帰って来て、

「おいつけの地方、隈なく巡めぐりましたが、敵らしい者には会いません。けれど民家は相当騒いでおります。昨日の昼、明智の小部隊が通過して、当所のお味方の動静を訊きあるいた上、勝龍寺方面へ立ち去つたと申しおりました」

と復命した。

秀吉は直接二、三の要領をたずねた上、ひと休みして、早く兵糧をとっておけと犒らつた。

程なくまた、

「ただ今立ち帰りました」

と、中村孫兵次、山内猪右衛門などの一小隊が復命に來た。これも昨日の昼から出てよ
うやくいま歸つた斥候部隊である。そして命ぜられた先も、渋川筋から洞ヶ嶺附近の地
域なので、かなり深入りして來たことが察しられる。

「洞ヶ嶺にある筒井順慶を訪ねて参つた光秀は、きのうお味方がこの尼ヶ崎に着いた
と聞き知ると、にわかには下鳥羽へ立ち退いたということでござります」

孫兵次の齎したことは重大な情報といわなければならぬ。諸將は聞き耳たてた。秀
吉の眼も急にらんとして輝きをおびた。

「して、筒井は？」

「依然、洞ヶ嶺にあります」

「光秀はそれに抑えの兵をのこしておるか、否か」

「齋藤利三としみつの一軍を留めて去ったようです」

諸将は顔見合させた。秀吉も黙然とうなずいた。それによって、筒井順慶の向背はほぼトし得たからである。

秀吉はまた、下鳥羽へ移った以後の光秀が、さらに前進して来るもようか、後退する気配かを訊ねたが、そこまでのことは、中村、山内の二人にもわからないので、ありのまま、「予察いたしかねます」

と答えた。やがて二番貝が鳴る。秀吉の周囲にいた諸大将は皆どこかへ駈け散って行く。間もなく各隊は尼ヶ崎を発し、山崎方面へ向って進軍を開始していた。秀吉の馬上姿もまた、馬簾ばれんとともに押し流さるるように軍勢の中に見えた。

淀・山崎・天王山

伊丹いたみの池田信輝も、一子勝九郎しょうくろうを伴ともなって、この日、途中から秀吉の軍に投じた。信輝も、今朝出陣の間際に、剃髪ていはつして、名も勝入しょうにゅうとあらためていた。

秀吉とは、清洲時代からの莫逆ばくぎやくの友であり、おたがいの莫迦ばかも知っていれば長所も

知り合っている仲である。

「やあ、御身も髪を剃おろされたのか」

「貴公も剃髪したか」

「期せずして、ひとつだったな」

「むむ。ひとつ心だった」

秀吉と信輝とは、それだけで他のことばを必要としなかった。信輝は携たずさえて来た手勢四千人と共に行軍に加わった。

昨日以来、目立って、軍勢は強力になっている。秀吉の手兵約一万が最初のものであったが、高山右近の二千人、中川清秀の二千五百人、蜂屋頼隆の一千人、それに今また池田隊四千を加えたので優に二万を超えようとしている。

こうして全軍が、右に淀川を見、左に能勢のせや有馬ありま地方の山々を見ながら、北進して行くうちにも、なお二十人、三十人の郎党や家の子を率ひきいて来る地方郷党の小部隊の参加もひきもきらぬ程だった。

それらの者は、口々に参会の意志をこう表明した。

「明智の行為はゆるされぬ不道である。逆を討ち順を扶たすくるは武門の当然な鉄則でござれ

ば、従来の行きがかりや旧縁の誼よしなど一切かえりみなく麾下きかに馳せ参じてござる」

このことばはほとんどみな一致していた。あながち羽柴軍の優勢だけを見て勝目に体を賭かけて来た者ばかりとはいわれない。

午ひるごろ茨木いばらぎに着き、小憩しょうけいのあいだに、秀吉は諸方の情報を聞きあつめ、また前進をつづけ、茨木と高槻たかつきの間、富田とんだに陣営をさだめた。

布陣の令が終ると、秀吉はすぐ部下を会して、作戦を評議した。そのとき端はしなくも中川清秀と高山右近のふたりが、

「先鋒はそれがしが」

「いや、先陣は自分に」

と、互いに云い張つて、いずれも譲ゆずろうとしない小争論を起した。

高山右近はいう。

「敵近き地にある城主がその手の先陣たることは古来弓矢の作法でもあれば、何と申されども、中川殿のあとにつくわけには参らぬ」

中川清秀も負けずにいう。

「先陣後陣のわけ目は、何も戦場と居城の近い遠いなどいうことで定めらるべきもので

はない。要は士馬精銳の如何にある。將たる人の覚悟と質にある」

「では、この右近には、先鋒せんぽうとして敵に当る資格がないといわれるか」

「いや、御辺ごへんのことは知らん。しかしそれがしこそ、余人におくれは取らぬものと、みずからかたく信じておる。故に、先陣はそれがしにと、誰へ遠慮もなく望む次第でござる。中川清秀にこそお命じあれ」

清秀はそういつて秀吉に迫った。右近も秀吉に手をつかえてその命を仰いだ。秀吉は、当然、主將たるの態度を床しょうぎ几ぎに構えて決裁けつさいした。

「いずれの申し条も道理であれば、中川も一線に陣取れ。高山ももちろん一番合戦の所に
出て、ことばに辱はじぬ功名を取ったがいい」

評議中にも、続々、斥候隊からの情報が入った。

「きのう以来、洞ヶ嶺ほらみね、八幡の陣を撤した光秀は、山崎、円明寺あたりの兵力も結集し、
或いは、京都坂本方面まで後退するのではないかのような空気も見えましたが、俄然がぜん、今
朝以来、明らかに攻勢を示し、その一枝隊は早くも勝龍寺あたりまで転進しつつある情勢
にござります」

この報らせをうけると、帷幕いぼくの諸將は俄然、緊迫した眉を示し合った。ここから山崎、

また勝龍寺との距離は、ほとんど、電馳でんちいつとつ一突の間でしかない。諸將のきらきらした眸にはすでにその辺に出没する敵影が見え始めているようだった。

中川、高山などは、先鋒の任を負ったので、すぐ立ちかけた。そして秀吉に向い、「時を移さず、この本陣も直ちに、山崎あたりまで、お進めあつては如何」と決断うながを促した。

秀吉はこの場合の色めき立つて来たものには乗らず、至極悠長に答えた。

「自分はここでもう一日、神戸殿かんべのお出を待つ所存だ。半日一夜たりと、大事な機の刻々うごく時とは思ふが、何としても、このまたとなき戦いに、幾名もおる先君の御遺子のお一方ぐらいはお加え申しあげたい。神戸殿をして生涯、悔いをのこし、世上にも顔向けならぬようなお立場にさせたくない」

「でも、とこうする間に、敵に有利な地勢を占められては」

「されば、神戸殿を待つにも、おのずから際限がある。——明日ともなれば、いずれにしても、山崎まで秀吉も出向かおう。全軍、山崎に集結した上、さらに聯絡れんらくを取るから、各はすぐ前進しろ」

「よろしい。ではなお刻々の状況は、後刻、使者をもつて」

と、中川、高山は立ち去った。

すなわちここを発した先鋒は一番隊高山、二番隊中川、三番隊池田勝入という順序であった。

富田とんだを離れるや否、高山隊二千余は、もう眼のまえに敵軍を見ているような迅速はやで驀ばくし進しんし出した。中川瀨兵衛以下、二番手の勢も、その馬煙を望んで、

「山崎にはもう敵勢が入っているのか」

と、疑い合い、

「それにしても、余りな急ぎ方だが」

と、あやしまれる程だった。

山崎の町へ入るとすぐ、高山右近の部下は、町をつらぬいている道の木戸を封鎖して、

附近の小道まで一切交通を遮断しゃだんしてしまった。

あとから来た中川隊は、当然、その遮断を喰って、さてはと、高山隊の急いだ理由を覺さとつたが、こうなると意地でも彼の第二陣に控えてはいられない。

「よし。その分ならば」

と、中川瀨兵衛はこの要所を捨てて、急に山の手方面へ向って行った。その方面に見

える一高地、名は天王山。

秀吉はついにその夜は富田に宿営したが、翌十三日の午ひる近い頃になって、ようやく、

「ただ今、神戸かんべ信孝君、丹羽長秀様などの一軍が、淀川の岸まで到着されました」

という報らせをうけた。

「なに。信孝様が、見えられたとか」

そのとき秀吉は、それを耳にすると共に、ほとんど、床しやうぎ几を倒して駈け出さんばかり

歡んで云った。

「馬を、馬を」

彼は、営外に立つて、あたりの者へ急せきたてた。そしてそれへ乗ってから、

「お迎えに行つて来る」

と、陣門の人々へ、馬上から振り向いて、ひと言告げ、淀川の岸まで急いだ。もちろん数騎の部下はあとから駈けつづいた。

満々たる水をたたえた大河のそばには、約四千人一隊、約三千人一隊と、ふたつに別れた軍隊が、船や筏いかだをすてて、馬に草を飼いい、兵は河原に憩いこうていた。

「信孝君はいずれにお在わすか」

秀吉は大声で求めながら、自分を見まもる汗くさい兵の中に跳び降りた。たれも秀吉とは思わなかった。

「どなたでござるか」

「筑前じゃ」

諸卒は初めて目をみはった。

秀吉は迎えも待たず、一部将のあとを見て、兵馬のあいだを押し分けて行った。

照り返す河原の水べりを避けて、出水あとの堤崩れが見える一喬きようぼく木の下に、三七信

孝は、馬印を立て床しょうぎ几いこをすえて憩うていた。

ふと、振り向くと、秀吉が、何かを大声で呼びかけながら近づいて来る。

その顔、その目、その声に接すると、信孝は何かしら、はッと、すまないような気持ちに胸をうたれた。

また、父信長が、多年手塩てしおにかけて来た一家臣が、このときは、主従の情をこえて、骨肉にも近いような感情で、つよく眼に映った。

「才、筑前か」

彼が手を伸べるも待たず、側近くまで早足に歩いて来た秀吉は、いきなりその人の手を

取つてかたく握りしめ、

「信孝さま！」

それだけをいつた。そしてあとは何もいわず、いい得ず、眼と眼に語らせていた。

どっちの眼にも滂沱ぼうたたるものがながれた。その涙のなかに信孝は父亡なききょうの気持をことごとくこの一家臣に語り尽していた。秀吉もその胸のうちを察すればこそであった。彼はやがて、固く握つていた相手の手をやわらかにはなした。それと共に、地にひざまずいて、なおしばし嗚咽おえつしつつ云つた。

「よくぞ。よくぞ……お渡り下されました。いまは何事も申しあげている違いとまもなし心も他にありません。……ただ、そのみがありがたくお礼申しあげます。またこのことこそ先君の御霊みたまもかならず泉下せんかにおいて御満足に思し召しておらるるであろうことを信じて疑いませぬ。……やれやれ、筑前もおすがたをここに拝して、臣下の道のひとつを完まつたいたしたような心地がされます。真実、高松以来、初めてのうれしさにござりまする」

信孝は、秀吉の手をとつて、

「ここはすでに戦場、主将たる御身が、左様にしておられては、信孝の居りようがない。まずまず床しょうぞ几を取られよ」

と、自身すすめた。

べつの一軍は丹羽隊であった。丹羽長秀はその中にいたが、報らせをうけるとすぐこれへ来て、参会の遅延を謝し、またともにこの一戦に臨む同生共死のよろこびを誓った。そして程なく秀吉の案内で、この軍馬七千も、彼の陣営の一翼となった。

信孝を迎えた河原では、信孝の前にぬかずいた秀吉も、ひとたび自己の陣営に入ると、左右すべて彼に懼しやうふく伏し、威風払わざるものはなく、たとえ神戸かんべ三七信孝たりとも、丹羽五郎左衛門長秀たりとも、全軍の指揮者たるその位置には、自然憚はばからざるを得なかつた。——といって、秀吉自身が、ことさらに信孝を下におくというようなどころはみじんもない。むしろ、宥いたわり慰めて事ごとに気を勞つかうふうすら見える。そして富田とんだの陣営に迎えるとすぐ、

「いまのところ、敵方の情勢はこうなっており、味方はかように進み出ております」と、手にとるごとく、作戰図について、詳しく説明を与えていた。

きのう中川、高山などの先鋒せんぽうが進出してから、夜に入つて、すでに勝龍寺の西方あたりで、足輕隊同士の鉄砲戦があり、その附近で、探り合いの放火が行われたという報しらせは——まず前線部隊からこれへ伝令されていた。

そしてゆうべは、遠方からもその火の手がボウと見えたが、大した展開も見せず、鉄砲の音も止んで、そのまま夜明けとなったものである。

きよう十三日も、空は依然荒れぎみで、折々、沛然はいぜんと驟雨ゆうだちが来ては、また霽はれたりしているが、ゆうべも山の方ではだいぶ降っていたらしい。そのために鉄砲隊の足軽は、敵味方とも火繩ひなわの火が消えて難儀しているということだった。

それも一因であろうが、またひとつには、富田にある秀吉が前進して来ないため、中川、高山、池田、すべての軍は、満を持したまま、ただ彼の一令を待っているというすがたでもあった。

「合戦は恐らくこれから今日中に開かれましょう。大勢の決するところも今十三日中になります。いずれにせよ、今日こそ定まる日です。御休息のおいとまもなかつたでしょうが、秀吉と共に御出馬なされませ」

程なく、彼は信孝を促うながして、富田の陣を払い、山崎へ向つた。

出がけにも、また一雨来た。金瓢きんびょうの馬じるしは鮮やかに濡れかがやき、諸将の陣羽織や太刀からも雫しずくしていた。

「おお。虹が、虹が」

途中、秀吉は指さした。

しかし人々が仰いだときはもう見えなかつた程、天相の変化は迅かつた。

山崎へ着いたのは申の刻（午後四時）、先鋒三部隊の八千五百に、予備軍一万を加え、山も河も町も、兵馬の影の無いところはなくなつた。

「今、明智方の一軍は、天王山の東のふもとへ、死にもの狂いの突撃を開始し、お味方の中川隊と激戦中との報らせでございました」

着くとすぐ秀吉はこの一報を聞いた。秀吉は、戦機熟すと見た。で、予備軍中の加藤光泰を池田隊へ加え、また堀秀政の軍を高山右近、中川清秀の二隊へ増援させて、

「いざ。われも」

と、全軍全面にわたる大攻勢の命令を一下した。

さば
裁きの悲歌

九日。——それは秀吉が早暁に姫路を出発していた日にあたる。

明智光秀は、この九日の朝、坂本を立てて京都へ引返していた。

同じ日月の下に在るふたりの者の居所とその行動を見くらべて見ると、秀吉があのような心と姿で送った姫路城の八日の晩を、光秀は同じ夜、坂本の城に、どんな感慨と夢を抱いて過していたらうか。

ここで一応、本能寺変の後、それからのわずか五、六日間には過ぎないが、光秀の行動と彼に蒐まつた世の衆目の機微な現われとを、顧みてみる必要もあろう。

本能寺の余燼もまだいぶっていた六月二日の当日、未の刻（午後二時）頃には、彼はもう京都を去って、

「安土へ。安土へ」

と狂風のごとく急いでいた。

もちろん京都にも部下を残して、残党狩りによる織田色の一掃に努めさせ、町々には地子銭免除（減税令）の高札とともに軍令をかけた、また万一を思い、山城摂津方面のうごきに対し、その圧えには明智家の属城勝龍寺の城へ、重臣の溝尾庄兵衛を入れておくなど、朝来急速、万端の手配を終った上であることはいうまでもない。

だが、洛外を出た彼の第一歩は、その日、粟田口から瀬田まで来ると、もうそこに、

(そうは、させぬ)

となす 障碍しょうがいにつまづいていた。

午ひるまえに、あらかじめ誘降状を送つておいた 山岡美作守やまおかみまさかのかみの兄弟はその使者を斬り、城を自爆し、瀬田大橋にも火を放つて、家中とともに甲賀の山中へ遁走とんそうしていた。

この違算のため、瀬田は通行できなくなつた。光秀は憤りいきどおを眼に燃やした。焼き落されて半ば破壊された大橋の残骸ざんがいは、彼へむかつてこういつているようにも見える。

(汝が世を観みるごとく、世は汝を観ない)

光秀はやむなく、坂本城に留まつて、むなしく兩三日を過し、橋の急修理をおえて、ようやく安土へ襲よせかけた。

安土はすでに死の町と化している。主あるじなく人なき巨城であつた。

蒲生賢秀がもうかたひで以下の留守居衆が、信長の妻子眷族けんぞくをつれて悉く日野の城へ退いていた後だし、町の家々にも、暖簾のれんも見えず商品の影もない。

しかし天下第一の大城の天守には、多年蓄積されていた金銀や名物ものなどの財宝がそのままあつた。

城を収めた後、光秀は、それを見た。けれど彼の心は少しも富まなかつた。却つて反対

な感情が呼び起された。

（自分の求めているものはこんな物ではない。こんな物を求めてしたと考えられたとは心外だ）

光秀は庫中の金銀を悉く取り出させた。そして部下の賞与や寄附や治民の費用に惜し気なく撒いた。小禄の者にすら数百両ずつ与え、上将たちの賞賜には、三千両、五千両と頒け与えた。

安土に居あわせて、その状を見ていた宣教師のオルガンチノは、

「日向どのには、幸運を楽しむ日もそう長くないことを、もう自覚しておいでとみえる」と、独りつぶやいた。異国人の眼にすら光秀の無理な力で持った「天下人」の威権はそう観察されていた。

——われ光秀はいったい何を求めている者か。

光秀はそれを自分にしばしば問うてみる。「天下人たらん」と、当然な答が湧く。しかし、どうしたものか、われながらその響きはうつろにしか血に響かない。

信念からの発足でなかつたことを自認せずにいられない。元来そういう大望を抱いていなかつた自分であることも誰よりも自分が知っている。

その器うつわでもなく、その大望もなかったと知る彼が、かくなつて来たわけはただひとつ、「天下人信長」を討つたからにほかならない。天下人は、天下人を仆たおした者が代るといふぶんりつ不文律が時代の中にある。それを呑みいなようもなく光秀をして大難業に駆からしめ、光秀自身もまたひたぶるにその権化ごんげたらんと見せている。——にもかかわらず、光秀の心の奥底に棲すむ光秀の本質は、すこしもそこに自身の前途も理想も見出していない。

信念の根のない熱情を強いて振おうとする姿は狂きやう躁そうにしか見えなかった。彼のねがいと満足とは六月二日の一火をもつてもう果されていたのである。あの朝、信長の死を聞くや、堀川の陣にあつた彼はうそか本心か、

(妙心寺の一室をかりて予も自刃せん)

といったという。そういう巷説こうせつが一時行われた。心ある者はそれを取つて云つた。(なぜ死なせてあげなかつたのか——)と。

伝えられるところによれば、その際、帷幕いばくの重臣たちが極力それを引き止めたものだとわわれている。或いはそうだろう。信長という者が一火の灰と化したせつなに、光秀の胸に凝り固こつていた万丈ばんじやうの氷ひやうえん怨うらみは雪解ゆきげのごとく解け去つたであろうが、彼をめぐり彼とともに事をなした将士一万余は必ずしも彼と同じような心態ではない。彼らにとって

はむしろ事はこれからだど期せざるを得ない。元々、信長一箇を討つのみが拳兵目的の全部ではなかったからだ。そして彼らはみな信じた。

（今日以後現実に、わが光秀様が天下人に成られたのだ——）と。

ところが、彼らの仰ぐ当の光秀は、このときすでにその実を失って虚になっていたのである。六月二日以前の彼とそれから後の彼とで、別人のようにその容貌も気魄も、叡智までが變つていた。ひと口に言えば、虚化していた。どこかにうつろが窺われるのである。

——それは単なる疲労などとは大いに違う。

とはいえ、天下は動いた。愚者の暴拳と軽視し去る者はない。天下は光秀自身の肚以上、彼の一拳を計画的なものにも観ているし、彼の才腕、彼の智囊を大きく買っている。刻々として、彼の誘いに応じ、彼の軍に投じ、また遠くにいても、呼応するかのとき表情を見せている分子も少なくはない。

五日から八日の朝まで、彼は安土にいたが、その間とて、彼はただいたずらに、庫中の金銀や滿城の綾羅珍什の処分をしていただけではなく、次の段階にたいするあらゆる努力を一面に傾けていたことはいうまでもない。

丹羽長秀の本拠、佐和山を攻めさせてこれを収め、秀吉の城長浜も同時に陥れた。そ

して人的には美濃の諸侍を誘降し、六角家の旧臣や京極家の一族、また、若狭の武田義統よしのりなどを加えて、それぞれ適所に用い、ひたすら兵力の増強にあせっていた。

一応、江州ごうしゅう附近の攻略をすませると、光秀は留守居軍の一部をとどめ、全軍装備を新たに、ふたたび上洛の途についた。

途中は坂本城で泊った。

そこでも、軍勢の一半を割いて、山科やましなから大津方面へ陣取らせた。

気を労つかえば限りのない程、諸方面に万一の備えが要る。それ程に、彼の期待の対象たいしやうはまだはつきりした意志を表示しないでいる。

明示しているものは、蒲生賢秀の如く、細川藤孝父子の如く、きつぱりと、彼の誘いを断つた者のみである。

わけて、細川忠興は、またなき彼の愛婿あいせいである。信長を倒した以上、一も二もなく自分に従ついてくるものと、光秀は決定的に思いこんでいた。

ところが、使者の齎もたらして来た返事によれば、その忠興も父藤孝も、

(もつてのほか)

という立腹であったというばかりでなく、

(故信長公に二心なし)

と、髪を切つて、誓いを示し、また直ちに、明智家から嫁いでいる忠興の妻の身は、子供を添えて山ふかき里に隠し、一方即刻、秀吉の許へ使いをたてて、

(共に逆臣を討たん)

という誓約を送つたとも——その宮津みやづから立帰つて来た使者から、彼はつぶさに聞かされていたのである。

このときまで、彼は、味方に引き入れる者の対象にばかり気をとられていて、いったい天下の何者が、自分にとつて、最大な強敵として立ち現われて来るであろうかを——まだ的確てきかくに想定していなかつた。

秀吉。

という存在が強く彼の胸を打つたのもようやくこの日頃からのことだつた。

中国在陣中の彼の兵力と、その人物などを、まったく埒らちがい外がいにおいて、観過みすぎしていたのでもないし、軽視していたわけでもない。

むしろその存在には甚だ脅威を感じていた程だが、なお光秀をしてひそかに安んぜしめていたのは、

(毛利と四つに組んでいる秀吉は急にうしろを振り向けまい)

と、予想していたところにある。

かたがた、本能寺襲撃の早朝、堀川の陣から急派しておいた毛利向けの二使者が、海路陸路、いずれかの一人は、疾とくに芸州げいしゅうへ行き着いて、中央の異変を知り、自分からの書簡を見て、

(時こそ到る)

と、歓呼をなしている時分であろう。そしてやがて、東西挟撃きょうげきして在中国の羽柴軍を粉碎せんと答えて来るにちがいない。——そう希望し、そう判断して、吉報の到るのを、今か今かと、心待ちにしている程だった。

が、この方面の使いも、梨のつぶてである。のみならず、自分の麾下きかに属し、しかも京都と近接している摂津あたりの中川瀬兵衛、池田信輝、高山右近などからさえ、まだ何らの返答がない。

また、大坂表にある織田信澄のぶずみは、光秀の婿むこでもあるから、彼がこれにも望みをつないでいたことは確かだが、その信澄は、僚将りょうしょうの丹羽、蜂屋などの手に襲われて死したといううわさが、もう一般に聞え渡っていた。

夜の明けるたび、光秀の耳に入るものは、事ごとの齟齬と、裁きの悲歌であった。

ほら
みね
洞ヶ嶺

彼にとつて、坂本の城は思い出がふかい。

まだわずか半月前。

信長に面罵めんばされ、饗きやう応おうの役を褫奪ちだつされ、憤然ふんぜん、安土あづちを去つて、居城亀山へ去る途中、幾日もここに留まつて、悶々もんもん、迷いの岐路きろに立つたものだが――

いまは迷いもない。恨みもない。同時に反省も失つた。

光秀はいつのまにか、正しき知識人の本質を、一時的な「天下人」の虚名と取り換えていた。

従兄弟いとこの左馬介光春さまのすけみつはるは、安土の守りに残して来たが、この城には、光春の夫人や、その子女たちや、また例の、ひょうきん者の叔父、明智長閑齋ちやうかんさいなどという身内の者がた
くさんいる。

わずか半月ぶりで接した光秀に、なぜか今度はそれらの内輪の者までが、何となくあら

たまつていて、窮屈に覺えたが、相変らずなのは長閑齋であつて、

「このたびは、天下様にお成り遊ばして、われらはまるで、夢かとか思えません。瓜うりや茄子なすが、急に花園の壇に上されたようなもので、御眷族ごけんぞくの端たるわれらも急にお行儀をあらためております。末々公家衆などのお交際も繁くなれば、瓜や茄子なすも冠かんむりして巖おごそかにおらねばなるまいと惧おそれましてな。——いや正直を申せば、先の短い愚老などには、迷惑やら仕合せやらで」

などと軽口ろくちを弄もして、その樂天振りに少しの変化も来たしていない。明智一族中、この老人だけは、べつな曆こよみでも持つて暮くしているようである。

どんな無用人でも、その所を与えれば、世に無駄人はいないとよくいう光秀は、日頃、従兄弟にむかつて、この老人を祝して、

（左馬介の家庭には、あの屈託のない年寄がおるので、何ぼう奥が明るいかわ知れぬ。家に後顧こうこがなくてよい）

と、称たえていたものだが、今度の一泊には、長閑翁と戯れあう子らの嬉き々きたる声もうるさい気がした。

——明けると早曉に、白河越えを経て、京都へ向つていた。

吉田神社の神官吉田兼和とは日ごろの交誼よしみも深い。その兼和が白河口に待っていて彼に告げた。

「御入洛と聞いて、撰家せんけ以下の公家方が、公式にお迎えに出ようと、慌あわただしく装よそおっております。この辺で御小憩せきねがいたいがい」

光秀は、拝謝した。

「いや、洛内もまだまったく鎮しずまったといえぬし、近畿の情勢もなおわからぬ今日、左様な重々しい儀礼は相互の迷惑。やがて御所へ御礼に伺候する日まで、おあずけ願ねがっておこう」

その折、彼は、銀子五百枚を御所へ献上したいとて、その手続きをこの友に依頼した。同日また五山、大徳寺その他へも多額な寄附をしたので、安土から携たずえて来た手許たずの軍用金はすっかりなくなってしまった。そして夜は、下鳥羽に陣営して眠った。この夜九日である。彼はまだこの時まで、秀吉の動向については何ら知るところもなかったが、河内、摂津方面に散在する諸大名の態度には、何となく不安を感じ出していた。

光秀は、翌十日の朝、本軍を下鳥羽において、一部隊だけをひきつれ、山城八幡に近い洞ヶ嶺ほらみねへのぼって行った。

ここは山城の綴喜郡つづぎごおりと河内の交野郡かわちかたのごおりとの境をなす峠路である。光秀は旌旗せいぎを立てて、終日ひねもす、何ものかをこの国境に待ちうけていた。

「筒井家の先鋒は、まだ見えぬか」

「見えませぬ」

「高山、中川、池田などの使いは？」

「何の訪れもありません」

陽の傾く頃まで、光秀は幾度も、同じ問いを、帷幕いばくから陣外へ発してみた。

そして自身も折々、

（そんな筈はないが？）

と、いぶかる如く、陣外に出て、河内摂州の山野をながめ、焦躁しやうそうの眉へ、手をかざしていた。

彼がここへ来た唯一の目的は、大和やまとの筒井順慶の軍を待たためだった。もちろん事前に順慶とは謀しめし合わせてあることでもあり、平常の關係としても、一子十次郎を養子にやる約束まで結んである筒井家のことなので、この来会と協力は当然なものとして、ほとんど、何らの疑いもさしはさまず、約を履ふんで、旌旗を立てていたものであった。

ところが、日も暮れかかるに、その順慶は遂に來ない。——のみならず、一面、疾く檄を飛ばしていた高槻の高山、茨木の中川、伊丹の池田などの、わが麾下と見なしていたところの諸将も、いい合わしたように、ひとりとしてここに会合する者を見ないのである。

光秀の焦躁は当然であつた。

「利三。何の手違いであろう？」

彼はなおこれをもつて、謀状の手ちがいか、或いは諸軍勢の用意が遅れているもののような程度に解したがっているふうだったが、そう質問をうけた老臣の齋藤内蔵助利三は、すでに非なる大勢が心のうちに読めていた。

「……いや。筒井殿には、來会の意志がないのでしよう。さもなれば、大和郡山からここまでの坦々たる道、かように時遅れるわけはございませぬ」

「いや、左様な道理はない」

光秀は敢えて云い張つた。そして急に藤田伝五を呼び、一書を認めて、急に郡山へ催促の使いにやつた。

「伝五、乗換馬も良いのを曳いてまいれよ。駒の足で急ぎに急げば、明朝までに立ち帰れるであろう」

「筒井殿がすぐお会いくださいささえすれば、夜明けと共に帰れましょう」

「会わぬなどというわけはない。深夜たりとも、すぐ会って、返辞をただしてまいるように」

「かしこまりました」

伝五は部下数騎をつれてすぐ峠を下り、木津川沿いに郡山の道を急いで行った。――が、この使いもまだ帰らぬうちに、諸方面の偵察隊は、秀吉の軍勢が疾くも続々東上を開始し、すでにその先鋒部隊は兵庫辺まで来ているという事実を相次いで、ここへ報らせて来た。

「あり得ないことだ。何かの誤報ではないか」

初めのうち、光秀はまだ、そう左右の者へいつていたほど、そのことについて、味方の物見が頻々と報じて来るような秀吉の迅速な行動は、頭から信じきれないような容子だった。

——どうして秀吉がそう簡単に毛利と和議を取り結べよう。また、和議を計ったところで、あれだけの地域に膠着されていた大軍を急に撤回して、上洛して来るなどは思おもよらない。到底、至難なことである。と絶対に信じていたものらしかった。

「いや、虚報とは思われませぬ。何しても早く、御対策を決せねば相成りませぬ」

この際にも、正しく事態を直観していた者は、かの老将斎藤利三としみつであった。そして光秀が、しゅんじゅん 逡巡しゅんじゅん にお決しかねている進退にたいしても、

「それがしのみは、ここに止まつて、筒井殿に備え、後おあとを慕うて参りますれば、殿には、きゆうきよ 急遽きゆうきよ 下山あそばして、秀吉のじょうらく 上洛じょうらく をそし 阻止そし なさらなければなりません」

と、明確に指針を与えた。

「筒井は望みなかろうか」

「十中八、九までのところ、まずお味方には参りますまい」

「秀吉阻止の策は、如何どうしたものだろう」

「伊丹、茨木、高槻などの諸勢も、はや秀吉に款かんを通じおるものと見るほかありません。

筒井勢もまた同様とすれば、機先を取つて彼を摂津の入口に邀撃ようげきするには、遺憾いかんながらお味方の兵力は不足であります。——が、はか 量はかるに、いかに秀吉といえ、ここへ到るまでには、なお五、六日を費やしましょうから、その間に淀よど、勝龍寺の二城を固めて、隘路あいろうの南北に堅陣を設け、その間に江州ごうしゅうその他の諸勢を糾きゆう合ごうするならば、一時の防ぎにはなりません」

「なに。それでも一時の防ぎに止まるのか」

「爾後じごのことは、大策を要しましょう。局所の合戦のほかのものです。しかし今は焦眉しょうびに迫つております。一刻もはやく下鳥羽しもとばへ」

利三としみつは急せぎ立てるように云つた。

光秀が山を下りたのは、まだ夜明け前の暗いうちだった。——明けると十一日。前夜、郡こおりやま山へ使いに行つた藤田伝五は、怒りを眉に持つて立ち歸つて来たが、利三の顔を見るやいな云つた。

「だめだ。順じゆんけい慶けいめも、裏切りおつた」

そして、相手の不信義を鳴らしてなおも、

「順慶坊主め、口の先では、程よく申しおつて、いつこう去きよしゆう就しゆうを示さなんだが、帰途、探り得たところでは、彼からも秀吉からも、頻りと使者の取り交かわしがあつたようだ。——げに頼みがたきは人心か。日頃、明智家とは、あれほど好誼こうぎある仲と思われたものすらかくの如しだ」

と、罵つてやまなかつた。聞く老将利三の方には、何らの感情のうごきも見られなかつた。当然なことを当然と聞いているふうでしかない。ただ白い眉と、まばらな髯ひげを持つ面おもてを、ありのままに彼へ向けていた。

ちまき
粽のこと

光秀が、むなしく洞ヶ嶺ほらみねを去って、下鳥羽の本陣へ帰って来た頃——十一日の午頃ひるごろ——には、すでに一方の秀吉は尼ヶ崎に着いて、一睡いっすいの快をとっている時刻だったのである。

光秀の本陣は、下鳥羽の秋山という一丘にあつた。

この日の暑さは、尼ヶ崎の禅寺も、この丘も変りはない。光秀はもどると直ちに諸將を会いばくして帷幕いばくのうちに作戦方針を議した。——とはいえまだ、いよいよ当面の敵とわかつた秀吉が、ここから指呼しこのあいだ尼ヶ崎に来ていようなどとは思ひも寄らないふうであつた。この先鋒部隊や先発の小荷駄隊は摂津口せつづくちにぼつぼつ現われても、秀吉自身が到着するのはなお数日を要するものと観みていたのである。

しかしこれをさして彼の叡智の混乱というのは当らない。彼はそのすぐれたる常識をもつて常識の水準からこう判断を下したに過ぎない。しかもこの判断は世人すべての常識でもあつたのだ。

「では、即刻工事を急がせましょう」

明智茂朝あけちしげともがまつ先に帷幕から出て行つた。評議は時をうつつさず終つたのである。茂朝は駒をよせて淀よどへ急いだ。急遽、淀城に補強工事を加えて、敵に備えるためだった。

淀を右墨とし、勝龍寺の城を左墨とし、能勢のせ、亀山の諸峰と、小倉之池に狭められたこの京口の隘路あいろを取つて、羽柴軍を撃げき摧さいせんとす準備行動のそれは第一歩とみられた。

また、前々から、散陣的に、淀川の対岸から山崎方面へ出しておいた幾つかの部隊にも伝令をとばして、

「勝龍寺へ籠こもつて、防墨をかため、満を持して、敵を待て」

と伝えさせた。

伏見には家臣池田織部いけだおりべを。宇治には奥田庄太夫を。淀には番頭ばんがしら大炊助おおいのすけを。また勝龍寺の城には、三宅綱朝みやけつなともをそれぞれ籠こめてある。

配するに万全を期しているが、敵方の兵数を推し量るとき、光秀はなお一抹いちまつの弱味を抱いだかずにいられなかつた。朝来ちようらい、午ひるを過ぎても、諸方から麾下きかに集まつて来る兵は相当あつたが、いずれも近畿の小武門や浪ろうろう牢ろうの徒で、いわば、名もなき輩やからちが出世のいとぐちを求めて来るに過ぎなかつた。大量の兵力をひっさげて、一方の將たらんといつて来る

ような曠^{はれ}ある参加者はほとんどなかった。

「いまのところで、味方の兵数はどれ程にのぼっておるか。勝龍寺、洞ヶ嶺、淀なども合わせて——」

光秀が左右に質^{ただ}すと、祐筆は着到帳と、亀山以来の譜代^{ふだい}の者と合算し、また安土、坂本その他、遠くに散在してある兵力とを差引いて、次のように書き出して、光秀へ示した。

齋藤利三^{としみつ}の隊 二千人

阿閉貞秀^{あへさだひで}。明智茂朝^{しげとも}の隊 三千人

藤田伝五。伊勢貞興^{さだおき}の隊 二千人

津田信春。村上清国^{きよくに}の隊 二千人

並河掃部^{なみかわかもん}。松田政近^{まさちか}の隊 二千人

——御本軍 約五千

ざっと、計一万六千である。光秀は心のうちでつぶやいた。

「……もし丹後の細川と大和の筒井だにこれへ加わっていたならば、日本中部を縦断して、われは絶対に不敗の態勢を取り得たであろうに」

すでに作戦方針を決定した後までも、彼は甚だ兵力の差に重点をおいて苦慮した。

由来、彼の頭脳は計数的であつて、にわかには、寡をもつて衆を破るが如き飛躍は、ひらめいて来なかつた。

それと、秀吉と直面するの大戦を前にしたが、どこかに一抹、敗戦を意識する気おくれが潜んでいた。これは決定的な敗戦の因をなすものであるが、光秀の性格とここ数日の齟齬がかくさせたもので、彼自身にも、どうにもならないものだったろう。

彼は、彼自身で起した怒濤の高さに、今や溺るる怖れすら自覚していた。しかし、それは表面の彼の姿ではない。彼自身も気づかないでいる潜在意識においてである。

その夕方、この下鳥羽の陣へ、一群の町人たちが伺候した。京都の町代表たちで、

「地子銭御免除の御礼のため、町民一同に代つて参りましたもので——」

とのことだった。そして、祝福の意を表するため、

「御合戦の大勝利をお祈り申しあげ、併せてお門立ちのお祝いまでに——」

と、手製の粽を献上した。

これらの者を迎えて、扈従の将星を左右に繞らし、悠然と床几に倚っている光秀のすがたには、まさに新しき「天下人」たるの威風に欠けるものはなかつた。

侍座の一将は、京都市民のよろこびと、献上の粽とを、光秀の前に披露して後、一同へ

向つて、

「洛内の取締りは、厳に戒めてあるが、なお日も浅いゆえ、さまざまな流言も撒かれ、陰にあつては、御行動を誹謗し奉るような説をなす者もあるう。しかし政をなす主権者に悪行あるときは、それを廢せし例は、わが朝のみならず、唐土にもあることで、周武がその主紂王を弑し、諸民の困窮を救い、周の八百六十年の基を開いたのを見てもわかるう。わけてわが日の本は上に万代不易の大君がおわしての武門であり、將軍職でもあれば、決して一信長が絶対の天下人でなければならぬ理由はない。汝らも、この辺をよく弁えて、市民の者が妄説に惑わされたりすることのないようによく努めい」

と、申し渡した。

光秀も、一言与えた。そして折角、志の粽だからといって、彼らのいる前で、そのうちの一つを取つて喰べた。

ところが、剥ぎ取つた粽の笹が、まだ少しこびりついていたとみえて、光秀は横を向いて舌のさきからベツと吐き捨てた。

「——あかんぜ、あの御大將は。きつとあきまへんぜ」

帰り途。口さがない京童の性を持つている代表たちは、口々に語り合つて行つた。

「粽の皮はよう残るもんじや。それをよう見もせず口に入れるような大将ではあきまへんわい。戦いは明智方の負けでつしやる」

このことを、後の諸書が、みな誇こし称しょうして、光秀が粽を笹の皮ぐるみ喰ったというように伝えてはいるが、恐らくこの程度に過ぎない小事であつたらう。

けれど京都人は由来、人に接すると、そうした小事を見つけて、すぐ相手の寸すん尺しゃくを量はかる性癖をもっている。中ちゆう原げんへ中原へと、古来から多くの武門が侵入して来ては没落し、あらゆる有為ういてん転てん変へんを、いつも被治者の立場から長い眼で見えて来たため、自然養われて来たものかと思われる。

桂川かづらがわ

法ほつ体たいの施せ薬やく院いん秀しゅう成せいが、

「惟これ任とうどのお目にかかりたい」

と、下鳥羽しもとばの本陣を訪ねて来たのは、京都町民の代表者たちが、そこを辞してから間もない頃だつた。

光秀は、藤田伝五、その他四、五の将を交えて、兵糧をつかっていた折である。

伝五の報告で、筒井の変節はもうあきらかだったが、なお順慶の余りなる豹変

ぶりには、ここでも諸將の憤りのたねとなつて、武門の風上にも置けぬ男と罵られていた。

そこへの取次であつた。

「はてな、施薬院が？」

光秀は眉をひそめた。施薬院は本能寺変の少し前に、信長から中国の陣へ差向けられていた者である。

「ま、通せ。——ともかく」

気のゆるせぬ心地もするが、また多大な感興と好奇も抱いた。秀吉の近状を知る者として、絶妙な便りとも考えて面会したのである。

「まずは、御健勝で」

と、施薬院は事もなげに平常どおりな挨拶をのべた。信長のことにはすこしも触れて来ないのが、光秀には何となく痛痒い気がした。

「お許は、中国へ下つたばかりと聞いていたが、どうして、にわかには立ち帰って来たか」

「筑前どのが、直ちに、京都へ攻め上られるため、われらの如きは、足手纏いと思し召

されたのでしよう。急に、お暇を下されたので、早々立ち帰って来たわけでございます」
「なるほど……ムムム」

と頷うなずいてから、ほんの言葉のつぎ足しに過ぎないような語調で、

「筑前は達者か」

と、訊いた。施薬院せやくいんも、至極、無造作に、

「はいはい、いよいよ頑健な御様子に見られました」
と、答え、

「あのお方の御精力というものは底がわかりません」

と、問われぬことまでいった。

「筑前には早や、毛利と和睦わぼくして、北上の途中にあると聞くが、お許がこれへ来る頃には、
どの辺まで来ておったか」

「何を仰せられます」

施薬院はその迂うを囁わらうように、

「もはや、ついそこの、尼ヶ崎まで来ていらっしやいます。それも今朝ほどのことです」

「えッ……?」

「まだ御存じなかったのぞ」

「先鋒ではないのか」

「おそらく先鋒の方がおくれたでしょう。筑前どの自身、紛れもなく着いております。途中の風雨も陸路船路も、ほとんど、不眠不休のおいそぎ方で」

「……そ、そうか」

語気やや紊れるのを、光秀は強いて沈着をよそおいながら、

「尼ヶ崎では面会いたしたか」

「余りに夥しい軍馬を見、わざと通り過ぎて参りました」

「兵数は」

「わかりませぬ。武家なれば目づもりでも知れましょうが」

「尼ヶ崎へは立ち寄らず、この下鳥羽のわが陣へ立ち寄ったのは、何か用向きがあつてのことか」

「中国でお暇をいただく折、日向守に会うたら申し伝えよと、筑前どのからお言伝てを頼まれておりましたので——」

「筑前からこの光秀へ言伝てとな？ …… おもしろい。何と云いおつたか」

光秀は異常な昂奮を抱いた。人をもつて言伝てして来たことばといえ、まさにそれは、敵將の決戦状ともいえるものと思つたからである。

施薬院は、次のように、それを伝えた。

「中国でお別れる折、道中用心のためにと、私へ手ずからお槍を一本下された上。——さて、筑前どのがいわれるには、その方は仕合せな仁じや、いずれ光秀と会うだろうが、このところ、後の天下は、光秀が取るか、自分が取るかだ。その両將のいずれにも心証しんじよのよいその方の家はまことに安全を保証されているものといわねばならん。——ついで、自分より先に光秀に面会いたした折は、筑前がかく申しおつたといえ。……そう仰せられました」

と、施薬院は、ここでちよつと、額ひたいの汗を、懐紙で軽くたたいた。そして秀吉の口吻こうぶんそのままいった。

「——日向守ひゆうがのかみとは毎度会いはいたして来たが、戦場で会うは初めて。大将と大将とが、直じきの太刀打ちいたすも、数日のうちにある。主君の敵なれば、部下の槍も待たず、かならず直の太刀打ちいたして、勝負を決すであろう。日向にも左様に心得おられ候え——と、かように屹きつと仰せられました」

「……………」

光秀はあきらかに感情をうごかしている。しかしじつと押し黙って聞いていた。がやがて、その硬直を解くと、しずかに一笑を見せて、

「筑前が云いそうなことよの」

と、立って、うしろに立て懸けてある槍を取り、施薬院に与えて、こう云い足した。

「言伝ことつづてたしかに聞いた。大儀である。——秀吉からも一槍を貰うたそうだが、わしからも贈ろう。洛中はまだ物騒じや。供の者に持たせて、用心怠りなく帰るがよい」

施薬院が辞去した頃は、すでに下鳥羽しもとばは宵だった。風が出て、雲脚くもあしが迅はやくなりかけている。

「暗いぞ。気をつけて参れよ」

光秀はそれを見送って、陣外の丘の端に佇たたずんでいた。——が、彼を送るのが主ではなく、白眼、天を仰いでいたのである。

「降りそうな……」

と、彼は独りつぶやいた。この風では降りもしないかと思われる一方に出た眩つぶやきだった。戦いに臨まんとするや、まず気象を見定めておくことは將の肚はらとして重要である。光秀は

かなり長く雲のうごきや風の方向を案じていた。

さらに、脚下の淀川を見た。

チラチラ、と風にそよぐ小さい灯は、味方の哨戒舟しょうかいふねであろう。大河のうねりは白く、山崎その他、摂津一円は、ただ漆うるしにひとしい闇でしかない。

「筑前風情が、何ほどのことを！……」

この河の、はるか海口うみぐち、尼ヶ崎の空へむかつて光秀のひとみが、光芒こうぼうを放ったようにすわったとき、彼のくちびるはかつて吐いたことのない強い語氣をもらった。

「作左。作左。作左衛門はおらぬかッ」

彼のすがたが大股に身をひるがえして元の営内にもどって行くとき、暗い烈風は、しきりに附近の幕舎に大きな波を立てていた。

「はいッ。堀与次郎、おりまする」

「堀か。そちでよい。すぐ貝を吹け。——全軍に出陣の用意をと」

陣払いの終るあいだに、光秀は洞ヶ嶺ほらみね、伏見、淀、その他の味方へ、急使を派した。遠くは、坂本城にある従兄弟いとこの光春へも、

（——退いて防がんよりは、前進して彼を邀撃ようげき、一戦に大事を決せん）

の覚悟を告げて、その来援を促して発したのである。

夜は二更。星ひとつ見えない。

軽捷な戦闘隊をまず丘から降ろして、桂川の上下を見張らせ、荷駄、本隊、後軍とつづいた。

驟雨が来た。全軍、渡河を半ばにしつつ、真つ白な雨に打たれた。

風も伴っている。西北の冷たい風だった。暗い川上を望みながら足軽たちはつぶやいた。「この川の水も、この風も、丹波の山を越えて来たものだ」

昼ならば見えもしよう。老坂も遠くはない。その老坂を越え、丹波亀山の故郷もとを出て来たのは、つい十日余の前だったが、彼らには、三年も四年も前のことだったように回顧された。

「溺れるなよ。火縄を濡らすなよ」

部将は、組々の者へ注意していた。山岳地方は、大雨だったにちがいない。桂川の水勢は常よりも烈しかった。

槍隊は、槍と槍をつなぎ持ちにして涉り、鉄砲隊は銃座と筒口を持ち合って越えた。光秀をかこむ騎馬の一隊は、早い水泡を残して対岸へ上がっていた。どこともなく前

方の闇でパチパチと湿しめつぽい銃音が断続して聞え、民家の火か、単なる篝かがりか、遠くに火花が見えたが、小銃の音が止むと同時に、それらの閃ひらめきも消えて、真の闇に還かえっていた。

「お味方の先駆が、敵の斥候隊を追い払ったものでござります。火花もまた、円明寺川附近の農家へ、敵の小勢が、逃げるに当って、火を放つけたのですが、直ちに、消しとめました」

伝令将校から報告がある。

光秀は意に介するなく、久我くがなわて暇ひまをすすみ、味方の勝龍寺城には入らず、わざとそこから西南方約五、六町ほどの御坊塚おんぼうづかに本陣をさだめた。

この二、三日の天気癖である雨はすぐ霽あがつて、墨を流したような濃淡を見せている空に星すら燦きらめき出している。

「——敵もしずかだの」

光秀は御坊塚に立つと、山崎方面の闇を一望して眩つぶやいた。

すでに秀吉の軍と、わずか半里を隔てて相對したと思う無量な感慨と緊張とが、その語の底に大きく呼吸をしていた。

ここを全軍の基点として、勝龍寺を後方の補給兵へいたん站基地とし、さらに西南方の淀から

円明寺川の一線を扇なりに引いた。前衛各部隊をそれぞれ配し終った頃——夜はすでに明け近く、淀の長流もほのぼの所在を描き始めていた。

突然。

天王山の一面に烈しい銃声こくだまが迸こくだまし出した。陽はまだ昇らず、雲は暗く霧は深い。天正十年六月十三日。山崎街道にもまだ一馬のいななきすら聞えない時刻であった。

火ひぶた

両軍が山崎に会して、この晨あしたを、生の日か死の日かと期して相対峙あいたいじしたとき、秀吉から光秀へ「戦書」を送ったとも伝えられているが、果たして、そういう余裕があったかどうか。

また、そうした古法の陣押しによつて、接戦の口火が切られたかどうか。

事実は。

光秀もまた御坊塚に着陣して間もない頃。また秀吉も、まだ後方の富田とんだに在つて、大坂から神戸かんべ信孝の来会あるを待つていた——十三日未明——まだ暗いうちに、期せずして、

秀吉方の山之手隊と、明智軍の奇襲部隊とは、ぎようあん 暁闇のうち、もう激烈なこの日の序戦に入ったのである。

——今しがた。

天王山方面に聞えた烈しい銃声がそれである。夜来、折々湿っぽい小銃音の小ぜり合いはしていたが、このときのものは、

「すわ！」

と、耳あるほどな者はみな毛穴をよだてて、やがての戦況如何にと、彼方なる雲か山かの一山影を凝視していた。

北軍光秀の陣営御坊塚から見るときは、天王山はここから約二十余町の西南にあつて、その左の麓に、一すじの山崎街道と、一条の大河とを擁している。河はもちろん淀である。

山頂はかなり高く峻しく、最高二千七百尺はある。別名をこもりの松山ともいい、たから 宝寺の山ともいう。峨々たる岩山で、全山、松の木が多い。

——きのう秀吉の本軍が富田大塚附近まで進出すると、麾下の諸将はみなまっ先に、この山に目をそそいでいた。

「あれは何山というか」

「あの東麓とうろくが山崎の駅か」

「敵の勝龍寺は、あの山の、どの辺の方角にあたるか」

など口々に土地の案内者に問いただしていた。

地理に詳しい者を陣中に伴うことは、どの隊でも必携ひっけいの具としていた。それに問うて、天王山の軍事的価値に目をつけたこともまた、多少戦略眼のある人々のあいだではみな一致していた。

「あすの合戦はあの山を先に占めて、高地から敵を俯瞰ふかんして打つの有利に立った方がまず勝ちであろう」

また必然、諸将の胸には、

「――先駆さきがけて遮しや二無二、天王山にお味方の旗を立てた者こそ平野の一番首よりも、戦功第一の誉ほまれたらん」

と、ひそかに期するものがあつたので、十三日の前夜、それを秀吉に献言し、或いは、みずからそこに赴かんと願い出た諸将が、幾人もあつたらしい。

「いずれは明日あす一日できまる戦いと観みる。淀、山崎、天王山を中心に、死ぬも生きるも、

およそ数里の外には出まい。われと思わんものは行け。ただし、味方争いするな。わたくしの功を競うな。ただ念ぜよ。故右大臣信長公の在天の靈と、弓矢八幡のしょうらん照覧を」が、秀吉のゆるしを得るや、勇躍して、真夜中のうちに、ここを立って天王山へ長駆したものの、鉄砲大将の中村孫兵次、堀秀政、堀尾茂助など、黒白あやめもわかぬ一勢であつた。南軍秀吉の麾下きかがみな目をつけた重要な地点を、北軍の光秀が、迂闊うかつに見のがしているわけは絶対でない。

光秀が、長駆、桂川かつらがわを渡つて、にわかには御坊塚まで出る決断をとつたのも。

——同時に天王山を占めて。

と、作戦態勢をすでに描いていたればこそその行動だった。

この辺の地理に明るいことにおいては、敵の先鋒の中川清秀や高山右近にもゆずらない光秀でもある。かつは、同じ山河の地勢を観るにしても、光秀の観るところおのずから彼ら以上のものを観ていよう。

で、光秀は、桂川を越えて、久我くがなわて礮を行軍中に、もうその途中から一軍を割いて、しもかいいんじむら「下海印寺村を北に見、天王山の北側より攀よじ登つて、山上を取れ。敵襲よせ来るも、構えて、要地を譲るな」

と、激励して、そこへ送っていたのであった。

命をうけた者は、勝龍寺城にいた松田太郎左衛門で、並河掃部の配下であり、この辺の地理に精通しているところから特に選ばれたものである。

松田太郎左衛門は、弓鉄砲組をあわせ、約七百余の兵をひきつれて急いだ。

ずいぶん迅速といわねばならない。光秀の司令も行動も、決して戦機を外してはいなかったのである。

にも関わらず、この時すでに、南麓の広瀬方面を突破して来た秀吉の諸勢は、先を争って、山へ取ツついていた。

しかし、なお真ツ暗な時分であるし、土地に不案内の将士が多い。

「登り道がある」

「そこは登れまい」

「いや、登れる」

「間違つた。このさき、崖だ」

などと麓を巡って、各攀路を搜り合うにあせていた。

ここまではほとんど後先なく、一斉にかたまつて来た堀秀政の隊、中村孫兵次の隊、

堀尾茂助の隊なども、忽ち分散して、あなたこなたに、石ころを落し、かんぼく灌木を掻き分け、そうぜん騒然と、麓一帯に物音を起しているに過ぎなかった。

さきに——前日の昼——先鋒部隊を命じられて、山崎まで出ていた高山右近と中川瀨兵衛の陣も、ここから近いのである。

わけて瀨兵衛は、高山右近に先んじられて、山崎の町から関門の閉め出しを喰って、この山之手方面へ陣していたので、忽ち味方の奇兵的行動に感づいた。

「その要地たることは、此方とて氣づかぬではないが、筑前どのの命令もまたず、みだりに逸はやまった行動を起してはと、ふかくみずから慎んでいたのだ。——さるを、後方にひかえていた諸隊が、われらにも無断で、先駆けするとは怪しからぬ。その分なれば、瀨兵衛とて、彼らごときにおくれるものではない」

憤然と、旗本数名、銃士わずかを連れたのみで、山麓から数町上の宝寺へ駈けあがって行った。

この道こそ、唯一の登り口で、あとは容易に頂へ行けない樵そまみち夫道にすぎない。瀨兵衛は、それを知っていただけに早かった。しかし宝寺の門前まで近づいてみると、もう先に来て、その山門の扉を、大声あげながら叩いている一群の武者があつた。

「誰だツ。味方か」

瀬兵衛が、声をかけると、山門の下の人影は、振り向きもせず、

「問うもおろか」

と、答えた。

これは堀尾茂助の声だった。

茂助吉晴は、いまでこそ、錚々たる羽柴麾下の一将だが、その青年期までは、岐阜の稲葉山つづきの山岳中に育った自然児である。彼の眼をもって見るときは、この天王山の如きは、ほんの一小丘としか思われぬにちがいない。

「寺僧、起きろツ。山門を開けぬと踏みやぶるぞ」

堀尾の部下は、そこを叩きつづけている。戦いを予感して、寺内ふかく潜んでいた僧は、やがて紙燭を持って出て来た。そして山門をあけるや否、どこかへ隠れてしまった。

「つかまえろ、一名、道案内に——」

瀬兵衛たちが、それを求めているうちに、堀尾茂助の主従は、十数名しか見えなかったが、わき目もふらず境内を駈けて、裏山の道へのぼっていた。

瀬兵衛は、それを見送って、舌打ちしながら、捕えた僧を追い立てて、

「山上まで、案内せい。早く早く」

と、槍で脅おどしていた。

とこうするうちに、山崎の町に陣していた高山右近の部下までこれへなだれて来た。――実にこの未明に行われた天王山先陣の士気の烈しさには、味方と味方のあいだにおいてすら相ゆるさぬものを互いに示していた。

味方と味方の負けじ魂は、時にきわどい摩擦まさつを起こすし、全戦局を過あやまるような危険もなしとはしないが、さりとして、この気魄きはくもないような気魄では、敵と相見あいまみえても、直ちに、靈魂そのものとなって、身を投げこむことはできない。

功を競きそうべからずであるが、男は各磨き合え、恥はたがいに恥と知れ、というのが秀吉のころであつたらう。

とまれ、この暁ぎようあん闇中天王山一番駆けは、いったい誰が早かったのか、どこの部隊が先駆だったのか、ほとんど我武者羅がむしやらのあらそいで、後の軍功によるも、記録によるも、皆目、見当がつかない。

堀、堀尾、中川、高山、中村各家それぞれ自家の先登をその家の記録には主張しているし、「堀家家譜」「川角太閤記」「池田家譜集成」「武功雜記」「明智軍記」などの

諸書の記載も、また、みなまちまちになっている。

しかし、想像に難くないのは、いずれにしても、逸早く山上近くに達した人数は、各隊のうちの極めて少数だけで、それも一将の下の一隊と限らず、諸將の部下が交じり合つて、偶然、早足者だけの混成部隊となつていたろうと思われれることである。

道は嶮しいし、夜はまだ明けないし、味方には違いないが、誰の手勢やら組やら分らない中に伍して、この将士はただいえいと山上へ急いだのだつた。そして、はや頂上も近いかと思われた頃、いきなり方角も知れないところからつるべ撃ちに弾をうけた。

撃ち出したのはもちろん明智方の松田太郎左衛門の銃隊である。

しかし、松田勢が先に火ぶたを切つたからといって、天王山の山上を先に踏んだのは明智方であつたかといえ、そうはいえないものがある。

なぜならば、それよりずっと前に、羽柴方の侍、山川七右衛門、山川小七、岸九兵衛の三名が、こつそりそこへ登つていた。そしてまだ人氣なき山上や麓の闇を見下ろしながら、「この要地を真ツ先に乗つ取つた者は恐らくわれらが一番であろう。この三名を措いては
あるまい」

と、遅れている味方や、まだ気配もない敵の静かさを嗤つていた。

すると、どこやらで、

「やかましい。黙つてその辺に身を伏せておれ」

と、叱つた者がある。

驚いて、あたりを見廻すと、何ぞはか凶らん、自分たちより先に、この山上に来て、岩陰にうづくまり、居眠りをしていた男があつた。

「誰か」

と、訊くと、

「高山右近の手の者、なかがわふちのすけしげさだ中川淵之助重定」

と、答え、

「貴公たちが、がやがやいうので、折角、敵が来るまで一ひとねむ睡りと思つていたのに、眼をさまされてしまうたではないか。ただ高い所へ登つただけでは、てがらでも何でもない。お互いにてがらを談じ合つていいのは、明智を全滅してからのことだろう。まだ勝敗もわからぬうちに、はしやぐのはちと早過ぎはせんかの」

ひどく愛想の悪い男である。こうぶつぶついうと、彼はまた自分の膝を抱えて居眠りを始めている。

しばらく経つとここへまた、中川家の臣、阿部仁右衛門も登つて来た。二人の鉄砲足輕も一しよだった。——で、山上にはこの頃すでに七名の羽柴方がいたわけだった。

そのうちに麓の宝寺やその他の方角から、味方の大勢の声がかすかに聞えて来たし、同時に——ほとんど同じゆうして——北側の下海印寺方面からも、すさまじい勢いで、明智方の松田隊七百が、これも先は、先頭、後は後、隊伍の順もなく、先登を争つて、あらしの如く駈け登つて来た。

「まだ撃つな」

例の 仏頂面ぶつちようづらした中川淵之助は、あだかも自分が、この手の指揮者でもあるように、逸はやりかける他の六名を戒いましめて云つた。

「——ずんと敵をそばまで引きつけてから一度に撃て。この下の道の曲り角に、白いものが見えるだろうが。あれは俺が松の枝に括くしつけておいた白鉢巻の小布だ。銃つつの標的をあの下に狙ねらいさだめておけ。そして敵の影がそこを曲つて来たら、途端に浴びせかけるのだ」
小面こづらの憎い味方だが、云い分は良策だし、頼もしいところもあるので、みなその言に従つて、敵の来るのを、待ち構えていた。

ところが、松田太郎左衛門の先鋒隊は、まだ山上に間のある八分所はちぶどころからはや後方の山

腹に羽柴勢の影を認めたので、忽ち機先を取る戦法に出て、一斉に銃火を浴せかけたのであった。

当然、羽柴方も応射した。

しかし、これはまだ距離も距離だし、暗くもあり、敵味方とも極めて目標の不的確な氣勢射撃に過ぎなかつたので、どつちに取つても、大した効はない。

むしろ、七名の小人数ではあつたが、この途端に、山上から数百歩駆け下りて来て、明智兵の影を認めるや否、銃先下がりつっさぎに撃つて来たわずかな弾丸のほうきこうが、はるかに奇効を奏した。

最初の七発の弾たまのうち、三弾は確かに敵を仆した。のみならず多寡たかはともかく頭上に羽柴勢の現われたことは、明智勢をして少なからずあわてさせた。敵の顔まで見える距離で敵を見たのは、この大決戦において、この一瞬が初めてであつたのだから、全隊が一時ぎくと衝撃しゅうげきをうけたことには相違ない。

敵の形相ぎようそうも、阿修羅の姿も、戦いが酣たけなわとなつて、自分もそれとなつたときは、何でもないものであるが、もつとも不気味なのは、初めに接近したときである。

その刹那には、敵と名のついた者は、人にもあらぬ悪鬼か羅刹らせつの如き感じがするものだ

った。しかしこれは、敵方が視る心理も同様なのであるから、その殺気に眩いをせず、日頃の丹田で、沈着に押し迫った方が、序の勝口を取ることはいうまでもない。

松田隊の先頭には、主将の太郎左衛門はいなかった。太郎左衛門の部下の将、辻義助が指揮に立つて来たものである。義助は、よく肚もすわっていた侍とみえ、すぐ奇襲の敵が六、七人に過ぎないことを看破して、

「騒ぐな。小勢だ」

と、不利な低地を取っているため怯みがちな味方を励まし、

「銃口をみなあの上の岩角にあつめろ。一斉に撃て」

と、呶鳴った。

少なくとも、七、八十挺はあろうかと思われる鉄砲の影がうごいた。それが皆、ひとつ焦点へ銃口を向けたのである。上の岩頭に立っていた七名は、当然、蜂の巣となるべき的に位置していた。

——と。中川淵之助は、他の岸九兵衛、阿部仁右衛門、山川兄弟などに対つて、
「間に合わん。俺は突ツこむぜ」

云い捨てると、鉄砲を捨てて高きから低き敵へ、猛然駆け向って行った。

一弾放つと、一弾こめて、火繩を点じひきがね関金を引くまで、かなりの時を要するのが、この時代の火器のどうしてもまぬかれ難い弱点だった。

殊に、明智方の銃士は、桂川を渉わたるとき、驟雨しゅううのために、だいぶ装備を濡らしている。中には幾筋もの切火繩がみな役に立たず、後に退っている者もいた。

その虚を衝ついたのである。淵之助に倣ならつて、阿部仁右衛門も岸九兵衛も、劣らじと、捨身に出た。パパパツと慌あわてた弾煙たまけむりが立った。こう撃つ弾は中あたっていないこと確かである。淵之助の陣刀は、もうそこらの敵を薙なぎ分けていた。山川七右衛門の弟小七は、素手で取つ組んでいた。槍を向けて来た敵がいたので、その槍欲しやと奪いにかかったためである。

まつまつまつ
松松松

後に思いあわせると、松田隊の七百余人の部隊は、このときもう二分されていた。

南軍のほうでは、堀尾、中川、高山、池田の各手の将士が、先を争って天王山の先登せんとうを競っていたが、堀秀政だけは、

「横道をとつて、北側の麓へむかえ」

と、急に山の腰を迂回して、行動を別にしていたのであった。

その目的は、すでに山へかかっていると観た敵勢の退路を断つにあった。

果然、その横襲は、松田隊を中断して、主将の松田太郎左衛門を、目前に見ることができた。

ここの激突は、山上よりも烈しかった。松樹や乱岩の多い山坂の混戦なので、鉄砲などはまどろいとなして、槍、太刀、長柄で喚きあう者が多かつた。

組んで、岩頭から落ちる者がある。惜しくも組みしきながら後から一と突きに刺されるものもある。

もちろん、弓組もいるので、弓鳴りや銃声は間断もない。しかしそれ以上なのは、敵味方約五、六百の喊声だった。その声は、たれひとりとして、喉から出しているようなのではない。満身の頭髪と毛穴から発しているとしか聞えない。

押しつ押されつだ。いつか陽はさし昇っている。めずらしく青空と白い雲が見える。こゝろ照り出すと、いつもなら満山に聞える蝉の声もきようは唾となったかのようなのである。

そして山をも揺がす武者の叫喊が、それに代っていた。累々、あなたやあなたに、

はや数えきれぬ朱の屍が点綴された。或いはひとつに或いは重なり合っている姿は悲痛を極める。しかしそれが味方を叱咤する力は非常なものだった。その屍をふむ戦友はみなすぐ死生の外へ駈けた。堀隊の兵もそうである。明智隊の兵もそうである。

山上の戦況はまだ不明だが、ここも一勝一敗をくり返していた。そのうちに、北軍の松田隊に揚っていた諸声かふと急変した。陽声から虚声になったのだ。わあッ——と、まるで嬰兒が泣くときのような退く息を示したのである。

「ど、どうしたのだッ？」

「なぜ退くかッ。退くな」

味方のみだれを怪しむ者は、味方にむかつて憤怒した。しかしそうした人々も、忽ち雪崩に巻かれて、麓のほうへ駈け出した。自分たちの主将、松田太郎左衛門が一弾に中つて、部下の兵に担がれてゆくのをようやく眼に見たからである。

「追えッ。突きまくれッ」

堀隊の大半は、すでに追撃をかけている。——が、秀政は、声をかぎりに、
「追うなッ」

止めていた。制していた。

けれどその間髪の勢いは到底、制止も何もきくようなものではない。果たせるかな山上から、松田隊の先鋒がまるで濁流のように駈けて来た。後続隊が来ないところへ、主將討たると聞いて、当然降りて来たものだった。

数においては、堀隊は彼の比でない。一戦どころか、ひと支えもなし得ず、急坂を駈け降りて来た敵の部隊に、つき飛ばされ、踏みつぶされてしまった。さきに麓へ追って行った堀隊の一部もまた、秀政の案じたとおりに挟撃きょうげきをうけて、惨たる苦戦に立ってしまった。

そのとき堀尾、中川、高山、池田の混成山之手隊は、山上にむらがり立って、

「取ったッ」

「天王山は、わが軍のもの」

と、序戦第一の歓呼を張りあげていた。

けれどそれは一部の将士だけに過ぎない。あらかたの者は、そこを占拠するや否、なだれを打つて麓へ退いた明智勢を急追していた。そして途中から堀秀政の手ひとつになった。秀政もこの時は、多くの味方を得たので、ためらいなく、さきに駈けた部下の一部を救うためにも、急せきに急いで、追撃戦へ移っていた。

逃げ散る敵は道を選んでいないので、追う者また道を見てはいなかった。

このすさまじい「駈落しかけおと」のうちに、宮脇又兵衛（後に長門守ながとのかみ）は馬を用いていた。そして宝寺たからでらのうしろの断崖の上に来てしまったのである。馬は当然、硬直してうごかない。その間に、身軽な敵勢は、小道を駈け下り、或いは、藤蔓ふじづるなどにすがって、蜘蛛くもの子のように逃げ降りてゆく。

「武門ぶもんに伍ごして、日頃は人並の言を吐いている又兵衛も、いざとなつては、わずか数丈の切岸きりぎしに怯ひるんで、馬を捨てたといわるるも口惜しい。——源九郎がひよどり越えの嶮けわしさは知らねど、ままよ彼も人、我も人」

又兵衛は両の手に手綱たづなを結んで、ひたと馬の背に胸を伏せると、逆落さかおとしに絶壁を乗り落した。

人に見せんためではないが、せつなの勇姿を目撃した者も多かった。敵とも味方ともつかず、ただ一つの喊声かんせいが、わあツと、その蹄ひづめから立った砂煙へ驚嘆を送った。

砕けたか？ 脚を折ったか？

と人々は、刹那のあとを、なお見まもつたが、何のこともなく、馬は又兵衛を乗せたまま、追いついた敵勢のなかを狂奔きょうほんしていた。

この道筋ではなかったが、堀尾茂助も、馬で敵を駆け落していた一人であった。彼は、用い馴れた十文字の槍をふるい、目ぼしき敵を三名まで引っかけたが、そのたびに、徒歩かちの家来、堤五兵衛、松田又市、柿権八かきなどを顧みて、

「いまの首を取れ」

と、いいつけ、自身はなお、寸間の時も惜しんで急追をつづけていた。

このほか、ここ一山を中心として、ふつきょう 弘ひる 暁から午まえの二ふたとき刻ばかりにわたる合戦中に、武功を示した将士は列挙するにいとま 違もないほどである。以ていかに、秀吉麾下きかの面々が、たがいに手に唾つばして、たとえば宇治川の先陣に臨むがとき——はれ 曠と、意気とを——心に期していたかがわかる。

この意気は、もとより彼ら箇々のものに違いないが、大きく観みると、秀吉の意気の投射であり、秀吉という主体を得て、初めて、太陽系を環めぐる諸衛星のような勢いと燦かがやきを持つたということもできる。

が、秀吉はこのときまだ前線に着いていなかった。神戸信孝の来着を淀川に迎えていたためである。信孝や丹羽長秀などの軍を加えて、彼がその本陣をここへ進めて来たのは、まだ陽ざかりの未ひつじの下刻（午後三時）頃であった。この炎天に、暁の雨も乾いて、人馬は

汗と埃にまみれ、華やかな緘の色や陣羽織もみな白っぽくなっていた。ひとり燦々として烈日を射るが如きものは、金瓢の馬じるしだけであった。

秀吉はその馬印を、山崎八幡宮の社前に立てさせた。

天王山に銃声の響していたうちは、空家のようだった町も、明智勢が退却して、ここに新たな甲冑の潮が混み入ると、忽ち戸ごとに、水桶や瓜の山や、麦湯などが持ち出された。そしてその接待に、羽柴兵がむらがつてくるのを歓びとする町民たちの中には、女子供まで立ち交じっていた。

「敵はもう一兵もあれにいないか」

秀吉は馬も降りず、間近の山上に見える味方の旗じるしを凝視していた。

「おりませぬ」

答えたのは蜂須賀彦右衛門である。諸隊の戦況報告を綜合して判断を加え、概念を秀吉に伝えていた。

「出ばなに、指揮者を亡った敵の松田隊は、その一部は北の麓へ、残る一部は友岡附近にある友隊と合したようにござりまする」

「光秀ともあろうものが、なぜこの高地を左様にあっさりと抛棄したろうか」

「おそらく、彼とても、かほど迅速にとは思い得なかつた結果でしょう。『時』の量り違いです」

「彼の主力は」

「勝龍寺をうしろとし、円明寺川を前にして、淀口よどぐちから下植野しもうえのにわたつて、満々と陣しておるようです」

神官や小姓組が来て、木蔭の涼しい所へ、お床しょうど几ぎを設け置きましたが——と休息をすめたが、秀吉はなお馬を立てたまま見向きもしない。

堀尾茂助、堀秀政、中川淵之助、宮脇又兵衛など、やがて続々これへ歸つて来た。そして各、馬前に一閱いちえんを受け、かつ、秀吉自身の前線出馬を賀し合つた。

「山麓まで行つてみよう。まだ死骸もそのままだろうが」

休むいとまを秀吉は血戦のあとへ馬を向けた。そして、聖天堂しょうてんどうのわきから中腹近く

まで登つて行つた。ここからは淀も、円明寺川の一線も、敵の布陣も、一瞬ぼんのうちだった。「秀政も茂助も、馬で駈け落したそうだの。中川や高山も、よい家来をもち、他家に恥なき戦功をあげたのはめでたい。とりわけ、宮脇又兵衛は、信長公の先発として、中国へ下るべきを、引つ返して、きよようの働きは、聞くも胸のすくような心地がする」

彼は、又兵衛を呼んで、手ずから長刀一と振りを与えた。敵味方の累々たる死屍は、松の根がたや岩角に、そのまま、撩乱の朱を見せていた。

「お味方もお味方ですが、敵もなかなかよく戦います。明智方にも、恥を知るさむらいは多いようです」

堀秀政がいうと、秀吉は、さもあろうと頷いた。そしてそれらの死屍のあいだを歩いて、すぐ山を降って行きながら、こう連歌の上の句を口誦さんだ。

松松松どれも日本の姿かな

「たれぞ。下の句を附けてみんか」

——しかしそのとき、円明寺川の方面に、喊声と銃声が揚った。きつかり申の刻（午後四時）頃の陽脚であった。

相搏つ 両軍

円明寺川は、山崎の駅の東方にあたる。一とすじの流れは川の姿をなして、淀川に注

ぎこんでいるが、附近は葭よしや蘆あしにおおわれた一帯の沼地である。そして常ならば行々子よしきりの聲が喧やかましく聞えるのだが、きようは一鳥の声すらない。

——が、この附近にはすでに、その日の午前から、明智方の左翼と、羽柴方の右翼とが、一水を挟んで、じつと対峙していたのである。

折々、ザアと、葭よしの葉裏を白く翻かえして、沼地を渡る風の中には、わずかに旗竿はたざおの先が見えるぐらいで、軍馬らしいものは兩岸共に見えなかつたが——北岸には、斎藤利三としみつ、阿閉貞明あへさだあき、明智茂朝あけちしげともなどの兵力は、先頭予備を合わせて、約五千はいるはずであり、また南岸には、高山右近、中川瀬兵衛の部下四千五百に、池田信輝のぶてるの兵四千というものが、重厚に陣列をかさねて、いわゆる一触即発の幾時間かを、むなしく湿地の暑熱に蒸むされて戦機を待っていたものだった。

これはもちろん秀吉の来着と、その命令一下を待っていたもので、はや味方の山之手隊が、天王山を占領したとも聞えていたので、この方面の将士は、なおさら武者ぶるいして、「いつたい、本軍は何をしているのだ」

と秀吉の着陣が遅いことを罵りたいばかり齒痒はがゆがっていたのである。

一面、御坊塚おんぼうづかに本陣をおいていた明智光秀は、疾とく天王山へさし向けた松田太郎左衛

門の討死、またその部隊の全面的な敗退を聞いて、

「遅かったか」

と、自己の指揮が、時を誤っていたことを、まずみずから責めていた。

その一高地を、味方の勢力下に置いて戦うのと、敵の手に委して決戦に臨むのでは、作戦上、重大な相違を来たすぐらいなことは、もとより彼も充分に知っていた。

けれど、これへ進出するまでの間に、光秀は、その機を掴む寸前において、三つの「未練」に惹かれていたのである。未練とはいわゆる決断を鈍らせる迷いにほかならない。

一は、筒井順慶との会約にひかれ、むなしく洞ヶ嶺ほらみねに一夜を焦躁して送ったこと。二は、下鳥羽に帰陣して後も、なお淀城の修築などを命じていたほど——秀吉の進撃に対して時間的な過誤かじを抱いていたことである。

また、その三としては、根本的な彼の肚はらの問題になる。つまり積極か消極か。攻勢をとるか、守勢を選ぶか。御坊塚へ進出する直前まで、彼の大方針は多分に、岐路きろを決していなかった。

これは、老臣齋藤利三などの意見も大いに彼を迷わしていたといえよう。利三は、使いをもって二度まで、光秀にこうすすめていたのである。

(ここの御一戦では、どうしてもお味方の不利と考えられます。如かず、秀吉の鋭鋒を躲して、ひとまず坂本まで御退陣の上、江州その他に散在しているお味方の勢を一つに結束し、不敗の陣容を確とかためた上、敵をお邀え遊ばすが、ここにおいては、唯一の良策ではございますまいか)——と。

斎藤利三の献言は、決して理由なきものではない。

一万六千と数えられる明智勢も、その質を見ると、内二割は、山城新附の兵である。

これは子飼の士卒にくらべると、断然見劣りがする。あちこちで新たに糾合された未訓練の兵であるから、弱いことは知れきつている。

また部将のうちにも、諏訪飛騨守とか山本山入とか、その他、旧公方家の遺臣だの、丹波武士と称する土豪なども交じっている。これらの者の闘志を、果たして、明智譜代の旗本たちと同様に視て、この戦列に恃んでいられるかどうかも甚だ疑わしいのである。

これに反して、敵秀吉の軍容は、圧倒的な優勢にあるといわなければならない。数においても。

中国から引つ返した彼の直属軍一万に、池田信輝の四千人、高山、中川の両軍をあわせ四千五百人。ざっと一万八千五百人を擁している。

加うるに、大坂表から参加した神戸信孝、丹羽長秀、蜂屋頼隆の総勢約八千を容れたので、総計すると、

二万六千五百人。

が、その実数となつた。明智方から比して、断然一万は多いのである。

のみならず、その麾下は、いわゆる精銳であり、また故信長の譜代であり、かつ、絶好なる——

「故右大臣家の 甲 合 戦」

なる大旗を持つてゐるのだ。

これに對して、その出足早な潮さきにむかつて行くのは、到底、明智方の不利である。

この際、明智方としては、京都という政略上重要な地をひとまず敵に委ねても、坂本まで退いて、そこにある三千の兵と、また味方のうちでも最も恃みがある良將としてゐる明智左馬介光春をも帷幕に加え、かたがた、四国の政治的变化や、信長の遺臣中にも必然起るであろう内訌と自壊作用などを待つて、おもむろに陣容をかため、ここに玉砕を選ぶよりは、万全な戦いをなすべきではあるまいか。

これが齋藤利三の考えるところであつたのである。

老将の見解にはおのずから肯綮こうけいに値するところが多い。光秀も内心は大いに心を惹ひかないこともなかった。けれど彼は、

「ここで敗るる程ならば、坂本にたてこもるとも敗れ去らんは必ひつじょう定じょうである。もし京都を敵に委すならば、光秀の名分は何によつて立てようぞ」

と思つた。たとえ幾多の不利はあるとも、一戦も交えず、京都を明け渡すことは、彼の心事として、断然、忍び得ないものがあつた。

人にも語らず、檄げきの文にもそれは称いえないことだったが、光秀の心事というのは、実にこうであつた。

(たとえ主と名のつく信長を一いち朝ちように討つも、われも御民みたみ。信長も御民。弓矢の精神こころになど変りのあるべき。さるを、一戦もせず、御所の地たる京都を易々いとして敵に渡すからには、あれみよ光秀こそは、何を奉じて天下に立たんつもりぞ。不利と見れば、禁門の御所在も打ち忘れて、引き退く心根の卑いやしさを見よ。信長を討つたる心も、それをもつてみれば、まったくの乱臣賊子の出来心に過ぎまい。そういわれても是非がない。よし屍かばねはいかに辱はずかしめらるるも、その一点を疑わるるは百世までの心外である。——光秀は断じて、都をうしろに、この山崎で一戦を決しよう。なんの秀吉、何する者ぞ)

かくて、この戦いに面した光秀の心事は、すでにこれへ臨む前から、おのずから悲調を奏かなでていたものと観みてよい。

——秀吉、何する者ぞ。

との気概は示しても、心の底には、必勝を期すまでの確信はなかった。

その悲壮な決意は、主なる将にはみなよく酌くみ取られていた。その点、彼にもまた、彼のためにはいつでも死のうとする腹心が多い。

とりわけ斎藤利三のごときは、年も老齡としではあるし、忠ちゅうかん諫かんすでに容いるるところとならず、大勢の見透しにも老将だけに、

「きようこそ、一期いちごと覚えたり」

とは、誰より先に、ひとり決めていた覚悟であつたらう。

——で、円明寺川口の銃声も、その斎藤隊から突如として揚あつたものだった。

戦いの切っかけというものは微妙である。両軍とも小半日は葭蘆かろのあいだに、ブヨや蚊に喰われながらも、じつと対峙たいじしたまま、上將の号令を神妙に待っていたが、そのうちに、羽柴方の陣から美しい鞍を置いた一頭の放れ駒が、水を吞もうとしてか、ふいに円明寺川の岸へ跳ね出して来たのである。

馬の持主は郎党であろう。それを追いかけて来た四、五名の兵が見えた。それへ向つて、対岸の葭よしの中から、ぱつと弾たまけむり煙けむりが立ち、つづいて、パチパチパチとつるべ撃ちが注そそがれたのであつた。

「あッ、殺やられた。撃て、撃て」

川べりに伏した味方の兵を救うために、此方からも、北岸の弾煙へ向つて弾が送られた。かくてもう命令を待ついとま違ちがはない。

「——全軍突撃」

という秀吉の命令は、実に、この銃声が揚つてから後に届いたものであり、明智方もまた、敵の動きに反動を起して、果然、川を渡つて来たものだった。

淀へそそいでいる川口はかなり広いが、少し上流かみのほうは、さしたる川幅ではない。

ただし、水は数日來の驟雨しゅううで相当激している。鉄砲を持った明智の銃隊が北側の藪やぶに姿をあらわして、南側の堤上に立つ羽柴勢を狙い撃ちするあいだに、はや彼方此方、しぶきを蹴つて、押し渡つてゆく甲かちちゆう冑ちゆう群は、明智の精銳級と目されている槍隊の士たちであつた。

「槍組ッ。出ろッ」

堤の上でも高山隊の一将が、躍り上がって、指揮していた。

川幅が狭いので、銃の効果は少なかった。前の一側が撃って、弾込めたまひこするため、後列の一側が入れ代る間に、はや此方の岸へすがりついた敵は、直ちに、銃隊のふところへ跳びこんで来る危険があつた。

「銃隊は横へ開け。味方の前を塞ふさぐな」

槍の穂をそろえて突き出した中川隊の一群は、あらかたその槍をふりかぶって、堤の下や水面を撲なぐりつけた。

もちろん目ざすものは敵兵だったが、槍を繰り引いて突き出すとまよりは、振りかぶって撲りにかかったほうが、より迅速に、敵の出足を防ぎ得るからであつた。

激突は、川の中で起つた。

槍と槍。槍と太刀。——或いは長柄ながえ。

斬ツつ、斬られつ、である。

「面倒ツ」

と、吠えて組む者。

しぶきを揚げて戦列から水中に没し去る者。

濁流は渦巻いた。

いや、武者と武者の中に、わずかに流るる水があるといつてよい。川は戦う武者で埋められている。

血あぶらは、水面にぱつと泛ういては、ぱつともとの水に回かえってゆく。

そのうちに、南軍の第二陣、中川清秀の一隊は、下流の戦鬪を、高山右近の手勢にまかせて、

「突ツこめ。突ツこめ」

「ただ、突ツこめ」

「横にも、後にも、顧かえりみするな」

「突ツこめ突ツこめ」

「ただ突ツこめ」

御興みこしかつ昇のぼぎの懸かけごえ声をそろえて社を出るように、わっしわっしと、重厚な戦列を押し出

していた。そしてはやくも、円明寺川の東岸の藪しやに迫り、遮しや二無二、敵の中へ駈け入った。

この辺は、明智の左翼第二隊、阿閉あべ貞明の陣地である。北軍の破綻はたんはまずこの一線から生じた。すでに味方の左翼が猛突撃を起しているにかかわらず、しきりと弾たまけむり煙のみ立

てて、火器の威力を恃み過ぎていたためである。

藪を踏みこえると、所々の湿地のほか、畑や野道や団栗林などが見える。明智勢はそのいたる処に真ツ黒なうごきを呈しており、今や、味方の陣地内へ一歩突き進んで来た敵を見ると、怒濤のように、思い思いの相手を目掛けて駈け蒐まった。

「ありやありや」

と、異様な声を発して、明智方から挺身して来る巨漢がある。見るまに、彼の重そうな強槍は、中川隊の士を四、五名突ツかけて、左右に芻ねとぼし、なお此方へ奮迅して来た。

具足はつけているが兜はいただいていない。鉢巻から逆立つ乱髪は一炬の炎のように赤ツぽく見え、その大きな双眸の光と共に、いかにも万夫不当のさむらいらしく見えた。その漢に突き崩されて、中川隊の一角は、ふたたび川の側まで押し返された。——と見て、中川勢のうちから、

「おのれ、われ独り武者顔する憎い奴。ここに織部のあるを知らぬか」

と、呼びながら、颯爽、前を遮って、猪武者の槍のなかばを、槍をもって、ぴしツと搦み合わせて行つた一将があつた。

中川清秀の婿の古田織部重然ふるたおりべしげなりであった。

この二者の戦鬪は、余り烈しくて、人交ぜひとまをゆるさなかつた。彼に比して、織部の槍は、細目だったせいから、戛然かつぜん、けら首のあたりからポキンと折れて、その穂先だけが、あたかも氷片のように遠くへ飛んだ。

「あなや。若殿危うし」

と、周囲に戦つていた中川家の家士たちは、思わず眼前の敵を捨てて、救けに向いかけたが、織部は咄嗟とつさに、折れ槍をふりかぶつて、敵の手許を強く一打ちし、同時にそれを捨ててむざと猪武者のふところへ組みついていた。

中川家の家士達は、途端に後へ迫つて、織部おりべの相手方を、滅茶苦茶に斬りつけ、また、突き抉えぐつた。

秀吉の第二軍中川勢の突出は、明智方の最左翼にある斎藤隊が克かち取った凸形とつがたを、忽ち危ういものにした。

中川勢が急に右転して来れば、うしろを巻かれる懼おそれが生じるからである。その斎藤隊の鋭鋒えいほうを、防ぎかねて見えた高山右近の部下も、

「二の手の中川勢はもう遥かに先を取っているぞ。中川勢におくれるな。彼らの下風かふうに措お

かれて堪るか」

と励まし合つて、押されては押し、押しでは押し返され、ほとんど、川の中を両軍の死者で埋めるばかり吠え戦つた。

「退けーッ。陸へ退がつて、敵の奴輩を、寄せては叩け、寄せては突き伏せろ」

斎藤勢のあいだから振り絞るような号令が響いた。これは早くも味方の中川勢が敵のうしろへ迫つた証拠と高山隊も見て、

「突け、突け、突けッ！」

「息つかすな」

と、対岸へ退く敵のしぶきをかぶつて、追撃の槍を一斉にそろえた。

川口に近いこの辺には藪もない。湿地に続く湿地帯であつた。それだけに、いちど退き足となると、防禦物もなく、事実上総崩れとならざるを得なかつた。

馬が駈け渉る。旗じるしが突き進んで来る。高山右近の隊も、ほとんど、北岸へのぼり尽した。

この頃、西陽はようやく傾いていた。たそがれ迫る茜の雲は、悽愴な夕空の下に、喚き合う真ツ黒なかたまりとかたまりを照らしながら、寂寥と、ひとり夜空のたたずまい

を整ととのえるに他念がない。

ここでもまた、約半刻はんときにわたる激烈な戦いが繰り返された。いちど崩くずれるかと思えながら、また取つて返して、沼地や灌木かんぼく地帯の足場の悪い所に立ちながらも、なおよく防ぎ戦う齋藤勢の粘ねばりづよさには、驚くべきものがあつた。

ここばかりではない。

阿閉あへ貞明の隊といい、明智茂朝の隊といい、総じて明智勢のうえには、一種不気味なる死に物狂いがあつた。何とはなく光秀の胸中に予期されていた悲痛かなの奏でこそ、この死に物狂いが揚げる破軍の声だつたのである。

「ここは、孤立する惧おそれがある。味方の山之手隊は、潰滅かいめつされたという。並河掃部なみかわかもんども討たれた。諏訪飛騨守も討死した。——つまれぬうちにはや引き退ひこう。退ひけや、退ひけや」

悲歌は、しきりに立ち、悲報は風の如く、明智方の一軍二軍、さらに中央の第三軍をもつつんだ。

予備隊としては中軍には、御坊塚おんぼうづかを中心とする光秀直属の五千人を真ん中にして、右は藤田伝五、伊勢貞興らの二千人が陣し、津田信春、村上清国らの二千人があつた。

そしてこの中央部には、蜂屋出羽守頼隆が当って来た。

藤田伝五は、押太鼓を打ち鳴らして、歩武堂々、戦列を展開した。

さきに立てた弓隊が、一齐に弓鳴りを発して、物凄い矢風を送るや、蜂屋隊もそれに報いて鉄砲をあびせかけた。

「交われツ」

と、伝五の塵が、一令、風を截ると、弓隊は散開して、こちらも鉄砲隊が出て応戦した。漠々、立ちこめる硝煙の霽れるを待たず、次には、間髪をいれず、鉄槍鉄甲の武者が敵へ向って、その下を掻いくぐっていた。

藤田伝五と、部下の精銳は、蜂屋隊を撃退した。

蜂屋隊に代って、神戸信孝の麾下、峰信濃守、平田壱岐守が、新手を出して、明智勢に当った。

伝五行政は、それをも撃碎して、追い退けた。

一時は、当る敵もないような勢いに見えた。

藜々と、無敵をほこる藤田隊の押太鼓は、信孝の身边をむらがり守る騎馬の士たちの足なみをも、しどろに乱して脅かした。

ときに、国分佐渡守やほか二、三の部将が、およそ四、五百の兵をひきいて、藤田隊の横から、急に、攻め鉦を鳴らし、喊の声をあげ、さも大軍のように、喚き襲せた。

雲はほの紅いが、地上はもう夕闇だった。藤田伝五は、自身、やや深入りを自省していたところでもあったので、

「右転！」

と、麾を振り、

「曲がれ、曲がれ、どこまでも右へ」

と、急に指揮をかえた。

全軍、円を描きながら、徐々にもとの中軍と合して、手固く戦うつもりだった。

ところが、急に左方から、秀吉の麾下、堀秀政の一手が、猛襲して来た。これは伝五にとつては、地から湧いた兵みたいに見える、

「退く策はない」

伝五は、咄嗟に思い返したが、もう陣容を立て直すいとまもなかった。堀隊は疾風のよ
うに、敵を中斷し、一方の勢を包围にかかった。

伝五の前には、金色の杵の馬印が、近々と揺れて来るのが見えた。

「さては、神戸三七信孝、自身進まれたな」

と見たので、いまは猶予なく、子息のでんべえひでゆき伝兵衛秀行、舎弟のとうぞうゆきひさ藤三行久、伊勢与三郎などと共に、一団四百七十騎、

「この首渡すか。あの首を申しうけるか」

と、真ツ黒にかたまつて、敢然、数もわからぬ敵の中へ駈け入った。

せいふうや腥風野をおほ蔽うとはこの一瞬のことであつた。宵はすでに暗く、死闘のおめきは、一声、血のにおいをふくんで天を翔かける風となつた。

羽柴軍の全陣のうちでも、神戸隊は最も兵力の多い点で重厚だったのである。それに丹羽長秀の三千人もそれを救たすけている。いかに、藤田伝五やその骨肉どもがみな豪勇であつても、到底、刀槍をもつて掻き分けられるような薄手な線ではない。

伝五は、全身六カ所の傷をうけた。

そしてついには、戦い戦い駈けまわる馬の上で、われ知らず昏こんこん々と神気を失いかけていた。

すると、うしろの闇で、

「ち、父上ッ」

と、子の絶叫が聞えた。

息子の伝兵衛秀行の声よと思うと、彼はハツと馬のたてがみから面おもてを上げた。途端である。何やら右眼のうえに打ぶつかったのは。——彼は空の星が額ひたいに落ちたように感じた。

「あッ。——鞍へ、鞍へ。固くおすがりになっておいでなさい。矢はそれています。額のお傷は浅手です」

「だれだ。わしを支さえたのは」

「藤三です」

「舍弟か——伊勢与三郎はいかが致した」

「はや、討死を遂とげられました」

「諏訪すわは」

「諏訪どのも」

「伝兵衛は」

「——また、敵に囲まれました。お供いたします。鞍の前輪に、身をお伏せなされませ」

伝兵衛の生死には触れず、藤三は兄を乗せた馬の口輪を把とって、乱軍のなかを一散に落

ちて行つた。

金瓢押し

相搏つ味方の咆哮は、申の刻（午後四時）から酉の下一刻（七時頃）までつづいた。久我暇から円明寺川に沿う北野一帯は、この咆哮のうちに、とツぶり暮れた。

「——思いのほか手強い」

と、秀吉をして、つぶやかせた程、明智勢の抗戦も熾烈を極めた。

が、何としても、この総決戦を展く午まえのうちに、明智方が、天王山の一高地を敵手に委ね、その山之手支隊の大半を失い、かつまた、松田太郎左衛門、並河掃部などのこの手の大将を早く亡うたことは、決定的な敗因をすでにそのときに約したものである。ほかない。

機を見るに敏な秀吉は、この薄い線を衝いて進出した。まだ赤い斜陽が円明寺川を染めているうちに、自身の率いる予備隊一万をのこらず押し進めて、上流から敵を圧縮したのである。果ては、ほとんど敵の中に自己の中軍を置いたとも云い得るほど、大胆なる積極

性をその馬印に掲げて、前進また前進、一步たりと、退くことをしなかった。

とはいえ、こことても、決して易々として、進み得たわけではない。

御牧三左衛門、奥田宮内、明智十郎左衛門、進士作左衛門、妻木忠左衛門、溝尾庄兵衛など、明智家譜代の名だたる勇将は、ことごとくこれへ殺到したといつてよい。

「筑前、あれにありとみえたり」

「ござんなれ、猿一面」

「われこそ、一と槍」

と、およそ名のある程の者は、みな彼の夜目にも燦たる金瓢の馬印を目がけぬはなかつたのである。

秀吉の姿は、秀吉を狙う敵方の将たちを、著しく勇気づけ、死をも忘れさせたことは確かだった。

故に、彼の予備軍は、一万という大軍とはいえ、尺地を刻むジリ押しにしか進み得なかった。

もつとも、この時もうその予備軍中から、加藤光泰や堀秀政に、各二千ずつをささずけて、中川、高山などの他の手薄な方へ救けに廻していたので、実数は五、六千しかなかった。

たにちがいない。

で、この戦況も、一時は勝敗いずれともいえなかったというほうが正しいであろう。

——光秀にとつてもまさにここは本陣そのまま前衛であり、秀吉も自身剣けんこうげきふう光戟風のあいだに馬を進めているので、いわば主力と主力の真の決戦は、ここにおいて定まるものと観るべきである。

思い出されるのは、秀吉が、さきに僧そうぎよう形のせやくいん施薬院をして、下鳥羽しもとばにある光秀の陣を訪わせ、

（毎度、合戦はしておるが、まだ大将と大将との、直じきの太刀打ちはしたことがない。このたびは主あるじかたきの讐たる敵の討伐に向うのであるから、三日のうちに攻めのぼって、光秀と直じきの太刀打ちをいたすであろう。そう伝言しておいてくれ）

と、施薬院の口から光秀へ通じておいたことばである。きよようの秀吉の進撃ぶりを見れば、その予告は決して一場たわむの戯れでも恫喝どうかつでもなかったことが今思い当る。彼は本気に光秀と直じきの太刀打ちをせんと望んでいる血相だった。しかし馬前馬側の旗本たちとしては、甘んじて彼にその先駆を誇らせてはおかないことはいうまでもない。

川角かわずみ太閤記が誌しるすところの記述——

秀吉ガ御馬ノ先手衆、鎧合セ申スト等シク、日向守ガ備ヘヲバ突キ崩サレ、一町
 バカリ引退ク処ヘ、又々、敵ノ先手詰カケ候ヘバ、秀吉、味方若シヤ押掛ラレ可
 ヤト思シ召ケム、味方ノ鎧ノ石突モ働カザル程、御馬印ノ瓢ヲ御詰カケナサレ、ソ
 レヨリ又敵ヲ突キ立テラル

とある辺りの情景は、まさにそのときの情景を描いて躍如たるものがある。

由来、秀吉といえ、智策に富み、攻城野戦にも、多くは敢えて戦わず、これを謀
 収する計に出で、また自身勇戦をなすは甚だ得意でもない人であると思われているが、
 必ずしも、彼が勇将でないという確証はどこにもない。

彼はただ、能うかぎり兵を損ぜず、無血の戦果と最大の戦果を希っているに過ぎないの
 だ。青年将校時代すでに、箕作城の激戦には、味方に先がけて身に数カ所の手傷を負
 うほどの勇氣を衆に示している。彼に、摩利支天の一面がないとは決していわれまい。

わけて、山崎の一戦には、

(大将と大将との太刀打ちにて勝敗を決せん)

と、光秀へ云い送り、また、その場に臨んでは、

——味方ノ鎧ノ石突モ働カザル程、御馬印ノ瓢ヲ御詰カケナサレ

とあるを見ても、いかにこのときの彼の形相が、見敵必殺の意気に燃えていたかがわかる。

きようこの時の彼の戦法は、あだかも永禄の頃、越後の上杉謙信が、敵信玄の陣城深くへ基地を取つて、一鞭、妻女山から川中島の敵幕中へ突入した——あの捨身不退の構えにも似ている。

何で、この前に立ちふさがり得る敵があろうか。

明智方にも、勇者は多かつたが、奥田市之介、溝尾五左衛門、桜井新五、逸見木工允、堀口三之丞、磯野弾正、鳥山主殿助など、枕をならべて、討死を遂げてしまった。星が暗く、道は湿地。

血か、沼か、びしよびしよしたものを、踏みこえ踏みこえ秀吉の中軍は、間断なきギリ押しを進めてゆく。

そのうちに、一窪地から、頻りにパチパチ撃つ者がある。

前列の四、五名が、次々、撃ち仆された。弾継ぎの早さから見て、一小隊も伏せてあるのかと思うと、撃手は、一名らしい。ただ左右に家来を三、四人置いて、撃つては弾をこめさせ、一弾撃つてはまた、ほかの鉄砲をとつて狙っているらしく思われる。

「退かざる敵はない中に、さりとして健気な敵。虎之助、参ってみよ」

秀吉がうしろへいうと、あつと、主人の声を潜つて、もう駈け出している若武者が見える。当年、二十二歳となる小姓組の加藤虎之助であった。

ダン、ダン！ 二つばかりの弾音に出会ったが、虎之助の迫る脚のほうが、その弾煙の消えるよりも迅かった。

窪地の敵は、もう間に合わないを見ると、銃を抛つて、

「汝、何を望んで来たか」

と、猛然、突つ立つて、眼をいからした。

虎之助は、初陣ではない。

中国在陣中、冠山の城、そのほかでも、一かどの戦功はあげている。

手馴れの槍を横に進めて、

「戦場での望みは、名のある敵の首。名もない汝なれば、取るに足りぬ。——俺の槍にかつてよいほどの首か、さまでの値打もない首か。もう一度、吠えて見よ」

と、云い返した。

敵は猛者だった。

からからと打ち笑つて、

「日向守ひゆうがのかみ様の御内、伊勢与三郎貞興さだおきの侍頭さむらいがしら、進藤半助しんどうはんすけとはそれがしのこ

とよ。主人貞興は、はやお討たれなされた。この半助も、生きて何かせん。——この上はただ一弾をあゝの馬印の下にある秀吉に報わんと身を伏せていたものだ。汝、まだ年ばえも未熟な小冠者こかんじや、半助が討ち取る相手には足らん。——退けッ。邪魔するな」

「烏漣おこなお人よ。これでも相手とするに足らぬかッ」

虎之助は、いきなり槍の穂先を高目に、びゅッと、敵の真眉間まみけんをかすめた。

およそ槍は穂先下がりとなりやすいものである。顔を狙えば喉のどのあたりに、喉をねらえば胴のあたりに来るのが普通である。半助も、その的確には驚いたとみえ、

「かつッ」

と、首を交かわしぎま、陣刀で払った。

払かわせた槍を、咄嗟とっさ、そのまま、虎之助は抛ほうり捨てた。——ひどい乱暴である。兜かぶとの鉄て鉢つぼらを砲弾のように向けて、彼の横つ腹へぶつけて行つた。

「あッ」

半助はよろめく。

虎之助は組みついている。

もう勝った形だ。

——が、両方とも無手^{むて}。そうして双方とも、鎧^{よろい}通^{とお}しの柄^{つか}に手をかける違^{いとま}がない。

「小癩^{こしやく}な若者^{やく}め」

半助の足軽三人が、わらツと、虎之助のうしろへ廻った。鉄砲の逆手、また、ふりかぶった刀、一度にその背へ落ちんとした。

どたツと、その三人が地ひびき立てて仆れた。虎之助危うしと見て、味方の前列から飛んで来た武者たちが、一人一人、敵の足軽を討ったのである。

軍鶏^{しやも}と軍鶏のように、羽がいを組み合わせたまま、地上に諸^{もろ}倒^だれとなっていた虎之助は、自分の具足の緒をつかんでいる死力の拳^{こぶし}を挽^もぎ放すと、ぶるぶるツと、血ぶるいしながら、何物をか引つ抱えて、秀吉の馬前へ、一目散に駆けもどって来た。そして、

「仰せつけの物、持つて参りました」

と、進藤半助の首のもとどりを掴^{つか}んで、星明りに翳^{かざ}して見せた。

「祐筆、筆を」

と、馬上のまま求めて、秀吉もまた、星の光に、白紙へこう書いて、虎之助へ投げ与え

た。

武勇心掛手柄者の若者とは汝たるべし。いよいよ武功を尽すべし

六月十三日

秀吉判

加藤虎之助どの

眞情率直だ。何の文辞も、誇張もない。——が、この一片の紙は、黄金の兜、名物の茶入れにも優ること数等の勲章となろう。これを約された若い一武者は感涙にむせんで押しいただいた。市松、助作、佐吉、孫六などの他の小姓たちは、羨望の眼をみはつて、ひそかに後の自己へ誓っていた。

おんぼうづか
御坊塚

暗い松風が陣営を搏つ。

陣幕は白い生き物のように、大きく膨れる。はたはたと翻つてはまたしきりにただならぬ悲歌を謡う。

「与次ツ、与次ツ」

「はいッ」

「いまあれへ来て、何事かを告げるや否、すぐまた、取つて返した使者は、誰からの使いか」

「はッ」

「なぜいちいちこの光秀に告げぬ」

「まだ……事実や否やも、確しかと定まりませぬゆえ」

「何であろうと、伝令のつたえを、光秀の耳に入れぬ法やある。与次郎ツ」

「はいッ」

「しつかりせいッ。——味方の敗色にそちまでが度を失うたか」

「残念なことを仰せられます。堀与次郎は、死を期しております」

「……そうか」

光秀はふと、自己の甲かんだか高さに気がついて声を落した。そして堀与次郎をたしなめたそのことばは、そのまま、自分に向けて聞くべきだと思ひ直した。

さるにても、御坊塚おんぼうづかのこの本陣も昼のひところ頃にくらべると、何と、寥々りょうりょうたる松風

の声ばかりではあると、彼は、ぶぜん 憮然として見まわした。

ゆるい傾斜の下は、畑と野面のづらへつづいている。東は久我くがなわて 躰、北は山岳、西は円明寺川まで一いちぼう 瞬の戦場もいまは青い星のまたたきと、一色の闇のみであった。

申まをの刻こくから西とりの下刻げこくまで、わずかまだ一刻半（三時間）のあいだでしかない。野に満ちていた味方の旗幟きしは、いずれへ潰つぶえ去ったのか。

——誰も討死しました。誰も敵の中で相果てました。誰も誰もと、相次いで報じて来る味方の名を、彼は胸に留めきれないほどここで聞いた。

一刻半いっときはんの間にある。

今も、堀与次郎が、その悲報の上にまた一つの悲報を受け取ったにちがいない。

けれど彼ももうそれを光秀の耳へ取次ぐ勇気を失っているのである。——光秀に叱られて、ふたたび丘の下へ立ちに行つたが、見てみると、力なげに松の幹へ鎧の背もたを凭せかけて、黙然、星を仰いでいる。

「——何者だッ」

その与次郎は、ふいに、杖としていた槍を持ち直して、彼方の闇に馬を止めた者へどなった。

「お味方だ。お味方だ……」

息を喘ぎながら此方へ登つて来る影は、その足つきから見ても、明らかに傷を負っている。近づいた与次郎は、愕然と、自分の肩をその者へつき出した。

「刑部じやないか。つかまれ。俺の肩に」

「お。……与次郎か。御主君は」

「上におられる」

「まだここにおられるのか。あぶない。もうここもいけない」

香川刑部。それは、藤田伝五の手に加わっていた明智の一部将であった。

刑部は、光秀の床几の前に、のめるが如く手をつかえた。

「斎藤どの。阿閉どの。津田どの。そのほか藤田伝五のを始め、諸軍、総くずれと成り果てました。お味方の将、精鋭の士、屍を重ねて、討死を遂げ、いちいち指折って、名を思い出すことも出来ません」

「……………」

この暗い松影の下なのに、光秀の顔ひとつが、白く泛いているように仰がれた。返辞はない。

聞いていないかのようである。

刑部^{ぎょうぶ}は苦しげに語をつづけた。

「いちどは、秀吉の中軍へまで迫りましたが、闇迫る頃から、退路を撃ち乱され、主将伝五どのの行方も知れずなりました。……また、御牧^{みまき}三左衛門どのの一軍も、敵の重圍に落ちて、苦戦を極め、辛うじて、御牧どのの以下、およそ二百ばかり、一団となって、西久我の部落まで、落ちのびておられました——その御牧どのが、それがしを見て申さるるには——はやこもこれまで、御主君には、一刻もはやく、勝龍寺の城へ退いて、御籠城^{ごろうじょう}の用意あるか、さもなくば夜のうちに、江州^{かうしゅう}へお落ちあるこそ良策と思われる。御辺は、御坊塚へいそいで、はや疾^とく、三左衛門のことばを主君へ伝え給え。それまでは、三左も死を逸^{はや}まらず、ここにあって、殿軍^{しんがり}を構え、主君がお立ち退きの合図を見て後、われら生き残りの二百余名、一手となつて、秀吉の陣へ駆け込み、斬り死にして果て申さん所存——と、かように、申しおられました」

「……………」

光秀はなお沈黙していた。

使命を終ると、刑部の影は、急に平たくなつた。地に俯^うつ伏^ぶしたまま、呼べど答えぬ者

になつていた。

光秀は、じつと、床しょうぎ几から見まもつていたが、冷然と与次郎をかえりみて、

「刑部は、深傷ふかでを負つていたのか」

「はい」——与次郎は悲涙を眼に溜めていた。

「ことぎれたものとみえるな」

「左様に思われます」

「……与次郎」

と、まったくべつな声がらをもつて光秀はふいに訊ねた。

「最前、そちの受け取つた使番の報しらせは何であつたのか」

「今はつまず申します。あれは、筒井順慶の軍勢が、にわかほらに、洞ヶ嶺みねを降つて、淀方面からお味方の左翼を強襲しに出て来たため、さしもの斎藤利三としみつどのを始め、お味方の諸隊も、踏みこたえる力も尽き、総くずれになつたものと、その敗因を報らせて来たものにござります」

「何だ。そのようなことか」

「今さら、お耳に入れても、この挽回ばんかいはつきませぬ。いたずらに、御不快と焦躁しょうそうを

加えるまでのことと、実は折を見て、お話し申すつもりでおりました」

「なんの、人の世じや。とりわけ順慶のごときは、人の中でも、最もありふれた人柄。あれのやりそうなことよ。たれが齒牙しがにかけようぞ」

光秀は笑った。強しいて笑ったといえないこともない。そして彼の手は陣後をさし招いた。馬を曳ひけ、馬をと、にわかひかに、焦心いらつて呼ぶのであった。

深夜行しんやこう

援軍また援軍と追いかけて兵を出したので、残り少なくなっていたが、ここにまだ老臣旗下以外、二千に近い兵力はある筈。

光秀はその手勢をひっさげて、敵中の御牧三左衛門兼かね頭あきの残軍に合し、最後の一戦を試みようとしたのである。

馬上に身を移すと、全御坊塚の營にとどろくような声で、自身、進撃の令を叫んだ。そして、全營の兵がむらがり寄るいとまも待たず馬首を振り向け、左右の土わずか数騎と共に丘を駈け下っていた。

「あッ。——立つは誰だ」

光秀は急に馬を止めた。ふいに一つの陣幕の内からまろ転び出た人影が、傾斜を駈け下つて、いきなり道に立ちはだかり、光秀の馬の前に、大手を拡げて立ったからである。

「たてわき帯刀。なぜ止める？」

光秀の声はするどかった。

老臣のひだたてわき比田帯刀なのである。帯刀の手はすぐ主人の馬の口輪をつかんでいた。ひとたび、悍かんき気にまかせた馬は容易にその本能を制しきれないもののように、頻りに土を蹴つて足あが掻いた。

「与次郎も、三十郎も、なぜお止めせぬか。降りろ、降りろ」

比田帯刀は、数騎の旗下をさきに叱つて、いんぎん慇懃、光秀へ頭を下げた。

「常のわが殿とも覚えませぬ。——勝敗は一場の変に過ぎませぬ。目前の一敗をもつて、直ちに、おん身を捨てんと遊ばすような軽拳に出るは、日向守光秀様らしくもないことです。血迷えりとわら嗤われましよう。——なおなお、ここには敗れても、坂本には御一族もあり、各地にやがてを待つ諸將の散在すること、必ずしも、後こうと図の策なきではありません。……まず、ここはひと度、勝龍寺の城まで、お立ち退きがしかるべくと思われまする」

「おろかよ、帯刀」

光秀は、悍馬かんばのたてがみと共に、顔を振った。

「——常ならぬ今だ。常の光秀をもつてわれと視るか。駈け崩された諸隊の兵も、光秀先陣に立てりと聞けば、ふたたび結集して銳気を取り戻そう。——かたがた、御牧三左の一隊を、敵中に捨て殺しはできぬ。秀吉にも一泡ふかせん。筒井順慶の不信義も懲らしめてくれん。——光秀はただ漠然と死に場所を求めにゆくわけではない。光秀の光秀たるころを示そうとするのだ。——放せッ、要らざる妨げするな」

「ああ、さすが叡智えいちの殿の御眼も、きょうに限って、なぜかそのように曇らせ給うておられるか。——きょうわが全軍にうけた傷手いたでは、討死の者、尠なくも三千人は降りませぬ。傷負ておいは数知れず、しかも重将ごとくとく討たれ、新附しんぷの兵はみな離散し、この御本陣においてすら、今は幾いくばくの兵が残っていると申し召すか」

「放せ。……何でもよいわ。放さんか」

「その御放言こそ、すでに死を急がれておる証しるしです。帯刀たてわきはあくまでもお止め申しあげる。——ここになお、三、四千の屈強があるならともかく、御馬に続く者どもとは、おそらく、四、五百もありますまい。あとは皆、黄昏たそがれごろから忍び忍びに陣地を脱して逃

げ散つておりまする」

老臣の ひだたてわきのりいえ 比田帯刀則家の ちゆうかん 忠諫は、声涙ともに下るものであった。

人間の智性などというものは、かくも脆せいじやく弱なものか。ひとたびその叡智に齟齬そごを来すと、こうも愚かえに還るものだろうか。

帯刀は、光秀の きようそう 狂躁を眺めて、

(こうもお違いになられたか)

と、痛涙して、以前の光秀の深慮聡明なすがたを偲しのばずにいられなかった。

「——比田殿のおすすめは、われらも至極のおことばと存じます。勝龍寺の城はすぐ間近、ひとまずそこにお入りあつて、善後の策をお立て遊ばすも決して遅くはございませんまい。いざ、御供仕りましょう」

進士作左衛門、明智茂朝、その他の将も、いつか馬前へ来ていた。二人は、いちど前線に立ったが、やはり光秀の身を案じて、これへ退がっていたものだった。

「こうしている間にも、敵勢に近々と詰め寄せられたら、百事空むなしくここに終ろう。さ、一刻も早く、お轡くつわを把とつて、勝龍寺へお移し申しあげい」

帯刀はもう主人の意志を問わなかった。貝を吹かせて急に北方へ後退を命じた。村越三

十郎、堀与次郎などは、自身の馬を捨てて徒歩となった。そして主人の馬の轡をつかんで北の方へ無性に駈け出した。丘上の将士もまた追い慕った。しかし、比田帯刀のことばに違わず、その数はわずか五百ぐらいに過ぎなかった。

勝龍寺の城には、三宅藤兵衛が守将としていたが、ここも敗色の外ではあり得ない。一種暗澹な凄風が満城に漲っていた。

微かな燈を囲んで、一同はこの敗戦の収拾を凝議した。それを理性の正しい判断に求めるとき、光秀も、もう策なきことを覚った。

城外の哨兵は、頻りと敵軍の近づくのを告げている。この城もまた秀吉の破竹な軍勢を防ぐに足る堅塁ではない。元々、摂津の中川、池田、高山らにたいして、万一の変あらばと、擬勢を張っていたに過ぎないものだった。

淀の城ですら、つい昨日、その修築を命じていた有様だ。怒濤の音を聞いてから築堤にかかったといえないこともない。事ごと逆にゆくと、光秀ほどの人物も、こう目先の晦くなるものかと思われるばかりである。

ただ、彼としても、おそらく遺憾なからうことは、年来の宿将や家士たちに限っては、彼の恩顧を裏切るなく、まったく捨身奮迅の戦いをなし、涙ぐましき主従の義を示して

いたことだった。主筋の人を討った明智家のうちに、なおこの主従の道義の破れずにあつたことは、一見、矛盾むじゆんなようでもあるが、やはり光秀の徳といえるし、また、道義に生きるほか生き所も死に所もない、武門の鉄則を明示しているものでもある。

為に、わずか一刻半の合戦だったが、その日の両軍の死傷は、夥おびただしい数にのぼっている。もちろんこれは後の調査によるものであったが——明智軍の死者三千余人、秀吉方の死者三千三百余名、負傷を加えれば算を知らぬ数であつたという。以て、彼の意気にも劣らなかつた明智勢の気魄きはくも知るべく、しかも、敵の半数に近い寡兵かへいと、不利な地に立つての戦いであつたことを思えば、光秀の敗北は、決して世の嗤わらい草くさとなるような敗北ではなかつた。

おぐるす
小栗栖

淡墨たんぼくのような雲の裡うちに、水無月みなづき十三日の月が滲にじんでいた。

離ればなれに先へ一、二騎、また少し後から数騎の武者が影をかさねて、点々十三騎ほど、淀川の北から伏見方面へ落ちて行つた。

「ここは何処の辺りか」

やがて道の暗い山のふところに入ると、光秀は、比田帯刀則家を顧みてたずねた。
おおかめだに
「大亀谷でございましょう」

帯刀の面にも、続く数騎の影にも、梢を漏る月の斑が、青い潮光のようにこぼれていた。

「では、桃山の北を越えて、小栗栖から勧修寺道へ出るつもりか」

「御意。——夜の白まぬうちに山科、大津近くまで辿りますれば、もうお案じはございませぬ」

——と。光秀の少し前をゆく進士作左衛門が、ふいに駒を止めて、

「叱ッ」

と、手を振った。

光秀も止まった。つづく駒もみな止まった。そして囁きもやめて、道のゆくてをずっと離れて、物見をしながら先へ先へと歩いてきた明智茂朝と村越三十郎の二騎の影が眸に入った。その二騎は、谷川のほとりに駒を立てたまま、うしろの人々へ手を以って、

(待て)

と、合図をしながら、全身を耳にしていつまでも、佇んでいた。

(敵の伏勢ではなかつたとみえる)

人々はやがてほつとした顔色にもどつた。先頭の二人が振る合図に従つて、ふたたび密々そひそと駒を進めた。月も雲も真夜中の中天に寝まろんでいる相そうである。いかに忍びやかに進めても、馬は坂路にかかると石を蹴り、朽木を踏み折るので、小さい筈くだまにも、寝鳥が立つ。そのたびに、

(敵か?)

と、光秀主従の影は、駒の脚を竦すくませた。

大敗のあと、宵にいったん勝龍寺の城へ入つて、終日のつかれを休め、さて、

(どうするか?)

を議してみたが、結局、坂本へ落ちてゆくほか方策もなかつたし、衆臣もみな光秀にその隠忍いんにんの道を選ばれたいと請うこので、光秀もようやくそれに方途をきめて、城の後事は守将の三宅藤兵衛にあずけ、自身は宵の頃すでに、そこを脱していたものであつた。

——がなお、その勝龍寺を出るときまでは、彼に従う手勢は約四、五百人はあつた。しかし、久我暇なわてから淀をこえ、伏見の里に来るまでに、ほとんど、散々に脱軍して、残るは腹心の者ばかりわずか十三騎とまでなつてしまつた。

「多いは却つて敵の目につく。死生を共にするまでの覚悟のない者はむしろ足手纏いだ。坂本にはなお光春様あり、三千の精銳がある。ただただ、そこへ行き着くまでの御無事こそねがわしい。あわれ御主君のうえに、神助あらせ給え」

明智茂朝しげとも、村越三十郎、進士作左衛門、堀与次郎、比田帯刀たてわきなどの腹心たちはそう慰め合つていた。

くわしくいえば、大亀谷は、山城の紀伊郡深草村の山中である。道はこれから宇治郡醍醐村おりのむらの南小栗栖みなみおぐるすへ通じている。

谷といい、山といっても、この地方にはさして峻峻けんしゅんな所はない。そして、この夜に限つて、久し振りの水無月みなづき十三日の月輪を空に見たが、先頃から雨天がちに、木の下の闇こしたやみはじめじめ泥濘ぬかるんでいるし、低い道には思わぬ流れが出来ていたりして、主従十三騎の落ちて行く道は、決して容易なものではなかった。

加うるに光秀も、その腹心たちも皆、綿の如く疲れきつた心身を引きずつてゐる。——山科やましなはもう程近い。大津まで出ればもう大丈夫。——と励まし合つて行くものの、各の疲労感にうける感じでは、その間近な距離が、百里もあるような気がするのであった。

「才。——部落へ出た」

「小栗栖おぐるすであろう。ひそかにしたまえ」

「そうだ。静かに通ろう」

やがて面々は目顔で、戒いましめ合っていた。草ぶかい山家やまがの茅屋根かややねがおちこちに見えて来たからである。そうした人里は努つとめて避けたいのであるが、道はおのずから家々の間へ入ってゆく。

——が、幸いなことには、何処をながめても、燈影ほかげ一つ見えなかった。白い月の下、大竹藪たけくさに囲まれた山里の屋根は、世の騒乱そうらんも知らず、深々とみな眠り入っている気配だった。

厳密な眼を光らせて、はるか先の方を、物見しながら駆けていた明智茂朝、村越三十郎の二騎は、狭い村道の一とすじ道を、つつがなく通り越して、かの藪の曲がり道たがすに佇み、あとから来る光秀たちのひと群れを待ちあわせていた。

その影と、二人の引ツさげている槍の白さが、半町ほど先の樹陰に、キラキラ見えたときである。バリバリツと、青竹でも踏み折るような響きと共に、ううむ——と野獣でも唸うめいたような声がどこやらでした。

「……や?」

光秀のすぐ前に立つて、密やかに駒を歩ませている比田帯刀は本能的にうしろを見た。暗い竹叢たけむらに覆われた山家の柴垣しばがきに沿うている暗がりである。光秀の影は、十間ほど後に、釘付けくぎづになつたように立ち竦すくんでいた。

「お館やかたツ……」

返辞へんじもしない。

高い若竹の茂りが風もない空に揺れている。ばらばらと頻りにする地の音はそれから降る夜露よるろだつた。

「如何いかになさいました」

帯刀が引つ返そうとしたときである。いったん馬のたてがみに俯うつつ伏して脇腹を抑えているかのように見えた光秀は、胸の下となつた手綱の手をうごかすと、急に面を上げて、トトトトと、小刻みに駒の脚を早め出した。

ものもいわず、帯刀の前もサツと先へ駈け抜けてゆくのである。不審には思ったが、まだ何も気づかずに、帯刀はそこから後になつてつづき、作左衛門や与次郎も、それに倣なまらつて駈けつづいた。

三町ほどは何事もなくそのまま駈けた。先に待っていた茂朝、三十郎の兩名もひとつに

なり、光秀は一行十三人の六騎目にあつて進んでいた。

すると、ふいに村越三十郎の馬が竿立ちさおだになつた。とたんに三十郎の抜いた白刃が鞍下くらさがりに左の脇を払つていた。

かつん！

と鼓膜こまくをつき徹とおすような音響は、その白刃と竹槍のあいだから発したものである。

穂先を斬り落された青竹の手先が、ガサツと、竹叢たけむらのうちに隠れたのが、実に迅はやくはあつたが、明らかに他の人々の眼にも見えた。

「土匪どひか？ 今のは」

「——らしいぞ。油断あるな。この大竹藪のうちに立ち廻つてみるとみえる」

「三十郎。何ともないか」

「なんの、野伏のふせりどもの竹槍などに」

「構うな。いそげ、ただいそげ。構うてはうるさいぞ」

「……が、お館やかたは？」

と見まわして、

「や。あれに」

と、人々は何か急に愕然と色を失った。

つい百歩ほど先に、光秀は落馬していたのである。しかもただならぬ唸きと苦悶に身を曲げて、ふたたび起ちも得ぬ容子であった。

「殿。お気を慥と遊ばして下さいッ」

「お館ツ。お館……」

「もう少し参れば山科です。お傷もさして深傷ではありませぬ」

「お心をたしかに」

すでに馬を降りて駈け寄っていた明智茂朝や比田帯刀などは、光秀を抱き起して、こう励ましながら、強つてももう一度駒の背に掻い上げようと試みていた。

——光秀はすでにその意志もないようだった。ただわずかに顔を横に振っていた。

「あッ。如何あそばしましたか」

三十郎、与次郎、作左衛門など皆、われを忘れてそこに影を重ね合った。そして苦しむ光秀の唸きと人々の長嘆と、また嗚咽に似た声とが辺りに流れた。

空には、月一つ、そのときばかり殊さらに冴えていた。そして附近の大竹藪一帯の暗がりには、俄然、土民たちの露骨な登音や喚きが、ざわざわ立騒いで来た。

「さきほど、物陰から竹槍をつけた土寇の徒が、なお尾け狙うているとみえる。弱味を見せると、足下を見て、よけいに執念く寄つて来るのは彼らの持前。——三十郎も与次郎も、ここよりは、辺りの土賊どもを——」

茂朝のことに、人々は、急に前後へ立ち別れて、寄らば、と槍を持ち直すもあり、また陣刀をひきぬいて、

「こやつら」

と、大喝して、気配のする大竹藪の中へ、躍り入ったものもある。

ザザザと、まるで猿の群れか、木の葉の雨のような音が、一瞬、小栗栖の夜半のしじまを破った。

「茂朝。……し、茂朝は」

「おりまする。こうして、確乎と、殿のおからだをお抱き申しあげておりまする」

「お。……茂朝」

光秀は、ふたたび唇をうごかした。そして自分を支えている彼の腕や肩を、探るように撫でまわすのであった。

夥しい脇腹の出血は、すぐ視力に影響して来たにちがいない。舌もあやしくもつれて来

た。

「いま、茂朝が、傷口を巻いて、所持の薬をさし上げますから、しばらくお忪えを」

「……無用」

要らぬ——と首を振るのである。そして何か求めるように手をうごかした。

「……何でござりますか。……何ぞ？」

「やたて」

「矢立と仰せなされますか」

茂朝はいそいで鎧の袖から懐紙と矢立を取り出した。

おぼつかない指先に、光秀は筆を持たせてもらった。そして白い紙のうえを睨まえた。

(さては辞世を書きおくお心とみえる)

茂朝は胸の塞がる気がした。今ここで光秀にそんなものは書かせたくないと思ひ募った。大きな運命というものへ対して、彼の執着は無性な反抗を心のうちで試みていた。

「殿。殿。……かいなお筆をお取り遊ばしますな。天津まではもう一息、そこまで辿り

つけば、左馬介光春様にもお迎えに見えられましょう。……さ、傷口を巻きましょう」

と、懐紙を地に置いて、わが帯を解きにかかると、光秀はふいに、愕くべき力でその手

を振った。

そして左の手をつかえ、地上の白紙へ向つて右手を伸ばすと、筆の腰も折れるばかりな力で、

順逆無二門^{ジュンギャクニモンナシ}

と書いた。

——が、次の文字は、もう手のふるえが烈しく書けないらしいのである。光秀は茂朝に筆を渡して、

「あとを書け」

と、云った。

「……………」

茂朝の膝に凭れたまま、光秀は、面を天に向けた。一痕の月を凝視することしばしであつた。その月よりも青い死色がみるまに面上へ漲つて来たとき、ふしぎにも少しの紊れもない小声で、光秀は、偈のあとを、こうつづけた。

大道ハ心源ニ徹ス^{ダイドウウ シンゲン テツ}

五十五年ノ夢

覚メ来レバイチゲン 一元二帰ス

茂朝は筆を投げて哭ないた。

とたんに、光秀はわれとわが喉のどを短刀で搔き切っていた。

愕おどろいて駈け戻つて来た進士作左衛門や比田則家も、その体ていを見ると、

「いまは」

と、主人の屍かばねに寄り添つて、各、自己の刃に伏した。——なお四人、六人、八人と、

数を加えて、同じように光秀の死骸めいぐを繞つて殉じた人たちの亡骸なきがらは、またたくうちに大

きな一箇の血の花弁かべんと花心かしんを地上に描いた。

さきに大竹藪へ駈け入つた堀与次郎と、一、二の者は、土民の群れと戦つて、斬り死にして果てたものか、村越三十郎が闇へ向つて、

「与次郎、戻れツ。与次郎、与次郎ツ」

と、いくら呼ばわつても、ふたたび帰つて来なかつた。

その三十郎も傷を負つたので、竹林の中をよろ這はいよろ這はい帰つて来ると、すぐ側を摺すり抜けて通る人影があつた。

「あッ。茂朝どの」

「三十郎か」

「お館やかたはいかが遊ばしました」

「御最期だ」

「げッ」

——仰天して、

「ど、どこに？」

「三十郎。お館はここにいらつしやる」

茂朝は、馬の鞍くらおい覆おおいに包んで抱えていた光秀の首しゆきゆう級ゆうを彼に示し、暗然と面をそむけた。

「おおッ」

と、彼は烈しい勢いでそれへ跳びついた。主人の首級にむしやぶりつくや否、おいおい声をあげて慟どう哭くした。

「さいごのおことは」

「順逆無二門じゆんぎやくにもんなし——の一偈いちげであった」

「順逆無二門——と仰つしやいましたか」

「たとえ、信長は討つとも、順逆に問われるいわれはない。彼も我もひとしき武門。武門の上に仰ぎ畏むはただお一方ひとかたのほかあろうや。その大道はわが心源しんげんにあること。知るものはやがて知ろう。——とはいえ五十五年の夢、醒さむれば我も世俗の毀誉褒貶きよほうへんに洩れるものではなかつた。しかしその毀誉褒貶をなす者もまた一元に帰せざるを得まい。……そんな御鬱懷ごうつかいを吐かれて御自刃遊ばした」

「わかります。……わかります」

——三十郎はしやくり上げながら、拳で顔じゆうの涙をこすつた。

「戦巧いくさこうしゃ者な斎藤どのの諫めいさめもお用いなく、みすみす不利な地形と寡兵かへいをもって、山崎に決戦を辞さなかつたのも、その大道に抛よられたためです。山崎を退ひいては京都を捨てることになるからです。御心事を察すると、哭ないても哭ききれません」

「いや、敗れたりといえ、その大道をお捨てにならなかつたことだけは、ひそかに本懐として死なれたにちがいない。最期の偈げがそれを天にさげんでいらつしやる。……お、時移しておると、また土寇輩どこうばいが襲よせ返して来るだろう。三十郎」

「はッ……」

「わし一人では御始末すべをする術もなく、あれに取り遺のこして来たお首級しるしのない屍がある。あ

れをどこぞ人目に見出されぬ土中へ埋めてお隠し申しあげてくれ」

「余の方々は」

「みな御遺骸を繞めぐつて、いさぎよく死に就いた」

「おいつけの役目をすました後、それがしもどこぞ死所を求めましょう」

「わしもこのお首級を、知恩院ちおんいんにある光忠みつただどのへお渡し申しあげ、その後、身の始末をする所存だ。——では、さらばぞ」

「おさらば」

ふたりは竹林の中の小道で立ち別れた。こぼるる月の斑ふがきれいであった。

瀬兵衛御苦勞せべえごくろう

一方、勝龍寺城も、その夜のうちに陥おちた。

ちようど光秀が小栗栖附近で最期をとげていた時刻である。

山崎、円明寺川の線に、明智勢を撃げ摧きざいした南軍の堀、中川、高山、蜂屋などの諸部隊は野を吠え、草を掃いて、

「必定、光秀は、あれにこそ在らん」

と、勝龍寺を取り囲んで来たのであった。

だが、その光秀は疾とくに、伏見方面へ落ちた後とわかって、寄手は失望したが、なお囲みは解とかなかつた。

城中からは、守将の三宅藤兵衛以下、数百の兵がいる様子だし、それらの者が、一時、矢弾やだまのあらんかぎり烈しく撃ちつづけて来るからであつた。

ところが、その猛射は、滅前の一いっせん燦さんだつた。程なく、はたと止むと、城じょう楼ろうの一端から、ボウと赤い焰が映さして、月の夜空へ濛もう煙えんを吐き出した。

「さてはみずから火を放つて、城兵のこらず一手となり、城を出て斬り死にせんの準備したくと見ゆるぞ」

寄手は戒いましめ合つて、各部隊に異様な緊張をたたえていた。そして城門から殺出する敵を迎えたがさいご、一兵も討ち余すことではないとひしめいていた。

するとそのうちに、城中の焰は消えてしまった。墓場のようなしじまと暗い余煙だけが望まれる。——はてなど、寄手は怪しみにとらわれていた。

「寄手の将にも申す。守将三宅藤兵衛は、所詮しよせん、支え得ぬところと覚悟いたして、た

だ今、自刃して相果てました。罪なき部下は、それぞれ郷里に帰してやりとうござる。――この儀、お聞き届けあらば、直ちに開城いたすであろう」

人影が一つ、城門の上に見られた。そこから寄手の陣へむかつて、こう呶鳴っているのである。

三宅藤兵衛の股肱、溝尾五右衛門であつた。この申し入れは、もちろん寄手にゆるされた。五右衛門は、居る所から直ちに開門を命じ、城兵数百が事なく敵の手に接收されたのを見届けると、

「どれ、俺も行こうか」
と、そこから降りた。

しかし彼は、城外へは出て来なかつた。間もなく櫓の下あたりから再び火焰が立つた。寄手は一斉になだれ込んだ。そして忽ち消火に当つたが、五右衛門はすでに腹を切つて火中の白骨となつていた。

宵の頃、円明寺川の激戦にやぶれ、重傷の身を、駒の背に抱きあげられ、舎弟の藤三に守られて、辛くも戦場を脱した藤田伝五行政は、夜の明け方ちかい頃、ようやく淀の町はずれに辿りついていた。

「兄上。しばらくこれでお待ち下さい」

と、舎弟の藤三行久が、橋の畔ほとりをしきりに歩きまわるので、伝五は、

「行久。何を探すか」

とたずねた。藤三は答えて。——小舟を求めて、兄上をお落し申し上げんつもりですと云った。

伝五は、憤然と叱った。

「殿の御生死も知らぬうちに、我ひとり安き道に就つけようか」

——が、そのうちに、勝龍寺城の落去も伝わり、光秀の死も聞えて来たので、兄弟は、淀の小橋のたもとに坐つて、見事に刺さし交ちがえて果てた。

勝龍寺城へ南軍が混み入った後も、西ヶ岡方面や、久我くが、桂川一帯のひろい地域には、なお折々、ぱちぱちと遠い小銃音がしていた。

各所で掃討戦が行われているらしい。

一面、中川瀬兵衛、高山右近、池田勝しやうにゆう入、堀秀政などの諸將は、一応みなここに部隊司令部を移して、大かがりを焚たかせ、城門外に床しやうぎ几をならべて、神戸信孝と秀吉の到着を待つことにしていた。

その信孝は、程なくここへ臨んだ。

かがやく戦捷の入城だ。将士は旌旗を正してつつしみ迎えた。信孝は馬を降りて全軍堵列のあいだを通つた。

「やあ。やあ」

彼はしきりに将士へ温顔をふり撒いた。とりわけ池田、高山、堀、堀尾などの面々へは、いんぎんに過ぎるほど、ていねいな会釈を与え、犒の意を示した。

殊に、中川瀬兵衛へは、その手を取つて、こういつた。

「このたびの大合戦に、さしもの明智軍をも一日に撃ち摧き、亡父信長のうらみを散じ得たのは、まったく御辺たちの忠節と奮戦によるものであつた。信孝、忘れは措かぬぞ」

高山右近へも池田勝入へも、同様な賞辞を呈した。

ところが、すぐその後から来た秀吉は、高山、池田などの前を通つても、何も言葉をかけなかつた。のみならず彼は陣駕籠を用い、それに乗つたままでやや身を反り気味に澄まし返つているふうさえ窺われる。

荒武者の中でも、精悍無比な中川瀬兵衛は、小面憎く思つたか、

「清秀がここにおるぞ」といわんばかり、わざと大きな咳払いを一つひびかせた。

——と、秀吉は、駕籠のうちから、一瞥いちべつをくれた。そしてただ一言、

「瀬兵衛。御苦勞」

と、云い捨てて通つてしまった。瀬兵衛は、足ずりして怒つた。

「信孝様さえ、下馬して色代しきたいされたのに、駕籠のままでは通るとは不遜極まるやつだ。――

――猿めが、もう天下でも取つたように心得るか」

あたりの人へも聞えよがしに云い散らしたが、さて、それ以上には怒れもせず行為にも出せなかつた。却つて、自分が小さくなるばかりだからである。

ひとり瀬兵衛だけではなく、丹羽でも池田でも高山でも、みな同列の織田遺臣のはずだつたが、いつのまにか、秀吉は彼らを自分の麾下きか同様にあつかい、彼らもまた、意識しつつ秀吉の下風かふうに在らざるを得なくなつていた。誰もみな割りきれない気持ちにちがいない。だが、さればといつて誰もそれを拒むこぼこともできないのであつた。

城中に入つても、秀吉は焼け残りの建物に一瞥いちべつを向けたのみで屋内に身を休めようとはしなかつた。

広庭に幕を張らせ、信孝と共に床几しょうぎをならべて、すぐ諸將をここに会し、次の指令をさづけ始めた。

「久太郎（堀秀政）はただちに兵をひきつれ、山科やましなから粟田口あわだぐちへ押し通れ。目的は大津へ出て、安土と坂本との通路を遮断しやだんするにある」

また、中川、高山の二将に対しては、

「瀬兵衛と右近とは、丹波路へむかつて、急げるだけ急げ。敵の残兵の多くは丹波へ逃げたろう。それらの者が、亀山に籠こもつて、備えをなすいとま違も与えぬようにだ。時おけると、陥おとすにも手間どらう。明日中に亀山へ迫るぶんには、苦もなく陥おとちるはずだ」

そのほか、誰は鳥羽、七条方面に急げとか。誰は吉田、白河方面へ先発せよとか。すこぶる明快なさしずであるが、傍らに、信孝をさし措おいていつていることだけに、諸将の眼には、秀吉の態度が、甚だ不遜に見えてならなかった。

だが、この折には、最前、口に出してそれを立腹した中川瀬兵衛も、他の者も、
「心得申した」

と、云い、

「よろしい」

と云い、大様おおように命をうけて、たれもそれを色に出さなかった。そして、今朝から初めての軍糧を兵に解いて、酒を酌くみ、腹をみたし、ふたたび次の戦場へ立った。

人を自分の麾下きかに服せしめるにも、時と所があることを秀吉はよくのみこんでいた。誰も彼もこの勝軍かちいくさに気を好くして沸き立っている時と場所こそつけ目であったといつてよい。こんな中で瀬兵衛の如きムキになつて怒つてみたところで、あたりの雰囲気は却つてその小心を嘲わらい消してしまふのが常例である。

が、秀吉は、そのつけ目だけを利用して、これらの万夫不当ばんぶふたうや、扱い難い猪勇ちよゆうの同僚を、敢えて麾下に見るの冒険を試みているほどの無分別でもない。

軍には絶対に、首脳がなければならぬし、統帥とうすいは明確でなければ紊みだれる。身分上、信孝こそ主将たるべきだが、この軍には出おかれて来たし、戦陣に立つても果断、英邁えいまい、ともに欠けていることは、全軍の諸将もみな認めているところだった。

さればとて、秀吉を措おいて他に人があるかといえ、これはまったくない。箇々の胸には秀吉の下風に甘んじきれない自負を持つていても、

(自分では他が納まらない)

ことぐらゐは各知つてゐるからである。殊に、この弔合とむらいがっせん戦の主唱者が明確に秀吉であり、その糾合きゆうごうに依つて立つた以上、今となつて、

(ひとを部下扱いにするのは怪けしからぬ)

などと、筋目立って見たところで、自分の小量を自分で吹聴するようなものだし、かたがた、戦捷の陣営に組みしながら、みずから功を捨てて裏切りの誹謗を求めるといふ結果になろう。

で、諸将は各々、休息する違もなく、命じられた新戦場へ向うべく、やがて、一斉に座を立ったが、それに対しても秀吉は、将座についたまま、

「大儀大儀」とか、

「いや、御苦労」

とか、極めてあっさりとして、顎で会釈を送っているだけだった。

橋上橋下

秀吉もまた同夜のうちに淀まで進んだ。

ここで信孝と宿営を共にし、未明に立って京都へ入った。

六月十四日である。京都では何よりも先に本能寺の焼け跡を訪れて、亡主信長の霊を弔って、戦況を報告した。

——といつても、もちろんここの焼け跡には、燃え残りの伽藍がらんの残骸と灰のほか何物も余されてはいなかった。

ただ一隅の池のほとりに、高台寺こうだいじかどこかの法師達が来て石を積み重ねておいたという所に、誰とはなく花や水など供えていた跡があったので、仮に、そこを信長以下しゅんな殉じゆんなの将士一同の霊地として、信孝と秀吉は、姿をそろえて、額ぬかずいたのであった。

「ここに立つてもまだ、安土あつちへ参れば、お目にかかれそうな心地がしてならぬ……」
といつて信孝は落涙した。

秀吉も、去りがてに佇たたずんで、

「御無念さ、いかばかりでお在わしたろう。——その六月二日から、ちようど今日は十三日目、燃え残りの棟木むみぎや柱にもまだ火のにおいがするようだ。……おお。小袖の焼け布きれが落ちてゐる。弓の折れも見える」

と、其処此処を見まわしなどして、うたた感慨にとらわれていた。

しかし彼が軍を駐とどめて、ここへ立ち寄つたのは、この日さらに、蹴上けあげを進んで、大津にまで出る行軍の途中であつた。

ゆうべ勝龍寺から直接立つた秀政の隊は、すでに、今朝あたり、近江辺まで突出してい

たであろう。そのほか、昨夜以来の配置によって、醍醐、山科、逢坂、吉田、白河、二条、七条、洛の内外いたるところも、秀吉指揮下の隊が部署についていない方面はない。今朝は、陽の色までが、何となく爽けく違つて来たように仰がれた。

(妙心寺から大勢曳き出されたそうな)

(嵯峨でも捕まったという)

(本阿弥の辻で斬られるのを見て来た……)

町々の噂は、残党狩りで持ちきっていた。山崎から逃げ込んだ落武者や、こここの治安に当っていた明智方の兵は、ほとんどひとりも余さず捕斬された。

さきに二条城の戦いで負傷し、のちに知恩院に入つて療養していた明智光忠も、この朝、

(はや秀吉の馬じるしが京都に入つてきました)

と侍臣に聞くと、すぐ一室を閉じて自刃してしまった。数名の家臣もみな殉じた。なおまた。

昨夜来、丹波越えに向つた高山、中川の二隊は、十四日朝、亀山城を包围していた。けれどここにはもう光秀の家族はいなかった。一子十兵衛光慶が留守している筈と思われ

たが、それも見あたらなかつた。老臣おき隱岐五郎兵衛は前日病死していた。そのほかこれという程な将士もない。為に、ここではほとんど何らの抵抗もうけることなく寄手の入城を見ていた。

明けて十四日というこの日頃には、中央以外の地方諸侯は、どういう方策を決していたろうか。

まだ依然たる昏迷こんめい中にあつたといつていいが、さすがに海道の徳川家康と、越前の柴田勝家とは、やや積極的な動きを示していた。

勝家は、養子勝豊、勝政、その他の諸將をすでに先発させ、自身も北ノ庄きたしよづを出て、山越えに、近江おうみへ急いでいる頃であつた。——もちろん上洛を遂げて、故主のあだ光秀と一戦を果さんために。

家康の徳川勢も、同様の目的のもとに、今十四日には、すでに熱田あつたまで来ていた。そしてなお京都へ向つて続々行軍中であつた。

すでに遅しというほかはない。光秀はすでに破られていた。しかもその光秀と同様な誤算を、家康もまた勝家も抱いていた。——秀吉の反転突進が、さまで鮮やかに迅速に、てきぱきとこの大世転を処理し終つていようとは、なおまだ思いもよらぬこととしていたの

である。

世人もまたおなじだった。きのう一日で、明智の存在が泡沫ほうまつのごとく、地上から抹まつ殺ころされてしまった今朝、その起るときの急なるに愕おどろいた世人は、ふたたび、その散滅さんめつの呆気あつけなさに、茫然として見るふうに見える。

しかしまだこの日となつても、まったく無傷な兵力を擁ようしている明智方の一族があつた。安土を占領してそこに拠よつていた約一千余人と、坂本の城に在る千数百という人数である。そしてこの方面の将は光秀の従兄弟いとこにあたるかの明智さまのすけみつはる左馬介光春さまのすけみつはるだつたことはいふまでもない。

あわせれば二城で約三千の兵力はある。むなくこれを近江口に置いたことは光秀として用兵上すこぶる下策であつたと酷こくひよう評する戦略家もあるが、光秀とて決してそれだけの軍をあそばせておくつもりではなかつた。ただ秀吉の猛撃が余りにも一瀉いつしゃせんり千里の急潮をもつて押し来て来たため、予備軍としていた安土、坂本の新手を加えて反撃に出るいとまもない結果となつてしまつたのである。

光秀が山崎へ臨む前に、急遽きゆうきよ、従兄弟の光春へあてて早打はやうちした書面は、本来、遅くも十三日の朝には着いてよいはずだが、途中の聯絡れんらくが困難なために、これが光春の手

にとどいたのは、すでに十三日の夜半を過ぎていた頃だった。

急を知ると、光春は、

「これに遅れたら取り返しはつくまい」

と観^みて、すぐ安土の一千余名にことごとく出軍を命じ、未明、城門を出て、陽ののぼる頃、瀬田の仮橋へかかった。

——もし光秀が小栗栖^{おぐるす}に死なず、もう数里を遁^{のが}れ得ていたなら、この朝、山科から大津へ出て、たとえ勝てないまでも、光春と共に最後の一戦を華やかにすることができたであろうに。すべては全く手遅れだった。

ここ瀬田の橋口も、光春の最期を見るべき所ときめて、夥^{おびただ}しい敵影が手具脛^{てぐすね}ひいて待ちうけていた。

橋は中断されていた。橋板を剥^はがして、桁^{けた}と杭^{くい}ばかりになっている箇所だの、放火して焼き壊^{こわ}した跡など見える。

「近くの民家を潰^{つぶ}して、すぐ架^かけ渡せ」

馬上の左馬介光春の面^{おもて}には、何のうろたえも見えない。

附近の民家はどしどし潰^{つぶ}された。古材木の柱や戸板はわいわい担^かがれて来る。或る者は、

瀬田の河流に身を沈めて、橋杭を補強し、或る者は、桁を這い渡って彼方から綱を投げ、長い板を引っぱっている。

頃あいを計っていたらしく、対岸の敵勢はこの機を見ると、銃を揃えていちどに弾丸を浴びせて来た。

「身を伏せろッ」

と部下へ命じながら、自分は毅然と立ったままで、敵の弾けむりを睨んでいた明智方の足軽頭は、こめかみの辺を撃ちぬかれて、橋桁からもんどり打って河中に墜ち、ドボンと、大砲の弾が落ちたようなしぶきを揚げた。

「怯むな、怯むな」

なおそこへ、長い棟木だの、床板だのは、絶え間なく運ばれて来る。一步一步、決死の修理をつづけて、味方の突撃路は作られてゆく。

屍は橋上を埋め、血は橋桁からしたたつて、瀬田の流れを紅くした。

対岸の敵勢もなかなか重厚らしい。銃手が弾ごめに時を移している間には、弓隊が矢風矢唸りをたてて、これまた凄まじい鏃の数を射て来るのだった。

この一軍は、事変の初めから反明智態度をあきらかに示していた瀬田の城主山岡景隆の

全家中と、さきに山崎から急派されていた堀秀政の先鋒せんぽうの一隊である。きのう以来の勝ちいくさに続いて、光秀以下、敵の一族諸將の終りも聞き知って、いまや意気の昂あがりぬいている軍勢であるから、その矢弾やだまといい、喊声かんせいといい、ほとんど、左馬介光春の率あがいる一千余の兵力の如きは、主を失つて路頭に迷う敗残のあわれなる群を押揶やゆするような概でしかなかった。

「明智の者どもよ、まだ聞き及ばないのか」

「山崎の総敗軍を知らずに、ここを通ろうとするのか、知って通ろうとするのか」

「日向守光秀さえ、昨夜、小栗栖おぐるすで相果あひまてているぞよ」

「土民の竹槍で」

「悪因あくいん悪果あくかの見せしめを身に示して」

「それとも知らぬか」

「知ってか。ばか者」

「うつけたる、うろたえ軍」

「何のために通るぞ」

「どこへ落ちる気で——」

こう口々に罵る敵側の弾けむりの裡に、時には、ドツと笑う声すらするのである。

それに対して、光春の部下は、味方の作業隊のために、必死の掩護射撃を酬いながら、尺歩丈進、押し詰め押し詰め、味方の屍を壘として、徐々に大橋の半ば以上を踏み取り、やがて左馬介の号令一呼の下から、千余騎いちどに、対岸の敵陣中に突貫した。

それは橋上ばかりでなく、橋の下の急流を、馬で渡し、筏で進み、或いは、半裸体になつて、泳ぎ渡つてゆく者もあつたのである。

志賀の浦風

山岡景隆兄弟や、同苗美作守などの一族は、いわゆる甲賀武士の頭目だつた。

こんどの大乱に際して、さきに旅行先の堺からあわてて本国へ帰つた徳川家康の道中の難儀を、甲賀山中で扶けた一種の山ざむらいも皆、この山岡一族の配下に属する者どもだつたといわれている。

この一族が、節義を立てて、当初から光秀の誘降をしりぞけ、断乎として、反明智を守り通したことは、筒井順慶などにくらべると、大いに偉としなければならぬ。——要

するにこの瀬田城は、以前、瀬田掃部助せたかもんのすけの居城であつたのを、信長の代に、山岡一族に与えられたことを、深く恩としていたことによる。

こういう山岡勢に加えて、堀秀政の先鋒隊が合しているのです、その強さはいうまでもない。しかも、光春が安土から率いてきた手勢一千余に対して、彼は少なくともその三倍に近い兵力を擁ようしていた。

辛からくも、瀬田の大橋口は、遮しゃ二無二突破して、光春以下、その大軍のうちへ、面もふらず駈かけ入るまでの果敢かかんは示したが——到底、それはみずから求めて苦戦の中へ自軍を投じたというしかない戦鬪であつた。

「散るな、崩すな、まんまると円陣をむすび、円を旋めぐらしながら北進せよ。——味方の旗を離れて遠く戦うなよ」

光春は声をからして、その馬上すがたを、戦う喊かんせい声と馬けむりの中に、揉もみに揉まれていた。

この場合、軍の分裂は、敵のねがうところで、光春にとっては、自滅を意味する。彼はあくまで千余人の力を一団として、颯たいふう風のごとく、旋回陣せんかいしんを取りながら、大津まで突破しようとしたのだ。

しかし、その大津まで出ること成功しても、それは決して勝利をつかんだことにもならないし、大勢の上に曙しよこう光を見ることでもなかった。

ここで勝つても、ここに敗るるも、彼のゆくてにはただひとつ。

死、

それあるのみだった。

山崎すでにやぶれ、一族みな四散し、主将光秀もまた非業ひごうの死を遂げたり！ と聞ゆる今、彼として赴おもむいて何かせん、生きて何かせん——である。

とはいえ、その光春にも、なおまだ、これだけの苦戦をなしても果そうとする一つの望みはあつたにちがいない。

それは、もちろん、

(ただは死なぬぞ)

であり、日頃からの覚悟ねがと希いからも、

(こころよく果てたいもの)

とする生涯最高の場と時とに今や直面していることの自覚であつた。

(——さむらいの道、一生涯の華はなも実みも、成るか成らぬかは、ただ死しに際ぎわの一瞬にあるこ

と。生涯のつつしみも守りも研みがきも、もしその死を誤あやまてば、生涯の言行すべて真を失い、ふたたび生きてその汚名を拭ぬぐい直すことはできない)

日頃、彼が家中の子弟にもいつていたことばを、彼はいま、我とわが身に云い聞かせながら、馬上、槍を横たえて、怒濤どとうと怒濤の相搏あいうつごとき血戦の中を、悠々、少しずつ、粟津あの方へ進んでいた。

——こうして、ようやく、大津の町の東口まで突破して来たものの、ふと炎のような息のひまに、前後につづく兵を見ると、わずか二百騎ぐらいしか見えなかった。

多くは、途中で討たれたか、或いは負傷したものだろうが、粟津の辺で、有力な敵の部隊に味方を中断され、それからは四分五裂となつて来た結果である。

「坂本へ。坂本までは」

左馬介さまのすけ光春は胸のなかで、不断にその目標を意識していた。行き着くまでは、死なぬぞと誓った。

坂本の城には、なお多くの家中の者と、そして亀山城から移した光秀の夫人や子達や、そのほかたくさんな老若男女の眷族けんぞくが籠こめてある。もちろん自分の妻子もいる。

「あれらの者にも、心安く逝ゆけるように、よい死に方を取らねばならぬ」

光秀のなきあととは、当然、彼が一族の家長であつた。光春はいちばん後から死のうと思つていた。

その坂本は程近い。もう一里半か二里である。

しかし大津の町へ入ると、町屋は煙につつまれている。光春の先に立つて駈けていた荒木城の子荒木源之丞、乙之丞の兄弟は、忽ち駒を返して、

「殿々。この道は通れませぬ。——道を変えねば」と、手を振つた。

兄弟に倣つて、ほかの徒士勢も、どつと後戻りして来た。両側の家々から火を噴いているので、所詮、熱くて通れないのである。

「なぜ通れぬ」

光春は、先へ出た。

荒木兄弟が、

「新手の敵が、町屋に火を放つて、この先の辻に充満しております」

と告げると、光春は、

「この小勢で、田や畑道を奔らば、それこそ、敵に迂回されて、よい獲物と包まれよう。」

敵の真つただ中を割つて通るのが、どこよりもいちばん安いのだ。わしについて通れ」と、やにわに、馬に鞭打つて、焰の町中を駈け出した。

火ばかりではない。その姿を狙つて、矢や弾丸も彼へ蒐まった。光春は、左の脇を曲げて、鎧の袖を額のまえに翳し、馬のたてがみに俯伏し気味に突撃して行つた。

「それ、殿につづけ」

兄弟も、他の部下もわあツと、咽びながら、火の下を駈けた。

辻へ出た。

登れば逢坂、西は三井寺。また一方の道は柳ヶ崎の浜辺へ出る。

ここの要所を占めていたのは、堀秀政の本隊だった。もちろん久太郎秀政自身も、この中にいるはずである。当然、光春以下、明智勢はそれへぶつかつてゆき、堀隊もまた猛然と邀撃した。馬のうごきも槍の柄も意のままにならないほど道幅も狭い辻である。しばしの市街戦は、焼け落ちる建物のひびきと、人間の咆哮と、血の黒煙で、夜か昼かも分らなかつた。

ここの辻は、坂の裾の三叉路なので、当然、坂上を取っている堀軍は、地形上からも有利であつた。

そのほかすべての条件からも、光春主従の終りは、いまここが、その時と場所であるとしか見えなかった。

けれど光春以下二百の兵は、その絶対的なものを、いわゆる「ものともしない」死にも狂いをもって驚くべき勇戦を持ちつづけていた。

ここまで、光春を離れず、従^ついて来ただけでも、その兵は、尋常一様な兵数の質でないことはわかるのである。

——為に。

地の利をしめ、黒煙猛火を味方とし、あまつさえ数倍の兵力をもつて、それを喚^{わめ}きつづんでいた堀隊も、却つて、少数の敵に、まったく一泡ふかせられた形となった。刻々敵も討ち減らしてはいるが、味方もそれに数倍する死傷者を累々^{るる}と路上に重ねている有様であった。

「あれが左馬介光春か」

堀秀政は指さしていた。

坂上にある彼の床几^{しょうぎば}場は、燃えさかる町屋の煙のため、すぐ下の戦況すら透視^{とうし}できなかった。

「どれでしようか」

側に彼をかこんでいる家臣の堀監けんもつ物や近藤重勝は、眼をこすりながら、秀政の指のさきを見わたしていた。

「あれ、あの白地の陣羽織じやよ。乗っているのも良い馬らしい」

「才才、なるほど」

「光春だろう」

「慥しかとはわかりませぬが」

「光春ならで、あれほどの武者が、部下のうちにいるとは思われぬ。久太郎秀政の前に立たせて不足のない敵だ。どれ……」

「うや否、彼は、傍らの馬へとび乗って、坂下へ駈け降りていた。」

堀久太郎秀政は、この年、ちょうど三十歳である。天王山、山崎などで、彼の名は、羽柴軍のうちでも断然重きをなして来たが、なおまだ帷幕いばくにかくれて計謀けいぼうに参ずるよりは、陣頭の勇将であった。

彼は、味方を押し分けて、敵勢の直前に馬を立てた。同時に、大音声で何か敵へ云ったが、あたりの叫喚きょうかんや炎の音で、到底、ことばの意味はとどかない。

けれど、その態度や物の具などで、大将秀政ということは、すぐ知れた。明智勢の眼が、みなそれへ蒐あつまった。

「死ぬならあれと刺さし交ちがえて」

と、雑兵までが、どツと秀政のすがたの下へ寄つて来た。

「われと見て、うしろを見せるか。左馬介さまのすけ、左馬介」

秀政は、馬前の敵を見ず、彼方の白い陣羽織を見ていた。およその敵は、馬蹄ばていにかけ散らし、槍をもつて叩き伏せた。そしてただ白い陣羽織のみを目がけていた。

光春は、煙の中から、ちらと此方こちらをふり向いた。

——と、猛然、彼の影は、あたりの敵をふりすてて、秀政のほうへ馬首をめぐらして来たが、突然、前に立ちふさがった味方の若者の二人が、左右から主人の口輪をつかんで、ぐるりと、反対な方へ駈け出してしまった。

それは光春が、日頃目をかけていた二人の小姓だった。

うしろからは、堀秀政が、

「きたなし！」

とののし、
と罵り、

「返せ」

と呼ばわり、

「——逃げんとしても、逃げ得る道もあるまいに、左馬介光春は、死に場所を知らないのか」

と、乗れる駿足しゅんそくにまかせて、その追撃は物凄**い**ばかり急**だ**った。

堪たまりかねて、光春も、

「放せッ」

と、駒を止めて、二人の手を、馬の口輪から振り飛ばそうとしたが、二人の小姓はなお、

「いけませんッ。殿には、お落ち下さいまし」

「あとは、われら二人で」

と、必死に拒こぼんで、しかも一人は槍の柄で、光春の馬の三頭さんずのあたりを、力まかせに撲りつけた。

馬は愕おどろいて、光春を乗せたまま、盲目的に彼方かなたへ飛んで行**つ**た。ふたりの小姓は、もとの道へ取**つ**て返して、健気けんげにも、堀秀政と槍を交え、枕をならべて戦死した。

——止とどまるを知らない奔馬ほんばの手綱をやつと締めて——光春が、田の畦あぜの、湖に注いでゆ

く小川の縁から振り向いたときは、もうその二人も見えず、追って来る秀政のすがたも見えなかった。

そのかわりに、近くに望まれる街道にも、うしろの畑道の土橋や森の附近にも、百騎、二百騎ぐらいな敵の集団が、あだかも空から網の中へ翔かけこんで来た鳥を眺めているように、そう物々しく動きもせず、此方を見ている様子であった。

危地は決して脱していない。むしろ反対に、光春の危険は加わった。混乱の重囲から、完全な重囲のうちへ移って来ただけのものである。

こういうとき慌あわてふためくと、後々までの語り草になされる。包囲している敵の意志も、（左馬介光春が、どういう死にざまをするか、これは見ものである。見ていてやろう）

というような落着き払った意地悪さを示しているのだ。どう緩慢かんまんに放っておいても、所詮しょせんは檻おりの中のものに等ひとしい。左馬介が逃げきれものではない——という自信たっぴりな気持を前提としてであるということはいうまでもない。

「叱しいッ……」

光春も悠々ゆうゆうたるものだ。手綱の一方をぐいと挙げて、馬を叱った。無理にここで馬を止めたはずみに、馬の前肢がやわらかい田土にふかく入ってしまった。その前脚を怪我

なく抜かせておもむろに馬首をめぐらすためだった。

駒は、田と小川のあいだを、ゆるやかに湖のほうへ向って歩み出した。

軽い速度になって、しきりと鬣たてがみを振りながら、白い泡を口輪に吹いているのは、なお馬が悍気かんきをしずめていない表情である。光春の手綱は、努めてそれを宥なだめながら歩ませているた。

びゅんツ——と、一矢、風を截きって、彼の面と鬣たてがみのあいだを通った。

ぶすツと、そこらの敵うねにも、銃弾のもぐる鈍い音がした。

が、多くは、矢も弾たまも、田たの面もに落ちた。まだ彼の位置は射程しゃてい圏外けんがいにある。

しかし彼の駒はどこへ出る気であろう。行こうとする道はすべて敵にふさがれている。

それ以外は琵琶湖の水あるのみである。

そのうちにふと光春のすがたが見えなくなった。

遠巻きにしていた敵勢は、多寡たかをくくって見ていた自己の心理を遽にわかにたしなめて、

「逃げうせたぞ」

「どこかへ影をかくした」

急にあわて出した様子である。そして無性に、光春の姿の消えたあたりに向って、矢弾やだま

を盲射し出した。

各、一騎打に自信のあるらしい武者が、東の森からも、西の街道からも、三騎、七騎、十騎と前後して駈け出した。もちろん光春に近づいて、雌雄を決する気ぐみにちがいがなかつた。その面々は馬上から味方のほうへ手を振って、

「射るな」

「しばし撃つな」

と、制しながら、何か、口々に呼ばわり呼ばわり駈け巡って、光春のすがたを捜しているふうだった。

すると、彼方の葭の茂りが、風でも分けてゆくように、一筋、際だつて戦いでいた。――見ると、まぎれもない金鞍を乗せた馬の背と、その馬の背を降りて、みずから口輪をつかんで曳いてゆく白地の陣羽織の武者が――葭のうちに影を沈めながら、しかも極めて悠々と、湖水の方へ歩いてゆくのが見えた。

「おツ。あれだ」

「左馬介。待てツ」

十数騎の武者は、功を競つた。われこそ、その獲物をと、争うかのように、面々、いず

れも馬をおどらせて葭の中へ駈け入った。

その田圃道から、湖の波打際までのあいだ約一町ぐらいな幅は、いちめんな葭におわれているのである。乗り入れた面々は、みな葭の根の生えているやわらかい湿地に気づかなかつた。馬の脛は蘆の根よりも深く泥土を穿つて、到底、その駿足をあらわすことはむずかしい。

「——いけない」

と覺つて、何騎かは、馬の背を降りた。或いはまた、ふたたび畦道まで戻つて、遠く、葭のない先の方へ迂回を試みた。

葭のあるのは、町はずれの、この附近だけであつて、柳ヶ崎のてまえになると、松原つづきとなり、白砂青松の渚である。

「ここへ出て来る他あるまい」と、光春の方向を察して、先へ廻っていたのである。この辺から打出ヶ浜にかけても、羽柴方の軍兵は充満していて、三井寺方面から明智兵を掃討して来た堀秀政とその旗下もまた、附近の松林のなかで、一息ついていた。

——と。そのみでなく、湖岸の全味方のうちから、何事かわあつと歓声に似たような動揺み声があがつた。

見ると、彼方の蘆の岸から水面およそ半町ほど先をゆるい波紋が一すじ真つすぐに描かれてゆく。

それはまったく誰もが予想さえしていなかったことを、ふいに眼に見せられたときに出る敵味方なき驚嘆といえよう。

いま、琵琶湖びわこの心をさして、一頭の馬は、鮮やかに水を掻いてゆく。そしてその波紋の中に浮きつ沈みつ見える白い陣羽織こそ、彼らがさつきから手に唾つばして求めていた左馬介光春のそれに違いなかった。

人間の想像力にはおおよそどうしても一定の限界がある。あとでは当然その非に気づくことでも、事実のあらわれる瞬間までは、いつも十目十指的な常識の線から一步も出られないのが普通らしい。

今、左馬介を逸いっした羽柴勢が、むなしく声をあげている心理も、われとわが常識を嘲あざけるに似ていた。

(甲冑を着、太刀を佩はき、あまつさえ、今朝からの戦いに疲れ果てた左馬介が、騎うまのまま湖上にのがれ得るはずはない)

と、きめこんでいた考え方が、眼に見せられた事実によって見事にくつがえされたので

あつた。——鉄は水に沈むもの、という確乎不拔かっくふぱつな通念のほうが顛覆てんぷくを見てしまったのである。

大きな不覚にちがいないが、かくまで鮮やかに受けた不覚に対しては、戦国武者のあいだでは、敵ながら天晴あつぱれなものとして、一時の歓呼を惜しまなかつたのみか、

「さすがは、明智一族のうちでも、彼ありといわれていた男」

「見事哉かな、左馬介」

と、どよめきどよめき、私語を発して、それを賞め称たたえている者すらあつた。

殊に、堀秀政や、その他、互いに名を惜しむ武門の将は、美しきものに見み惚とれるときのような眼で、湖の沖を凝視していた。

弾も矢もとどかない距離にまで——すでに左馬介は泳ぎ出していた。

「よも坂本までは、あの馬を泳がせきれまい」

「——どの辺で、溺おぼれ出すか」

兵の多くは、なおまだ期しているものの如く、無駄矢も無駄弾も放たなかつた。

——と。波打際を数町離れた左馬介光春は、やがて弛ゆるい半円の波紋を描いて、水面わずかに見える馬の頭を——西の方、坂本のほうへぐるりと向け直していた。

「改正三河後風土記」や、その他の諸書が記すところによると、その日の光春が装いは、しろねりぎぬ白練絹の陣羽織に、時の名ある画匠が、水墨をもつて雲龍を描いたものを着ていたという。

また兜は、二ノ谷と銘のある明珍造りの輝かしき物であり、馬も大鹿毛の雄で、よほど優駿であつたろうことは、朝からの戦闘に耐えて、なおよく湖上遠くに出て、さかんに水を搔いている悍気を見てもわかることだつた。

しかしどんな名馬でも、その馬をして長く疲れぬように乗りこなすには乗人の如何によるこというまでもない。

弓太刀の表芸以上、当時の武将が騎馬を重んじていたことはいうまでもないが、特に光春は馬術熱心だつた。このことについては、青年時代秀吉とのあいだに一挿話も遺しているが、いまはそれをいつている違はない。——いま彼が馬首を向け直した湖上から斜めに見ても、彼方なる坂本の城は、なお目づもり約半里の余はある。そこまでよくこの馬が耐えるや否や。また、世の笑い草になるかならないかの衆目もある。光春としてもまさに畢生を賭していたにちがいない。

ただ見る眼には、いちめんの湖でしかない広さにも、その水底には深淺があるというこ

とはいうまでもない。

左馬介光春は、よくそれを弁えていた。

安土を出たときから、死を期していた今日ではあるが、彼は本来の性格としても飽くまで無謀や愚拳ぐきよはやらない人である。その点、従兄弟の光秀よりは、彼のほうが遙かに徹底した理性家であったといつてさしつかえない。なぜならば光秀は生涯の完成にあたって、ついにみずから信ずるところの教養も忍耐も一挙に自身で破は潰さいしてしまつたが、左馬介光春はといえば、なおこの期ごになつてもその自己を——敵軍すべて取り囲む琵琶の湖においてさえも——珠たまの如く愛めでて持つてゐる姿であつた。

この湖上はいうもさらなり、この辺の地はみな自身の領土である。しかも坂本のすぐ城下である。光春が、田畑の畦あぜ道みちから葭蘆かろの茂りまで、どこはどうと、知りぬいてゐることは、当然であつた。

水馬の技でもそうである。

彼が、湖に馬を泳がせたことは、彼としては、きよう初めてのことはない。

常に、居城の坂本の馬場から、この大津附近まで、水馬で渡つたことは何十遍も経験があるのである。従つてこの辺の湖底は、深いか浅いか、ほとんどぞらんにしている彼でもある。

った。

——馬の足の外れる深さにかかれれば、身を馬の三頭さんずに下げて、かるく手綱をくれながら馬を泳がせ、また、浅瀬にかかれれば、しぶきを咬かませて駈かけわたるのである。このようなことはあながち彼の創意でもなく、敵前渡河のときは、かく操あやつるものと訓おしえている前人の貴い経験に基づくものであった。

ただし、これが非常な至難かのように考えられて、後世、説をなすものが絶えない。いわく。

(左馬介の湖水乗切りというのは、派手がましく伝えた虚説で、ほんとは湖水の岸を駈かけ廻まわって坂本へ入ったにすぎない)

また、別説には、

(彼は、湖水と町屋とのあいだを駈かけて通った)

ほかにもなお、小舟に乗って坂本城へ渡ったものである、などという説もある。

これらの説はみな、堀秀政やその他の羽柴勢が全然、その兵力を、湖岸や坂本への通路には配置していなかったもののように、あの戦局を見ているらしい。

用兵上、しかも敵に数倍する兵力と、時間の余裕をも充分に持っていた羽柴軍が、そん

な一方抑えの作戦をする訳はない。

要するに、左馬介の湖水渡しを否定したがる史家心理には、そのことの至難に思われるのと共に、余りにも、事実そのものが劇的であり過ぎるといふことに却^{かえ}つて、懷疑^{かいぎ}をもち、これを通俗中の巷^{こうせつ}説と片づけてしまいたいものがあるのではなからうか。

けれど古来、身をもつて歴史を描いた日本武士のすがたは、常におのずから最高な劇的の一天地を作っている。湊^{みなとがわ}川、四^し条^{じょう}畷^{なわて}、桶^{おけはざま}狭^ま間、川中島、高松城の一舟、松の間の廊下、雪の夜の本所松坂町、劇以上の劇でないところはなない。

——が今、当の左馬介光春にとつては、そのことは決して、後の人が考えるような至難や無謀を敢えてしているものではなかった。彼はただ日頃の水馬の錬^{れんせい}成をきようはただ甲冑を着けてしている程度にしか思っていないかった。

そうして、悠々と、波間に馬を遊ばせてゆく左馬介の白い陣羽織は、この湖に多く住む鳩^{にお}の一羽が泳いでゆくようであった。

——依然として、なお、

「いまに溺れ死ぬだろう」

と、それを見ていた湖岸の羽柴勢は、やがてふたたび騒ぎ出した。固執していた自分た

ちの予想にまたも裏切られたからである。

左馬介光春の姿は、敵の矢弾の射程距離外を注意ぶかく迂回して、やがて難なく坂本城の東の浜へ、水を切つて駈けあがつている――

唐崎からさきの一ツ松からその辺りは、いちめんにきれいな真砂まぎと松原の渚なぎせだった。波打際のしづきを離れるや否、彼はいつさんにその松原へ駈け込んだ。そしてしばらくその姿を緑のなかに没したと思うと、坂本の町屋と松原のあいだにある十王堂じゅうおうどうの前にふたたび姿が見えた。

――遠く、それを認めた羽柴方の兵は、われに返つたように、一時に鼓こを鳴らし喊かんせい声をあげ合つて、

「や、や。乗り抜けたぞ」

「城へ入れるな」

と遽にわかに、潮を作つて、こなたへ奔突ほんとつして来る様子であつた。

振り向いて、それを見ながら、左馬介はにこと笑つたようであつた。――なお一鞭ひとむち当てて急ぐかと思うと、彼は十王堂の前でひらと馬を降りた。

馬の手綱を拝殿の廻廊柱につないでから、身をゆすぶつて、鎧よろいの袖やふところの水を走

らせ、二ノ谷の兜かぶとを脱いで、神前に置いた。

そして矢立を取り出した。筆を持つて御堂の前に立ったのである。やがてその白壁にこう書いた。

明智左馬介光春、ただいま湖水を乗り渡し候ふ馬也。年来の忠勤をいたはる暇もなく
訣けつべつ別をつぐ。誰にてもあれ、我に劣らぬもののふにこの大鹿毛おほかげを給ふべきなり。愛め
で給へかし。

筆を捨てて、階きざはしを降りると、左馬介は、大鹿毛の濡れ寝ている鬘たてがみを幾たびも撫でて、
「鹿毛よ。おさらばだぞ」

と、人に語るように云った。

大鹿毛は鼻をすり寄せて、彼の肩へ顔を載せた。あだかも甘え泣いているようである。
光春はその頸うなじを抱えながら、あなたの唐崎の松をながめて、ふとこう吟ぎんじた。

われならで誰かは植ゑん一つ松

こころして吹け志賀しがの浦うらかぜ

この一首は、かつて光春が、初めて坂本の城を領したとき、唐崎に記念の松を植えさせ、
その折、それに寄せて詠んだ和歌である。

何で、その歌がいま左馬介の口に出たか、左馬介にもわからない。ただ、説明できることは、こんなとき人間は、何か無性に鬱懷うつかいを放ちたくなる。天地に向つて慟哭どうこくした感情を反対な形で現わそうとした努力が、思わず朗唱ろうしょうとなつたのかもしれない。とにかく左馬介は、愛馬を捨ててそこから身を翻ひるえすと、たちまち町口の木戸へ駈けこんでいた。彼の味方は、わツと哭なくような声をあげて、彼を坂本の陣營に迎え取つた。

世々の物よよのもの

光春は城に入ると、ここに留守していた全家の老幼男女から、そのすがたを、焦土に降つた菩薩ぼぼつのように取り囲まれた。

坂本にとどまっていた光秀の夫人や一族の者も、かならず彼が一度はここへ来るものと信じて、必然、取らねばならぬ最期とは知りながらも、

「左馬どのがここへ見えられた上でも遅くあるまい」

と、待ちに待っていたのであつた。

光春はすぐ令を下して、

「云い渡すことがある。将士はみな本丸へ集まれ。城外の木戸へ出ておる者も呼びもどせ」と、下知げちさせた。

やがて集まつた頭数は三、四百に足らなかつた。半数以上は、光秀の死を伝え聞くとともに、ゆうべのうち何処いずこともなく逃げ落ちてしまったものとみえる。

「よく今までここを支えていてくれた。しかし、事ころざしと違たがい、味方は山崎にやぶれ、大殿も昨夜小栗栖おぐるすのあたりで敢あえなき御最期と聞く。すでにわれらの惟任これとう日向守様のなき今日となつては、われらの望みも同時に終つた。——かさねていう。この最後の最後まで、異心なく、踏みとどまつてくれた各の善戦にたいして、左馬介は、故光秀様を始め、御内方ごないほう、ほか一族になり代つて、心からお礼を申す。かくてこの一城は、わが明智一党の最後の墳墓ふんぼと相成つたが、各にはもう武士として恥なき本分を尽し果されたことでもあれば、この上、求めて死をいそぐにあたらぬこと、それぞれの郷土に帰つて、さらに、土魂をみがき、今日の訓おしえを生涯いに活かし、よいさむらいとして終つてくれるように……これは光春が命じる最後の命令である。かならず守つてもらいたい」

左馬介はそう告げ終ると、やがて庫中の金銀から何くれとない器物や身廻りの物など、すべてをそれらの人々に頒わかち、

「はやく落ちてゆけ。搦手からめてを出て山づたいに、四明しめいヶ嶽だけを越えればな遁のがれる先はあろう。とかくして、われら一族どもの足手まといになつてくれるな。はやく、はやく」と急せいて、ほとんど、そのあらましの者を、追うように、搦手の一門から落してしまつた。

あとの城中は、空洞うつろのような広さだつた。その寂寞せきばくのうちには限られた血縁の人々と、かしく少数の女人たちと、そして極く内輪の近臣しか残されていなかった。

——すると、奥の丸の橋廊下を、幾人もの幼な子を、その母なる人や侍女こしもとたちと共に両手をひいて、こなたへ渡つて来る老人があつた。光春の叔父で明智光廉みつかに入道いんどう長閑ちやうかん齋さいという、あの面白いひとであつた。

「じじ様。みんなして、どこへ行くの」

光秀の末の子、乙寿丸おとしゆまるは八つであつた。こうして、奥の者が揃つぼって局ぼねを出ることはめづらしいので、ふしぎそうに訊きいていた。

「さあ、いずこへ行きましよう。嵯峨さがの花見か、竹生島ちくぶしまへお舟で月見か」

このひとの常として、洒々しゃしゃ落らく々くと子供相手に戯たわむれている容子ようすは、きょうも平生と少しも変りがなかつた。夫人や侍女こしもとや乳人めのとたちは、さすがに、折々面をそむけて、そ

つと涙をふいていたが、長閑齋のことばを聞くと、涙の中でも、ふと笑ってしまふことがままある程であった。

もちろんここには左馬介光春の妻子もいる。その上に、亀山から光秀の妻子眷族けんぞくまでここへ引き取っていたので、ひと口に奥の者といつても、縁類を加えた老幼男女の数は何してもずいぶん大勢である。光春は、それを皆、叔父の長閑齋に頼んで、騒ぎ乱れぬように、本丸の広い一間に寄せ集めさせたのである。長閑齋の役目はなかなか難しく辛はずだった。しかしこの老人は辛い顔も悲しい容ようす子もしていない。例のとおり子らと戯れながら、何度にもわたって、橋廊下を往復し、やがて滞とどりなく奥の者を全部、ひとつ広間にあつめた。

「賑やかなことじやな。このような多数の道づれでは、どこへ参ろうと、淋しゆうない」
彼は、その真ん中に坐つて、たえず何か喋しゃべ舌しやべつていた。

けれど多くの女性は泣きぬれている。それが子たちの童心をも異様にしめやかにするの
で、いつもなら彼の肩や膝に取りついて忽ち、よい遊び相手とせずおに措おかない子らも、各
、その乳母やその母の側にすがつて離れなかつた。

「叔父上、みな、お揃いなさいましたか」

やがて光春はそれへ臨んで、光秀の夫人へむかい、

「はや敵は、城下近くに迫りました。いまはお心こころ措おきなく、お始末遊ばしますように。

——光春もすぐおあとを慕うて参りますれば」

と、最期をうながした。

光秀の夫人は、わが子、身寄りの子など、幼い者を左右に置いて、光春の妻と並んでいたが、

「何かと、こまやかに、嬉しゅう思います。わけてお許もとにひと目でも会えたのは、またとない仕合せでした。ここには氣づかいなく、お許の思いのままよい死に場所を取って、敵に噛わらわれないようにして下さい」

「ありがとうぞんじます。……では」

今こんじょう生しょうこれきりの一礼をのこして、

「叔父上。おねがいます」

「承知した」

「女房。みだれるなよ」

妻へも、一言いつて、彼はすぐ去った。

城壁の外には、もう鉄砲の音が聞えて来た。それと、たった今、ここにいる者が立つて来た奥の丸から突然、濃い煙が立ちはじめた。

これは光春の命によつて、小姓の奥田清三郎と船木八之丞ふなきはちのじょうのふたりがみずから放った火であつた。その火焰が橋廊下のある中庭を隔てて此方の広間の障子へ赤く映つた。

「——怖いッ」

取りすがる子の叫びや、急に泣き立てる子の声がながれた。その中にも、長閑齋の声だけ、何となく明るく、

「泣くじやない、泣くじやない。さむらいの子は、泣かないもの。——じじも行きませうぞ、母御も参ろうぞ。みなも来い。お手々をつないで死出の旅出じや。さあ、お行儀よく、おすわりなさい。順々に、じじが連れて行ってさしあげる」

黒煙の漂ただよい出した障子いちめん、こまかい血しおの霧が打った。みだるる黒髪の下から初期の息で子の名をよぶ母の声も洩れた。しかしすべては一瞬の震撼しんかんに似ていた。刺さし交ちがえ、刺し交え、おくれる親も子もなかつた。——ひとりなお生き残つて、やがてそこから廊下へ出て来たのは、長閑齋だけであつた。

その頃、大手の城門は、ぱりぱりと響きを立てていた。寄手の勢が破壊にかかり出した

のだ。石垣の彼方此方からも、先を争う兵の影がよじ上つて来る。

からめて
「搦手からは火であった。」

この方面の火は、さきに城中の者がみずから放つた奥曲輪おくぐるわの火とつながつて、忽ち半城を蔽うばかりの火勢となつた。

「八之丞、清三郎。いちいち弾込めたまごしては手鈍いてのろ。鉄砲を取り代え取り代え、弾のあるかぎり撃て」

光春は矢倉にのぼつて、残り少ない左右の者に、なお下知げちしていた。そして自身も、鉄砲を構えて、狭間はざまから筒先下なりに敵兵を狙撃していた。

すでに城兵の大部分を逃散ちようさんさせたあとなので、武器だけは夥おびただしく残っている。一弾放つては、またほかの鉄砲を取つて撃ち、使い捨てに撃ちつづけていた。同じ矢倉にいる七、八名の小姓も部将もみなそれに倣ならつて敵に猛射を浴びせた。

「左馬どの。居るか」

「居るッ。周防か」
すわう

「そうじゃ」

「申しつけた品々は」

「矢倉の下まで運ばせたが、如何なされる？」

「何でもよい。すぐこれへ運び上げさせてくれい」

「心得た」

階段口から半身だけあらわして、そこから光春の背へこう云っていたのは三宅周防守だった。周防守はすぐ矢倉の二階辺りまで降りて行って、下に待っているさむらいたちにかい、

「上げろ。上がって来い。それらの品を持って、お矢倉のうえまで」

と、手を振っていた。

その間も、光春は、鉄砲を撃ちつづけていたが、程なく、三宅周防守と、ほか四、五名の味方が、何やら蒲団包みにした荷物や、蕙ぐるみにした梱などを三、四箇ほど、すぐうしろまで担い上げて来たのを見ると、

「鉄砲止めッ」

と、四方の狭間へむかつて、ふいに休戦を命じた。

なお漂う硝煙だけは立ちこめていたが、一令のもとに、そこはしいんと静まり返った。

左馬介光春は、狭間から半身を乗り出すようにして敵勢を見ながら、

「寄手の大将、堀殿はあたりにおらぬか。かくいうは、守将の左馬介光春でござる。堀秀政どのに物申したい」

敵も急に喚かんせい声をひそめた。そして堀秀政の従兄弟にあたる監物けんもつのすがたが矢倉の下に立った。

「左馬介どのか。今ほどは寔まことにお見事であつた。よい語かたりぐさ草をおのこしなされたぞ。はや最期のお支度と察するが、此方に物申したいとはいかなる儀か」

「やれ、監物どのか」

と、覗のぞき下ろして――

「なお少々さし上げる矢弾はあれど、武門のごあいさつもはや打ち切る。やがて全城火となり申さん。そのあとでは、われらの骨すらお求めあるも難むずかしかろう。ついては、可惜あたら、

灰となすにも忍びぬ品々を、貴公の手を経て、世にお戻しいたしたい。お受け取りあれや」
 云い終ると、蒲団包みや、蕙むしろぐるみの荷物を、細ほそびき曳ひにからげて、狭間はざまから下へするす
 る降ろして来た。

堀監物は意外な感に打たれた。寄手の将士もみな一いちよう様な眼をそこにこらした。矢倉の下なる監物と、上なる光春とのあいだに、なお数語が取り交わされた。

光春はいう。

「いま、お手許へお渡し申した品々は、亡き光秀様が、故信長公より生前功あることに拝領いたした物ばかりでござる。——それに添えてある目録もくろくを一見ねがいたい。——虚きよと堂の墨跡ぼくせき、茶の湯釜、名物の茶入れ、ほかに太刀、その他数点」

監物は下で目録を見ていた。そして兵に荷を解かせ、照らし合わせて、すぐ答えた。

「お目録どおりたしかに受け取り申した。が、せつかくの御秘蔵を、憎き敵の手へお譲りあるとは、いかなる思し召しのことか。特に何人へお譲りありたいとかいうお望みでもあらるるか」

「何の」

と、光春は高き所から一笑を見せて、

「敗れ去れば天下さえ、次代の勝者に移つてゆくものを、一箇の茶器名刀の如き何かあらん——です。ただ、それがしの思うところは、かかる重器は、いのちあつて、持つべき人が持つあいだこそ、その人の物なれ、決して、わたくしの物ではなく、天下の物、世々の宝と信じ申す。——人一代に持つ間は短く、名器名宝のいのちは世々かけて長くあれかしと祈るのでござる。これを火中に滅すのは、国の損失、武門の者の心なさを、後の世に嘆

じられるを口惜しと、かくはお託し申す次第。——依つて、その名器名刀が、やがて誰の御所有になろうと、左様なことは、ただ今、この世に暇いとまする光春の知ったことではありません。——流るがんでんしやう玩ん転てん賞しやう——それでいい。持つべき資格のある者に持たれ、世の流れにまかせてゆけばよいのです」

告げ終ると、光春は、はや死を急ぐらしく、その狭間から姿をかくした。

堀監物はあわてて、再び、矢倉の上へむかつてこういった。

「左馬どの、左馬どの。なおお訊きしたいことがある。もういちど姿を見せられたい」

「おう、何事」

ちらと、また光春が、下を覗いた。

「ほかでもないが、いま受け取った数々の重器のうちにも、かねて明智衆にありと聞く、世に名高い吉よしひろえ広江ひろえの脇わき差さしは、目録にも見えぬが、お取り出しを忘れたのではないか。

——もし御失念なれば、庫中からお持ち出しになる間、お待ちいたしてもよいが？」

すると、左馬介光春は、呵か々かと笑つて、

「あれは平常、日ひゆうがのかみ向守むかみ様が、特に御ご鍾しゆう愛あいの名刀。わけて明智家には、由ゆいしよ緒しよふかい

品でもあれば、やがて死出の山にて、光秀様にお会いしたとき、お手渡しいたさんものと

思うて、わざと取りのぞいておいたのでござる。——はや火も本丸まで燃えついて来たよ
うですから、余事を申しておる違いとまもない。監物どの、いぎ、攻めかかられよ」

ことばの下から、ぐわんツと異様な音がした。光春は一閃いっせんの火光と黒けむりの裡うちにか
くれ、矢倉の狭間のすべてから、同時に濛もうちゅう々と硝煙がふき出した。

次の一瞬には、轟ごうぜん然と、全楼ことごとく、一火となつて崩れて来た。火薬を積んで自
爆したのである。

坂本城は、明智方最後の一抛地だった。左馬介光春以下、一族とその股肱ここうは、思い残り
なく、生涯の終りを飾った。かくて地上にはこの日限り、明智方と名のつくものは、一城
一兵もなくなつたわけである。

自爆した矢倉の崩壊ほうかいと共に、全城また火の海となつたので、寄手の勢は、いったんそ
の火勢から、囲みを開いた。

ところが、その焰の下から、まだ生きていた一人の敵が躍り出した。

「寄手の若い者に物申さん」

と、その老武者は、熱風の中から駈け出して、

「われは光春の叔父、明智長閑ちようかん斎さい光廉みつかどである。欲しくば寄れ、この首をさずけん」

そしてりゅうりゅう槍をしごき、堀勢の一角へ猛突して来たのだった。

日頃、家庭の儿女たちや、坂本の家中一般からも、「のん気なお方」といわれ「おひやらかな御老人」と、まるで奥曲輪おくぐるわの玩具おもちゃみたいに見られていた長閑齋は、この日、光秀光春の妻子から老幼すべての者の最期までを見届け終ると、やがて矢倉にのぼっていた。そして甥の光春に切腹をすすめて、その介錯かいしゃくをつとめ、さらにまた、三宅周防守らの将士が、すべて自害し終つてから、矢倉下の火薬に点火するという——最後の役までもしていたのであった。

「やあ、口ほどもないぞ。当年六十七歳の老武者の槍先から逃げまどうような奴は、この先ともに世に生きていたところで、世の役には立つまい。われと思わん若い者なら、この首を取れ。取つてみよ」

長閑齋は、広言を吐きぬいていた。実際、彼の槍に立ち得る者もなかった。真実死をきめた人の働きには、老若の差もありとは見えない。まさに老獅子の奮迅ふんじんに似ていた。

突き崩された寄手は、ついに鉄砲を揃えてこれを撃とうとした。すると堀秀政の旗本、薬師寺某やくしじは、

「さすがに、甥も甥なり、叔父も叔父なり、あわれにも、見事な死に振りよ。ねがわくは、

あの入道首はそれがしに給われ」

と鉄砲組の狙撃そげきを制して、一いっそう槍をもつて立ちむかい、ついに突き伏せてその首級をあげた。

長閑齋は、さきに甥の光春を介錯かいしやくした光春所持の刀を帯していた。首級はその品と共に、やがて、堀秀政の手から三井寺へ送られ、秀吉の実検に供えられた。

「死んだか。……この長閑齋も、おもしろい老人だったが、とりわけ、光春は惜しい男だった」

秀吉は、首と刀を前にして、左右の諸將にこんな思い出を語った。

「あれはもう——だいぶ以前のことになるが、光秀が初めて坂本城を拝領した頃、信長公のお使いで、この筑前が祝いに参ったことがある。そのとき、光秀は下へも措おかずわしをもてなし、またしきりに、従兄弟の光春をも会わせたがって、何度も、左馬介を呼びにやったらしいが、ついに出て来なかった。——その帰りがけじゃ。わしが湖畔の道へかかる時、松原の中で、茜あかねの陣羽織を着た男が、余念なく、馬の稽古を励んでおる。この方の行列にさえ一顧いっこもくれず馬ばかり飛ばしているのだ。——あとで聞くと、それが左馬介光春であったそう。その時分から、わしもひそかに骨のある男と見ていたが、果たして今日、

その真価を天下に示した。……もしこの男が、わしの麾下であつたらと真実思う。しかし
 こう惜しまるるもまた人の華だが」

駄のう
 馱農

秀吉は三井寺に宿陣していた。十四日の夜はまたも大雷雨であつた。坂本城の余燼は消
 え、墨の如き湖や四明ヶ嶽の上を、夜もすがら青白い稲光が閃めきぬいた。

もし、地上の現実を超えて、人の感情や幻想をも、歴史の影として書くことができるな
 らば、この夜の凄い黒雲の中には、明智一党の軍馬がなお轡の音や喊の声を止めず、また
 本能寺方面にもただならぬ武者声が聞かれたであろう。そして叡山の根本中堂あた
 りには、かつてこの峰々で焼き殺された無数の僧侶、碩学、稚児、雑人たちの阿鼻
 叫喚もたしかに聞え、或いは哭き、或いは笑い、或いは闘い、それが電光と雷鳴をなし
 ていたといつても、あながち過言ではないであろう。

なぜならば、京近畿の諸民は、明智氏の滅亡を知つても、なお明日の世がどう向いて
 ゆくか、地上の修羅がいつ熄むか、大きくそれを見とおすことはできないのみか、むしろ

ふたたび、信長以前の乱脈な風雲が世をおおうて来るのではないかと——夜の具をかぶりながら、この夜の雷雨に夜ツびて脅おびえていたろうと思われるからである。

が、夜明けとともに、一天はきれいに拭ぬぐわれ、ふたたび暑い夏空となっていた。

この日は、十五日である。

三井寺の本陣から見ていると、湖の東岸に当る安土の方に、濛もう々と黄色を帯びた濃煙が揚り始めた。

「安土が旺さかんに焼けております」

哨兵の報に、諸将が廻廊に出て、秀吉以下、手をかざしていると、瀬田の山岡景隆から早馬があつて、

「——今朝来、江州土山に陣しておられた北畠殿（信長の第二子信雄）と、蒲生殿の勢が一手になって安土へ攻めよせ、城下城壘に火を放たれましたため、火は湖の風をうけて、安土一円をつつんでおります。——が、すでに安土にはさしたる敵兵もおりませぬゆえ、合戦というほどな合戦は行われていないものと存じます」

こう状況を伝えて来た。

秀吉ははるかにその状さまを想像しながら、

「理由なき放火よ。信雄様はともあれ、蒲生までが、何をあわてて」と、口のうちに、不機嫌な呟きを鳴らしていた。

しかし彼の眼はすぐ和んだ。信長が半生の血と財力をかけて築いた文化は、あらゆる意味において惜しまれはするが、秀吉にはやがて秀吉自身の力をもって、ふたたびそれ以上の文化や城廓を再現してみせる確信があった。その抱負は、このときはもう彼の肚にも充分な確信をもつて描かれていた。むしろ今日を画して過去のものに帰してゆく天意にたいして、新たな励みと感激を覚えた。

折ふしまた、山門の方から哨戒の将士が、一名の男を取り囲んでここへ連れてきた。「小栗栖の百姓、長兵衛という者が、日向守の首級を、醍醐辺の畔で見つけたと申して、ただ今、それを持参のうえ、訴えて参りました。——この儀、君前までお取り次ぎを」

中門の守将は、直ちに駈けて、ちようど縁に出て立っていた人々の下へ行つてひざまずき、そのまま秀吉の耳へ達した。

敵将の首を実検するには敵かな作法と礼をもつてするのが慣わしである。秀吉は扈從に命じて、直ちに本堂の前に床几を設けさせ、やがて左右の人々と共に着席して、光秀の首を見た。

「……………」

凝視ぎようしするのみで、秀吉は何もいわなかつた。ただ無量な感慨につつまれている姿であつた。

この折、秀吉が床几を立て、

(主君信長を討つた酬むくいを思い知つたか)

と、光秀の首級を杖で打つたなどということが、「豊鑑ほうかん」には書いてあるが、嗤わらうベき筆者の臆測というしかない。

同じ臆測をするならば、秀吉が振り上げた杖は、むしろ首級の傍らにしたり顔して控えていた訴人そじんの男に振り下ろされたろうと考えたほうが、まだ遙かに秀吉の心事に近い。

光秀の首を土中から掘り起してこれへ持つて来た訴人というのは、年頃三十がらみ、風体から見ても、酒焦さかやけのした、面構つらがまえもどことなく悪ずれている男だつた。

当人の申したてでは、小栗栖村の百姓長兵衛と称えているが、元々百姓の家に生れ、農村の事に通じている秀吉には、ひと目見て、

(これは良農ではない。どこの村にもいる駄農というやつだ。かかる者に恩賞を与えて、郷土に誇らしめるのはおもしろくない)

と考えたことであろう。

事実、この長兵衛という男は、醍醐^{だいご}辺の百姓とも、小栗栖の庄屋の息子だとも、諸書に種々伝えられているが、いずれにしても真面目な農でないことは確からしい。今もむかしも、農村にはかならず一人や二人はいるぶらぶら者——怠け者で、すれからしで、屁理窟^{へりくつ}ばかりこねて、勤勉な農をダニのように邪^{さまた}げている——いわゆる駄農^{たぐ}の類いには違いないようである。

従来^{じゆらい}の通説によると、とかく戦国期の百姓は、平常は田畑に出て働いているが、附近に戦争があると忽ち土匪^{どひか}化して、弱い落^{おちゆうど}人を襲つたり、戦死者の持物を剥^はいだりすることを稼^{かせ}ぎとしていたかの如く伝えられている。しかしこれは史家の大きな誤認だと思う。日本の百^{おひまたから}姓の郷土における悠久なすがたを、他民族の百姓と同列に視^み、或いは唯物史観に陥^{おち}ちた史家の誤^ご謬^{びゆう}にほかならぬものである。決して、過去の史家にいわれたような弊^{へいふう}風と悪質な生態が、当時の農村そのものであつたわけではない。

ただこういうことはいえるかと思う。

戦乱による「時の敗者」にとつても、悪質な闇の横行者や怠け者にも、当時の農村は全国的によい匿^{かく}れ家^がにされていたという事実である。滔^{とうとう}々とこれらの者が流れこんでいた

には違いない。だが、こういう帰郷者や外来者と、祖先以来そこに住んで、黙々と土のみに天命を託して、五穀を^{いの}漉り耕していた純然たる百姓とは、当然、區別して考えられねばならない。室町^{むろまち}以来、一戦また一戦あるごとに、^{おびただ}夥しい不純が純の中へ割りこんで来て農村の姿を^{さつぱつか}殺伐化した^{すさ}が、その荒びきった時流の底にも、古来からの農は、依然^{あらかべ}粗壁の中に貧しい燈を細々とぼして、時代の物音に^{おび}脅えながらも、本然の勤めと農の心は失われてい^なかつたことは確かである。——さればこそ時移れば、さしもの濁流も、ふたたびもとの純に澄むのであった。

「光秀の首はどこから持つて来たか」

秀吉の問いをうけると、小栗^{おぐるす}栖村の長兵衛は、待つていたように幾つも頭を下げ、百姓に似げない弁舌で答えた。

「醍醐道の藪の畔^{ほとり}へ、誰知るまいと埋めておいたやつを、後から掘り返して持つて参りましたので。はい」

「どうして、そこに埋^いけてあつたものが、すぐ分つたのだ」

「それや分るはずでございますよ。小栗栖村の大竹藪を、日向守やほか七、八騎が通るところを、こいつと見定めて、竹槍で一突きくれたのも、かく申す長兵衛でございますから

ね」

「おまえが竹槍で光秀を突いたというのか」

「へい、左様で」

「よく致したなあ」

「そりゃあ、大將様の前でござんすが、少しばかり腕にも覚えがありますから」

「百姓もし、腕にも覚えがあるとは、おまえはなかなか隅に措おけないしれ者だな」

「しれ者たあ、何でございますか」

「百姓らしくもない、喰えん奴じやと申すことだ」

「へへへ。土地の百姓どもときては、意気地なしの、腰抜けばかり揃っておりますから、たとえ、明智方の大將株が、落武者となつて通ると分つても、こいつに、竹槍をつけるな
んという度胸ツぶしのあるやつは一人だつていやしません。はばか 憚りながら、もしこの長兵衛
が、音頭おんどを取つて、野伏りどもを集めなかつたら、日向守はまだこうして、首になつては
いなかつたらうと存じます」

「仲間の野武士は多勢か」

「五十人の余も狩り集めてやった仕事なんで。へい」

「では、汝一名のてがらというわけでもないな」

「左様でございます。その五十人の奴らは、てまえが帰るのを村で首を長くして待つておりまする」

「ふム。何で待つておるのか」

「てへへへ」

と、長兵衛は、自分の頸くびすじを平手で叩きながら――

「御大将には、申し上げかねますが……その、御褒美の金の割り前をもらおうってんで……」

「褒美か」

「へい。何分、よろしく」

揉もみ手でをして、また平伏した。

秀吉は、左右に命じて、首を首桶に納めさせ、やがて云った。

「長兵衛」

「へい」

「汝は、酒好きだろう」

「すこしばかりは」

「遠慮するな。飲みたいばかりに働いたことだ。きようは存分飲んで帰れ」

と、傍らの福島市松とほか二、三名の荒武者を選んで命じた。

「この男に、酒一斗与えて、飽きるほど飲ませてつかわせ。飲み切らぬうちはそちたちの刀にかけても帰すな。飲みほしたら門前から抛り出してやれ」

「かしこまりました」

「あ。……た、大將様。御褒美のお金は」

「追つて、小栗栖村一同の村民へ施与せよいたすであらう。家臣をつかわして地頭名主へ手渡してやる。汝に持たしては、途中、一斗の酔でこぼしてしまふに違いない」

「さッ、立て。飲みに来い」

荒小姓の福島市松などは、左右から彼の襟えりがみをつかんで、面白半分に何処かへ引つ張つて行つた。

桔梗きぎょう分脈ぶんみやく

光秀の首は本能寺の焼け跡に曝さらされた。水色みずいろ桔梗ききょうの九本旗がここの暁あけに鼓譟こそうしてかわらずか半月の推移であつた。

もとより見るにまかせてあるので、市民は朝から夕べまで蝟集いしゅうした。それだけで充分このことの政治性はあつた。ひとたびは光秀の逆を道義に照らして罵ののつた者も、いまは口の裡しやうみょうに称しょう名めいを念じて歸つた。稀まれに腐屍ふしの下へ花を投げてゆく者もあつた。警固の武士もそれを見て咎とがめるようなことはしなかつた。

京都を中心とする残党の詮議せんぎなども、極めて短期間にすまされて、より大きな意味の人心転換がはかられていた。生前、光秀と親交のあつた吉田兼和よしだけんわや里村紹巴さとむらじょうはなどの召しょう喚かんされたことが、ちよつと民間の神経をとがらせたが、これも即日、

——咎めなし。

ということゝ歸かへられていた。

秀吉の軍令は簡にして明であつた。職に励め、悪事はなすな、紊みだす者は斬る——の三則に尽つきている。そしてまた光秀の場合とちがつていることは、京都に入つたからといって、すぐ地子錢じしせんの免税を布告したり、五山や公卿くけたちへ献金したりするような媚態びたいのない点だつた。いや彼はまだ正式に信長の葬おくりいをしていないのである。この大葬はただ兵力によつ

ては出来ず、また彼一名の名をもつてするわけにもゆかない。

すべてはその後でという肚であろう。殊になお中央の大火はようやく鎮しずまったものの、飛火は各州の国々に及んでいる。

柴田、佐久間、前田。また徳川、滝川、毛利、長曾我部ちようそかべ。なお信長の遺子たる北畠信雄

とか神戸信孝とか、親族たちの意向から、さらに、その間に伏在する諸武門の心態など、

これをいちいちつぶさな思考に糺ただして望見ぼうけんしていたら、到底、手の下しようもない千波

万波というほかはない。天下の相貌はまだまだ決して一いっ旦たんの狂瀾きやうらんからもとの平静に

帰ったわけではないのみか、信長逝ゆき、光秀去つて、ふたたび全土三分の大分裂を来すか、

或いは、室町中期のもつとも悪い一時代のような、同族抗争と群雄割拠さくまの状が再現するに

いたるかも知れないと思われるようなものすらある。

かかる中に、秀吉は数日三井寺からうごかなかつた。

十七日には、ここへまた、明智方の老臣齋藤内蔵助利三としみつが、捕われて引かれて来た。

秀吉は、この老虜将ろうりよしようの白髪をあわれみ、

「望みは」

と訊いてやった。

「ただ、死のみ」

という利三の答えだった。

訊問じんもんによつてわずかに彼が知り得たところによると、内蔵助利三は十三日山崎に敗れた後は子息の利光や三存みつよしとも別れ別れになり、江州ごうしゅう堅田かんだの民家にひそんでいたところを捕えられたものである。身には幾力所かの矢傷槍傷を負い、毛髪は麻のように白く、見るからに慄あわれであつた。

十八日、洛中らくちゆうを引きまわし、後、首級は栗田口あわだぐちに梟かけられた。

ここに市井の一小事件があつた。

首の紛失である。

栗田口に梟かけられた斎藤利三のそれは、本能寺から移して来た光秀の首級と並べられていたが、曝さらされたのはわずか半日、その夜、何者かに盗まれてしまった。

「明智党の仕業しわざである」

「まだ残党がいるのだ」

洛中の者は、詮議せんぎの苛烈かれつを予想して恟々きようきようとしていたが、このことについては、存外、その後さしたる余波もなかつた。

ところが、それに安心し出した頃になると、だれいうとなく、

「首を盗んだのは、画家の海北友松らしい」

という噂がたつた。

友松は当時洛北の一寺院に住んでいたが、そこを訪うた者の言によると、彼は依然たる貧乏と画三昧がさんまいのうちに慎んでおり、それについて訊ねても、自分がしたともいわなければ、自分ではないともいわない。ただ笑っているのみであつた。——ということであつた。

前々から光秀とは心交を契つてちぎいた彼ではあり、内蔵助利三とは取りわけ親密だつた友松なので、

(てつきり、彼が)

という当然な臆測が生んだ風説にはちがいないのである。けれどまた、当人がどこかそれを肯定している容子ようすであるから、察すると、案外、世間の考えが中つてあたいるかも知れない——という者もあつた。

しかし京都守護の軍から友松へたいしてべつに召喚もなく過ぎた。為に、洛の内外は、日ならずして、前にもまさる平穩に返つていた。

——これはずつと後の余談になるが、齋藤利三の末娘は、お福といつて、やがて稲葉いなば正成まさなりに嫁かした女性である。

良人の正成は、小早川秀秋こはやかわひであきに仕えていたが、関ヶ原の役にやぶれて牢浪ろうろうの果て、妻のお福は二代將軍秀忠の息竹千代の乳人めのとになつて柳營りゅうえいにあがつた。有名な老女かすがのつば春日局ねはこの女性なのである。ひと年、上洛して天顔てんがんにまで咫尺しせきするの榮すらになつた。そのおり、この春日局は、いまは亡きひとながら海北友松の遺族をたずねて、

(天正十年六月の父の忌日きじつをまつるたびに、あなた方の御先代友松どののお情けも思い出され、その御芳志は今もつて忘れておりませぬ)

と、手土産の金一封を置いて東へ歸つたということである。

これをもつて見れば、いよいよ海北友松の——笑わら而不答こたえず——の態度には、その陰にひとつの事実があつたことは確からしい。

明智氏は亡んだが、桔梗ききようの根は諸家に分脈ぶんみやくされている。そのうちにも妙たえなるものは、後に伽羅沙がらしゃとよばれた細川忠興夫人である。父光秀が叛旗をあげた日から最期にいたるまで——いやその後々までも、夫人がいかに世の批判と家庭のあいだに立つて人知れぬ苦惱をしたかは、想像に余りあるものがある。それは一篇の戦国女性史をもつてしなれば到

底語りきれないものであるから、ここではこれ以上及ばないことにしておく。

母の城ははしろ

三井寺の秀吉は、その本陣をそつくり十数隻の兵船の上に移した。馬も乗せ、金屏風きんびょうぶも乗せた。十八日のことである。目的は安土への移動だった。

陸路にも軍勢が蜿蜒えんえんと東進していた。微風きしにうごく旗幟きしを乗せて湖上を行く船列と、湖岸をすすむ陸の行軍と——両々相映じてゆくさまは壯観さうかんというもおろかであった。

が、安土はすでに焦土である。ここに到着するや、ひとりとして、慚然みぜんとしないものもなかった。

金碧こんぺきの天守閣もない。外廊の諸門も総見寺そうけんじの楼ろうしやう、廂しやうもほとんどあとかたなく焼けている。城下町はもつとひどい。野良犬あさの漁る餌えさもなかった。南蛮寺のばてれんがうつろな眼をして歩いている影が妙に目につく。

ここにあるべきはずの北畠きたはたけのぶお信雄は、蒲生賢秀がもうかたひでとともに江州ごうしゅうの土山にたてこもり、いまなお伊勢伊賀の叛乱軍と抗戦中なることも来て見てわかった。

安土の放火は、直接、信雄が指揮したのもなく、蒲生賢秀の意志でもないことが同時に判明した。一部軍隊の行為には違いないが、何か命令を穿きちがえたものか、敵側の流説に乗ぜられて、逸まったものらしく想像された。

「心ない業だ。取り返しもつかぬ。返すがえすも惜しいことを」

秀吉と同行の神戸信孝はしきりと嘆いたが、それでもこの放火が信雄の手でなされたものでないことが判明してからは、よほどその憤激もなだめられたようである。

秀吉はといえば、彼の志向はすでに江北から美濃方面へ転じている。

ここに着くとすぐに堀、中村、宮部などの諸隊に命じ、江北の山本山城へ急がせていた。明智の一将阿閉淡路守と、それに組みした京極高次一族などの逃げ籠っている小城である。

光秀の乱に呼応して起った若狭の武田元明は、丹羽長秀の佐和山の城を奪い、また、阿閉淡路守も同じ頃、秀吉の留守城を襲って長浜を占拠していた。

いくばくもなく、中央の戦況は俄然非となり、光秀も討たれたと知るや、長浜の阿閉淡路守はそこを出て、そこから約三里の地にある山本山城へ移ってしまった。もちろん京極一族と共に。

かくて猛烈な寄手の攻囲をうけると、山本山城は、脆くも一日半で陥ちてしまった。阿閉淡路守は斬られ、一子孫五郎は湖畔から船でのがれようとしたところを、里の者に妨げられた上、なぶり殺しにされてしまった。また京極高次も、坂田郡の寺内で捕われかけたが、ちようど追手の堀秀政は、以前、京極家に仕えていた関係もあつたので、その旧恩によつて辛くも難をのがれ、これは越前の柴田勝家を頼つて遠く落ちのびて行つた。

安土滞陣もわずか二日だつた。船列はふたたび湖を北した。秀吉はいよいよかつてのわが家たる長浜の城へその本軍をすすめた。

城は無事だつた。敵影もなく、すでに味方の兵も入っている。

ここへ金瓢きんぴょうの馬簾うましるしが上がると、城下の民は狂舞して、彼が船から城へ通る道すじへ溢れ出て来た。女も子供も年寄も土下座して迎えた。涙して顔をあげ得ない姿もある。歓呼して手を振るもあつた。われを忘れて踊り出す領民も見えた。

(よかつたよかつた。みな息災でうれしいぞ。お前たちもよく泳こらえた。わしもこの通り達者だぞ)

秀吉の眼はそういつている。領民の熱意にこたえるため、かれはわざと馬上で通つた。こういうときの領民は国主の慈眼を読みとることに甚だ賢さとい。語らずといえども領主の心

はよく知るのである。

が、秀吉には、重大な不安も残っていた。長浜城へ入ってからそれはなお濃いものになっていた。一刻も晏^{あんじよ}如^{じよ}としてはいられない寂しさと焦^{しよ}躁^{そう}にかられていた。

「知れたか。——母上の御安否は？」

ここの本丸に坐つてからは、出入する諸將にたいして、彼はたえずこう訊ねた。——明智軍の襲撃にあうまでは、この城中につつがなく暮していた老母や妻などの身の上がにわか案じられ出して来たのであった。

「百方、手分けして、お行方を求めさせておりますが、まだ確報もございませんぬ」

と、いまも彼の前にひとりの将が復命していた。

「領民の内には薄々知っている者がおりはせんか」

と、秀吉はいう。

「——と、思われましたが、存外、その領民にも皆目得るところがございません。御一同して、ここをお遁^{のが}れ遊ばす折には、極力、そのお行き先を秘して参られたものようです」

「なるほど。それはそうかも知れんな。領内の者にそれが洩れていたようだったら、忽ち阿閉^{あへ}淡路の手勢があとを追つて危害を加えたにちがいないからの」

秀吉はまた他の一将を迎えて、こんどはまったくべつなことを話していた。この日、佐和山城の敵もそこを放擲ほうてきして、若狭方面へ逃走したということであった。で、そこも以前の城主丹羽長秀の手に戻ったという報告をいま耳にしたのである。

そして、夜に入ってからであった。

小姓組の石田佐吉と、ほか四、五名の同輩が、何処からかあわただしく立ち帰って来た。秀吉の室まで来ないうちに、小姓溜りだまや廊下のほうで、何やら歓びあう声が沸いている様子に、心待ちに待っていた秀吉は、

「佐吉がもどったか」

と、左右にたずね、

「なぜ早くこれへ来ぬか」

と、叱りに遣やったほどだった。

石田佐吉は近郷の出生である。従つて、浅井郡や坂田郡の地理にかけては誰よりも詳しい。そこで彼はこんなときこそ知識を生かすべきだと考え、みずから望んで、主君の母堂や夫人の落ちのびた先を昼から捜しに出いたのであった。

心のふるさと

石田佐吉はやがて秀吉の前にかしこまっていた。

「ようやく、さる所で、みな様の御所在を訊きあててまいりました」

と述べる彼の復命によると、秀吉の母堂と寧子夫人などの眷族は、ここから約十余里もある山奥に潜ひそんでいるというのである。長浜から供して行った家士や侍女などもみな一つ所において、今日まで敵の目をのがれ、からくも一同は生命を保っている様子であるとも云い足した。

「佐吉」

「はい」

「そちはどこでそれを訊き出して来たか」

「寺の者から聞いてまいりました」

「寺とは」

「幼時わたくしが稚児ちごとして養われていた真言寺しんごんの三珠院さんじゆいんでございます」

「よいところへ目をつけおった。すると、母や寧子の潜んだ先も、寺の縁つづきとみゆる

な」

「仰せのとおり、浅井郡の大吉寺だいきちじという山寺の由にござりまする」

「大吉寺とは、聞かぬ名だが、詳しくは、どの辺か」

「坂田郡の七条、鳥脇とりわきなどを経て、伊吹いぶきの山裾へつきあたります。すると、北国街道が横たわっておりますが、これにならわず道を横ぎつて、なおも伊吹の西麓へ登ってまいるのです。——その辺まででも、お城からおよそ六里はございましょう」

「くわしいな、汝そちは」

「三珠院にいた時分は、あの辺をよく飛びあるいたもので、いわば童時代わらべの古戦場でございますから」

「うム、うム」

と、うなずき続けて——

「そこからまだ山奥か」

「なお六、七里、めつたに里人も通わぬ道を参ります。姉川の上流梓あずさがわ川の水は、溪たにをせき淵をなし、道に沿うておりますが、どこまで行っても水源に到りません」

「待て待て。そう聞いても呑みこめぬ。明日の道案内に従ついて来い」

「おやすいことですが、わたしよりもつとよい道案内がおります。それを迎えにお遣り遊ばしては」

「たれだ、それは」

「美濃衆の広瀬兵衛（みのしゅう ひろせひょうえ）にござります。あの辺は美濃ぎむらいの広瀬が領地の由を、三珠

院でも申しておりますが」

「いや、美濃へ使いをやっている暇はない。明日にも秀吉はそこへ参りたい。広瀬へ挨拶だけを遣つておこう」

「明日、何刻ごろお出ましになりますか」

「朝立てば、夕には、母にも妻にも会えようが」

「たといお馬でも、一日では参れませんか」

「早立ちでもだめか」

「到底——」

佐吉が首を振ると、

「では。——今からすぐ出向こう。今からなら、あすの夕には行き着けよう」

秀吉はいうとすぐ座を立ち上がった。

やもたてもない気持ではあるうが、余りといえ急である。同席の諸将はあつけに取られた顔だし、扈從こじゆうの家臣たちは、支度にあわてふためいて、その忙せわしなさは一ひとかた方では
ない。

「あとは、たのむぞ」

堀秀政などをかえりみながら、秀吉は小姓のかける陣羽織を背にうけていた。そしてなお云った。

「大津には彦右衛門をのこしてあるし、安土には神戸ものが止まっておられる。佐和山と
いい、この長浜といい、はや抑えは心配ない。——で、ちよつと母を迎えに行つて来るゆ
え、兩三日のいとまをくれい」

「行つていらつしやい」

諸将はそういうしかない。

総立ちで、城門まで見送つた。そのあいだ、人々のつらつら思うには、いったいこの羽
柴という大將はどこまで続くものだろう。背中から眺めても、いっこう見ごたえもない体
格なのに、そのどこからかういう気力や体力が湧いて出るものか——という驚嘆に似たあ
やしみであつた。

「——なんと大^{おおき}仰^{よう}な。母を迎えにまいるのは秀吉のわたくし事。……そう大兵を供して参るには及ばぬことだ」

秀吉は城門を出るとすぐ大声でどなっている。須臾^{しゆゆ}の間に勢揃^まいして待つていた六、七百の兵列をそこに見たからであつた。山崎、坂本と連戦して来て、安土でもほとんど休むいとまもなく、早暁そこを立つてこれへ来たばかりの今夜である。兵の顔はまだみな泥の如く疲れきつていたのである。秀吉はそれをも察してそういつたのかもしれない。

「供は、五十騎もあればよい。ただし小姓どもはなるべくみな来いよ」

すでに馬上へうつり、松^{たい}明^{まつ}を持つ人々が列の先に立つわずかな間を、秀吉はそう告げていた。あらかたの兵はあとに留むべしといった。

「それは危ない。五十騎では少なすぎる。この夜道——わけて伊吹の山近くにでもなれば、なおいかなる敵勢^{ひそ}が潜^{ひそ}んでおるかも知れぬに」

堀秀政も池田勝入も、口をきわめて諫^{いさ}めたが、秀吉には、その懸^け念^{ねん}はないとする確信があるものの如く、「案じるには及ばぬ」とのみで、やがて、松明の火光を先に、長浜の城門から東北方の並木道を一路遠ざかつて行つた。

宵から四更にかけて、秀吉はさして急がずも五、六里の道は抄^{はか}どつていた。石田佐吉が

さきに走つて、七尾村の三珠院を叩いたのはまだ真ッ暗な時分であつた。寺僧の驚きは一通りではあるまい——と思ひのほか、何ぞはからん、山門をひらくと、寺内は煌々こうこうと燭をてらし水を打ち、清掃いたらざる所もない。

「たれだ、わしの立ち寄ることを、先触れしたものは」

「佐吉にございまする」

「そちか」

「はい。この辺で殿の御休息あるはまちがいなしと思ひ、足早な若党ひとり先へ走らせて、五十人前の弁当と、お湯漬ととのの調えなど命じておきました」

この寺のお稚児ちごだつた佐吉が、秀吉に貰われて長浜城の小姓部屋に入ったのは、彼が十三のときだつた。

それから八年目の今日である。石田佐吉も二十一歳の若武者とはなつた。しかも事理に明るく敏びんさい才衆をこえている。秀吉も常に、

（市松も虎之助も助作も、みな武勇すぐれておるが、その中の佐吉はすこし異つておる）
と、いつもいつているほどである。

この佐吉を、親代りともいえるほど、幼時から育てた三珠院の住職は、いまなお健在だ

つたので、今日の佐吉を見て、よろこぶこと限りもなかった。

同時に、久々な城主の来訪でもあったので、寺中をあげて款待かんたいにつとめたことはいうまでもない。

けれど秀吉の気持は、唐突を知って、ほんの小憩しょうけいを求めに立ち寄つたに過ぎないのであるから、従者の弁当ととのを調べさせ、自分も湯漬の馳走になつて、一碗の茶を喫きつし終ると、

「世話になつた。いづれ沙汰するであろう」

と、直ちにそこを出発した。

この頃となつても、夜はまだ明けきつていなかった。ただ目のまえの伊吹山の線がほのかな暁紅と薄浅黄の空にはつきり浮き出して見え、耳に小禽こことりの声が聞かれて来たにすぎない。道の露はふかく、そして樹の下は暗かつた。

住持のいいつけで、山にくわしいという若僧わかしゅがふたり、わらし穿ばきで、松明のさきに立ち、

「大吉寺まで御案内申しまする」

と、伊吹の腰へ上つて行つた。その僧が指していうには、

「伊吹に連なる彼方の山は国見といい、あのへんを東へ越えると、美濃の揖斐郡いびごおりになり

ます。——またこれから奥は草野ノ庄くさのしやうといい、むかし平治の乱に源義朝みなもとのおよしともの父子が匿かくれたのもそこだと云い伝えられております」

秀吉は楽しげに見える。一步一步、母や妻に近づいていることを意識してであろう。道の嶮けわしさも身のつかれも知らない容子である。そして静かに明けて来た伊吹の西谷にししたにを行くほどに、ここはもう彼にとつて母の懐ふところかのような心地がするらしかった。

さきに石田佐吉がいったことばの通り、梓川あずさがわの溪流は、それに沿つて溯のぼつても溯のぼつても水源らしくならなかつた。却つて、行くこと数里にして豁然かつぜんとあたりは展ひらけ、山奥とも思われない広々した谷あいへ出た。

「あれが、かなくそ山です」

つき当りの巍峨ぎがたる一峰を指して、案内僧がひたいの汗を押し拭ぬぐつた頃、陽ひもちようど中天、真夏の暑さは昇りつめていた。

「まだよほどあろうか」

「この辺から東草野ですが、大吉寺までは、なお二里もございましょう。何しろひと口に草野ノ庄といつても、上草野、東草野にわかれ、東西二里、南北五里というひろい谷でございませうからな」

僧はまた先に立つて行く。道は狭まるばかりである。この辺からは騎馬では無理というので、秀吉も扈從の家臣も徒歩になったが、そのとき、何を認めえたものか、左右の者は、にわかにごよめき立って、

「敵らしいが」

と、噪ぎはじめた。

よい息子

ひとつの山陰を旋つて、次の視野へ出たときなのである。——見るとなるほど、彼方の山腹にひとかたまりの兵が屯していた。向うでも驚いたとみえる。遠くこちらの一行を知るととたんに総立ちになっていた。何か指揮するような表情を示している者だの、また幾人かの兵はわらわらと何処かへ駈け散らかってゆくらしくも見えた。

「伊吹へもだいぶ逃げこんだと聞く。その阿閉勢か京極の残兵どもであろう」

秀吉の供人たちは、あり得ることとして、直ちに、隊伍の中の銃手を前に繰り出した。すぐ打敷けと命じるのだった。すると前の方では、かの道案内の二僧が、

「敵ではありません。草野ノ庄を守っている哨兵しょうへいです。大吉寺から出ている見張りの衆ですから撃つてはいけません」

と、手を振りぬいて後の者を制しながら、一方、あなたの山腹へ向つても、出せるだけの声を張つて、何やら手真似てまねで意志を送つていた。

すると、山腹たむろに屯たむろしていた兵の影は、崖をくずれ落ちる石ころのように、一斉にそこを降りはじめていた。まもなく背に小旗を差した一将が此方へ向つて駆けて来る。近づくに従つて味方にちがいないことが確認された。味方である。長浜の留守にのこしておいた一家臣にちがいない顔を秀吉も思い出していた。

もとより山寺である。大吉寺は大吉堂ともいい、一字いちじうの堂と、破やれはてた僧房ひとむね一棟むねしかない。

平治の頃、義朝よしとも父子が匿かくれたという頃には、この山中にも、四十九院の殿舎があつたと古記はつたえているが、いまは野瀬のせとよぶ溪流に臨むその小部落をあわせてもそんな戸数はなかつた。

雨が降ると、雨がもる。風がふくと、壁うつぼりや梁うつぼりの土がこぼれる。そうした本堂に、寧子ねねは

老母に侍かいて住み、僧房のほうには、身内の幼い者や年寄や侍女たちを住まわせていた。また長浜からついて来た家臣やその郎党たちは、附近に小屋を建てたり、部落の農家に分宿したりして、ともあれ二百何人という大家族が、ここに半月以上の、きのうまで予想もしなかった必死の生活を体験していた。

六月始め、本能寺に！——とあの乱が聞えたときにはもう長浜へも明智軍の急潮を目前に見ていたのである。——何をするまもありようはない。はるか中国にある良人おととにあてて、妻として、寧子ねねが一書をしたため送ったのが、実にやつの暇であった。老母を負い、眷族けんぞくを伴い、家臣を励まし、城をすててのがれ出るにあたって、もとより持物などは顧みかえりていられなかった。老母の着換えと、良人が君公から拝領した品などを、馬の背に積ませたのがようやくであった。

この場合、誰よりも悲壮な覚悟と大きな責任を「女の道」に感じていたのは、いうまでもなく寧子である。家の留守をあずかり、良人の母に仕え、なお多くの召使を擁している身として、

(どうしたら戦陣にあるわが夫つまに、妻よ、よくやったと、欣よろこんでもらえるだろうか)——
を生命いのちにかけて念じたにちがいない。きのうまでは、良人は戦場に在り、自分たちは国内

にある、という観念でいたのが、一朝にして、そのけじめもなく、居る所いずこも戦場と化したのである。

が、これが戦国のあたりまえな相であつた。^{すがた}戦国に生活してゆく人々にとっては、たとい一時の狼狽はしても、

(夢のような)

と、おろおろするようなことはなかつた。あり得ぬことと嘆き沈んで、滅失^{めつしつ}に囚われてしまうような不覚者は侍女のなかにもいながつた。

ただ、母の身を、何処へ移しまいらせようか——それには寧子も心をいためた。一時、城は敵手にゆだねても、あの良人のことである。いつかかならず奪^{だつ}回^{かい}する。その信も固かつた。けれど万一、老母の身にひとすじの矢でも負わせたら取り返しがつかない。留守をあずかる妻として、良人にあわせる顔はない。それをのみいっばいに思った。

「ただ母様を。——母様のお身を護つて給^たも。寧子の身などかもうてくれるな。いくら惜しい物とて、財宝には心をひかれまいぞ」

寧子は、召使う女たちへも、一族の誰彼へも、こう諭^{さと}したり励ましたりして、必死に道を東へ東へ急いだのであつた。

長浜の西方一帯は湖だし、北は敵の京極や阿閉あへの与党が牽制けんせいしているし、美濃路の方面はまったく動靜が知れないし、必然、伊吹の山ふところを望んで逃げてゆくしかなかつたのである。

勝者の一族たる場合は、よくぞ武人の妻にとあらためて思うほど曠はれた幸さちにもつつまれるが、ひとたび敗者に立ったときの——わけでも居城を逐おわれて落おちゆうど人になつたときの——惨たる姿と心根とは、平常、野に働いたり、町に物を商あきなっているものには、到底、想像もできないみじめさであつた。

その日から食には飢え、野伏のふせりや敵の斥候おびやに脅おそかされ、暮れては雨露うろのしのぎにも困り、明けては血にそんだ白い足をたがいに励きまし励きまし逃げるのであつた。

ただこういう辛酸しんさんのなかにも毅然きぜんとして失われないものは、
(もし敵とらに囚とらわれたら)

と、そのときの一つの覚悟と、

(時あれば、ふたたび、敵にものみせて)

と、ひそかに誓うやがての意気であつた。不屈な女の一心だつた。平常の臙脂えんじや黒髪くろかみのうるわしさも、もしこの日にしてその芳香を心から発するのでなければ、ただ醜みにくしさをか

くす似え而非せのものと、女と女のあいだですら蔑さげすみ、卑いやしむ氣風があつた。

野瀬の部落は絶好な避難所であつた。遠く哨しょうへい兵を立たせておけば、まず敵の急襲にあわてる惧おそれはない。真夏なので、夜の具、食糧なども、何とか間に合う。

ただ佗わびしきは、余りに人里と隔絶されているため、以後の世情が皆目知れないことであつた。

(使いもはや帰りそうなもの)

寧子は西の空へ想いを走はせた。長浜を落ちる前夜、あわただしく一書をかいて中国の良人へ持たせてやった使いの消息もあれきりだつた。或いは途中で明智の手にとらわれたか、ここの匿かくれ家を探し当てないものか。朝夕を千々ちぢに思うのだった。

ところが、それより先に、山崎に合戦があつたと近頃聞えて来た。ひそかに里へ出した一家臣が三珠院で聞いて来たことである。それを耳にしたとき、寧子の血は皮膚の表にまで色になつて出た。

「……さもあろうよ。あの子のことじゃ」

これは老母の言葉であつた。さも当然としているかのようにである。とはいえ、髪もいつか真ツ白になりかけているこの母は、朝起きるから寝るまで、大吉寺の本堂にべたと坐

つたままほとんど身うごきもせぬ姿であつた。

ひたぶるに、わが子の戦捷せんしやうを念じていた。いかに世は乱れても、自分の産んだ子が大道を踏みちがえるようなことのないことだけは固く信じているものの、いまなお寧子にうわさするときは、むかしの口癖をそのまま、あの子あの子と秀吉をよんでいるこの母であつた。終日の祈念は一すじに、

(この年老いた身に代えても)

と、念じているにちがいない。——そして折々には、ほつと正面の本尊仏を仰ぎ見ていた。大吉堂のそれは立像丈余の聖観音しやうかんのんであつた。

「お母さま。何かしら近いうちに、ここへ吉報があるような気が寧子にはいたしますが、お母さまには……」

すこしの暇でもあれば、彼女も母のそばへ来て、ともに掌てをあわせていた。ここへ移つてからの彼女は一切召使の手をからず、母の食事から夜よるの具ものの上げ下ろしまでみなしていた。また間には、家中の妻子や病者を見舞つたり、とかく意気銷沈しやうちんしやすい郎党たちをも励ましてまわるなど、まったくもう一度、秀吉がまだ貧乏時代であつた頃の一主婦に立ち還かえつていた。

「ほう。そなたもそう思うか。この母もそう思うてじや。何という故は知らぬが」

「わたくしは、この聖観音さまのお顔を仰いで、ふとそんな気がしてまいりました。おとといよりは昨日。きのうよりは今日。一日ましにはつきりと、わたくしたち母子おやこへ御微笑を投げかけられてお在わすような……」

朝、母子して、そんなことを話していた日であつたのである。まことに虫の知らせというものであつたかもしれない。

日没のはやい谷陰の部落は、もう御堂の壁に暮色をたたえ始めていた。

寧子ねねは内陣の陰で、燭しょくに燧石ひうちを磨すっていたし、老母のすがたはただ一つ暮れ残つたもののように、聖観音の下にじつと祈りの姿をつづけている。

非常な迅はやさで来る蹺音あしおとがそのとき外の方に聞えた。少なくとも十名足らずの武者らしい。老母ははつとしたように振り向いた。寧子も御堂の縁へ出て立つた。

「——殿だんながこれへお出でになりますッ。間もなく殿が見えられますッ」

境内中へひびけとばかり呼ばわるほどの声だった。毎日、二里ほど先の下流まで見張りに出ている哨兵しょうへいの者たちである。みなのもめるような姿勢をして、傾いた山門を駈けこんで来たものだったが、とたんに彼方の濡縁に寧子のすがたを見たので、そこまで寄る間

も惜しい気もちで、みな口々にそこから叫んでしまったのであった。

「お供には、御家中の誰彼をひきつれ、およそ五十騎ほどで、お休みもなくこれへお急ぎ中です」

「殿をはじめ、供の衆も、みなすばらしいお元気で」

「とこうする間に、すぐお着きになりましょう。夢かようですが、夢ではありません。まさに、中国から攻めのぼられて来たわが殿です」

かかる声々は、濡縁の前を去つて、やがてまた、狭い寺中はおろか、裏の武者小屋から、部落の家々にまで伝わって行つたが、その伝わることの迅きは、たちまち大吉寺を中心に、野瀬の部落全体から、何ともいえない声が、わあツと一斉にわき揚つたのもよくわかる。

「母さま」

「……寧子よ」

老母と彼女とは、その歓声をひとつの声とも思われず、相抱いてうれし涙にむせんでいた。

老母は聖観音へ額ずいた。寧子も心からひれ伏した。はや現もなげなその姿へ、母は母らしく促した。

「寧子。いかにこの時とはいえ、あの子も、久しぶりにそなたを見るのじや。そのすがたは余りに寔れ過ぎて見えよう。いそいで髪など撫でての……」

「はい。はい」

「そして、御門前まで出て、お迎えしたがよい」

寧子はいそいそと庫裡の水屋へかくれた。髪をなで、笕の水を掌に溶いて、瞬間に薄化粧をほどこし、帯、襟もとも直してそこから藁草履を穿いた。

一族の主なる者、家士はことごとく、すでに門前に出て、年の順、身分の順に、出迎への列をととのえている。附近の木の間木の間にも、老幼の顔がいっぱいに覗いている。その多くは部落の者たちであった。何事が起るのかと眼をまろくしている様子である。

しばらくすると、また二名の武者が、先駆としてこれへ報らせて来た。——もうすぐそこへ殿を始め御一同お見えになります、というのである。寧子の前へ告げ終ると、その者たちもまた列の端に加わった。急にそこはひそまり返る。誰のひとみも一すじの道の彼方にさす影を待つていた。寧子はもう眼にあやうげな潤みをたたえ、瞼にほのかな充血を見せながら、求める人々の肩の陰に佇んでいた。

間もなく一団の人馬はこれへ着いた。汗と埃のにおいはまた、騒然たる出迎え人のどよ

めきに包まれて、大吉寺の門前は一時、馬つなぎにいななく馬の影と、相擁して無事を祝しあう人と人の影で埋まった。

秀吉もまたその一人だった。彼は、部落近くから背を借りて来た駒を、いま山門の前で降りると、それを従者にあずけ、すぐ右側の列の端に並んでいた幼い童のひと群れを見かけて、

「どうだ、山の中は。遊び場がたくさんあつてよかろう」

と、はなしかけた。そして手近な所にいた少年や女童めわらべの肩を打ちたたいた。

これらは皆、家中の者の家族だった。で、もちろん、それらの者の母親や祖母、老父なども立ち交じっていた。秀吉はその顔を一つ一つ見てあるくように歩を山門の石段の方へ運ばせながら云った。

「よし、よし。みなつつがなくこれにおるな。筑前も安心したしたぞ」

それから左方の列へ顔を向け直した。そこには家士一同が肅然しゆくぜんと頭を下げていた。

秀吉はやや声を高めて、

「一同、いま立ち帰ったぞ、留守中の難儀、察し入る。御苦労だったの」

列をそろえていた家士たちは、膝までの手を、さらに、膝の下まで下げた。

石段の上、山門のふところには、親族の老幼と、主なる家臣だけが迎えていた。秀吉は、そこでは左右へ向つて自分の健康を示す笑顔を撒まいて見せただけだった。わけて妻の寧子へは、ほんの一顧を与えたのみで、ことばもかけず山門を通つた。

けれど、そこから先の良人の姿には、たえずつつましやかな妻の影が添っていた。ぞろぞろと従つて行つた小姓たちも、また一族の誰彼も、寧子のことばによつて、みな休息につくべく去り、或いは、

「後刻、また」

と、縁の上で、礼のみを送つて、各の居るべき所へ姿をかくした。

天井の高い御堂の中に、低すぎる燭台がただ一つぽつねんと燈ともっていた。そのかたわらに繭まゆのように真白い髪の人が朽葉色くちはいろのうちかけを着て、ひそと坐っていた。いうまでもなく秀吉の母である。後にやがて子が太閤たいこうとなつたときは、大政所おおまんどころとあがめられたひとである。

「こちらにおいでか」

妻に導かれていま濡縁へ上がつて来た子の声はその陰でする。老母は音もなく立つてその姿を入口の端近くへ移した。

秀吉は藪しとみの下で、陣羽織の埃ほこりを払っていた。尼ヶ崎の陣中で剃おろした髪はまだそのまま陣頭巾じんずきんにつつんでいる。寧子は良人のうしろへ廻まわつて、そつと、

「お母さまが、板敷までお迎えに出ていらつしやいます」

と、小声で注意した。

秀吉はあわてて母の前へ寄つてひれ伏した。どうしたのか何もいうことができなくなつていた。やがてようやく洩はらしたことは、

「母上。御難儀をおかけいたしました。おゆるし下しおかれましょう」

という一語に過ぎなかつた。

老母はすこし膝を退さげた。入口まで立つて出迎えた礼を、もういちど繰り返して、わが子に手をつかえるのであつた。わが子とはいえ、この際の礼儀は、凱旋した家の主あるじを迎えるのである。こうするのが武門の家風でもあつた。つね日頃の単なる親子としてではない。けれど秀吉は、ここに無事な母の姿を見たとたんに、つい骨肉の情愛それだけになつて、老母の膝へ寄りかけたのである。しかし老母の恭きやうけん謙けんな礼儀はそれをそつと拒むかのようにして、こういうのであつた。

「お許もと様もつつがなく、まずはようお帰りなされた。……けれど、この母の難儀や無事を

問う前に、なぜ、右大臣様（信長）の不慮をお語りなさらぬか。また、憎い敵の光秀を討ったのか、まだか。……それを告げては下さらぬか」

「はい。まことに」

秀吉は思わず襟を正した。老母はかさねて、

「知りたや、如何あろうと、この老母までが、日々あこがれていたのも、お許という子の生き死にはない。右大臣家の臣、羽柴秀吉という大将のはたらき振りであつた。御主君の亡きあと、どう御始末なされたか、尼ヶ崎、山崎あたりまでは、軍を返して、お上りなされたとは聞きながらも、その後のことは、いつこうまだこの山奥までは聞えて来ぬ。……この年寄は、ただそれのみを案じておりましたのじや」

「申し遅れました」

言葉は愛もなき他人行儀に似ているが、秀吉は体じゅうの血が沸^{たぎ}り立つような嬉しさに揺すぶられた。

母の母らしい当然な愛に慰撫されるよりも、いまの老母のたしなめは、彼にとって、百倍千倍の大きな愛と、同時に、将来までの励みを与えたような気がしたのである。

子を膝にかかえ寄せ、子に数々のやさしい愛撫をすることならば、それは鳥獣の母もし

よう——けれど人の母ならでは見られない真の愛は、時にその本能にも超えた高さのものである。秀吉はその大愛に五体を打たれた。——なぜならば、彼も人の子として、実は、心のうちで、

(母からそういわれたい)

と、希^{ねが}つていたことだからである。

なぜ、子は母に、そういう希^{ねが}を抱くかといえは、いうまでもなく、戦場でも、いとまあれば、うしろ髪をひかれるのが情^{じょう}だからである。何は措^おいても、ひと目、母の無事を拝してと、万難を冒して、これへ来たのも、彼としては、決して帰って来た心ではない。——明日はまたすぐ、この母をも何ものをも捨てて、死生の中へ——と胸には期している身である。

いや、秀吉ばかりでなく、およそ大義に生き、高い生命に燃えようというものは、家ではさりげなく見せていても、みなそうした希^{ねが}いを、母にももち、妻にももち、また弟妹にも持つであろう。あとへ残してゆく弱い者を思えば思うほど、その心理は痛切である。だから、もしその弱い者たちの口から、健気^{けんげ}なひと言でも聞けば、男子たるものは、それこそそれを無限の愛と受けて、同時に、顧みなき自己の雄魂を、弥^いが上にも強め得るのであ

った。

秀吉はまだかつて、ひとに向つて、将来、大をなさんなどという壮語を弄もてあそんだことはない。亡き信長はよく彼を評して、大氣たいきもの者大氣者といったが、おのずからな大氣は辺りへ示しても、みだりな大言は放たない彼であつた。けれど、彼を生んだ母は、誰よりも彼を知っている。きょうの言葉は、まさに、子を知る親の言葉にほかならない。

(——母は知っていてくれる。成るも成らぬも、母は覚悟していて下さる)

これは子にとつて最大な強味であり恩愛でもある。秀吉は、中国以来連戦のつかれも、これから先の後顧こうこも、いちどに取り除かれた気がした。今はただ、渾身こんしんの努力を天命に託して、天意の応えこたを待つのみとする清々すがすがしさがあるだけであつた。

で、主君信長の死に会してから取つて来たここまでの経過と、これからも貫かんとする大志望を、彼はこの老いたる母にもよくわかるように、囁みくだいてつぶさに語つた。

老母は初めて涙をたれた。そしてまた、初めて、健気なことよと、子を称ほめた。

「よう短い日のうちに明智を討ち尽しなされたの。右大臣様の霊も、さすが致したと、御生前のおいづくしみも、お悔い遊ばすこともなく在おわそう。……実をいえば、この母とて、万一お許が、まだ光秀の首も見ぬのに、さきへこれへ来たのであつたら、一夜とて、ここ

へ寝かすことではないと、心できつく思うていました」

「いや、秀吉も、それをすまさぬうちは、母上に合わせる顔はないぞと、つい二、三日前までは、一念ただ戦いのほかはありませんでした」

「それがこうして、無事を見合うことができたというのも、そなたの取った道が、神仏の御旨にかのうたからである。……さ。寧子もこれへ寄ったがよい。揃うて、お礼を念じましょうぞ」

老母はそういつて、正面の聖観音へむかつて坐り直した。

そのときまで寧子は、良人と母の間よりも、もつと離れて、ただつつましく坐っていたが、老母にそういわれると、はい、と静かに立つて御堂の内陣へあるいて行った。

二つの吊燈つりとうみょう明と龕がんの内へ燈ひを入れたのである。そしてもどると、初めて良人の隣に坐った。

母子三人は姿をならべて、ほのかな明りへぬかずいた。秀吉は頭を上げて凝視したのち、ふたたび三礼をなした。聖観音の御厨子みずしの側壇には、主君信長の俗名をしるした仮の位牌いはいが仰がれたからである。

それがすむと、老母は初めて、心の重荷も降りたように、

「寧子よ」

と、やさしく呼びかけ、

「この子は、風呂好きじや、湯浴ゆあみのしたくはさせてあろうの」

「はい。おつかれを解くには、何よりはそれと思ひまして、大急ぎで今、させております
る」

「そうか。ともあれ、汗など流させたがよい。母はその間に厨くりやへ行つて、何ぞ、この子の好物でも調理させておきましょう」

老母はふたりだけを残して立つた。

「寧子ねね」

「はい」

「そなたも、このたびは、何かと心労であつたらう。が、前後の処置、誤りなく、よく母上をお護り申しあげてくれた。秀吉もそのみ案じていたが」

「武人の妻には、これくらいな難儀は、いつあるか知れぬはずのものと、日頃、覺悟しておりましたせいか、さほどとも存じませぬ」

「そうか。総じて苦難というものは、そこを乗り越えて、苦難をうしろに振り向いてみる

と、おもしろい、何とも愉快なものだ。……ということがわかったろう」

「いま、こうして、わが夫のお無事を眺めていることが、ほんとに仰つしやるとおりな心地でございまする」

「人生、その起伏がなくては、何の味もない。——夫婦の仲とて、同じようなものではないかな」

「ホホホホ。左様でございましょうか」

「中国の長陣中、安土までは帰つても、長浜の家まではつい立ち寄るいとまもなかつた。

——が、こうして久しく見ぬ妻に久し振りで会うと、わが家の古女房も、何となく目にさややく見え、そなたのつつましさまでが、花嫁の頃を思い出させる」

「ま。——」

と寧子は顔をあからめて、

「何を仰せ遊ばすかと思えば」

「いや、いや、ほんとだぞ」

秀吉は大真面目にいうのであった。

「ふたり限りで、この御堂の素筵すむしろに坐つておると、ふたりが祝言いたした清洲時代きよすの——

「あの弓之衆長屋が思い出されるではないか。そなたの羞らう容子はし、また、良人を迎える心からな容子。すべてが、その頃の楽しさに返つて来る。余りに馴れた夫婦というものは、時に二、三年ほどは別れてみるもよいものじゃ」

「それは殿方のお気持でございましょう。女房心はまた少しちがいまする」

「そうかな。……ふうん、どちらがう？」

そのとき本堂の袖部屋そでぐやに、ざわざわと人のけはいがした。睦まじくはなしこんでいた夫婦はあいだを措おいて向き直つた。見れば一族近親の老幼たちであつた。ともあれ殿様へ御挨拶をとるので、各、多少衣服を改めてこれへ押しに来ていたのだつた。

「おう。誰も達者よな。誰も無事でおつたの。よかつたよかつた」

秀吉はそれらの者一同へ、いちいちことばをかけて、息災を祝した。やがて、一浴の後、べつな室に夜食のしたくが調とうと、それらのうちの主なる者も加えて、賑やかな内輪の晩飯をたべた。

一家の者は、この主を中心あるじとして、心ゆくまで団欒だんらんの夕を過した。あすは早朝この山奥を引払つて、ふたたび敵手から奪り返した長浜城へ帰る——というので、老いたるはいうまでもなく、女子供も嬉々ききとして寝つかれないほどだつた。

「あすは早いぞ。早起きだぞよ」

子をたしなめつつ、親たちは寺域の中のお小屋へもどった。大吉寺の御堂も早目に燭を消していた。老母は、聖観音の前に臥し、秀吉夫婦は、聖観音の御背にある内陣裡の一房にやすんだ。梓川あずさがわの渓谷の音と、ほととぎすの声が、夜もすがら聞えていた。

短夜もまだ明けぬうちから身支度や馬の用意に大吉寺は騒めいていた。長浜落ちのとき何もかも捨てて来たので、帰る日にも荷物は少ない。

秀吉は、寺へは寺領を寄進し、村長むらおやへは、村一同への恩賞を下げ渡して出発した。列伍は長々とつづいて行く。母堂は急づくりの山駕やまかこへ乗せられ、秀吉夫婦が側へついていった。

白い霧の海に、旭あさひが映じている。梓川の渓谷に沿うて、道は狭くなってくる。騎馬の士は馬を降りて馬を曳いた。嶮けわしさに馬も耐えないのである。

駕かこも楽ではない。秀吉は老母の辛抱を察して、

「母上。お辛うございませう。ちとお休みなされては」

と駕の外で、しばらく休息させてから、自分の背を向けた。

「こんな難路、あと半里か一里の間です。こんどは、わたくしが背負うてさしあげましょ

う」

老母はためらわなかった。老いては子に従え——ということばのまま、すぐ両手をさしのべて、秀吉の肩にすがった。

「あ。わたくしに」

寧子も求め、小姓たちもあわてて来たが、秀吉は、頭を振り振り母を負って立った。

「十年の不孝の罪を一日で償うのじや。秀吉にさせる、秀吉にさせる」

秀吉は坂道を降り出した。——あなたの子はまだこんなに元気ですぞ——と母へ見せるように歩いた。が秀吉は母のからだの余りな軽さに、ひとり母の年齢をかぞえていた。

途中まで来ると、長浜から幕僚ばくりようの一名が、きのうからの戦況報告に来るのと出会った。長浜でも秀吉がこう早く帰って来るとは思っていなかったとみえる。

報告には、別条もなかった。

「さきに御当家から諸家へ向つて、明智征伐の事終ると——疾く御通牒ごつうちようのあつたためか、徳川殿の軍は、昨日、鳴海なるみから浜松へ引つ返されたとのことです。一方、近江境まで来ていた柴田軍も、これまた、大事すでに去ると、茫然ぼうぜん、進軍を見合わせておる様子です」

秀吉は黙笑のうちにつぶやいた。

「徳川どのも、この度はすこし慌あわて気味きみだったとみえる。間接ではあるが、この秀吉のために、光秀を牽けん制せいしてその兵力を分散せしめる役をしてくれたような結果になった。いま、むなしく引つ返してゆく三河武士どもの無念顔が見ゆるようだ」

かくて、彼は、母を長浜へ安んじ終ると、翌二十五日、また直ちに、美濃へ進発していった。

一時、美濃も動揺しかけたが、彼が征ゆくや、即日そこも平定を見た。彼は、故信長もいた旧山河、稲葉山の城を信孝に献じて、まず旧主家への誠忠を示し、つづいて、同月二十七日に開かれる予定となった清洲会議きよすの当日を悠々ゆうゆう、一睡いっすいのあとに待っていた。

柴田勝家しばたかついえ

彼はことし五十三歳の武将としては千軍万馬の往来を積み、人間としても、世路せいろの紆うよ余曲折よくせつをなめ尽して来ている。加うるに門地えつれき閱歴えつれき、並びにその麾下きかに持つところの實力りきといい、頑健な体格といい、この者こそは、時雲に選ばれた随一の男だと観みるに誰も不審ふしんとはいうまい。彼自身ももとより深くそう任じている。——この六月四日、越えつちゆう中魚ちゆうう

崎おぎさきの陣にあつて、本能寺の変を知ったとき、とたんに感じたこともそれであつた。

(わしの動きは重大だ、ここぞ、万全を期さねばならぬ) ——と。

為に、彼の行動は手間どつた。その自重からである。——しかしまた、心は疾風のごとく、現地の京都へ急いでもいた。

彼とは、織田随一の出頭人、北陸の探題たんだい、柴田修理亮勝家のことである。彼はいまや、畢生ひっせいの智と力と、そして、のるかそるかの一擲いつてきを賭けて——越中魚崎での対上杉軍との戦場を捨て——急遽きゆうきよ、上洛の途中にあつた。

急遽とはいへ、越中を離れるにも数日を要し、居城の越前北ノ庄きたしやうでも幾日かを費やした。——が彼としては、決してこれを遅いとはしていない。ただ勝家ほどの者が、この大事に、ひとたび動くとなると、いわゆる不敗の万全を期すために、当然な自重が当然な時間を必要とし、その速度から時が差引かれていたに過ぎない。

越中で対陣中の上杉景勝かげかつの兵にたいしては、麾下きかの佐々成政さつさと前田利家の二軍をのこし、北ノ庄にも部下を留め、勝家としては実に、超速度の転進とは見えたが、その主隊が、越前と近江の境、柳ヶ瀬やなせを越ゆる頃、日はすでに十五日となつていた。そして主將勝家に遅れて、北ノ庄や越中方面からなお追いついて来る後続部隊と合し、全軍が峠とうげで馬をやす

めていたのは、もう行くてに望まれ出した江北一帯に夏雲高い、翌十六日の午頃ひるであった。十六日といえ、彼が信長の死を知った四日の日から数えると、十二日間を費やして来たことになる。何ぞ知らん、中国で毛利と対していた秀吉は、京都の飛報を入手した点では、勝家より一日程早かったにちがいないが、四日には毛利と和議の誓紙を交わし、五日そこを発し、七日姫路着、九日には尼ヶ崎へ向い、そして十三日には山崎の一戦に光秀を討ち、今頃はもう洛中近畿きんきにわたる残兵の掃討そうとうから、戦後の布令まで揭示し終っていた時分であつたのだ。

越中から京都への道と、備中高松からの道とでは、多少道路の峻げんや距離の差に長短はあるにしても、秀吉が対していた局面と、勝家が向つていた戦局とでは、比較にならない難易があつた。勝家の立場のほうはずつと有利であつたことはいうまでもない。全面的転進を計るにも、戦場から離脱するにも、秀吉の場合よりは遙かに変じやすい事情にあつたものを——なぜこう手間どつて来たろうか。——要するに勝家の「自重万全」の觀念が、この貴重なる「時」を代価としてあたら費つひやされて来たものというしかない。

かたがた、余りに彼が百戦の老巧だけに、その自信と体験が、いよいよ思慮分別の殻を厚くし、今次の如き天下一変の大転機に當つては、却つてそれが疾風の行動さまたの邪よこしまげとなつ

でも、常套的じょうとうてきな作戦変更という形式からついに一步も飛躍し切れなかったことの一因といえよう。

「やすめ。馬に水飼え」

「そのあいだに、全員は腰兵糧を解け。ただし、村口の哨戒しょうかいに当たっている隊は、交代で休息するように」

「また南条からこれまでのあいだに、途中から御陣列に加わつた後入りあといの組は、さつそく到着を認めてしたた、その人員名簿を、ここの出立までに、本隊の祐筆ゆうひつまで差出しておくように」

柳ヶ瀬山中の一村は、いま人馬で埋められていた。

ここから西すれば京都方面へ。東すれば余吾よごの湖うみを経て、江州長浜街道へつづく。

全軍が駐とどまると、勝家の主隊から命をうけ立ち別れた部将たちが、声を張って、前後の部隊にそれぞれ令を伝えていた。

次から次、次から次へ、令は令を伝えて忽ち全軍に届いたように思われたが、なお未だ北の方の登りを、蟻のごとく陸続りくぞくと、これへ向つて行軍中の後続隊もあるらしく、前隊との聯絡れんらくをとるための法螺貝ほらがいが遠く夏山のはるか下の方に聞えているので、ここでもた

えず法螺貝をもつてそれに答えていた。

この辺一帯の山地を総称して柳ヶ瀬といっているが、くわしくいえば近江伊香郡片岡村。そして今、大将柴田勝家が馬をとどめた所は、椿坂つばきざかのほとりで、小さい神社の境内だった。

勝家は非常な暑がりやであるらしい。わけてきょうの山道と炎暑はこたえたものようである。木蔭に床しょうぎ几しつらを設えさせると、そこらの木から木へ幕を掲げさせ、その中で行儀悪く具足の緒おを解いていた。そして養子の権六勝敏かつとしへ背を向けて、

「権六、拭いておくりやれ」

と、鎧よろいをゆるめて、頸くびから背なかへ手を入れさせて、汗をふかせた。

二人の小姓は、大扇を持つて、勝家の腋わきの下を、左右から煽あおぎぬくのだった。汗が乾きかけると、勝家は身を痒かゆがって、

「権六、もつときつくこすれ、きつく」

と、もどかしがった。

養子の権六は、まだ十六歳である。養父のそばにあつて、行軍中も親孝行の体ていがいじらしく見えた。

勝家の皮膚には、汗腫あせもに似たものがいつぱいできていた。勝家にかぎらず、皮革と金属で包まれた夏の軍士の皮膚には、具足病とでもいうべき皮膚病が非常に多いのであるが、勝家はそれが殊にひどかった。

こう夏弱くなつたのは、天正七年からここ三年越し、ほとんど身を北国の任地において、北陸経営の任にあたり、居住も多く北ノ庄の城廓で過していたため——と彼はよく自語しているが、実は老いていよいよ強壯な、胆汁質たんじゆうしつともいえるような体質からのものであることは否いなまれそうもない。今権六がいわれるまま強くこすっている所を見ても、すぐ毛穴から脂肪しぼうのような赤い血がふき出る程であつた。

「大殿。ただ今、神官や村長むらおさどもが、御門出おんかどでの祝いと、この山の溪流で漁とれた串魚くしぎやら餅など捧げ持つて見えましたか」

幕の裾から武者のひとりが告げると、勝家はあわてて、もうよいと権六の手を退のけ、具足を纏まとい直していたが、傍らの佐久間玄蕃允盛政げんぱのじようもりまさをかえりみて、

「お汝こと、村人どもの挨拶をうけてこい」

と、いいつけた。

玄蕃げんぱが立ちかけると、玄蕃と並んでいた毛受勝助家照めんじゆしやうすけいえてるが、その足もとを遮さへぎるよう

に、

「いや、大殿」

と手をつかえて、勝家の大きな体を仰いだ。そして、

「村人どもの素朴な志、寸時なりと、大殿御自身、会えしやく積をお与え遊ばしては戴けますま

いか」

と、わが事のように願った。

「玄蕃、立たんでもよい」

勝家は、毛受勝助の乞いを容れて、自身、そこで神官村人を引見して、祝いをうけた。

またすぐその後で、幕僚たちと共に、献物の串魚なども披ひらいて兵糧をつかい始めたが、

毛受勝助には、口もきかず、眼まなざしも向けなかった。

勝助の諫言かんげんは、もつともなことだった。勝家も、それが領うなずけないほどの愚将ではない。

しかし、二十五歳の若い一部将からそんな注意をうけたということが、鯉きもの胆でも噛みつ

ぶしたように、勝家の内省の中にいつまでも苦いものが消しきれないでいるらしいのであ

る。

ここにはなお、勝助の弟、勝兵衛もいた。兄が二十五、弟が二十一。勝家としては、柴

田家にとつては功勞のある毛受茂左衛門の息子たちなので、左右において重用もし目にもかけていたが、弟の勝兵衛の方はともかく、兄の勝助家照の方はどうも余り好きでなかつた。——というのは、時々、今のような直言をするからである。

鬼柴田とか、瓶かめわり破柴田とか、彼自身の上に、若い頃からの剛勇の誉れが高かつたせい
か、その剛胆無双をもつてみずからもゆるす風が常々の起居にもあつて、ともかく勝家の
日常には、粗暴きよぼうというか、倨傲きよぼうというか、不行儀をもつてむしろ矜ほこるようなところがあ
つた。慎みという念が乏しく、僻地へきちの陣中でも食いたいと思ふときは「食いたい」といい、
飲みたいときには「飲みたい」といい、痒かゆいときには「痒いから搔かけ」と、誰にでもその
皮膚病をこすらせる如くにである。

（大殿はまことに飾り気がなくてよい。今日のような御大身になられても、御若年の当時
とお変りなく、われらを窮屈きうくつがらせぬようにお扱あげ下さる）

そう解して、主人の一面を、ひどく磊落らいらくな、またその人物の大きな所以ゆえんであるとして、
称ほめちぎる家臣もあるが、毛受勝助などは、それを阿諛あゆの言として、強しいても反対な苦言
を呈している方だつた。

越中の境に長陣の折、そのときも何か勝助として感じていたことがあつたのであろうが、

勝家から徒然つれづれに読む書があつたら差し出せといわれたのを機しおに、三略の一部の紙中を折つて、すぐ目につくようにして出した。

後で勝家が繰くり展ひろげて見るとその一章にこういう文があつた。

軍井未ダ達セス、将渴カクヲ曰ハズ。軍幕未ダ弁ベンセス、将倦ウムヲ曰ハズ、軍竈未ダ炊ガズ、将飢エヲ曰ハズ、冬、裘キウヲ暖ニセス、夏、扇センヲ採ラズ、雨ニ蓋ガイヲ張ラズ。是ヲ、将ノ礼トイフ。

この時も勝家は、二、三日不機嫌な色をなしていた。しかし部下統率上のこれくらいな常識は充分わかりぬいている大将なので、為に、勝助を退けるなどという暗愚なまねは決してしない。ただ自分の持つている胆汁質な欲望と粗野な本質にたいし、彼自身としては、せつかく北陸探題の総大将たる威厳とにらみあわせて、極めて不調和なく、その矜持きやうぢを保っているつもりなのへ、他の意志をもつて水を割られると、甚だその節度が持ち難くなるらしかった。従つて、一時は慎みもするが、すぐ以前の鬼柴田、乃至ないし、瓶破柴田かめわりに立返つてしまうのであつた。

きょうの不興にも、きょうの事ばかりでなく、三略の文句がまた彼の頭に追加されていたかもしれない。何しろ、食事の席はあまり賑わなかつた。ところへ折も折、秀吉からの

早打がこれへ来合わせて、さすがの瓶破柴田の胆きもをも潰つぶすような報告を彼に齎もたらした。使者は二人であつた。ひとりには秀吉の家臣、ひとりには神戸かんべの信孝のぶたかの臣。

各、主人の一書を持ち、二通を併あわせて、同時に勝家の前に呈した。

二通とも、大津三井寺に在陣中の秀吉、信孝の手で認めしたたられてあり、日附も同じ十四日とあつた。

(——この日、逆将明智光秀の首級を検し、亡君信長公の弔とむらい合戦、ここにおいて、首尾よく遂げ果し終おわんぬ)

と、秀吉の方には山崎以来の戦況が概略認めてある。そしてなお、

(——この由、在北国の織田遺臣一統へ、さそくに御披露ありたく、尊台まであらましを急達しておく、事あらためていうまでもなく、今次の変は、御同様悲歎にたえぬことながら、故主御さいこの日より十一日を出でぬうちに、逆将の首級をあげ、賊徒一兵もあまさず掃滅し得たことは、身の功を誇るにはなけれど、いささか泉下せんかの尊霊をお慰め参らせたいものと信ずる。この儀、貴公におかれても、まず不慮中の歓びとして、同慶給わるものと思う)

というような文章であつた。

秀吉が書中でいつているとおり、大いに歎ぶべきことにちがいはなかったが、勝家にはどうしても、歎びとすることができなかつた。

むしろ、反対なものが、まだ文面から眼を離さないうちに、彼の満面にみなぎっていた。しかし返書にはもちろん祝着この上もなしと書いた。そして自軍もこの柳ヶ瀬まで駈つけて来たことを特に強調しておいた。

使者を帰すと、彼は、その使者の口から聞いた情報や書翰によって知った程度では、到底、次の行動にかかり得ないもののように、水野助三、鷲見源次郎、近藤無一などという健脚な若者をすぐつて、大津方面から京都あたりまで、実状の探索に放つた。そして、爾後の全貌が明確にわかるまでは、ここの椿坂に宿営するほかはないと肚をきめたものようである。

「まさか？ ……しかし、虚説であろうはずもなし？」

この日、勝家は、さきに信長の悲報をうけた時以上の驚きを喫したような容子ようすだった。

「すでに光秀の首級をあげたり」という敵たる報告に接してもなお頭のどこかで「まさか？」と疑惑する常識を一掃しきれなかつた。——もし自分よりも先に光秀の軍へ向つてとむら弔い合戦の先陣をつける者があつても、それは神戸信孝か丹羽長秀か乃至、堺に滞在中と聞

いていた徳川家康などを加えた近畿合体の織田遺臣軍であろうと見越している程度だった。そしてそのいずれに形勢がうごいても、勝敗は到底一朝一夕のものでなく、織田家において、自分以上の上席にある者のない自分がそこに臨めば、当然、明智討伐の総大将として、われを仰ぎ迎えずにもいられまいと充分思いこんで来たものであった。

そういう予見のあいだに、秀吉という者の存在が皆無ではなかった。秀吉が見たとおりつまらない男だなどとは決して思っていない勝家でもあった。むしろかなり秀吉の底を知っている者といつてよい。秀吉の一将校時代からずいぶん意地悪くその擡頭たいとうを邪魔したこともあるからである。踏んでも踏んでも拉げない御小人の藤吉郎頃から、近年にいたつては、重臣の自分らと肩をならべ出して来た彼の器量にたいし、白眼はくがん、常にゆるがせには視みていなかったのだ。——しかし、それにしても、どうして彼が、毛利軍を措おいて、中国から一転できたか、そんな早業はやわざができたか、勝家の常識では、ほとんど、奇蹟を聞くような気がしたのである。

宿営地の椿坂は翌日へかけて、本格的に警備が強化された。

往來は遮断しゃだんされ、京方面から来る旅人たちは、哨兵しょうへいに留められて、悉く一応の訊問をうけた。

蒐め得た情報は、すぐ本陣の幕舎へ、部将から伝えに行つた。それらの巷ちまたの説を綜合してみても、明智軍の全滅は疑う余地もなく、坂本城も陥ちたこと確實である。なお昨日今日あたりは、安土方面に炎々と黒煙くろけむりが望まれる——といっている旅人もあり、羽柴筑前守殿は、一部の兵をひきいて、はや長浜へ向われたと機微きびを告げる者もあつた。

一夜明けても、勝家の心は、依然として穏やかでない。「われは何をなすべきか」の問題が容易に決定しないからである。辱はじや体面を考えると、限りなく不愉快になつた。北陸の軍馬をすぐつてここまで臨みながら、拱手きやうしゆして、秀吉の大活躍を眺めているごときは、真に、彼の耐えうることはない。

それにしても、「この勝家は何をなすべきや？」がすぐ頭にのぼってくるのだつた。織田家の大老たり、首脳部の首席にある者の当然な任は何よりも明智討伐にあつたのだが、そのことがすでに秀吉の手で終つた今日では、何が最大な急務か、また、秀吉の上うわ手に臨みうる策か。——苦慮はそこなのである。

いつの間にか、彼の頭は全面的に、秀吉なる対象に占められていた。——しかも対敵感情に近い憎悪をもってそれが強く思考を左右してくる。古參の股肱ここうを寄せて、昨夜深更まで凝議ぎやうぎしていたのもそれだつた。その結果、きようはこの帷幕いばくから急使きゅうし或いは密使として

立つ者が八方へ急いでいた。国元の北ノ庄へも、越中魚崎の味方へも。

また遠くは、上州三国の嶮けんをこえて、越後春日山へ討ち入り、上杉勢の本拠をつくべく、すでに呼応の聯絡れんらくをとつていた滝川一益かずますきか麾下の軍隊へも。同時に滝川一益個人へ宛ても、べつに懇ねんじろな私書を送つた。

特に神戸信孝にたいしては、きのう帰つた使者に特に持たせてやった返書に追いかけて、さらにあらためてまた一書を認しためた。使いの人物にも老臣の宿屋やどや七左衛門をえらび、ほかに心の利く家臣二名を添えて立たせ、何か重大な内意を含ませてやったようである。

以上のほか、祐筆二人が、勝家のことばをうけて、半日書き通していた書状は二十余通の多きにのぼつた。要旨は、七月一日を期し、清洲きよすに会同、主家の継嗣けいしのこと、明智の旧領処分の問題など、当面の重大懸案を議せん——というのであつた。

勝家は、この会議の発唱者として、いささか宿老の体面をとりもどそうとした。また、自分を措おいて、この重大懸案は一步も解決に入り得ないことをも、充分承知していた。それを「鍵」として、彼は当初の方角を一転、尾張の清洲へと向つた。

途上、聞くところによれば、また追々に帰つて来た水野助三や近藤無一などの報告に徴しても、彼の廻かいじょう状が届く前に、織田遺臣のあらかたは、期せずしてみな清洲へ向つて

いることがわかった。そこには、信長の嫡子^{ちやくし}信忠の遺子三法師丸^{ぼうしまる}がいる関係上、自然、安土以後の織田家の中心がそこに移されたかのような観をなしていたためであるが、勝家には、そのこともまた、何か逸早く、秀吉が僭越^{せんえつ}な音頭^{おんど}を取って事態をうごかしているように邪推^{じゃすい}された。

おりづる
折鶴

清洲城はここ毎日、登城の列、下城の人馬で、凡^{ただ}ならぬ光景を見せていた。

かつては信長が起業の地であったここが、きようは織田家の跡始末を議する会議地と目されている。

が表面、ここに集まった遺臣たちは、

(三法師君の御機嫌を奉伺^{ほうし}するため)

と称して、お互いが、柴田勝家の飛状に接しているともいわないし、また秀吉の意によつて来たということも表示していない。

しかし暗黙裡^{あんもくり}に、やがて近く城中に大評議がひらかれるという予定は、誰にもわかつ

ていた。議題の内容も周知であった。ただ日取や時刻などの公的な通状がまだ達しられていないにすぎない。——で、三法師君への伺候をすませても、諸侯中、帰国する者としてない。各 多くの軍兵を擁し、城下の宿所に待機していた。

真夏の暑気に加えて、狭い城下町に、何倍もの人口が一時に入ったので、その混雑や喧騒はひととおりでない。厩の馬が町中へあばれ出したとか、御小人同士の喧嘩沙汰やら、頻々たる小火騒ぎやら、無聊を感じるひまもない。

月の末近くには、神戸信孝、北畠信雄の一門もそろい、以下、柴田勝家、羽柴秀吉、丹羽長秀、細川藤孝、池田信輝、筒井順慶、蒲生氏郷、蜂屋頼隆など、あらかた到着していた。

ひとり滝川一益が、まだ見えていない。それについて、

「信長公御在世中は、一にも滝川二にも滝川と、御重用をうけて、関東管領の重職をもさずけられておりながら、今次の凶変に、こう馳せつけに遅るるとは何事だ。さてもぶざまな漢よな」

と、巷の悪評は、かなり露骨であった。

「自体、あの仁は、経略家肌で、忠義一徹ではない。このたびもそのために、すぐ足が立

てなかつたものである」

などと評して憚らぬ者もある。

町中の酒亭などでも殊さら聞えよがしに、談じている仲間もあつた。

「一益殿の取柄といえは、新しい武器に精を入れてよく用いるぐらいなところじやろ。だから射術には明るく、滝川勢といえは、鉄砲撃ちはみな巧者じや。その点を、信長公にも買われていたのじやろうが、なんの戦争はからツ下手だ。若いうちは常に先鋒隊に置かれ、相当、勇名を鳴らしたが、それも当時の織田軍全体に破竹の勢いがあつたからで、何も彼が秀でていたわけじやない」

「そうかもしれない。こんどのような場合に、立ち際の悪いところを見ると」

「立ち際のみか、頭も悪い。上州厩橋という遠方ゆえ、手間どつたのは仕方もないが、途中、北条勢と勝負のない戦いなどして、神流川ではさんざんに敗北し、やつこのことで、居城の伊勢長嶋へもどつて来たなどは、気のどくといおうか、近頃の笑いぐさといつてよい」

公然な非難である。そのついでに、明智討伐に出遅れた柴田勝家にたいする非難もちらちら沙汰されていた。当然、これが滞在中の諸家の耳にはいらぬはずはない。羽柴家の

家士もすぐこれを秀吉の耳にいった。すると秀吉は顔をくずして頷いた。

「そうか。……もうそろそろやり出しておるか。柴田をも難じておるので、柴田から出た流説とは誰も思うまいが、それは皆、勝家がさせておる反間はんかん苦肉くにくと観てまちがいあるまい。大評議前の謀略戦じやよ。小細工はやらせておけ。いずれ滝川は柴田に抱き込まれる者、それでよいのだ」

信長亡きあとの、織田王国の縮図が、ここ数日の清洲に見られていた。

やがての大評議を前にして、その帰結を、各の将来に予想し、おたがいの肚はらをさぐりあっているという形だった。そしてその間に、当然な黙契もつけいやら、反目やら、また流説を用い、誘惑を講じ、抱きこみ、切崩しなど、あらゆる謀略が行われつつあることも蔽おほうべくもない。

殊に、柴田勝家と神戸信孝との往来は、目につくものがあつた。

一方は、宿老の上席、一方は故信長の三男。こう二者の公事を超えた親密ぶりは、時人の目につかざるを得ない。

「修理どの（勝家）には、御二男の信雄様を措いても、信孝様を、次のお世嗣よつぎに立てんの下した心こころと思わるる。はて、一ひと波はら瀾はまぬがれまいぞ」

誰も、直感した。

けれど、その信孝擁立ようりつの競争者は、誰もが、信雄であると信じていた。

信長の跡目は当然、信長に殉じて、二条城で戦死した嫡男信忠の次弟たる信雄か信孝にゆくであろうという見解には、何人も疑う余地のないこととしていたが、その二人のうちの、いずれが立つか、また、支持すべきかは、各迷うところであった。

信雄、信孝。——共に永禄元年正月生れの今年二十五歳だった。同年にして兄弟というのもおかしなわけだが、この時代の上流家庭にはままあるというよりは普通のこととされていた母系のちがう兄弟なのである。その上、信雄が兄、信孝が弟となっているもの、本当の生誕月日からいうと、弟の信孝の方が、二十日も先に生れていた。故に当然、彼が兄であつていいはずなのに、信孝の母の生駒氏が賤しい家系の女子であつたせい、出産の届け出を怠つていたため、信長の第三子と定められ、遅く生れた信雄の方が、第二子にすえられて来たものであつた。

従つて、この兄弟は、兄弟とはいへ、骨肉の真情はうすかつた。信雄は陰性であり、消極的な性情だったが、信孝に対してのみは、常に反撥はんぱつを起すような感情をもつていた。従つて、殊さらにでも、この弟を下風に見て、兄たるの上座をかりそめにも冒おかさせなかつ

た。

信長の後継者として、公平にこの二者をくらべてみるときは、誰の目にも、第三子の信孝のほうに多くの資質が認められた。戦陣に出しても、彼は、信雄よりもはるかに大將らしくもあるし、平常の言動にも覇氣はきを示し、何よりはまた、信雄のようにひっこみ思案でない。

故に、父信長、長兄信忠の死に会したこんどの場合でも、山崎へ出て来て秀吉の陣に君臨して以来、とみにその覇氣をあらわし、はやくも織田の相続者を以てみずから任じているふうが歴々と最近の言動にもあらわれて来ている。その包蔵をしめす顕著な一証としては、山崎の合戦後は、事ごとに、秀吉をいみ嫌い始めているのもおよその想像はつく。

明智勢の襲撃にあわてて、自軍の手で安土の大城へ火をかけた信雄にたいしては、「賞罰をあきらかにするなれば、彼にも責任を問わねばならぬ」

と、いつたり、また、

「信雄は、ばか者だ」

と放言したこともあるという。ところが、そういう陰での言葉も、誰が伝えるともなく、いつか信雄の耳にも入るような空気が今の清洲には濃厚だった。目に見えない謀略の綱目

が、人間の凡非凡を嗅ぎわけている状態と云つてよい。

はじめ会議の開催は、月の内の二十七日と予想されていたが、滝川一益などの来着が遅れ、その後また、一日延びて、ようやく、七月一日の夕べ、在清洲の総大名衆へ、ふれじよ触ふれがまわつた。

——明日、辰タツ之下刻、総登城候へ、御城ニ於テ、各 申シ談ジ、天下人ヲ相定ムベク候也

というのである。

大評定 ふれがしら触頭ふれがしらは、いうまでもなく柴田修理勝家。

一益が到着後も、なお何という理由もなく、一、二日のびていたことや、諸般のさしずなども、すべて彼の一存によるものらしく思われた。もとよりそれに対する不平の声などはあり得ない。なぜなれば、彼が、神戸三七信孝を立て、すでにその信孝と事前けったくに結託けったくしていることは、隠密の沙汰ではなく、公然、知れわたっていたからである。

信孝は柴田を威とし、柴田は信孝をかさとして、圧倒的に会議を押しきろうとする氣勢が表面化され出した。しかも大多数はそれに傾いているかのような形勢の下に大評定はひらかれた。

当日の清洲城は、数ある間ごと間ごとが、思いきってみな開け放たれていた。この日も、照りつづいて、暑さと人いきれに堪えないためもあつたらうが、見方によつては、物蔭での個人的な談合はゆるさぬと、暗に制御せいぎよしているようにも取れる。武者溜りだまの詰人を始め、要所の杉戸杉戸にいる控人も、悉く柴田の家来といつてよいほど多くの外臣が入つて、いることもただの手助てつたいとは見えなかつた。

辰たつの下刻には、すべてそろい、巳みの刻こくには、総大名衆すべて、大広間に着席していた。席順から見ると、

柴田、羽柴、丹羽にわ、滝川、と左右両座にわかれて向いあい、以下、池田勝入しょうにゅう、細川藤孝、筒井順慶、蒲生氏郷がもうじさと、蜂屋頼隆など居流れていた。もちろん、正面の上座は、一門の神戸三七信孝と、北畠信雄の二人が、席をわかつていたが、なお一方の上うわぶすま襖へ寄つて、もうひとりの幼い君が、傳人もりの長谷川丹波守に抱かれていた。

これが三法師君さんぼうしぎみである。

うしろには、この遺孤いこの父信忠が二条城で戦死した折、信忠の遺命をうけて、敵中からこれへ遁れ落ちた来たという——遺臣前田玄以げんいがつつましげに控えていた。ひとり生きてこれに在ることは面目ないというような彼の容子を衆目は見ていた。

三法師は、何といつても、まだ三ツなので、傳人の長谷川丹波守が膝へのせて正面へ向けていても、決してじつとしていなかった。手をのぼして、傳人の頤を押しやったり、膝の上に立ったりしてしまふ。

当惑顔な丹波守を扶けて、玄以がうしろから何か小声であやしていると、肩越しに、その玄以の耳をひっぱった。玄以も弱つて、意にまかせていると、さらに、うしろに身をかがめていた乳人が、そつと三法師の手へ色紙で折つた折鶴を持たせて、玄以の耳を救った。

「……………」

列座の諸将の眸はみなこのあどけない遺孤に注がれていた。微笑をふくむもあり、暗涙をたたえるもあつた。ひとり勝家は大広間いっばいに眼を放つて、「困つたもの」とつぶやきたいような渋面をつくつていた。

きようの清洲会議の胆煎人として、また議長として、いちばん威儀儼然として、先ほどこから劈頭第一の口をきろうとしているのに、人々のひとみが徒らに散っているため、その唇が、発言の機を逸して、むなしくあることが堪らない不快となつていゝらしかつた。

勝家はついに口をきり出した。

「筑州殿」

秀吉をさしてである。

秀吉は、向う側の席から正視を向けた。勝家は強^しいてその顔を笑い作りながら、

「どうであろう」

と、至極、談合的にはなしかけた。

「——何といつても、まだあの通りたあいな御幼少じや。傳^{もり}人の膝に置かせて、お苦し
い目におあわせ致さんでも、よくはあるまいかの」

「さようにも」

秀吉の答えは、どつちともつかないものだった。——折れて出ればそう出るかと、すぐ
対立感をとがり立てたものだろう。勝家の全身にはすぐ威厳を交^まぜた反感が硬直し出した。
劈^{へきとつ}頭早くも甚だおもしろからぬ顔つきが露骨だった。

「……が喃^{のう}、筑州殿。三法師君の御出座を求めたのは御辺^{ごへん}とはちがうか。——修理は、い
つこうに知らんが」

「されば、筑前がおすすめ参らせたには違いありません。ぜひにと」

「ぜひにと」

勝家は大紋の衣服の皺^{しわ}を大きく揺りうごかした。午^{ひる}まえなのでまだ暑気もさしてではな

いが、彼には式服の厚着と例の皮膚の腫物できものとが人知れぬ苦痛らしかった。こういうことは些細に似ているが、時によると重大な意志表示にもふと語気の上へ大きな関りかかわをもたないとは限らない。殊に、柳ヶ瀬を越えてから後は、彼が秀吉を見る気もちは、まったく一変していた。従来とて彼を後輩視して来た先入観が根本をなしているのです、決して折合いのよい間からではなかったが、山崎の合戦を境として、逐日ちくじつ、織田遺業の勢力圏けんに、秀吉なる名が、何とはなく、澎湃ほうはいたる威勢をもつて聞え出して来たことは、勝家として、到底、晏如あんじよとしてに忍びない現象であるのだ。

そればかりか、秀吉が先君の弔合戦とむらいを果したというそのことの反動として、

(北ノ庄殿(勝家をいう)には、時遅れて、山崎にも参り合わず、さだめし手持ちぶさたなお心地であろうに) などという不面目も酬むくわれている。近頃、何かにつけて、双方を対比する風潮が一般に表面化して来たことは何を意味するか。勝家にすればこれも苦々にががしい沙汰といわねばならぬ。筑前と自身とを、対等に視みられることさえ、不愉快の上もないのである。いわんやその者のたまたまあげた一殊勲いちしゅんによって、数十年來の織田家における元老的地位を閑却かんきやくされて堪るかと思う。むかし清洲のお濠ほり浚せういや馬糞掃除をしたいた御小人あがりの匹夫ひつぷが、今日、衣冠いかんして得々たるかの如き前に、何で柴田修理勝家

ともあろう者が下風に置かれていようぞ——そう思うのであった。この日、彼の胸中は張りつめた強弓のように、そういう感情やら万策の懸引かけひきに緊めしられていたのである。

「きようの評定ひようじようを、筑州殿には、何とお考えかしらぬが、およそ列座の諸侯も、このような大事を議す場所に臨むは、織田家あつて初めてのことに、みな臍ほぞを固めておられうに。……何じや、三歳の幼君を、強しいて、ぜひとまでこれに仰いで」

勝家はすけすけ云い出した。彼の言動は、ひとり秀吉にばかりでなく、辺りの諸大名へ共感を求めているという風だった。そして秀吉からいつこう冴さえた返答も聞かれないうと見ると、なお同様な語気をかさねて、

「追々、時刻もない。評議にかかる前に、御退座ごへんを願つてはどうじやな。それとも、何か御辺ごへんの都合でもあるのか。筑州殿」

至極、風采のあがらない秀吉は、式服となつても、大紋の着ばえもせず、列座の中ではどう見てもやはり野生のものでしかない。

位置としてはすでに信長の在世中に、屈指の重職を与えられ、実力としては、中国征攻中も、山崎の「捷いっしやう」でも、充分示されてはいるが、実際に、会ってみると、

(この人が)

と、むしろ聞いていた名声や想像を裏切られるくらいなもので、深くその人間にふれてゆけばともかく、ただの眼で、いわゆる一見した程度では、この者と不測の時代を共に進み、生涯の大事を一緒にするなどということは、考えものだという気を起すほうが、むしろ常識として無理もないといつてよい。

一見、直ちに、さすがはと、その人らしく見られる者では、滝川一益など風采奕々たるほうで、一流の武将とうけとるに誰も吝かとしなideあらう。丹羽五郎左衛門長秀にはどこか枯淡があつて禿げあがつている鬢つらなど、戦陣振りも頼もしげに思われる。蒲生氏郷は座中第一の若年ではあるが家柄のゆかしさ天性の氣稟、どこか薰々たるものがある。重厚なる風格において、身なりは秀吉より小さいくらいなものだが、曙光射るが如き池田勝入あり、また清雅温順に見えて、腹中何をつつむか分らないような大人の風格の持主に細川藤孝がある。

秀吉の風采が栄えないといつても、或いは、こういう人々の中だけに、よけい見劣るのかもしれない。何といつても、その日の清洲会議に列した程の者は、時代の一流級ぞろいである。ここには加わっていないが、北越の陣に残っている前田利家と佐々成政と。そして別格ではあるが、徳川家康とを加えしめれば、まず日本の中心的人物は網羅されて

いるといつてもさしつかえはなからう。その中においての秀吉である。人品となつては、どうもまだ仕方のないものがどこかにある。

それを自分でも感じるが、ここでは秀吉もひどく慎しく、謙虚けんきよを旨としているふうであつた。山崎で捷かつや、戦後、諸軍の礼をうけつつ駕籠の上から、

(瀬兵衛、御苦労)

といつて、彼奴きやつ、もう天下人に成りおわせたような氣でおるか——と同輩の將を口惜し
がらせたような不遜の態度は、今日はどこにも見あたらぬ。さつきから非常な真面目さ
であるのみだつた。勝家の口数にたいしても畏おそるかのように寡黙かもくであつた。——が、勝
家の執拗しつような言に、今はせひなくというような容子で、

「いや宿老のおことは、ごもつともです。三法師君の御出座を仰いだには、理由がない
ではありませぬが、なるほど、まだお無邪氣なお年、長評議に、ああしておられては、御
窮屈きうくつにちがいない。かたがた、今日の触ふれ頭がしらたる宿老の御意ごいとあれば、ひとまず、御退
座をねがうことにいたしましょう」

と、穏当な語を返して、少し膝を上座に向け直し、傳人もりの長谷川丹波守へ、
「そのようになされるように」

と、立座を促した。

丹波守は頷いて、膝の三法師を、うしろの乳人の手へ渡した。三法師は、盛装した大勢の人々が居ならんでいる様が、何か無性に楽しいらしく、乳人の手をつよく拒んだ。それを無理に抱いて、立とうとすると、こんどは突然、手足を振って泣き出した。そして手にしていた折鶴を列座の諸侯のまん中へ抛ってしまった。

諸侯はふと、眼に涙をもった。

薫香散

土圭の間の点鐘は、午を報じていた。

それも耳に入らないように、大評議の広間は、ひそとした緊張にみなぎっていた。

「主君信長公の不慮の御他界は、おたがい何とも痛哭のほかはないが、すでに事定まった今日となつては、偏にお跡目を正し、御遺業をうけついで、御在世の日にまさる忠勤を励ましあうこそ、臣下の道でもあり、また一尊霊をなぐさめ奉ることとも存じて……かくは今日」

と劈頭へきとうに、議長格の柴田勝家から、主君を悼いたむの辞やら、爾後じごの報告などがあつて後、「さて、それについて」

と、予定の議題が、これも彼の発言の下に、提出されたものだった。

即ち、その一は。

(御遺族のうち、どなた様をもつて、お世嗣よつぎとお定めするか)

の問題であり、二には。

(旧明智所領の配分如何)

であつた。

まず第一の重大懸案について、勝家から列座一同へ、

「御意見もあらば」

と、訊たずね。

「ほかならぬ儀。あとでとやかくのしないよう、腹藏なくお考えを述べられたい」

と再三にわたつて、諸侯の発言を求めたが、誰も、顔見あわすのみで、押して私見を披ひ瀝れきする者もない。

ないのは当然であつた。

この場合、もし軽率に、自分の思うところを主張しても、万一結果において、その反対な立場の者が、織田の相続者として擁立されることにでもなれば、当然、その発言者の前途は危険なものにならざるを得ない。

で、誰もが、軽忽けいこつに口をひらくべきでないとして——じつと、沈黙をまもつたまま、およそ大勢の定まるのを見ようとしているふうであった。

勝家は根気よく一同の慎黙しんもくを慎黙にまかせておいた。さもあろうと、およそはこの場の成行きを予察していたものようである。そしておもむろに威儀をあらためて口を切つた。

「方々に別しての御意見とてなければ、さしずめ、宿老として、この方が愚存ぐぞんを申しのべるほかおざるまいが……」

その時、上座にあつた神戸信孝の容子ようすに、ふと顔いろのうごくのが見えた。勝家の眼は、秀吉にそそがれ、秀吉は、滝川一益の姿と、信孝の容子とを、見くらべていた。

微妙なうごきが、一瞬、心から心へ眼に見えぬ波長を立てた。清洲一城、人なきかのよ
うな、異様な緊張としじまの中にある。

「この勝家が見奉るところでは、三七信孝様こそ、実げに実げにお年ばえと申し、生来の御器

量、お跡目として、申し分なきお生れと存じ上げる。惑まどいなく、三七様をこそと、この方はすでに心に定めており申す」

ずばとした発言だった。というよりも宣言といったほうに近い。勝家はすでに、牛耳ぎゆうじを取ったものと観みたのだ。ところが、

「いや、それはいけませんまい」

すぐ反対の声が出た。云い出したのは秀吉である。

秀吉は、勝家の提議を、まっ向から反駁はんぱくした。

「何さま、お見立てとしては、宿老のお考えもよろしかろうが」

と、かろく一蹴しておいて、

「筋目から申すなれば、正しく御嫡男信忠様の跡は、三法師様こそ、御相続あるべきところではおざるまいか。国に法あり、家々にもおのずから家法はあること。下々においてすら、かような大事は紊みださぬものを、まして」

勝家の面は、朱へ墨をにじませたように、感情をあらわしていた。

「アア待て、筑州」

「いや」

と圧して、秀吉はいうだけを云いつづけた。

「三法師様は、まだ御幼少と、仰せられるであろう。——が、御一門以下、柴田どの始め、宿老諸将がそろうて、お守り立っていたすからには、御幼少とて、何の御不足やあろう。忠勤をもて仰ぐ御方は、何もお年ばえの如何にあるわけではありませんまい。——筑前においては、ぜひに、御筋目を正されて、三法師様をこそ、お跡目に仰ぐべきものと信じます」

勝家は、ぐだつとしたように、懐紙を出して、衿くびの汗を押し拭っていた。大きな暗礁あんしやうにのしあげたかたちである。しかも秀吉の主張は、家系の正法であり、常道であつて、反対のための反対とは聞えない。

ここでまた、非常な失望を顔にあらわしていたのは、北畠きたばたけのぶお信雄であつた。彼はあくまで信孝を対象として、表向き信孝よりは兄となつてゐるし、生母の家系もいいので、ひそかに自分こそ——と独り期していた気もちがあつたことはいうまでもない。

それが、暗に相違したので、すぐ彼らしい卑屈ひくつが出て、居るに堪えないような容子をしていた。

三七信孝の方は、もつと覇氣はきがあるだけに、秀吉の横顔を、上座から凝視するの風を示していた。

「さあて、喃のう？」

勝家は、是ぜともいわず、非ひともいわず、こう大きく呶つぶやいて、席上の空気から何かを窺うかがてとうとうとした。

しかもまだ容易にその賛否を態度に示す者もいなかった。勝家も本音をふき、秀吉も肚を割わつて、二者の二説が、真反対に立つて、はつきり対立をあらわすとなつては、いよいよそのいずれに拠よるかは大である——となすもののように、緘かん黙もく沈ちん吟ぎんは、よけいに外皮の殻を厚くするばかりだった。

「筋目とな。……なるほど。……が、無事泰平の世とはちがひ、先君の御遺業とて、まだまだ半ば、多難多端は、御在世の日にまして来ように。——さて、どうあろう」

勝家は頰しきりと、味方を誘いつた。彼がうめくようにこういうと、そのたびに、領うなずいてみせているのは滝川一益だった。しかし、その他の諸將の胸きょう懷うかいは、依然、見てとるにむずかしい容子ばかりである。

秀吉は、再言して、

「もし信忠様の御簾ごれんちゆう中に、御懐妊の方でもあれば、御産のひもの解かるるを待つて、御男子か女子かの上までお見とどけ申しあげた上、さてと、かような会議も開かるべきに、

まして歴乎れつぎたる若君がおありになるのに、何で異議ごせんぎや御詮議ごせんぎの必要があるろう。三法師様こそ、即座にお定めあつてしかるびよう存ずる」

飽くまでも主張した。余人の顔いろなどは問うところではない。一に勝家へ向つての反はん駁なんぱくだつた。

諸將の容子には、声にこそ出て来ないが、秀吉の説にうごかされて、

(それこそ道理である)

と、内心大いにうなずいたかの如きものが見えた。

この心理の傾きは、秀吉がいう嫡ちやく孫承祖そんしょうその正論に肯定を余儀なくされたというだけのものではない。「理」の半面にもうひとつ「情」の裏づけがあつたによるのである。

——といえるわけは、

会議の直前、諸將は、信忠の遺孤いこ三法師のいたいけな姿を見ている。

ここにゐる諸將は、例外なくみな子をもつ家の父であつた。今日あつて明日知れぬ武門の身には——三法師のいじらしい姿をながめて、誰もが、身につまされずにいられなかつたにちがいない。

その情念の上に、理念からも、堂々たる正論を掲げて、衆判しゅうはんに問うたのであるから、

さしも自主緘黙かんもくを持していた諸将も、秀吉の主張にうごかされたのは当然であった。

それに反して、勝家の主張は、一応尤もつともらしく聞えるが、根拠が弱い。方便主義であり、また、信雄の立場を完まったくなくしている。信雄とすれば、自分をさし措おいて、弟の信孝が跡目に立つよりはまだ、三法師が擁立ようりつされるを望んでいるであろうことはいうまでもあるまい。

勝家は反駁はんぱくに苦しんだ。

きよようの評議で、秀吉が易々として自分の提議を容いれるものとは思っていないなかったが、三法師を擁して、こう強硬に主張して来ようとも予測していなかった。また、秀吉以外の諸侯が、かくも易々と、しかも多数、三法師支持へ傾こうなどは、なおさら、思っていなかった。

とはいえ、ここで秀吉にやぶれるなどは、何としても忍び難い。

「ふうむ。……なるほど、……理くつじやな。理づめで申さば、まずそんなものであろうが、三歳の幼君をいただくのと、お年ばえもたのもしき将器豊かなる御方を仰ぐのでは、われら重責を負う遺臣としても、その施政に士気に、将来の大計にも、やはり大きな違いがないわけには参るまい。毛利といえ、上杉といえ、なお安からぬものが多いところじゃ。

三歳の若君でどうなるう。先君の御遺業も半途に止め、このまま縮もうという織田家ならばつじやがの。——いや、守ろうとすれば四辺は、時こそ得たれと侵して来る。所詮しよせんふたたび乱世じや。室町家の末路の轍てつを踏もうも知れぬ。いや、勝家には危ぶまれる。どうあろう？ 諸侯」

座中を見まわして彼の眼は支持者をさがした。が、どこからも明瞭な反応がないのみか、偶然彼の眼とかちあつた眸が、突として、

「御大老」

と呼びかけ、却つて、横から斬りかけるような反勢を示してきた。

「おう、五郎左殿か、何じやあ？」

勝家も反射的に、頼みをかけぬ返辞を投げた。五郎左——丹羽長秀は初めて発言した。

「だんだん御深慮は伺つたが、ここはまず羽柴殿の説を容いれられては如何なものかの。羽柴殿の云い条、五郎左も至極と存ずるが……」

宿老格では、丹羽長秀もまた、宿老の一人である。

その五郎左が、緘かんもく黙を破つて、秀吉方へ、自己の旗いろを明らかにしたので、この時、勝家の面色ばかりでなく、座中にわかは俄に色めくものがあった。

「五郎左殿よ、それはまた、どういうわけなの？」

勝家は内心の忿懣ふんまんを抑えながらなじった。——が、形勢かたちここにいたっては、秀吉との対立、もはやまぬがれ難しと肚はらのうちできめこんだものか、焦躁しょうそうの半面に、瓶破柴かめわり田らしい傲岸ごうがん不屈ていな体をも、わざと示していた。

多年のことだ。長秀は知っている。彼のそういう性情をよく心得ている。——でなだめるように、

「大老。お腹立てなさるなよ」

と、まず温顔を向けてから、自己の所存を述べはじめた。

「——何というても、羽柴殿は、最も先君の御意になつておる者ではござるまいか。右府様、御非業ごひごうの節、すぐ中国より取つて返し、俱ともに天を戴かざる無道人の光秀を討つたるは、われ人ともに、悲痛の中の面目、ありがたいことでおぎった」

「……………」

勝家の面色は惨たるものに塗られた。が依然、くずれないのは、その五体もあらわしている我意一徹な線であった。

長秀はなお云いつづけた。

「あの際、大老にも、越中の陣におかれて、右府様の御最期を知るやいな、たとえ手勢は揃わずとも、飛馬に鞭をあててお上りあらば、羽柴殿とくらべては、倍にも勝る御身上、明智ごときものの二つや三つは、立ちどころに踏みつぶされたであろうものを。……さてさて、御油断ゆえに、わずかの遅れ。惜しいことでおぎった」

諸将、たれの胸にも、このことはあつた。長秀の言は、諸将の感情を代表したものといえる。

同時に、これは勝家の大弱点であつた。出遅れて、故君の弔い合戦に会さなかつたという一事だけは、何としても弁疏べんその道がない。長秀は巧みにそこを衝ついてから、秀吉の提議が正しくもあり、穩当でもあるという、自己の贅意きたんを忌憚はたらなく述べ終つた。

彼が口をつぐむと、ここ大評議場の空気は一転、險悪を孕はらみかけて来た。勝家の苦境を救おうとするかの如く、滝川一益が側の者に急に私語しごし始めたのをきっかけに、諸所において、低語歎息が聞え出した。——これはむずかしい。織田家の御運の別れ目は今。——と表面は片語の騒さわめきに過ぎなかつたが、声なき底に勝家対秀吉の正面切つての衝突が、どうなることかと、より以上の関心となつたのはいうまでもない。

この重苦しい空気のように、当の勝家とは見れば、茶道衆が、すでに午ひるの刻ときを過ぎてい

る旨をそつと伝えて来たのに対して、

「うむ。ウム」

と、うなずいたきりで、汗ぬぐいをくれといいつけ、同朋どうぼうの者ものが、水絞りの白布を捧げると、大きな手にそれをつかんで、襟えりくびの汗を拭きぬいていた。

「……はて。当惑な」

その時、秀吉は、左の手をわき腹にあてていた。そして急に眉をしかめて見せながら、勝家に向つていう。

「これはどうもならぬ。……柴田殿。にわかには、虫気が起つたものとみえ、腹が痛む。失礼なれど、しばし中座する。おゆるしを」

つと立つて、評議の席を抜けてしまった。

遠い、台子だいすの間ままで来ると、

「いたい。……いたい」

秀吉は大げさに腹痛を訴えながら、まごまごしている同朋衆へむかい、

「枕、枕」

と、よび、それから、

「薬をくれい」

と、すぐ横になってしまった。

大病人のようである。

しかし心得ている病人とみえ、書院庭から吹きこんでくる涼風へむかつて枕をすえ、うしろ向きになり、汗に蒸れた襟元を自分でくつろいでいた。

が、典医てんいや茶坊主どもは、あわてぬいている。侍たちも、こもごも見舞に来て、

「御気分は……？」

と、気遣ったが、秀吉は、

「そつとしておけ。そつとしておけ。……持病だ。やがて癒なほる」

うしろ向きのまま、蠅はえでも追うように手を振った。

同朋どうぼうがとりあえず、薫香散くんこうさんを煎せんじて来て献じると、秀吉は起きて、

「これは、暑気中あたりにもよい」

眩きながら、喉も大いに渴かわいていたところか、熱いのを、ふうふう云いながら飲みほした。

そしてまた、横になった。

どうやら本当に寝ついてしまったらしいので、同朋衆も侍たちも、次へさがって、そつとしておいた。

大評議の広間とこことは、幾つもの間敷をへだてているので、秀吉が立つた後、どうなつたことか、気配も知れない。

だが、ちようど同朋衆が、頻りと午を告げていた折でもあつたから、秀吉の中座を機会に、どうやら午食の休憩に入つたらしくも思われる。

一刻いっときほどの時が経つた。

そのあいだ、七月の真昼は、かんと照りつけるのみで、一城の広さは、事もなげに静かである。

そして、次の風雲をはら孕み、明日の世代を分つともないいちだ一朵の夏雲が、清洲きよすの上に、じつと、動きもせずあつた。

「筑前どの。御気分はどうじゃ。……落着かれたかの」

いつの間にか、枕許に、丹羽長秀が来て坐っていた。うしろに清洲の侍もひかえていた。

「……ウム？ ……おう」

秀吉はむくと肱ひじを立てて、長秀の顔を見、急に気がついたかのように、

「やあ、失礼を」

と、坐り直した。

「柴田殿が、迎えて来いといわるる。……はやお越しあるがよい」

「評議は」

「貴公が座にいらなくては、評議にもならぬ。——ともかく参られてからと、柴田殿のことばだが」

「それがしの申し条は、はや尽しておる」

「いや、あれから各の詰所へさがり、半刻ほどの休息の間に、風模様は変った。柴田殿も、考え直したらしくみえる」

「参ろう」

秀吉は立つた。長秀は思い入れの微笑を見せたが、それにニコともせず、秀吉はもう先にだいす台子の間まを出ていた。

勝家は、眼でじろと彼を迎えた。

座中一同も、ほっとしたかのようである。議場の空気は前とちがっていた。勝家は折れて、秀吉の提議を容いるべし、と確言した。ここに、三法師を相続者と定める議案は一決し

た。

勝家の讓歩によつて、

「めでたい、めでたい」

と、一瞬、大評議場は、危雲を払つて、解^とけあう和氣に醸^{かも}された。

「三法師君を、天下人と仰ぎ奉ること、各にも御同心、勝家にもはや異存なし。

祝^{しゅうち}

着^{やく}、祝^{しゅうち}着^{やく}」

彼もしきりにいつていた。自説の形勢^{ことごと}悉く非なるを見て、にわか^{てつかい}に前言を撤回し、か
らくもこの場を切り抜けたというかたちである。

がなお、彼として、ひそかに期すものはあつた。

それは次の議案——旧明智所領の処置——つまり領土分配をどう割り振るかの問題であ
る。

これが直接、諸將の利害にかかわる実質的懸案だけに、相続問題以上、ひと揉めはまぬ
がれまいと予想されていたが、案外そうでなかつた。

「そのことは、ひとえに、宿老方のよろしきように」

と、さきに「捷^{いっしょう}を掴^{かく}した秀吉から、謙^{けんじょう}讓^{じょう}を示したことが、まず非常に、會議の

進 抄しんちやくを円滑にしたのである。

「では、一応、大老のお考えを……」

と、宿老格の丹羽、滝川などが、ここで前にはまるつぶれとなった柴田勝家の顔をたてて彼を中心に合議して原案をまとめにかかった。

しかし、すでに秀吉の存在は、何となく、冒おかし難いものになっている。纏まとめられた原案は、やはり一応は、秀吉の前にも送られて来て、

「御意見、どうあろうか」

と、彼の内見を求めざるを得なかった。

「——筆を」

秀吉は同朋どうぼうからそれを求めて、原案を一閱いちえつしていたが、筆に墨をふくませると、無造作に三、四項へ棒を引き、かつ、私見を書き加えて、

「かようにされては、如何」

と、訂正して返した。

ふたたび勝家の手に廻されてくる。勝家は苦々しい容子である。黙思もくし久しかった。勝家の望みとしていた項目にベタベタ墨が引かれているからである。けれど、秀吉は自分へ割

りあてられて来た江州坂本の知行分にも自分で棒を引いて消していた。そして秀吉自身は、ふつうの諸將並に、わずか丹波一国を書き入れているに過ぎないのである。

寡慾かよくを示して、勝家にも、寡慾をすすめて来たものだ。そして信雄、信孝に多くを割当て、あとは山崎の弔合戦とむらいの功によるかの如き分割案の振り当てだった。

「……明日もあること。暑中の長評議とて、各も疲れたろうが勝家もちとつかれた。この議は、あすとしてはどうか」

ついに勝家は保留として即答こぼを拒んだ。それには、異議はない。夕陽もさして来て暑さはいよいよ苛烈かれつだ。第一日は閉じられた。

次の日。大評定第二日目。

勝家は、妥協案だきようあんをもつて、

「かようでは、どうじやな」

と、宿老たちに諮はかつた。

夜前、勝家は、自身の家臣たちを集めて、宿所で鳩きゆうしゆ首談合しゆして来たものだった。

が、秀吉は容れなかつた。

きようもまた、この分割案を挟んで、両者の対立が激化するかとみえたが、大勢はすで

に秀吉に加担している。どう粘ねばつてみても、結局、秀吉の云い条に抛よらざるを得なかった。午ひる、ひと息入れて、やがて午すぎの未ひつしの刻こくを期し、その決定が諸將へ披ひ露された。配分に付せられた領地は、明智の關けつこく国のほか、信長の直領地もふくまれている。

国分けの筆頭は、

のぶおきよう

信雄卿

びしゅう
尾州一円

のぶたかきよう

信孝卿

のうしゅう
濃州

の、ふた筆であった。

一は織田家の発祥地はつしょうちとして、一は岐阜在城の地として、共に、適切な処置とされたが、これも秀吉の意で、勝家の初案を直して、こうさせたものだった。

滝川一益の五万石加増、新付北伊の一部、蜂屋頼隆はちやよりたかの三万石加増等には、何らの筆を加えなかったが、

池田勝入父子、大坂、尼ヶ崎、兵庫十二万石

丹羽長秀、若州、並びに江州ごうしゅう二郡

の二項には、原案よりも、加封を多くした。

その代りに、秀吉は、自分への割当を削つて、丹波一国を獲うるにとどめ、また、勝家の

取分も減らして、

——江州の内、長浜六万石

だけを彼に付与した。

長浜は現に、秀吉の城地となつてゐる所である。

しかしそこは越前から京都へ通ずる咽喉の要地であつた。

勝家はそれへ目をつけたにちがいない。強引にもこれを需めた。そのほか三、四郡の地をも望みに加えていたが、ほかは秀吉が抹消してしまつた。そして長浜六万石だけは、きれいに彼へ渡してやつたのである。

もつとも、それにも条件が付いていた。勝家の養子、柴田勝豊へ持たすという確約の下にされたのであつた。

前晚、柴田家の家中は、勝家を囲んで、こういう屈辱的な分け前にたいし、大不服をとなえ、秀吉のやり口を、

(思ひ上がった下郎の専横沙汰、断じてお容れあるべきではない)

と、一蹴し去るべきことを励ましていた程だつたし、勝家もきょうここへ来るまでは、

家臣と同じ気もちでいたが、評議の席へ臨んでみると、おのずからまた自我のみを強調し

得ない諸将の大勢というものがここにはある。

(——自分を小さくしてはならない。我慾一点と見られてもなるまい。多数が可とする以上はやはり順応せねば却つて後に悪かろう)

などと座中の空気とにらみ合わせては、自然、彼の我意もこう牽制けんせいされてしまわざるを得なかつた。——で結局、

(長浜の要地さえ、秀吉から取り上げて、わが掌中に収めておけば)

と、他日を底意に期して、とうとうその条件付にも甘んじて受諾したものであつた。

彼の狐疑鈍渋こぎどんじゆうに反して、秀吉の態度は淡々たるものに見えた。

中国以来、山崎の快捷かいしよくまで、戦政両略の主動を取つて来た筑前守こそは、必ずや誰よりも多くの獲得を欲するであろうと人々はみな予想していたに關わらず、彼が受けたのは、諸将並に丹波一国にすぎず、既得の長浜も譲つてしまい、当然取つてよいものと人皆がゆるしていた江州坂本の地も、丹羽長秀にやつて顧みなかつた。

坂本は京都の関鍵かんけんだ。

(自分には、天下をうかがう意などはない)

それを秀吉は敢えて衆に示すべく、わざと取らなかつたものか。或いは、

(いづれ帰すところに帰すしかないもの)

と、眼前の小事として、群議ぐんぎにまかせておく気であったものか、なお未だ、彼の大腹中を真に知る者はなかつた。

虎口ここう

一時は決裂のほかあるまいかのような危局けいきうを孕はらんだ清洲会議も、二つの重大懸案が、ともかく議決されたので、あとの小問題は、一瀉いつしゃ千里せんりに片づいた。

信長の跡目を承うけた新君三法師の食邑しょくゆうとして、近江おうみの内三十万石をあて行う事——も異論なく決定した。

傳役もりやくには、従来どおり長谷川丹波守と前田玄以げんいの二人のほか、なお秀吉が輔佐ほさすること。

また、安土は焼失したので、安土に仮館ができるまで、三法師の座所は、この岐阜としておく事。

信雄、信孝の二叔しゆくは、幼主三法師後見人たるべき事。

等々の事項のほかなお、施政しせい体制の面としては。

京都に織田代表の四将を置く。柴田、羽柴、丹羽、池田の四家はその任にあたり、各自、家中から役人を派して、洛中の庶政しよせいを合議裁決せしめる。

という案も即決された。ここにすべての解決は終った。閉会の式として、

(いづれ協力一致して、幼君を奉戴ほうたい、異背いはいあるまじき事)

の誓書を納れ、これを故主信長の霊前に供え、併せて、評定の結末を直ちに報告することになった。

その日は、七月三日。

信長の月辰げっしん——月の命日は、昨日の二日であつた。もし会議が順調にすすめられていたなら、このことは、きのうの命日に行われるはずだったが、勝家の保留で一夜越したため、忌日きにちつ追福いふくの営みも、ついに一日延ばされてしまったわけである。

諸将は、詰所へさがつて、まる三日間の緊張から解かれると、やれやれといいたげに、各、夕風に涼を入れて、家臣たちの宥いたわりに寛くつろいでいた。

多くの同朋衆は、手分けして、各詰所の小部屋で、一いっせん筥せんをそそぎ、茶を献けんじ、香くんを薫くんじて、犒ねぎらいを扶たすけていた。

その間にもう清洲の臣が、

「御小憩がおすみに相成りましたら、酉とりの下刻げこくのお土圭とけいをあいずに、二の丸の御仏殿までおわたり下さるようには」

と、触れあるいていた。

汗をぬぐい、喪服もふくにあらためて、諸将は刻ときを待っていた。

蚊おとうなりのする大殿おとのびさし廂びさしに、新月の影がほそい。

遠く土圭が鳴っていた。

喪服の武将たちの影が、もの静かに、二の丸へ渡っていた。

雲母きらぶすま襖すまに紅白の蓮花れんげが描いてある仏間の裾すそに沿うて、勝家以下、ひそと着席した。

次々に、一人来ては坐り、一人来ては、また加わった。

ひとり秀吉だけが見えない。

「はて……?」

と、いぶかりつつ眸をこらして正面の仏龕ぶつがんほのかな辺りを見ると、厨子ずし、位牌いはい、金こんべ壁き、供華くくげ、拈香ねんこうなどの巖おごそかなものの影のうちに、さきの誓書一束が供えられてあるのが一ひとしお目につく。

が、より以上、衆目をそばだてしめたのは、壇下に接して、筑前守秀吉が、喪服した三法師を膝にのせ、けろと、とり澄ましていることだった。

(これは——?)

と思わぬ者はなかつたらしい。

けれどよくよく考えてみると、長谷川、前田などの傅役のほかに、秀吉も幼君の輔佐たるべしとは、昼の会議でみなが衆判の下に認めていたことである。僭上なり——とは咎められない。

そうして、臣座を超えた別格の位置に坐っている秀吉にたいし、何ら咎める理由が見出せないだけに——勝家のおもしろくない顔つきは非常なものだった。

「……いざ、お順に」

二叔の信雄、信孝へむかつて、こう促すのさえ、頤のさきで、声こそ低かったが、業腹の沸りが息になって洩れたような語調だった。

「お先に」

信雄は、信孝へ云つて、さきに立った。これがまた、信孝には不興なこと夥しい容子だった。少なくともこれだけの列将を前にして、信雄の次にされたことは、彼として、将来ま

で下風におかるることを無言のうちに確定づけられた気がしたのであろう。

信雄はと見れば——父信長と兄信忠の位牌にむかい、瞑目合掌して香をささげ、ふたび厨子壇を拝し、静かに、そのままうしろへ退がりかけていた。

——で、すぐに自分の座へ戻りかけるかのような物腰に見えた時、秀吉は、咳一声して、自分の膝に三法師君が在ることを——

(ここに新君おわずぞ)

といわぬばかり屹となつて、信雄の関心を促した。

秀吉の意識的な身じろぎに、はつとしたらしく、信雄はあわてて膝を向け直した。自体、気の弱いこの人のことである。それが気の毒なほどどぎまぎと見えた。

「……………」

三法師を仰いで、信雄は、ごていねい過ぎるほど、恭しく拝礼をした。

「うむ」

うなずいたのは幼君ではない。秀吉である。

どうしたものか、秀吉の膝にあつては、駄々でおむずかりやの三法師も、人形のように端然としている。傅役の長谷川、前田、乳人たちは、遠い末座に、ただひれ伏している

のみで、ほとんど、その人たちの手を焼かすこともない。

信孝が立つと、同じく、父信長、兄信忠の霊を拝し、これは信雄の前例を見ているので、諸將に笑われまじとするかの如く、まことに拳止正しく、新君三法師にも謹んで伏礼をして退った。

次が柴田勝家であった。

彼の大きな姿が塞がるように厨子壇の前に坐つたとき、障壁の紅蓮白蓮も、ゆらめく仏灯も、悉く瞋恚の焰のごとく、その影を赤々と隈どつた。

会議の報告、新君擁立の誓いなど、胸中の万感を交えて、長々と信長の霊に告げているものか、黙拝拈香、いと重々しく、さらに合掌久しゆうしていた。

そして退座七尺、いちど胸を正して、三法師のほうへ向い直した。

すでに、信雄と信孝すら、三礼をなしているので、彼として怠ることはできなかつた。ぜひなくではあつたらうが、そのまま、腹中いっぱい苦情を嚙んで拝礼をした。

秀吉は彼へもひとしく、

「ウム」

と、頷くかのような眉目を示した。——勝家は、ぐいと猪首を横に曲げて、ばさばさと

自席へもどった。その後、唾つばでも吐きたいような顔をしていた。

丹羽、滝川、池田、蜂屋、細川、蒲生がもう、筒井など順次に拝儀は終った。——そして人と席とはそのまま、この夜——故信忠卿の御簾中ごれんちゆうより被下くださる——とあるお齋ときの間へ移つて酒宴となつた。

ここには、会議後、遅ればせに着いた金森長近や、菅屋九右衛門尉、河尻肥前守なども、席に加わつていた。

また両日中、城外の治安や城中の守備聯絡などに助力していた諸侯の家臣中の一族とか老臣格の者も、各一、二名ずつ列席をゆるされ、清洲直臣の側からは、前田玄以、長谷川丹波などがつらなつた。

信雄、信孝の在るは、もちろんのことである。配膳は四十客以上に供えられた。すでにして杯は廻り燭しよくは夜涼やりようにさやぎ、人々はこの二日間に初めての歎語かんごとくつろぎの中に各酔いを覚えていた。

酒宴と茶会とは、この時代の戦国社会では、流行り物はやもののようであつた。陣小屋の雑器とされている備前壺に、一輪の野の花を生けて、物の具のまま一碗を喫し、また、陣後の往来や城中の諸会にも、昼に夜に、酒宴のひらかれるのはめずらしくない。百事の儀礼はみな

酒宴の形式でされるといってもよいほどである。

これはもとより当時の世態と武門生活の要求から自然になされて来た風習であった。信長といい、柴田、羽柴、その他、当年の先駆者や中堅はすべて皆、この世に、生れた時から世は戦国であり、長じて四十、五十となった今でも、なお世の中は戦国である。

極言すれば、この時代の人間すべては、

（世の中とは、即、戦国のこと。戦国以外に、どんな世の中があるか）

を、まだ自分の生涯中には見てもいず味わつてもいない人たちばかりであったといつていい。

故に、戦いは、日常であった。

（いつかかならず身をもつて、天日うらかな平和を四海に回らし、万民をして和樂の地に安んぜしめん）

とは、武門の上に立つ大将としては、誰もがいだいている理想のうちの大きなものだったし、民土一般も、その日の来ることを生涯の憧憬あこがれとしていたことはいうまでもないが、さりとして、

（いつから始まった戦い、いつ頃になれば終るか）

などと月日から割り出した儂いはかな観測などに無為むいな日を暮している者はなかった。——この世は戦国、戦国は日常——という通念が徹していた。生活一切もそれに順じゆんのう応して、何の不自然もなく、苦しみも楽しみも、焼土も建設も、死別も生別も、涙も笑いも、悉くこごとごと、人生の毎日まいにちにあり得る常のこととされ、しかもその中になお、この世に対する大きな希望と、苦しい日にも、愉快にあらんとすることを忘れなかった。

諸将のよくやる酒宴は、その積極性のあらわれの一つだった。戦陣の寸暇、甲かっちゆう冑を解いて、身をくつろぐと共に、心を寛ひろくし、和楽のうちに、心身を養うことであつた。

しかしまた宴樂のあいだには、外交の詭計ぎけい、私交の虚実、人物の試胆したん、戦不戦の打診など、善悪あらゆる機微のものも美味声色を仮りて入り交じっている。燭しよくろうわは麗しいといえどもまた観かんずれば刃やいばなき戦場なりといえないことはない。——しかもそれは深く秘して交こ杯談笑うはいのうちうちに各おのづかが魂の素肌まで示しあうところにまた、人と人との交わりの微妙な味も醸かもされるのであつた。

だから当時の武将はみな何か酒宴のときに振舞う芸能を持っていた。信長の幸若舞こうわかまいも有名だったが、あの真面目くさい徳川家康にしても、自然居士こじの曲舞くせまいはおはこの芸であつたし、その家臣の酒井忠次といえは、蝦えびずくいの名人として、その珍なる踊りは、四隣

にまで鳴っていた。

こよい、この宴は、常の場合とちがひ、ぶっさん 仏餐を賜わっていたのであるから、誰も演舞までやり出すような大酔はしていないが、しかしこの顔ぶれの中でも、演やればずいぶん演り得る隠し芸の持ち主はいそうである。

わけて池田勝入の槍踊りは、自他共にゆるすものだった。

まだ信長の在世中であつたが、或る折、甲府の使者を迎えて、安土に大酒宴の催されたとき、主客の使者が列席の武將のなかに、一ひときわ背も低く、足も跛行びっこの小男が、人からうけた大盃を乾してそれを返しに立つてゆくのを見て、

(あれよ、盃より小さい侍が、盃を漕こいで、海をわたつて行くわ)

と、一寸法師の噺はなしに事よせて、座興をいつたつもりであろう、遠慮のない笑いかたをした。

すると勝入は、——この頃彼はまだ髪もおろさず名も勝入と変えていなかったが——黙つて次の間へ退さがつたと思うと、ふたたび現われ、携えて出た見事なる朱柄あかえの大槍を座のまんなかに立てて主客の方にむかい、

(客まろうど人にももの申す。末座にまかりある者ゆえ、わざと御挨拶をひかえていましたが、お

目にとまったようにござれば、かくは推参申してござる。……したが、客人の御眼には、この男、いたく小男のように御覽ぜられたかのようなれど、父母より賜える五体、幸いにして、五尺ほどはこれあり、今日までの戦場においても、いまだいかなる強剛に会うも、身の丈の不便というものはかつて覚え候わず。……とはいえ客人は小さいと仰せられ、それがしは大きいという。いずれが是やら、いずれが非やら、篤と、見ていただきとう存ずる)

云い終ると、信輝は武者ぶり作って、りゅうりゅうと槍をふるい出した。あだかも四面鉄桶の乱軍を駆けくずし、その悉くを槍にかけて、宙に大地に、突き投げ突き伏せて熄まざるかのような大演技を演じて見せたのである。

信長を始め安土の同僚は、手をたたいて興じ入ったが、甲州の使者は、演舞の槍先がしばしば胸元近くまで閃いて来たので、酔もさめたような顔していた。

そして、その後のてれかくしに、傍らの者へ、

(今のは、誰ですか)

と訊ねたところ、

(あれこそ、御当家の池田勝三郎信輝です)

と聞かされて、ふたたびふるえ上がったということである。

以来、信輝の槍踊りは、著名になつて、折あるごとに見られたが、本当はそんな烈しい荒芸あらかげいではなく、虫の居どころによりなかなか優雅な舞い振りのものであつたという。

——が、さて。

その池田勝入も、今夜の席に、居ることは居るが、こよいは亡君のお齋ときの賜膳しぜんである。酔うには酔うても、まさか槍踊りというわけにもゆくまい。

他の諸将も、同様な行儀であつた。

しかし多少、酒気のがるにつれて、あなたこなた、座をくずして、寄より々に談笑の聲はわき出している。

殊に秀吉の前には、杯と人とがかたまつていた。

そこへまたひとり出て、

「おながれを」

と、改まつて乞うた者がある。柴田勝家が自慢の臣、佐久間玄蕃げんばのじようもりまさ允盛政であつた。玄蕃の驍勇ぎようゆう無双なことは、北越の戦陣で久しく鳴りとどろいているものだった。

（——佐久間玄蕃に二度出会つた敵はない）

と、いうことばすらあるほどである。

勝家の愛し方は一通りでない。何かといえ、

(わが家の玄蕃は)

と、口癖にいい、

(甥おいめが、かように働いて)

とか、自慢たらたら、彼の武功を吹聴すること、他愛ないくらいであつた。

勝家には、甥もたくさんいるが、彼が、「甥おいめが」といえば、それは玄蕃をさすことであつた。

そして、その玄蕃盛政は、まだ二十九という若さであるにかか関わらず、柴田一族の上将として加賀の尾山城に住み、ここに在る諸大名とくらべても、何ら遜そん色しよくないほどな封地ほうちと待遇をうけていた。

「……おう、筑州どの。ひとつその男に遣つかわされい。——甥おいめが、お杯しよを所望しよもうと申しおる」

勝家は側から云い添えた。

それに初めて気づいたように、

「甥御とは？」

と、秀吉は見まわして、

「やあ、これは」

と、玄蕃の男振りを見まもった。

さすがに音に聞えた偉丈夫いしやうふとは見えて、玄蕃の逞たくましい筋骨は小がらな秀吉を圧するに充分だった。しかし彼は叔父勝家のようなあばたの瓶かめわり面づらとちがい、白はく皙せきの美丈夫にして、見るからに虎眉こびひようしん豹身の氣にみちている。

秀吉は、杯をあげながら、

「なるほど、匠しやうざく作さく（勝家のこと）にはよい家の子をお持ちではある。……どれ、ひとつ参らそう」

すると玄蕃は、首をふって、

「いや、どうせ戴くなら、そちらの大きいのを所望申す。大杯を賜りたい」

「これか——？」

それにはまだ酒がたたえられていた。

秀吉は無造作に器物へあけて、

「誰ぞ、酌してやれ」

といった。

朱のさかずきの縁へ、蒔絵まきえの銚子ちょうしの注ぎ口つぐぐちが当てられた。銚子が空になっても杯はまだ余地をのこしている。酌人は、べつな銚子を取りよせて、さらに、それへ満々といふ。虎眉豹身の美丈夫は、眼をねむつて、盃を仰いだ。そしてなお余滴よてきまで舌なめずることく飲みほして、これを懐紙でいっしき一拭し、

「いざ」

と、返した。

秀吉は、笑つて、

「わしは、だめだめ。その芸はできない」

手を振られると、玄蕃げんぱは、ひと膝つめた。

「なぜ、受けて賜わらぬか」

「弱いためだよ」

「なんの、これしき」

「それは、戦いくさのときのことばよ。酒はのむが、大酒はようせぬ筑前じや。ゆるせ、ゆるせ」

「あはははつ。あはははつ」

腹の底から玄蕃は笑った。そして満座へ聞えよがしに、

「ひとの噂にたがわず、なるほど羽柴どのは謝り上手だ。まことに、お腰が低うていらせられる。むかし——二十余年前には、この清洲のお城で、馬糞ばふんを掃き、お草履をつかむ御お小人こびとであった時代もある。その頃をわすれぬためとか。さても殊勝なお心がけよの」

今日の羽振りをもつ秀吉を前において、これほどのことがいえる者は、この玄蕃を措おいてほかにあるまい——と、みずから誇るかのような彼の放言だった。人もなげな哄こう笑しょうであった。

はつとしたのであろう。

あちこちの談笑は急にやんで、人々の眼はみな玄蕃の姿にそばだてられた。

そして玄蕃の前にある秀吉の顔いろと、勝家の容子とを見くらべもして、

「すわ、また何事が起りはしないか？」

と、一瞬みな、酔いと杯を忘失していた。

秀吉はにやにやと玄蕃を見ているのみである。四十七歳の眼から、二十九歳の若さを見やっっている眼であった。

いや年齢差だけでなく、秀吉が生れて二十九年をかぞえていた頃の人生と、玄蕃盛政が経て来た二十九年の歩みとでは、その境遇でも心しんてい態でも、たいへんなちがいがあつた。要するに、それすら思ひいたらないほど、玄蕃は実世間的な苦勞は知らないお坊っちゃんであつたといえよう。為に、剛勇無比の名と共に、すぐ驕きょうまん慢をも持つてしまうのであつた。当代の代表的人物が一堂にある今夜のような畳の上の場合のほうが、戦場以上に実は危険な場所であるという戒かいしん心などはまったくないかの如き彼であつた。

「——だが、筑前。ひとつ玄蕃の腹にすえかねることがあるぞ。やい、聞け筑前。……耳はないのか」

もう呼ぶにも呼び捨てである。酒くせよりは腹の虫が云つているらしく見える。しかし秀吉は酔すいたい態を眺めて、むしろ愛することく、

「お汝こつと。酔うたな」

微笑でなだめると、玄蕃は、

「なんの」

大きく首を振つて、

「事は、酒興ですむような、そんな小さい問題ではない」

と、大きく構え直して、さらに云いつのつた。

「聞けばだ。——最前、お仏殿において、羽柴筑前には、信雄様信孝様以下の諸侯が、尊堂へ拝をなすにあたつて、本来下賤げせんの成上がりなりの身をもかえりみず、三法師君をわが膝にのせて、ずんと上座にかまえ、しかもいちいちおのれの方へも、拝礼を執とらせたということではないか」

「は、は、は」

「なにを笑う。筑州、なにがおかしいか。——三法師君を飾りものに抱いて、実は羽柴筑前というつまらぬ男に、御一門や諸侯の辞儀を故意しに強しいたる汝の奸策かんさくであつたにちがひあるまいが。……いや、そうだ。もしこの玄蕃げんぱの允盛じょうもり政まさがいあわせていたらば、その座をも去らせず首のねを引きぬいてくれたであろうものを。——さてさて、わがお館やかたの匠しやうざく作さくといい、並居る歴々の衆といい、みな齒がゆいほど、お人のよい方々ばかり——」

秀吉の席から二人ほど隔てて上座にいた柴田勝家は、そのとき急に杯をほして、他の顔をも見廻しながら云つた。

「これこれ、玄蕃。何でそのように人の心事を猥みだりに口にするか。いや何、筑州どの、甥めは、こういう男でな。……ははは、悪気ではないのだ。聞き流してくれい」

秀吉は、怒りもし得ない、笑いもし得ない、いわば微苦笑のほかない羽目におかれていたが、こんな場合、彼の特有な容貌はまことに都合のいいものを持っていた。

「ふ、ふ、ふ、ふ。柴田殿よ。そうお気をもまれるな。よいわさ、よいわさ。……この方までが間が悪うなる」

判じのつかない態度でいうのだった。感情の揺れからのぼる顔色を見ても、大人の表情のようでない。

玄蕃のために、あたまからがんと喝破かつぱされて、手痛く参ったようにも見えるし、反対に、冷眼れいがんいちべつ一瞥、相手を齒牙しがにもかけていないとも見られるのである。

なおいえば、児童が爪を噛んで何かに拗ねすているような稚態ちたいと、老僧が山月に嘯うそいいて世にとぼけているかの如き狡ずるいものを、猿面郎と緋名あだなされているその類の少ない顔にぼかして、巧みに微酔ていの体を作っているものと思われぬこともない。

「なに、間が悪うなると。嘘をいえ。何の、猿が……猿が……あはははは」

こよいの玄蕃もまた、日頃の玄蕃に輪をかけた傍若無人ぶりである。燃えない物にむりに火をつけて烈火を誘おうと努めているようなところもある。

「猿。……これは失言だった。しかし二十年来世上の通り名、一いっちょ朝にしてはあらたま

らぬ。——左様、その猿で思い出した。むかし、この清洲のお城に、猿に似た御小人が、雑用にくるくる追い使われていた当時、そこにおるわが叔父も、まだ権六勝家と申されて、折々、宿直とのいなども勤められていたそうだが、……或る夜、つれづれのまま、猿を招いて酒をのませ、酔い疲れて横になったついでに——猿よ、すこし足腰を揉もんでおくれぬか——と申したところ、おやすいことと、猿は如才しよざいなく、権六の足腰を根気よく揉んだそうな」

「……………」

秀吉はともかく、衆はみな酒氣を失つて蒼白おもてな面に生唾なまつばをのみ合つた。——事態、これはただ事でない。この宴席からいくらかも隔ててない壁の外、木蔭、床下など、悉ことごとく柴田の手により劍槍飛弓が匿かくされているのではあるまいか。そして執しつこく秀吉の怒髪どはつを誘っているのではなからうか。——そんな邪推や臆測から生じる一種の衆の鬼氣が、満座にゆるぐ爛の影と、墨のごとき夜風となつて、夏ながら背すじも寒い心地に襲われ出していたからであつた。

と、秀吉は、玄蕃のことばが終るも待たで、からからと打ち笑つていた。

「いや、北ノ庄の甥どの。それは誰に聞かれたか、めずらしい思い出を語られるの。——いかにも二十余年前には、権六どののお腰はおろか、猿めは、導引どういんが上手うまいとて、御一

門の衆などには、わけてよう揉ませられたものじやった。そして、お菓子など賜わると、うれしくてなあ。……わははは。今はなつかし、あのお菓子の味はなつかしいものぞ」

「叔父上。聞かれたか」

と玄蕃は大げさに勝家のほうへ伝えて、

「筑前に、何かよいものをお遣りなされ。今でも、揉めといえ、揉んでくるるやも知れぬ」

「あまり座興の度をこゆるな。——お戯れだわ、のう、筑州どの」

「いやこの頃でも、折々は、ひとの足腰を揉んでおるにはおる」

「ほ。……誰の」

「ことし七十余歳に相成る老母の腰を揉むことは、この方が楽しみの唯一でおぎる。しかしここ幾年は戦陣にある方が多く、近頃はとんとその楽しみにも会い得ませぬ。……そう

そう、俄かに思い出されて来た。おさきに失礼する。各には、まずごゆるりと過ぎされい」

秀吉は先に宴を辞した。

そこを立つて、大廊下へ出てゆく間も、たれも止めてはいなかった。

諸侯は、彼が席を立つたのを、むしろ賢明と思ひ、たえられぬ危うさを感じていた鬼氣

殺気も、それによつてまず、ほつとするを得たからであつた。

「……殿つ」

「お退がりでございましたか」

大玄関に近い溜りたまの一間から、つと出て、彼のあとに従つたのは、片桐助作と石田佐吉の二小姓であつた。

城中二日の空気は或る程度この詰つめしよ所からでも感知することができた。が、秀吉は多くの家臣を城内に入るをゆるしていない。——で、二人の若者は、主人の無事を仰ぐと、各 うしろからこう云つた。

「お疲れでございましたでしょう」

「……が、何事もなくて」

秀吉はうなずくのみで、後の二人が小走りになるほど大股な歩みであつた。

そしてすでに、外へ出て、助作と佐吉が、供の家中や馬を呼びたてていると、

「羽柴どの羽柴どの」

あわただしく追いかけて来て、空に三日月の見える宵闇の広場に、彼の姿を求めている者があつた。

「ここじゃよ。ここじゃよ」

秀吉はもう馬上にあつた。

そこで鞍つぼを叩いている音を知つて、滝川一益は駆け寄つて行つた。

「何か」

秀吉は一瞥^{いちべつ}くれていう。

その容子は、主君が臣下を見ると、同じであつた。

一益は、寄り添つて、

「察し入る、察し入る。さだめし今夜は、お腹が立ったであろう。……が、酒のうえのこ

と。それに、北ノ庄の甥^{おい}は、あのとおりまだお若い。ゆるしておやり下さるように」

頻^{しき}りになだめる。

そして、次に告げた。

「既定の事。おわすれあるまいが、明四日の昼、三法師君のお世継^{よつぎ}御披露の祝事には、ぜひ御参列を欠かされることなきようにと、柴田どのが特に、あなたの立つた後ですぐ案じるごとく申されておられた」

「そうか。……うム」

「必ずおわたりあるように」

「わかつた」

「くれぐれも、こよいのことは、水にながされよ。——北ノ庄殿へはわしから申した。なんの、大腹な筑前どののこと、若い者のいちじょう一場のざげごと戯言などに気を悪うするものかと」

「叱しッ——」

馬がうごいたのである。一益が馬の後肢を避けて身を転じると、

「老人。あぶない」

秀吉は一顧して、さらに馬をぐるぐるまわし、黒々と寄つて自分を見まもっている供の人数へ、

「参るぞ」

すでに多聞たもんを出て、大手の唐橋を通っていた。

彼の宿舎は町の西端れで、小さい禅寺と隣地の一豪家を借りていた。寺坊には人数や馬匹をおき、秀吉はその農家の中二階ともいえるような所に起居していた。ここが気軽でいいというのである。

簡易な彼の旅営にしても、兵員は約七、八百名も連れてくる。——が、少ない方で、柴

田などは出陣そのままの装備と兵力を擁して来たので、無慮一万にちかい麾下を清洲に入れているだろうという噂であった。

宿へ戻るやいな、秀吉は、

「煙い煙い。窓を開けい。梯子口も開け放しでよい」

それと、暑さとで、桐紋の式服やら長袴やら、蹴るように脱ぎすてて、

「——風呂は」

と、早や裸体での催促だった。

もう宵の五刻だが、八百の兵員の炊煙はまだ濛々と旺であった。

ここの中二階の下の部屋には、堀尾茂助、一柳市助、木村隼人佑などの近衆がつめ、身辺の世話は、小姓たちが勤めていた。

隣地の寺坊の方にはなお、年長けた部将たちが兵と共にいたが、その中のひとり加藤光泰がこれへ来て、

「殿は、どちらに？」

と、さがしぬいていた。

裏の風呂場と分つて、光泰は廻って行ったが、豪家といつても、田舎家のことである。

板屋根の、それも壁も羽目もない吹きぬきに桶風呂一つすえてある所に、秀吉の首が、湯気の中に浮いている。

「——作内光泰にござります。何か、急に来いとの仰せの由、憚らずに参りましたが」湯の流れてくる垣の元にひざまずいた。

「作内か」

と、秀吉は見て、

「寺内の者どもは、今ごろ飯をくうておるらしいが、なぜ晩いのか」と、訊ねた。

光泰は答えて、

「城中に万一の變もあらばと、きよう一日中、みな案じておりましたので、殿の御無事なお歸りを知って、初めて炊煙をあげ出したわけにございまする」

「無用無用」

秀吉は湯から出て、小姓の石田佐吉に背中を洗わせながら、

「兵どもに、いらざる苦勞をさせるお汝らは、ちと拙ないぞ」

「はっ」

「兵には早う飯をとらせ、馬にも充分飼糧しりようをくれて、こよいは早目に眠らせておけ。——火の用心ぬかるな。時ならぬ沙汰あるも、すぐ打ち立てる心しておけや」

「かしこまりました」

「何している。蚊にくわれるぞ。……用はそれだけだ。はやく行け」

光泰は去った。

これはごきげんがよくないらしい。——佐吉はそう思いながら、小桶にすくった湯をおそるおそる秀吉の背にながした。

が、秀吉は、湯桶の中で、あくびを一つしていた。そしてその中で四肢の筋肉でもいっぱいに伸ばしているのか、ううむ——と鼻でうめいて、

「……すこし解けた」

と、二日の凝りこを啣かこっていた。

「蚊帳かやは吊ったか」

浴衣ゆかたを捧げた小姓たちが、

「吊っておきました」

「よしよし。お汝こたちも、早寝せよ。——詰つめの者にもそう申せ」

秀吉は蚊帳の中から云った。

戸は閉てられてあるが、窓は風を呼ぶためにあいていた。宵月のほの明りが揺れてくる。——と、眠りかけたかと思われる頃、

「殿……」

「なんじや。茂助か」

「はい」

と、堀尾茂助の声が外からいう。

「有馬法印が見えられて、そつとお目にかかりたいと申しておりますが」

「なに、有馬法印が」

「はやお寝みと申しましたが、それでもと、強つて申されますので……」

しばし、返辞がない。

秀吉は蚊帳のうちで、しばらく考えているふうだったが、やがて、

「では、梯子を上がつた所まで通せ。秀吉、ちと疲れ気味にて、お城よりさがるやいな、薬湯を飲んで臥せておりますれば……と断つてな」

「承知しました」

静かに、茂助の足音が、中二階の段を降りてゆくと、間もなく、ふたたび上がって来る人の気配が、その狭い板の間になぞくまった様子であった。

「筑前どのには、お寝みのようでございますが」

「オ。法印か」

「……どうぞ、そのまま」

「蚊帳の中に臥せつたままじゃ。無礼はゆるされよ」

「なんの。今、御近衆にうかがえば、お城より帰らるとすぐお茶を召されてお籠りの由。お案じいたしました、が、火急、お耳へ入ればやと、夜中を冒おかして参りましたので」

「何ぶん二日の会議で、心もいたため、体もちと無理をしたのでな。……が、夜中、急に来たとは」

「はい。……羽柴どの」

法印は急に声をひそめ、

「明日、御城内での、三法師さまお跡目立ちの御祝宴には、お出ましのおつもりでございまするか」

「さ。……何せい、きのうもきょうも、薬を服のんでは、忪こらえて来たような体の調子。多分、

暑気あたりかとも思われるが……さりとして、登城を欠けばまた、うるさかろうしの」

「左様に御気分のすぐれぬのは、それこそ虫の知らせというものでございましょう」

「ほう。……とは、なぜか」

「先刻、宴のなかばに、御退席なされましたが、あの後にて、柴田党の方々ばかりなお残られ、頻りと、秘事の談合です。——解せぬ色よと、前田玄以なども案じ申し、ひそかに窺いまするに……」

ふと、口をとじて、法印は秀吉が聞いているのか否かをたしかめるように蚊帳のうちを覗いた。

青い虫が、蚊帳のすそでキチキチと啼いていた。秀吉は依然、仰けに寝たままである。

「法印。——それから？」

「詳しい謀みはさぐり得ませぬが、あらましを察するに、柴田党の面々は、どうしても、筑前殿を生かしておけぬとしております。——で、明日の登城を機に、一室へ拉し、罪状の数々を拵え立てて、いやおうなく腹を切らせん。切らずば無下にも抑えて刺し殺さん。……それには、ああしてこうしてと、城内の兵のくばりから城下の抑えまで、残るくまなく、肚黒い密事を凝らし、しかも明日は、いとさりげなく、あなた様を清洲に待とうと

致しておるものにござりまする」

「ははあ……。怖いもう」

「実は、玄以がお告げに参ろうと、気を揉んでおりましたが、玄以がお城を出ては、人目につく惧れもあり、かくは法印がそつとお耳に入れにまいりました。……折ふし、御発病とあれば、これも天の御庇護、どうぞ明日の御参列は、お見合わせ遊ばしますように」

「さあ。どうしたものでらう」

「ぜひにも、お取り止めなされませ」

「ほかならぬ、新君の御祝事ではあるしのう。……が、法印、好意は謝すぞ。ありがとう」
降りてゆく梯子の登音へ、秀吉は蚊帳の中から掌を合わせていた。

離り

彼は、眠ることが上手な人であった。

眠ろうと思うときに、どこでもすぐ眠れるということはやさしいことのように実はむずかしい。

場所を問わず、また眼前の何事にもとらわれず、まつ毛をとじさえすれば、ごろりとなつても、物に倚りかかったままでも、すぐ寝られるのでなければならぬ。

しかも、ごくわずかな時を限つて、思いのままに、眼をひらくと、直ちに、百年の眠りから醒めたるごとく、頭脳も肉体も一洗されて、

いざい。

と立ちどころに、大事小事を、行く水のごとく処理してしまうというような習性は——習性というよりは、ひとつの禪である。

秀吉の絶倫な精力と健康とは、彼の「眠り上手」にもあるといつてもさしつかえなからう。

努めるともなく、これに慣れたのは、年少放浪の頃、家なき子として、草の上でも、荒寺の床にでも、いわゆる大地を褥としていた当時の賜ものと思われる。

——が、長じて、かつ世の指導的な一方に立つて、いかなる逆境や困苦の重圍にも煩わさるるなく、その少時の鍛練を、よく生かして、

即睡即覚

ともいえる悟道に近い妙生を身にもつようになったのは、彼自身がその戦陣軍務の

多忙と健康の必要から考え出したところの、ひとつの座右銘から得たものであった。

室町中期頃から、世上の騷乱そうらんあんたん暗澹あんたんたる半面に、心ある武門のあいだには、各がひそかに、

——われらは、これでいいのか。

という反省がよび起されて、その結果、武家の一門に、或いは、武士個々に、当時の座右銘ともいえる——家憲かけん、武士道訓、或いは、壁書かべがき——などというものが大に行われ始めて、その道義的風興は、戦国期に入つて、いよいよ磨みがかれ競きそわれているのであった。

で、秀吉にも、何かな日常の心養に、そういう座右の師語は幾つか心にあつたであろうが、彼がひとりひそかに珍重している座右銘は、むしろ路傍で会つたつまらない旅の禅坊主からふと聞いて忘れ得ないものとなつている——

離り

という一字であつた。

これが、彼の座右銘ともいえる護符ごふだったのである。

離り。はなれる——

何でもないようだが、彼の眠り上手のこつも離れ心であつた。

焦躁、妄想、執着、疑惑、早急——あらゆる事々のきずなをも、一瞬、両の瞼まぶたで断ち切つて、一切白紙の心になつて寝てしまふ。——また、瞬時にして、ぱつと醒さめる。

これが思うままにできるようになると、醒めるも快、眠るも快、百事、この世は快ならざるものはなくなつてくる。

のみならず彼は——彼とても巧うまい戦や思いどおりな計画ばかりではなく——ずいぶん周囲まに間の悪いような失策も度々だったのであるが、そんなときも、その失敗失戦にくよくよとらわれている風ふうは少しもなかつた。こんな場合、彼が胸のなかで思い出していることも、

離

の一字だつた。

よく人のいう臥薪嘗胆がしんしょうたんとか、一念没頭とかそんな程度の懸命は、彼にとっては、特別な心がけでなく、日々当然にしている生活だつた。——故に、彼にはむしろ、一瞬でも、それから離れて、大生命を息づかせる「離」の心がけの方がはるかに必要だつたのである。惹ひいては、生死ももちろん「離」一字にまかせていた。

わずかな間だつた。——半刻も眠つたらうか。

秀吉は起き出した。

階下の廁かわやへ降りてゆく。——と、すぐ詰つめの間の者が紙燭ししよくを掲げて板縁にひざまずいた。間もなく、彼が雪隠せっちんから出てくると、なおべつの一名は、小柄杓こびしゃくに水をたたえて待ち、傍らに寄り添うて、秀吉の手へ水をかけた。

秀吉は、手を拭きながら、軒ごしに月の位置をながめ、佐吉、助作の二小姓を顧みて、
「お汝ことらも、寝たか」

と、訊いた。

実は——眠る間などなかったのであるが、そういつては、きげんの良くないことを知っているの、

「はい。まどろみました」

と、答えると、秀吉は縁を五、六歩すすんで、その詰の部屋へ、

「権平ごんぺいも居るや」

と、直じかに声をかけた。

平野権平が、答えて出ると、秀吉は中二階のはしご段へ足をかけながら振向いて、

「寺中へ参つて、光泰に、出かけるぞと、合図して来い。——兵の分かちよう、道々の推す

行（行軍のこと）などは、夕刻下城のせつ、書きものに認めて、浅野弥兵衛に渡してあるゆえ、浅野弥兵衛について、さしずを聞けと申せ」

「はっ」

「待て待て。もう一言いいわすれた。大島雲八くもはちに、ちよつと来いといえ」

裏の雑木林から寺の方へ、権平の走つてゆく蹻音あしおとが遠ざかつてゆく。そのまに秀吉は小姓たちに介添かいぞえされながら、手早く鎧具よろいぐそく足あしを着けていた。

身支度みぢどさえすめば、さつさと先に出て、他の者に猶予ゆうよしていないのが彼の性分である。

自然、まごついている者は置き残されてしまう。けれど扈從こじゆうもよく馴れていて、秀吉の身世話は、刻々に顔をかえて行われ、支度のできた者が来て代ると、前の者が退いて、忽ち、物の具を引つかつぎ、われおくれじと、後について来るといったふうであつた。

宿の前は、伊勢路と美濃の往来になつている。秀吉は納屋なやの横を通つて、そこへ向つていた。

——と、さきに召しをうけた大島雲八みつよし光義みつよしが、よたよたと追いつがって来て、

「光義、参りました。御用の旨うけたまわを承りまする」

と、立ちどまつた人影の前へまわつてひざまずいた。

大島雲八は七十六の老武者であった。一子の茂兵衛光政は丹羽長秀に仕えていたが、この老父は早くから秀吉に傾倒していた。その持城が美濃の関にあった関係もある。

「老人か。御苦労御苦労」

秀吉はその老体をいたわりながら、雲八が若い者に負けず、早くも甲冑を着けて来たのに目をとめて、

「やれやれ、物の具までには及ばなかったものを。——頼みおく用は明朝のこと。お許は、後に留まっておれ」

「明朝。清洲のお城へ参りますので」

「それよ。さすがは年の功、よう察した。——筑前こと、持病に悩み、昨夜、にわか長浜へ帰国、残念ながら御祝事には列し難ければ、諸事よろしくと、城中へも、柴田へも申し入れておくのだ。……いずれは、勝家、一益などがくどくど申すであろうが、お許の耄碌こそ倅せ、耳の遠い顔して、何事も聞きながし、そのまま関へ立ち帰るがよい」

「お云いふくめの儀、よう分りましたござりまする」

老齢七十六の武者大島雲八は、海老のように曲った腰にも、なお一筋の槍は手離さず、一礼して立つと、大鎧にかためた身を重たげに旋らして、そこからゆさゆさとあとへ引つ

返して行つた。

山門前の往來には、寺中あらましの人数がもう出揃つていた。一旗一旗の指物さしものを目じるしとして、部隊は幾組にもわかれ、その組先には、各部将が馬を立てている。

火繩の火はチラホラしているが、一火の松たいまつも点じていない。

それに、その夜の月影も、いと細く。

並木つづきに、七百の兵馬は、渚なぎさの波のように、静かに、黒々と、たゆとうていた。

「弥兵衛やい。——弥兵衛やい」

秀吉は、呼ばわりながら、将士の列のすぐそばを歩いて行つた。並木の蔭なので、人影もさだかでない。わずか、六、七名をうしろに連れた背の低い小男が、竹の杖で地を叩いて通るので、小荷駄の組頭か——ぐらいにみな思つていたが——秀吉であつたと気づくと、さらに肅となつた兵馬が、彼のためにみな少しづつ馬蹄を避けた。

「あ。——弥兵衛、これにおります」

あなたの石段の下で、何か、一かたまりひとの人影へ向つて、さしずをしていた浅野弥兵衛は、秀吉の声に気づくと、早口にそれを終つて、こなたへと、駈け出して来た。

「いいのか。いいのか」

秀吉は、彼に、ひざまずかせる違も与えず、こう性急に云つて、

「——よかつたら出かけい」

「はつ。よいのです。——では光泰、先に立て」

弥兵衛は、後ろへいう。

うしろにいた加藤光泰は、

「では」

と、山門のわきに立てていた金瓢きんびょうの馬簾ばれんを預つて、列の中へ持ちこみ、自身もすぐ馬上になつて加わつた。

秀吉はそれを離れた。そして小姓たち数名と、堀尾茂助、浅野弥兵衛、その他三十騎ほどの者に囲まれて、山門から揺ゆるぎ出す兵列を見ていた。

貝を用うべきところであるが、貝の音も松たいまつ明いましも戒めてあるものらしく、浅野弥兵衛が、秀吉から金采きんさいを受けて、秀吉に代つてそれを一颯いっさつ、二颯、三颯——打ち振つた。それを合図として七百の兵馬は、先頭から徐々行進し始めた。

列の首端は、方向を一転、道を旋まわつて、秀吉の前を通つて行く。——各隊先導の部将には、生駒甚助同三吉の父子、中村孫兵次、山内猪右衛門、木下助左衛門、弟の勘解由かげゆ、小

西弥九郎、一柳市助など、いわゆる中堅の旗本のみだった。古参老練の顔があまり見えな
いのは、その多くが秀吉の城地たる長浜、播磨はりま、その他の占領地などに、なお残されてい
るものと思われる。

こうして、その夜半。

秀吉の人数は、あたかも、秀吉も共に、その主隊にあるかのごとく見せて、清洲の城下
を離れ、美濃本道をとつて、一路、長浜へ立つてしまった。

また、当の秀吉も、その直後、同じくここを去つたが、扈從こじゆうはわずか三、四十騎にす
ぎなかつた。しかも道はまったく別方面をとり、わざと津島を迂回して、まし江、いもら
の渡りなど、人も気づかぬ田舎をいそぎ、美濃の長松で一夜を明して、やっと長浜へ帰つ
たのであつた。

同夜、いや、もう翌あくる日といつてよい、ふつぎよう 払ふ 暁あけ だった。

柴田勝家の宿所と、附近の玄蕃盛政げんぼりまさの宿所などへ、どこから引き揚げて来た兵馬なの
か、霧や露に濡れびたつた夥おびただしい甲冑のなだれが、幾回となく隠れこんで、その後、市人
の目を惧おそれるもののごとく、門をとぎしていた。

「ぬかつたのう、玄蕃」

「いや、ぬかりはなかつたつもりですが」

「なかつたということがあるものかよ。どこかに手抜かりがあつたればこそ、せつかくな網の魚を、むぎむぎ取り逃がしたのであるが」

「だからこの玄蕃も、いわぬことではなかつたでしょう。討つなら討つと、初めから堂々と鼓を鳴らして、彼奴の宿所へ襲せかけるならば、今頃はもう二人のあいだに、秀吉の首級を置いて見ていられたものを。……それをば、叔父上が、やたらに、密かに密かにとばかり仰せられ、この玄蕃の策をお用いなさらなかつたゆえ、こんな無駄骨に終つたのでござる」

「若い若い。そちは下策を取つていう。わしは計の上策を思うのじゃ。——最上の策は、秀吉の登城を待つて、一室に監禁し、罪状を云いかぶせて、詰腹を切らせる。……これに如く良計はない。ところが、夜に入つて、細作（密偵）どもの告ぐるを聞けば、秀吉は急に宿を引き払つて、帰国する気配あり、夜立ちの動き見ゆ——とのことに、これはいかぬと思ひ直し、万一、彼奴が夜のうちに清洲を離るるがごとき場合あれば、むしろ天の与え、無断当地を離脱なさば、その罪を鳴らすにも名分の立つことと、急遽、そちに伏

兵の策をさずけて、途中において、彼奴を撃てといいつけたのじゃ」

「それがそもそも、叔父上の手落ちでござる」

「なんで、わしの」

「あの猿めが、こちらの思うつぼにはいつて、御祝事の今日、登城するだろうなどとお考えになつていたのが、不覚のひとつ。二つには、夜に入つて、それがしに、兵を伏せて途中で撃てとおさしずなされたはよいが、他の者にも、手勢をさずけて、本道以外の抜け道にも充分兵を配しておくべき当然な御用意が欠けていたのではございませぬか」

「たわけめが。——それくらいなことは、そちの一存でも、抜かるはずはあるまいと信ずればこそ、そち一名に申しつけ、他の将には、玄蕃の指揮によれとのみ、いうておいたのじゃ。……しかるに、本道のみを兵を伏せて、ついに秀吉を逸したことを、まるでわしの手落ちのようにぬかしおる。すこしは、己れの不つかも省みたがよい」

「……ではもうこのたびは、玄蕃の失敗として謝りますが、叔父上にも、以後は余りに、智謀を弄す癖はお止めください。智を弄す者は、智に溺れる。またせつかくの機を逸しまする」

「なんじやと。わしが智謀を弄ぶというのか」

「いつものお癖です」

「ば、ばかな」

「いや、世間でも、よく申しおりますぞ。——柴田どのお癖が出たといえ、又候、
底に底があることのようにみな用心して」

「……………」

白髪交じりの太い眉を重たげによせて、勝家はおし黙ってしまった。

日頃は、主従以上、親子以上、仲睦まじい叔父甥であつたが、狎るるに過ぎて、ひとつ蹉跌が生じると、ふたりの仲には、威令や尊敬を持つとうとしても持てなかつた。

何しても、この朝の勝家の渋面といったらない。

「複雑なる不機嫌」さである。生理的には、ゆうべは一睡もしていないし——それもあ
る。

玄蕃にいいふくめて、途中に兵を埋伏し、夜逃げの秀吉を急襲して、一挙に後の禍を
絶ち、ここ腹いっぱい溜っている鬱を晴らせるものと、夜明け方まで、

(今か。今に)

と、首を長くしていた吉報が、やがて戻つて来た玄蕃自身の口から、

(通つたのは、羽柴の家の中だけで、秀吉のすがたはその中に見え申さぬ。——秀吉も居ぬ行列へ、不意撃ちを仕掛けたところで、獲るものはなく、却つて、後日の不利と存じましたゆえ、むなしく引き揚げ申してござる)

とあつたので、勝家は夜来の氣づかれと共に、まったく心を腐らせてしまったものであつた。

その揚句は、玄蕃にまで、「いつもの癖」だとか「智を構えてみずから智にやぶる者——」などと、あげつらわれたのであるから、今朝の彼が怏々としてすぐれないのは無理もなかつた。

しかし、そうしてはいられない。きようは三法師の承祖披露しょうそひろうの祝日である。朝飯後、一睡一浴して、勝家はまた暑くるしい大紋烏帽子だいもんえぼしを身にまとつていた。そして、たてがみ飾りをした馬に乗つて城へ向つていた。

ひとたびは気を腐らせても、腐つたままにいるような柴田修理勝家ではない。きようは曇天となつて、暑さも一倍むし暑かつたが、途上の彼のすがたには、さすがに、清洲城下の何物よりも高いような威風があつたし、その面には胆汁質たんじゅうしつ特有なあぶらが光つていた。

ゆうべは——

甲かぶとの忍しのび緒おをしめ、鉄槍鉄砲を草むらに匍はわせて、秀吉の生命を道にうかがった猛者もさどもも、きようは烏帽子して、素襖すおう、小素襖こすおう、天てん正しょう袴かみしもなどを美しく着つらね、弓は袋ふくろに、槍やぎなた薙な刀たも鞘さやに、何くわぬ行ぎようそう装そうのもとに蛭えん蛭えんと城へさしてゆく。

柴田家ばかりでなく、丹羽、滝川、その他、諸家の列も、前後して登城していたことはいうまでもない。

きのうまで見えて、きようのみ見えなかつたのは、羽柴筑前の列だけであった。

「宿老。お待ちしていた。——筑州の代人として、老臣の大島雲八が、早朝より参つて。

——筑前守こと、病気のため、本日は不参とやらで、おわびの旨を三法師君へお届けに及び……柴田どのにもお目通りしたいとかいうて、最前から待つておるが」

滝川一益は、城中に勝家のすがたを迎えると、すぐそう告げた。

勝家は苦にがりきつて頷うなずいた。

念入りにしらばくれている秀吉よと、肚はらには怒りながら、彼もまた、とぼけた顔して、使いの大島雲八を引見いんけんした。

そして、秀吉の病気とは何病であるか——とか、急に帰国するならば、なぜ昨夜のうち

にわが宿所へでも沙汰してくれぬか。さすれば自分もすぐ出向いて病状を見舞い、諸事打ちあわせも遂げたのに。……などと意地の悪い質問のみ発したが、老来、至って耳の遠い大島雲八には、その半分もよく聞きとれないらしく、

「はい。はい。……さればで。いかにもな」

何をいつても、馬耳東風ばしとうふうである。そして独り合点を繰り返しているばかりの相手だった。

まるでのれんに腕押しである、とは思いながら、勝家は、表向き重大な使者に、こういう耄碌武者もろくを向けて来た秀吉の底意にたいして、何とも業腹ごうはらでならなかった。

いくらなじつても、なじりがいのない相手ではあったが、その業腹の余憤よぶんをもって、立ちがけにこう訊ねた。

「使者。——いったいおぬしは、幾歳いくつになるのか」

「さればで。……はい」

「年をきいておるのじやよ。——おぬしの年齢を」

「御意で」

「なに」

「はははは」

まるで擲揄やゆされているような気がする。憤むツとした顔を雲八の耳のそばへつき出して、勝家は破れ鐘かねのような声でいった。

「汝われは、今年、何歳に相成るか。——そのことを訊ねておるのじゃ」
すると雲八は、大きく何度もうなずいて、しかも暢のんびり答えた。

「ははあ。それがしの年をおたずね給わつてか。世に聞ゆるほどな武功もなく、お恥かしいことでおざるが、当年七十六になり申す」

勝家は唾然あぜんとした。

きよようの多忙を目の前に、しかも一日も晏あんじよ如たるは得ない刻下こつかにあつて、こういう老人をつかまえて癩かんを尖とがらせていたことの何たる愚ぞや——と自嘲を覚えるとともに、秀吉にたいする敵意は、俱ともに天を戴かざる者とまで誓われていた。

「立ち帰れ。もうよい」

顎あごを振つて、促うながしたが、雲八は腰へもちでもつけたように落着きすまして、

「何ぞ。御返書でもあらば」

と、勝家の顔をおつとり眺めこんでいた。

「宿者はどこにおいでか。北ノ庄殿には、どこにおわすか」

そのとき誰やら、自分をさがしている声があったので、勝家は、それを機しおに、

「ない、ないっ。返辞など、何も無い。いずれ会うところで会おうと、筑州に伝えておけ」
云いすてて、廊下も狭しと歩いてゆく彼の大紋姿は、本丸の方へ去ってしまった。

大島雲八も廊下へ出ていた。老いの腰に片手をあてて勝家の影へ振り向いているのである。やがて独りげたげた笑いながら、これはお表の方へ歩いて行った。

その日、三法師の祝事は終った。

さらに、きのうに勝る盛宴がそのあとで催された。新君たいりゆう戴立の披露というので、席は城中の広間三カ所でひらかれ、人はきのうに数倍していた。座間、もっぱら話題にのぼったのは、羽柴筑前守こそ怪けしからぬということだった。仮病けびょうをかまえこの大事な日に欠席するなど、言語道断、彼に真底からの忠なく信もなきことは、はやくも今日に見えたり——という者などあった。

勝家はみずからなぐさめた。

（秀吉が帰国したことは、考えようでは、却つて、この勝家に有利であつた）——と。

この紛々ぶんぶんたる秀吉非難が、滝川や佐久間などの徒さくの作為さくいから生じたものであることは、充分、承知していたが、勝家はなお、この空気をもって、爾後じごの形勢けいせいを卜ぼくす上に、自己に

有利なものとして、強いてひそかにほくそ笑むの小快感をむきぼっていた。

会議、月の忌、祝日と、多事な日がつづいたあと、清洲は、毎日の大雨だった。

諸侯のうちでも、細川、蒲生、池田などは、祝日のすぐ翌日、帰国の途にいたが、爾余の諸侯は、木曾川増水のため、足どめにあい、

(きようは？ 明日は？)

と、霽れを待つて、なお無為な日を宿所に過ごしているほかなかった。

が、この無為は、柴田勝家にとつては、あながち無意義でもなかつたらしい。

彼と神戸信孝との間には人目立つほど日々往き来が交わされていた。

といつても、こう二人の頻繁な会合が、直ちに、政治的な意味をふくむものとは云い切れない。——なぜならば、今は勝家の愛妻として、世にかくれないお市の方は、いうまでもなく、故信長の妹であり、信孝には、叔母にあたるひとである。

しかも。——近年のことにはなるが——そのお市の方を説き、信長にも乞い、彼女を勝家の室へ再嫁させることに運動した者も信孝であった。こうして信孝と勝家とは、その頃からすでに単なる姻戚以上の関係にあり、いわば切つても切れぬ仲だったのである。

で、そう二者の往来が、二者のあいだに止まってしまっているなら、世人も何らこれを疑う理由もあるまいが、ふたりの会合ごとに、必ずそこには滝川一益も加わっていることが記憶されるについて、

(また何のお顔寄せか)

と、意味ありげにそれを見、

(秀吉退治の相談が、ぼつぼつ進んでいるものとみえる)

などと早くも、不穏なうわさと、その実現が、この夏中にもあるようにいわれ出していた。

折も折、その月の十日に、滝川一益は、宿所の待月軒たいげつけんに釜をかけて、朝茶の会の招きを諸侯へ出した。

趣旨には。

頃けいらい来の長雨も霽はれ、各にも近く御帰国と思わるるが、兵家の常、またの再会はいつとも測はかり難い。先君をお偲しのびいたしながら、朝露のまに、粗茶一ぷくさしあげたいと思う。長い御滞在で帰途もおいそぎの折ではあろうが、御来駕を待ち申しておる。

——というのであつて、至極、あたりまえな催しに過ぎなかつたが、

(さては、密々の軍議でも?)

と、その朝の出入りには、特に清洲の人の目がそばだてられた風だった。

朝茶には、蜂屋はちや、筒井、金森、河尻などが参会した。信孝、勝家のふたりは当然お正客であつたらう。——しかしこの催しが、趣旨どおりな茶事であつたか、密事であつたかは、当日の主客以外、窺うかがい知るすべもない。

同日以後、これらの諸将も、やがてみな帰国した。そして柴田勝家は、さいごの十四日夜、越前への帰国を発表し、十五日朝、清洲を立つたが、木曾川を渡つて、美濃みのに入るやいな、自己の予感と、途上の風説との一致に、愕然がくぜんたる脅威きょういにさらされた。

(垂井たるいから不破ふわの山間の通路を扼やくして、秀吉の精兵が長浜を出て、昨夜以来、勝家ござんなれと、待ちかまえている)

と、もつぱらな噂なのだった。宿駅でも聞かしくし、旅人もいうし、物見もそう告げて来るのである。

おおものみ
大物見

さきに、秀吉の帰国の途を襲おうと謀つた勝家が、きのうと立場を逆にして、今日は自身の帰国に、薄氷でも踏むような途を、みち 恟々きようきようと歩まねばならない羽目にいたつていた。彼が、越前へもどるには、どうしても江州長浜ごうしゅうながはまを通らなければならぬ。長浜には、先に帰つた秀吉がいる。秀吉がだまつて彼を通すか否か？——これは大きな疑問としなければなるまい。

(滝川一益の領地を通過し、伊勢から鈴鹿すずかを越え、江州の西を廻つて御帰国なされては……)

という意見は、清洲を立つ前からあつたが、それでは、世上にたいして、みずから、秀吉を恐れるものと触れあるくようなものにならう。勝家としては忍び得ない恥だ。玄蕃げんぱも盛政りまさとてもとより同意するはずもない。

しかし事実の問題として、美濃路に入ると、面々は一歩一歩、「彼方の山に、伏兵の気配はないか。彼処かしこの煙は、敵勢ではないか」

と、前後に心を疲らせたり、情報の確かめられるまで行軍を駐めたり、隊伍を戦闘形態に改めたりなどして、寸時も、万一の変を思ふことなくしては進めなかつたのである。ところへ。

秀吉の麾下らしき一軍が、不破附近に見えるといい、見たという噂なので、勝家以下、柴田幕下の輩が、馬上、身の毛をよだてて、

「来たか」

「——居るか」

と、ゆくてに待つ敵の量や策を想像して、忽ち、墨のごとき殺気にまみれたのはむりもない。

にわかには、揖斐川でまえの牛牧附近に兵馬を駐めた。そして勝家と幕僚たちは、村社のある林の中で、

——当るか。退くか。

を急に軍議した。

ひとまず退いて、あくまで清洲城と三法師を擁し、秀吉の非を鳴らして、諸侯を糾合してから堂々とそれに当るのも一つの対策。

また、ここにこれだけの軍勢はあり、何の鎧袖一触と、一気に蹴ちらして押し通るのも武門の快。

結果を考えると、前者は攻略戦に多く拠ることとなり、後者をとれば、即戦即決だ。――

―或いは一挙に、秀吉を挫き得るかもしれぬ代りに、味方にとつても、万一の敗れなしとはいえない。

なぜならば、関ヶ原以北の嶮隘な地形は、埋伏して待つものにとつては甚だ都合がいい。加うるに、いったん長浜へ引き揚げた秀吉の手勢は、きのうの如き寡勢でないことはもちろん、江南から不破や養老地方には、小城、土豪、散在のさむらいどもまで、羽柴家と気脈のある者が多く、柴田家に縁故の者といつては稀れである。

「どう思案するも、ここで秀吉に当るのは、策を得たものではない。彼奴が、一日早く帰国したのは、この有利に立つためであつたのだ。その注文に乗って戦う不利を敢えて冒すべきではない」

勝家や老臣の考えはこれに傾いた。それにたいして、玄蕃盛政は、あざ笑つた。

「それ程、秀吉が恐いかと、世の笑いぐさになるのもお覚悟ならば、左様になさるがよろしかろう」

いつの軍議の場合でも、退くという意見は弱い。進むという意見は強い。結果の如何をべつにして、その場の氣勢において、一方は消極に見え、一方は積極に見える。

殊に、玄蕃の意見は、幕僚を左右する力があつた。彼の比類なき武勇、一族中の地位、

それに勝家の寵ちようというようなものも言外に作用する。

「一矢いっしも交まじえず、敵を見て退くなどということは、柴田家のお名折れでしょう」

「まだ、清洲から立たぬうちなら、ともかくのこと」

「玄蕃どののいわるる通り、ここまで来て、引つ返したと聞えては、末代、世上のわらいぐさだ」

「一戦の上で、退くまでも」

「なんの、猿の手下どもが」

若い武者輩はらは、口をそろえ、玄蕃のことばのあとから玄蕃を支持した。

ひとり黙つて、口を発しなかつたのは、毛受勝めんじゆしやうすけ助家照ぐらいなものだった。

「勝助は、どう思う」

めずらしく勝家が彼に意見を求めた。——日頃、玄蕃のようでなく、何となく主君から疎うとまれていることを知っている勝助は、常に口数を慎んでいるふうであつたが、このとき、「されば、玄蕃どのの御意見、至極と思われます」

と、神妙に答えた。

血気はみな、戦意に燃えている中で、若いくせに、水のように冷ひややかでいる勝助の容ようす子

は、勇に乏しく、ただこの場合、ぜひなくそう答えたように見えた。

「勝助までが、左様にいうなれば、玄蕃の意にしたごうて、このまま、押し進むといたそう。——が川を打ち越えたら、直ちに、大物見を出し、うかつに、道を急ぐな。足軽多くを先に立て、槍隊をすぐ続かせ、鉄砲組は、後陣の先へ置き。——伏兵の起る際は、得て、鉄砲は近すぎて、咄嗟の用にはたたぬものよ。——敵ありと、大物見の合図あらば、すぐ押太鼓を鳴らし、寸毫すんごう乱れをみせるな。組頭どもは、勝家が麾きの手もとに眼をあつめよ」
方針はきまつた。

人数は、揖斐川いびがわを渡り出した。

何事もない。

赤坂方面へとなお進む。

敵影まだ見ず——である。

大物見（斥候隊）は、ずっと離れて、垂井たるいの宿附しゆく近まで出ていた。この辺にも何の異状も認められない。

旅人が来た。

怪しいと見、すぐ物見の一兵が駆けて、つかまえて来た。物見頭おとが脅して訊ねた。旅人

は、何でもしやべった。脅したのが張り合い抜けするくらいである。

「羽柴様の御人数を途中で見たかと仰つしやいますので。……へい、たしかにお見かけいたしました。今朝早く、不破の辺で。——それから、自分は遅れて、たった今、垂井を通つて来ましたが、垂井の宿は、先に行った羽柴様の人馬でいッぱいでございました」

「人数は、どのくらい？」

「わかりませんが、何百という御同勢で」

「何百？」

物見は、顔を見合わせた。その男を突つ放して、すぐこれを後方の勝家に伝令した。

案内な——と思われた。敵は余りにも小兵力だからである。為に、なおさら危惧きぐされたが、騎虎きこの勢いだ。押せと、行軍をつづけて行つた。——時に、彼方から羽柴家の使番がただ一騎でこれへ来るといふ報らせがあつた。

やがて近づくを見れば、その一騎は、甲かちちゆう 冑ゆうの武者ではなかつた。紗しやの摺すり箔はくの小袖、藤色の天てん正しょう袴かみしも、手綱よそおまで装よそおいをこらし、目を奪うような姿の若者であつた。

「御案内をいただきたい。それがしは羽柴秀勝はしはひでかつ様の近侍伊木半七郎です。——お使いに参りました。北ノ庄殿の御前まで」

途上、はたと出会った大物見の武者たちへ、駒の上から会釈して、半七郎はもう駈け抜けてゆく。

大物見は、あつ気にとられた。物見頭ひとり、何か狼狽した声をかけながら、半七郎の駒の後を転ぶように追いかけた。

柴田勝家と幕僚の一群は、

「何者か」

と、猜疑さいぎの眸めをあつめて自己の陣列にこの若者を迎えた。

眼前に、一戦は必至と、われとわが殺気に昂たかぶり立っていたところだけに、駒を降りて楚々そそ、慇懃いんぎんな礼をしつつ、静かに進んで来た伊木半七郎の優美な身なりが、あたりの鉄槍や火繩のにおいに比して、妖あやしいもののようにまで眼をひいた。

「丹波殿の近侍というはまことに解せぬが。——ともあれ、連れて来い、会ってみよう」
勝家は路傍の雑草をふみこえて樹蔭の下へ寄った。そこへ床しょうぎ几を置かせ、物々しい塵き下かの——いや彼自身の硬ばった緊張をも一先ひとまず潜ひそめて——

「何事のお使いかの」

と、さあらぬ容子を使者に示し、その使者へも、まずと、床几を与えた。

「この暑中、遙かまでの御帰国、おつかれでございましょう」

半七郎の言は、まるで平時の挨拶であつた。そして、紅くれないひもの紐で、胸に懸けていた文笥ふばこをとり外はずし、

「筑前守からも、よろしくとお申し伝えてございます。なお、詳しくは、御書中にと、勝家へそれを手渡した。

勝家は疑つて、なお書面はすぐ披ひらきもせず、まじまじと半七郎を見てたずねた。

「お身は、丹波どのの近侍と申すが」

「はい」

「丹波どのには御健固かの」

「おすこやかにいらせられまする」

「御成人なされたらうな」

「はや、十五歳にお成り遊ばされます」

「ほ。もうそうなられるか。——早いものよな。久しゆうお目にかからぬで」

「今日は、お父君のおいいつけを奉じ、垂井の駅までお迎えに参られておられます。後刻、お宿において悠々ゆるゆるお話し下されませ」

「な、なに……？」

勝家は、吃どもつた。

床凡の一脚が、小石を噛み外して、彼の重い体と一しよに、心までを、がたと驚かしたのであった。

いうまでもなく、羽柴丹波守秀勝は、信長の子の末のほうの一いちなん男だったが、幼いうちに、秀吉が乞うて、養子としていた者である。

「迎えにとは、誰を？ ……誰をな？」

勝家は訊き直した。

「もとより、あなた様を」

半七郎は扇面を顔にかざして笑った。相手の瞼まぶたや唇くちびるが余りに複雑な瘰癧けいれんをしてやまないので、微笑を泳こらえきれなくなったものとも見える。

「わしをな？ ……この勝家を迎えにとな」

勝家は唸うめきつづけていた。

「まず、御書面を。——御一見くださいませ」

半七郎は、促うながした。

茫然たる余り、勝家はそれをすら、手にしたまま忘れていた。

「いや、そうか。……ウム、ウム」

何か、わけも分らぬ領うなずきをくり返した。勝家のひとみは、文字を辿たどり出すと、なおさら心理の変化を、露骨にまで、顔じゆうに湛たえ出した。

書面は、秀勝からではない。まぎれなき秀吉の筆だ。そして、率直に、こういつている。——江北から越前への道すじは、度々、お通りの地で、御不案内はなかうと存ぜられるが、このたびのみは、養子の秀勝を、御案内にさしむけた。

とるに足りない世間のうわさであるが、わが長浜が、尊公の御帰国の足もとを取るに絶妙な要地にあるため、世上とかくの臆おくそく測まが撒かれておるらしい。そういう卑劣ひれつな風説を打ち消すために、養子秀勝を、お迎えに上げたが、これを取って、質子ちしと召され、安心して、御通過をねがいたい。

一夕、長浜で酒茶でもあげたいが、あれ以来、筑前事なお病中にござれば、御道中のおつつがなきのみを、蔭ながら祈り申しておる。

使者のことばといい、またこの書面といい、勝家は自分の猜疑さいぎや小心をかえりみずにいられなかった。何か、あんぐりと、秀吉の腹のなかへ呑まれたようなこころもする。——

が、ほつとした。正直、ほつとした思いである。彼は以前から策略家と観^みられて、何かやるとすぐ「また、柴田どののお癖が出た」といわれるほど陰謀に富むかの如く定評されているが、今、こんなときの感情をさりげなくつつむことすらしないほど事実は正直者であった。——こういう性情は、死んだ信長がよく見ぬいていて、その勇も、その謀^{はかりごと}も、その正直さも、みな勝家の特徴として巧みに使いこなし、北陸探題の重任をも、多くの将士をも、また宏大な領土をも授けて、もつて、充分な信頼をもかけていたものなのである。——最もよく己れを知ってくれていたその主君も今はなしと思う彼の心事には、もはや本当に信をつなぎ得る者はたれもないような気持でもあった。

ところが、今ふと、秀吉の書面にふれて、彼は、この日までの、秀吉に抱いていた感情を、一瞬、まったく覆^{くつがえ}された。すべては自分の邪視^{じやし}と、小心によるものだったと、正直に反省した。そして、

(故君のないこの後は筑前守こそ、信じあつてゆける男だ)
と、偽りなく考え直した。

この考えは、その夜、垂井の駅で、親しく秀勝に会って、楽しく語り、また翌日、秀勝とともに、相^{あいたすさ}携^たえて、不破を越え、長浜の城下を通るまでも変らなかつた。

——が、その長浜で、自己の重臣たちを添えて、秀吉の城門まで、秀勝を送り返してか
らすぐ後になると、ふたたびぐらつき出していた。

というのは、秀吉はもうとく長浜にはいないことが分つたからである。秀吉はあれ以来、
京都へ上つて、中央の枢機すうきで大いにごういている。また、山城の宝たから寺でらの城をも大改築
にかかっているなど、勝家の耳には毒のような取り沙汰が、頻々ひんびん、聞えて来たからであ
った。

(かくては、またも秀吉にしてやられん)

と、彼は忽ち元の焦躁しょうそうに返つて、さらに帰路を急いでいた。

大五だいごと書かけ

七月の下旬。

秀吉はかねての約束を履ふんで、長浜の城地を、柴田側へ明け渡した。

柴田側でも、その際、秀吉から付せられた条件を履行りこうして、秀吉の希望による勝家の養
子——柴田勝豊をそれへ入れることにした。

勝豊は、養父の命によつて、越前坂井の城から、長浜へ移つた。

なぜ秀吉が、

(勝豊を入れるならば、長浜を譲つてもよい)

と、清洲会議のときに言明したかを、愚かにも勝家は、まだ気づかずになっていたのである。

いや、勝家ばかりでなく、その周囲も、世間一般も、何らこれを異として、ふかく秀吉の心事を窺^{うかが}つてみる者はなかつた。

そのくせ、次の事實は、およそ柴田家の一族で、心ある者どもは、みな憂いていることだつた。

(御養父と御養子とのお仲が、あのようにお冷たくては、柴田家の末も案じられる)

勝家には、もうひとり、ことし十六になる養子があつた。

柴田権六勝敏だつた。

情愛にも、日常の感情にも、とかく偏^{へん}しやすい性格の勝家は、

(勝豊は因^{いん}循^{じゆん}で、はきはきせぬやつじゃ。子のような気心がせぬ。それにひきかえ勝

敏は、邪気もなく、飽くまでわしを父としてよう馴^なつきおる)

これを、口にもいふのである。

けれどなお、その氣に入りの勝敏にも増してもっと偏愛へんあいしていたのは、甥おいの玄蕃盛政げんぱだった。

玄蕃を愛することは、甥とか子とかいうものを越えて、

「甥めは、わが家の至宝じやて——」

と、その凡情ぼんに溺るるような傾きさえあつた。

従つて、玄蕃につながる弟の久右衛門安政や三左衛門勝政などまで、よく目をかけて、まだみな二十五、六の若さであるのに、各へ要地の一城一城を持たせていた。

これらのお覚えめでたい鍾愛しょうあいの親臣中ひやにあつて、ひとり養子の勝豊のみは、養父からも忌まれていたし、佐久間兄弟からも冷やかに視みられていた。

或る年の正月のごとき、親臣の輩が揃つて勝家の前に年頭の祝いをのべに出た際、勝家から最初の盃がさされたので、勝豊は、当然、自分に向けられたものと思ひ、

「お盃、めでたく戴きまする」

と、謹んで膝を進めかけると、勝家は膠にくなく手を逸そらして、

「そちではない。——玄蕃、受けい」

と、彼へ先に与えて故意に、勝豊を後にさし措おいたりなどしたこともある。

このことは、勝豊の不平として、外部へまで洩れていたから、他国の隠密なども耳にしたりうし、従って、秀吉なども這般しやはんの消息には通じていたにちがいない。

その柴田勝豊へ、長浜を譲り渡すためには、秀吉は事前に、従来ここに住ませておいた家族たちを——老母や寧子ねねなどを主とする家庭の老幼を——他へ移さなければならなかった。

「冬も暖かいし、内海の魚もある。しばらくは、姫路ひめじがよからう」

と、秀吉のさしずには、老母や彼の妻は一家をあげて、播磨はりまの持城もちじろへと引き移った。が、秀吉は行かなかつた。この間、寸暇もなかつたのだ。

山州さんしゅう 宝寺の城を彼はしきりに改築していた。山崎合戦の際には、光秀が牙城がじょうとしていたところである。ここへ母や妻を入れなかつたのも、彼には深慮のあることだった。

山崎の宝寺城から、彼は隔日のように京都へ出向いた。帰っては、工事を督し、出ては中央に政務を見ていた。

皇城の守護も、市政も、地方の經綸けいりんも、彼はみずから身をもって任じていた。

本来、清洲会議での決議では、この京都政治まつりごととこころ所の閣臣かくしんは、柴田、丹羽、池田、羽柴の四人がひとしく庶政しよせいを宰さいすることになっていて、決して、秀吉のみの中央舞台で

はあり得ないのであるが、柴田は遠く越前にあつて、もつぱら地方的勢力の結集と、岐阜や伊勢やまた、神戸信孝などと何やらの暗躍あんやくにせわしく、丹羽は坂本の近くにあつても、これはすでに秀吉に一切を一任のかたちでいるし、池田勝入は軍議ならともかく、庶政とか、公卿づきあいなどは、

(本来、わが才に非ず)

として、名目はあつても、関かかわらざるを潔いさぎよしとしているような風であつた。

その点では、秀吉は実に器うつわであつた。

生れながらの彼の能は、何よりも経綸にあつたのである。今なお世人は彼を目するに武将として観みていなかつた。

本来、戦いくさは彼の本技ではない。しかし戦は経綸の車軸であることを知っている。いかなる大理想をかぎそうと、戦にやぶれては、その大経大綸も一尺として進み出さないことをよく知るところから、彼は、戦に絶対を賭とし、ひとたび戦陣ひらを展げば、権化ごんげとなつて、戦いを戦い切るのであつた。

京都は盆地の小山水に過ぎない地だが、政治的には、全日本を俯瞰ふかんするに足る所だし、思想的には、草莽そうもうの心の根こころいこという根は悉くここにつながっており、ここを根としていな

い家々なく華々はなばななしである。

なおまだ、一介いつかいの奉公人にすぎなかったが、秀吉は、京都政治所とする日々の時務が実に楽しかった。忙しければ忙しいほど楽しまれた。その頃、彼が左右の者に、

(この筑前にも、時来つて、ようやくほんとうのお勤めが与えられて来たようであるぞ。

お汝ことらも心せよや)

と、本懐ほんかいのほどを洩らし、同時に側臣たちへも精勤をうながしたとのことであるが、

春潮み盈ちて船出を想うような彼の心事は、まさに、成るも成らぬも、われ世に会せりとして、時代に結ばれたる身のいのちを、今さらのごとく驚歎の眼で省かえりみていたにちがいない。

従つて彼の部下も京都にあつては著しく人品を磨いていた。いやしくも恥あるを行わなかつた。時務は私心なくきびきび決裁した。箇々が小秀吉のごとく明朗だった。わけて皇城の守護には、誇りをもって任に当つた。

朝廷は、彼の武勲を賞して、右近衛中将たるべしと御沙汰あらせられた。彼は寸功すんこうを顧みて拝辞した。が、かさねて優渥ゆうあくな御沙汰を賜うて、従五位下、左近衛少将に叙任じよにんせられた。

よいことをする人間と見ると何か悪いけちをつけたがる。正しく働く者にたいし、卑屈

な働かぬ者が何のかのとあげつらう。

いつの世にもあることだ。大きく世の変動しているときは特に清濁せいだくの飛沫しぶきもはげしい。

「秀吉は早や専横せんおうを現わしおる。部下どもまでが、権をとつて」

「柴田どのをさし措きお、他の奉公人など、有るか無しじや」

「きようこの頃の羽振を見れば、まるで、信長の相続者は、筑前にて候といわぬばかりな……」

翁きゆうぜん 然ぜんとして、非難は彼を中心に喧やかましい。——が、誰がという、火元の弾劾だんがいしゃ者の知れないのも、こういう場合の常である。

聞えても、聞えなくても、秀吉には頓着がない。そういう陰性の声は彼の多忙な心はおろか茶間さかんの耳を傾けさすにも足りなかつた。

何しても忙しいのである。

六月、信長逝き、中旬、山崎に戦い、七月、清洲に会し、下旬、長浜を撤去てつきよし、家族を姫路に移し、八月、宝寺城の工を起し——この間、京都政治所と山崎とのあいだを隔日に往来しつつ、朝あしたに禁闕きんけつに伏し、昼に市井を巡察し、夕べに庶政しよせいを見、答使とうしを発し、賓客を迎え、夜半の燈下に遠国の文書を閲し、払暁、部下の訴えに裁決を与えて、飯を嚼

み噛み一鞭またどこかへ出かけてゆくというような毎日だった。

行く先も頻りと多い。

公卿の第宅ていたく、会合、視察、そして近來は、紫野むらさきのへと度々出向く。

そこでも尫ぼうだい大な工事をやらせていた。寺である。大徳寺の地域のうちに、新たにもう一寺を興おこしているのだった。

「十月の七日までぞ。八日には掃除片づけを終り、九日には式事一切の調ととのえをすませ、十日の朝方には何もすることないようになしておけや」

蜂須賀彦右衛門と弟の羽柴秀長にはかたくこういつてある。何の工につけ、期限は二言とないものだった。

やれ、といわれたら、否といえず。はい、と受けたら、爾後じごの云い訳はゆるされない。

秀吉のすがたが見えても、ここの奉行や督とくれい励れいしている侍たちは、彼をふり返る者もない。また、何千の木工、土工、左官、石工いしく、あらゆる工匠たくみや人夫たちも、一顧いっこしているすきもなかった。

秀吉は、かんな屑を、足にからませながら、そこここと、木の香のあいだを一巡し、「できる。できる」

独りつぶやきつつ上機嫌に馬へ移って立ち帰ってゆく。帰るや否、そこにも訪客や政務や——また、今とりかかっている総見院こんりゆう建けん立りゅうと、故信長の葬儀準備の用向きが山積して待つている有様だった。

「由己ゆうご。はようせい」

「はい」

「認めしたたたらすぐ、使いを走らすのじや。文言はぎつとでよい。はやく書け」

「はっ」

祐筆ゆうひつの大村由己は、今、秀吉の口述をうけて、一書を代筆していたが、ふと、醍醐だいごという文字をどわすれして、頻りと、筆の穂を噛みつつ思い出そうとしていた。

秀吉は焦しれたそうに急せいでいたが、横からのぞいて、それと知ると、

「由己ゆうご。何しているか」

と、寝ている者でもよび起すように、

「大五と書けやい」

と、呶鳴りながら、手をもって、虚空こくうへ大きく、大の字と、五の字を書いて見せた。

大村由己は、驚いた。

醍醐と、大五では、まるで字がちがう。

宛字あてじにしても、ひどすぎる。醍醐を——大五と書いたのでは、てんで意味をなさないではないか。そう思った。

「……は。恐縮にござります。……がそんな文字ではございませぬ。どわすれいたしましたのは」

「何をまだ。……これ由己。そちが先程から眉をしかめて思い出そうとしているのは、だ
いごと申す文字であろうが」

「御意で」

「じゃからよ——」

と、秀吉は、ふたたび指をもつて、空間へ手習いするように大きく書いた。

「大五と書け。それで分るではないか」

「……はっ、はい」

ぜひなく、急せかれるまま、由己はそう書いて、代筆の書翰を終り、秀吉はすぐ、それを小姓の手から、使番に持たせて、公卿の邸へ走らせてやってしまったが——由己は何とも後味が悪くて、

(さだめし、あの手紙をうけた人は、無学にも程があると、嗤わらっているだろう)
とか、

(祐筆ともある自分が、いかにも物を知らないようで、末代まで恥かしい。何とかして、あの手紙をもらい戻して、焼いて捨てたいものだ)

とか、いつまでも、恋れんれん々々とこだわって、気にかかる顔をしていた。秀吉はたくさん客に会い、また以来不沙汰の毛利家へ、その夕、使いを出したりしていたが、煩事はんじ一掃のあと、やつと由己をあいてに一盃いちわんの茶をのみながら、

「どうした？ 由己」

と彼のすぐれない顔つきを質ただした。由己も、こういう時ならと、彼の気色を察して、先刻の、無茶な宛字の愚痴を述懐すると、秀吉は、途方もない声して、いつまでもおかしがった。

「なんじゃあ？ 祐筆の身として、あのような無学な書面が残っては恥になると。……はははは。由己よ、そちでも、自分の筆蹟が、千年も世に残ってゆくと思っておるのか。安心せい、お汝ことあたりの筆では、まず百年も世にあるまい。おまえが生きている間だけでもどうか？ ……よくしたもので、世は滔とうとう々と、無用の文字は塵ちりに流して余しはせぬよ」

そしてまた、云った。

「お汝ことらのように、醍醐とは、こう書いたやら、ああ書いたやら……などと首をひねったり、筆の穂をなめたりして、この多忙な一日を暮しては、何と、今日のように、日月も世情も、車輪のごとく早く移り変わりゆく時勢にあつて人じんじゆいちだい寿一代の限りある身を持ち、いったいどれほどな業ができると思っておるぞ。秀吉には到底、そんな暇はない。——醍醐と書くべきところを、大五といたしても、たいがい、書面をうける方の者には、読み心があるゆえ、用向きの見当はつくであろう。……それでいいのだ。今の世はな」

「なるほど。承れば、まことにごもつともで」

「苦しゆうない。あれでいい。——見ろ、もう最前の使いが、どうやら返辞を持って帰つて来たらしいぞ」

こんな日常の心事だった。大村由己はまもなく、故信長の葬儀を紫野に執行のため、織田有縁うえんの近親や諸州の遺臣に、その期日参列の場を報ずる会状の代筆に多忙を極めた。

むらさき野の

何か盛儀が行われれば洛中洛外は賑わい立つ。そして労銀が下層にまでゆき渡るほど、町々の灯や炊煙けむりにも、庶民の謳歌おうかがあらわれてくる。

この秋。紫野において執り行とわれるという故信長の葬儀と十七日の大法事は、どれほど貧しい者たちに、事前の布施ふせとなつたかしれなかつた。

六月以来、本能寺、山崎と打ちつづいた戦乱に、家を失い、職に離れ、なお屋根も壁も持たない人がたくさんいた。

討ち洩らされた明智部下のうちには、領主の代つた丹波へ逃げ帰るよしもなく、すがたを変えて、市の裏や橋の下に、日の目も見ず、流民となつて潜んでいる者もおお少なからずあつた。

捕え尽すはいとやすいが、秀吉はそこまでの詮議せんぎだてはしなかつた。光秀の首級ひとつに一切の解決を負わせ、時の彼方に投げやっていた。のみならず、戦後の窮民とそれらの者をひつくるめて、これに、更生の仕事を与えた。

総見院そうけんいんこんりゆう建立と、信長の葬儀とが、それだつた。

「これも、御供養ごくようのひとつ」

と、彼はひとり呟つぶやいた。

信長の攻めるところは草木も枯れる——と恐れられたその人の冥福の営みをいまなそうとするに当って、秀吉はみずから、故主信長と自分との性格には、戦いくさをするにも、経綸けいりんを行うにも、必然な相違があつたことを、あらためて思いみずにいられない。

近頃、世人はややもすると、秀吉のやり口を評してこういう。

（筑前は、何事にも、信長の手口を真似、信長の行き方を、師として習まなんで、やがてその相続者となろうとしている）——と。

これは、秀吉の耳に、おかしかった。

信長があるうちは、信長は主君である。どこまでもその性格に副そい、指揮に従い、日常も呼吸いきをあわせて、大道一貫の歩をそろえていたのは当りまえである。——が、すでにその人亡き今日、何ぞ先人の規矩きくにとらわゆるの要あるうや——である。秀吉にはおのずから秀吉の資質がある。信長の長所に習まなぶところあつたにしても、それすら彼というべつな器うつわに入うつわって新たな経綸として現われてくるものは、まったく信長的な戦法や施政とはその趣おもむきを一変おしていた。どこまでも秀吉独自のものだった。

（まず窮民に仕事を）

と考えたことも、秀吉が、かつては、その窮民の子であつた思いが、すぐ施策にも出た

のであるし、なおまた、みすみす旧明智党の組子と知れている流離の者をも、大法事の工事に使うなどという寛度は、到底、信長には見られなかったところである。

かくて、紫野の工はすすみ、準備もほぼ調い、祐筆大村由己の手から、同日の招き状は、諸国へ発せられていた。

故信長の近親者はもちろん、清洲に会した日の宿老以下諸大名への招きも漏るるところなかつた。そのほかおよそ有縁にして主なる公卿、武門、町人、諸職にまで、案内状はゆきとどいた。

が、秀吉は、近親であり宿老であるからとて、特に、鄭重なとか、或いは執拗な書状などは出さなかつた。それらの人々には、来るもよし、来らざるもよし、としている風に見えた。

果たして、風当りは強い。

不参か参列かの返辞もない代りに、柴田勝家からは長文の抗議が来た。神戸信孝からも嫌味たっぷりな書面が来た。共に、大不満なのである。

秀吉には、要意がある。こんどのことも、柴田や信孝へたいして、決して、唐突に参列の通知を出したわけではない。

事前に、養子の秀勝の名をもって、書面で相談はしてあつた。

けれど、勝家も信孝も、

(於次おつきごときが、何の小才な)

と、返辞もせず^にいたしたのである。——於次丸とは、秀勝がまだ信長の第四子としていた頃の幼名である。功勞を経た宿老勝家の眼からも、ずっと兄の信孝の眼からも、秀勝はまだ乳くさく見え^た。おかしくて——と、それに真面目な返書もせず^に打ち捨てておいたのもあながち無理でない点もある。

殊にまた。

この九月から十月にかけては、勝家にとっては、多忙な吉事があつた。そのよろこびにも取り紛とまぎれていたのである。

お市御料人いちりようじんは、かねてからもう甥の信孝の斡旋で、北ノ庄へ再嫁することに内輪はきまっていたが、先夫浅井長政とのあいだに生なじていた三人の子もあるので、身がらはなお織田家のうちにおいていた。

ところがここ四圍の情勢は、勝家と信孝との、両者の緊密を急速に強化するの必要にも迫られ、かつは、世上にたいしても、この際、公然と、

(柴田殿こそ、故信長様も、生前よりゆるされていた妹いもとむこ 賀むかである)

ことを一度盛大な華燭かしよくをもつて披露するも急務なりと考えられて来た。その結果、曠はれて輿こしいれ入をとにわかには、お市御料人の北ノ庄入りの盛儀が運ばれ出していたのである。

小谷おたにの城の落ちた年からすでに十年になるが、お市の方はまだまだほんとうに美しかった。年も三十四、五でしかない。まだ信長の生きていた頃から、世間では、しきりと、その人を、勝家と秀吉とが恋い争っているなどと、あらぬ噂をもしたものだ。が、それほど彼女の容ようしよく色じしんが時人に記憶されていたのは事実である。

けれど、当のお市御料人の胸としては、何としても、気がすすまなかつたはなしであったにちがいない。それをしも拒こぼみきれない環境の中にある彼女でもあつた。兄の信長のな以後はなおさら自分の意志は口にもいえなかつた。信孝は初めから勝家のために運動していたが、今では自己の将来の計として叔母を用いる気になつていた。清洲会同の以後、彼や勝家も、策謀連れんけい携いの往来に寧ねいじつ日なく、勝豊を長浜へ入れたり、滝川ともしばしば会つたり、何かと心忙せわしかつたが、信孝はその中で、同族のことばや四圍の事情を措おいて、どしどし事を運んでしまつた。十六になる長女の茶ちやちや々ちやちやをかしらに女の子のみ三人を連れりたお市御料人は、それこそ、王昭君おうしやうくんの遠きへ行く日にも似るかなしき綾羅錦繡りやうらきんしゆうに

つつまれて、五彩の傘輿さんよは列をなして北越の山をこえ、九月には、すでに北ノ庄の館に入つていたのである。

老木に花が咲いたように、五十三歳の智殿むちは、国中の被官ひかんを連日招いて、披露の祝宴に満悦を見せていた。——こういう折に、羽柴家の一養子たる於次秀勝から、紫野に一寺の建立と、故右府の法事の相談が書面で来たのである。つい怠ったまま打ち過ぎてしまったのもむりはない。

しかし、十月に入り、重ねて今度は、秀吉が名をうたつての正式の招き状に接してみると、

(これは黙視できぬ)

と、彼は事の重大と、瞋怒しんどの焰ほむらにわなないて、烈しい抗議の一書を、秀吉へぶつけたのであった。

歳月は人間を対象として流れてはいない。

が、人は往々、歳月をあてにして歩む。

あだかもいつも歳月は味方のような片思いを抱いて。

雲無心。歲月の光輪こうりん響きやうりん輪りんもまた、大虚たいきよの車に過ぎない。

だが、同じ歳月を同じ時代のもとに持つて、これを、どう用いるかは、人々の意志によるのである。ここに生態の分野が生じ、人間社会の隔差おこができ、興おこる国、亡ぶ国、——千載までの歴史も、天地間一瞬のまに、決定づけられてゆく。

とかくして、十月だった。

勝家がそれまでに用いた日数と、秀吉が費やして来た日数と、天は同じ運行のもとに施せ与よしていた。本能寺の日から指折よつても、まる四カ月。——清洲の会合からすれば、まだわずか百日たらずの歳月でしかない。

しかも両者が、その歳月をもつて、自己の上へ具顕ぐげんして来たところの差は、今日——十月半ば——余りにも大きな差を結果していた。

即ち。秀吉が主唱し、また全力を傾けて実行した信長の大法要だいほうようは、やがて、全日本の耳目をあつめ、

(彼こそ、右府の遺業を継ぐ人と見ゆる)

という印象を与えたばかりでなく、ひいては中央の庶政も、秀吉を措おいては行われぬような感じを民心の中にふかく植えこんでいた。

この点、勝家がその権翼の拡大を、以後、同列の宿将や、織田家との婚姻による緊密化などに恃たのんでいたのとは、雲泥のちがいであった。秀吉が対象としていたものは、丹羽長秀でもないし、池田、細川、筒井の輩やからでもない。いわんや織田信雄や女子供の遺族達でもなかった。実に民衆であった。彼は百姓の子だ。土と熱を知りぬいている。

その月、十一日から十七日にわたって行われた紫野大徳寺の法要が、言語に絶す大規模なものであつて、莊嚴そうごん万華の大光演を極めたのも、単に、彼の大氣や亡主を慕う真情の溢ればかりではなく、民衆をも会葬者とみなし、民衆にも親しく見せ、この善奉行を、衆と共にするという彼の大布施だいふせしん心によるものであつた。

——十一日より御わぎ始まり、様々に尊き限り尽し給ふ。十刹じつせつの僧ども経を捧げ、ふうきん 諷経をなせり。十五日には野辺の送りの御わぎ始まり、蓮台野れんだいのには火屋ほやれいがん堂など嚴いめしく作り、竹垣をゆへり。大徳寺より道の警固けいこきびしく、武士どもかためたり、弟美濃守秀長奉行をなせり、棺くわん 槨かくのよそほひ金繡きんしゅうをかざり、玉の瑤瑤えうらうをかがやかせり。轅なぐえのさきは、池田古新こしん（輝政）あとをば次丸（羽柴秀勝）これを昇かく。

「豊鑑ほうかん」の筆者はその日の模様をこう記している。

「惟任退治記」にも、

羽柴小一郎、警固ノ大将トシテ、大徳寺ヨリ千五百軒ノ間、侍三万バカリ、道ノ左
 右ヲ護リ、弓箠エヒラ、槍鉄砲ヲ立テ、葬礼ノ場ニハ秀吉分国ノ徒党ハ云フニ及バズ、諸侍、
 悉ク馳セ集リ、見物ノ輩、貴賤雲霞ウンカノ如シ——
 と、叙じよし、輿こしながえの轅は輝政と秀勝。信長の位牌は、秀吉自身が、それを持つたことを明ら
 かにしている。

正親町天皇には、この機会に、臣信長へ、従一位太政大臣を、贈位贈官あらせられた。
 また、宣命を賜うた。

即ち、諡おくりなして

総見院殿大相国一品、泰たい敵大居士ごじ

という宣名せんめいのうちには、故信長にたいして、

「惟朝いちちようの重臣、中興の良士なり」

との勿体ない詔旨が宣のらせ給うてあつた。これを拝し、泉下の信長は、望外の光栄と身
 の本分に泣いたであろう。

善不善、凡非凡、人間としての信長はどういわれようと、彼の弓矢は、まさしく九重ここのえ

の御階みはしに立ち匂い、彼の臣子一片の忠誠は、はしなくもこのありがたい宣のりに浴して、千せんぎ載い、国土とともにあるものとなった。

あわせて彼は、父織田信秀の、皇室中心の祖承そしやうをも完まうしたものといえよう。まぎれなく、忠誠と臣道において、織田父子も、二代をかけた。信長は父逝ゆく日まで、父にひとかたならぬ心案こころあんじをかけていた不孝の子であったが、今日、その父へも、大孝の子となつたのである。

四十九年ノ夢一場

威名イミヨウイカン什イカンカ存亡ヲ説カシ

請フ看ヨ火裡カの烏曇鉢ウドンハツ

吹イテ海花ト作ツテ遍界ヘンカイニ香シカンバ

これは笑嶺しやうれい和尚の偈げである。

大葬礼の式場は、百二間の火屋靈堂ほやれいどうのうち執とり行われた。五色の天蓋は目にきらめき、千万の燈明は星に似、沈木ちんぼくのけむりは、幢幡どうばんの翻ひるがえるあいだから流れひろがって、数万

人の会者のうえに、むらさきの雲を作なしていた。

僧侶だけでも、五岳ごごくの碩せき学がく、洛中洛外の禪ぜん律りつ、八宗の沙しゃ門もん、余す者なく集会して、九品くほんの浄じよう土ど、五百阿羅漢ごひやくあらかん、三千の仏弟子、目前にあるがごとし——と当時の目撃者はその状況を誌しるしている。

諷ふう經きん、散華さんげなどの式のあと、さらに禅門各大和尚たちの、起き龕がん、念ねん誦じゆ、奠てん湯とう、奠て茶ちや、拾しゆう骨こつ、——などこもごもな礼拝が行われ、さいごに宗そう訖しきん笑嶺和尚の、偈げ辞じが読まれ、笑嶺が満身から、発はつした——喝かつ——の大声に一瞬しゆん、寂せきとし——また仏音楽の奏せられるあいだに、蓮華降り、香木くん薰くんじ、会者は還めくり巡りつつ、順次、焼香をささげっていた。

が、その会者の中に、ぜひいなくてはならないはずの、織田近親者の半分は来ていない。第一に、三法師も見えなかった。信孝も列していない。柴田、滝川、その他、彼も見えぬ、誰も見えぬ、と思ことごとい出される当然な顔がたくさんに欠けていた。

それらは悉ことごとく、無視と黙殺をもつて、すでに秀吉へむかつて、抗争の布陣をあきらかにしたものと誰にもすぐ感じられた。

(このままでは治まるまい)

という思いは、期せずして、大法要の十七日がすんだ直後の人心に残されていた。

近畿きんぎの諸将はあらかた会し、毛利輝元も代参のほを上せているが、柴田勝家翼下よつかの前田、佐々、金森、徳山の諸将、また神戸信孝一類の滝川以下、みな云いあわせたように、上洛もしなかつた。とりわけ無気味なのは、徳川家康の存在であつた。いや彼の意中である。本能寺以来、まったく特殊な位置に拠よつて、この時流奔々たる外にあつた彼の意志ばかりは、白眼、今日をどう観ているのか、誰にも皆目、推し測る材料がなかつた。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（八）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年7月11日第1刷発行

2009（平成21）年2月2日第20刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第八分冊

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>